

白江梯川遺跡Ⅱ

1989

石川県立埋蔵文化財センター

白江梯川遺跡Ⅱ

石川県立埋蔵文化財センター



白江梯川遺跡全景（西から）



第4次調査区全景（南から）

例 言

1. 本書は石川県小松市白江町地内に所在する白江梯川遺跡の発掘調査報告書第2分冊である。本書では第4次調査の調査結果を報告する。なお、第1～3次調査の結果は第1分冊として前年度に報告済である。
2. 発掘調査は石川県農林水産部耕地整備課施行の県営公害防除特別土地改良事業梯川流域地区白江西部工区に係わるもので、同課の依頼を受けて石川県立埋蔵文化財センターが実施した。調査および報告書に係る費用は、全て耕地整備課が負担した。
3. 発掘調査は湯尻修平（石川県立埋蔵文化財センター専門員）の指導のもとで鳥越浩（石川県立埋蔵文化財センター主事）、木立雅朗（石川県立埋蔵文化財センター嘱託）が担当した。現地調査の期間は1987（昭和62）年4月27日～9月11日、調査面積は約1600㎡であった。
4. 発掘調査の実施にあたっては下記の関係機関から協力を受けた。
石川県耕地整備課、小松土地改良事務所、（株）丸西組。
5. 出土遺物の整理事業は1988年度に社団法人石川県埋蔵文化財整理協会に委託して実施した。また、出土遺物の写真撮影は田畑弘（石川県立埋蔵文化財センター調査員）が行い、土壌の洗浄・種子選別は森田豊（石川県立埋蔵文化財センター調査員）が行った。
6. 本書の編集は湯尻・中島俊一（石川県立埋蔵文化財センター主査）の指導を受けて木立が行った。
執筆者名は目次および各文末に記したが、鈴木三男（金沢大学教養部）・能城修一（大阪市立大学理学部）両氏には樹種の同定について、南木睦男氏（流通科学大学）には種子の同定について、安英樹氏（富山大学文学部学生）には弥生～古墳時代の土器について玉稿をいただいた。記して感謝の意を表したい。
7. 本書の作成にあたっては次の各氏の御指導・御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。西井龍儀（富山考古学会）、平口哲夫（金沢医科大学）、樫田誠（小松市教育委員会）、安英樹（富山大学人文学部学生）、藤田邦雄・垣内光次郎・本田秀生・松山和彦（石川県立埋蔵文化財センター主事）
8. 本書における挿入図などの扱いは次の通りである。
 - (1) 挿入図の方位は真北を示しており、水平基準の数値は海拔高（単位m）である。
 - (2) 遺構番号は1次～3次ではそれぞれに付して報告したが、今回はそれらの全てに次数を付けて報告する（たとえば、2次調査の「11号井戸」は211号井戸、3次調査の「2号溝」は302号溝とする。ピットは2～4次調査とも100以上存在するため、4桁の番号とする。3次調査の「P529」はP3529とする。なお、第2次調査では弥生溝と中世溝に別々の番号をふっているが、本書では中世のみふれるため20〇号溝などと呼ぶものはすべて「中世〇号溝」である。）。
そのため、本書で報告する4次調査の遺構番号にはすべて頭に4がくるが、これらは現場および整理時に注記した番号に400を加えただけの番号である。しかし、井戸として取上げて注記したもので報告書作成段階で土坑として新しく番号を付けたものがある。その逆に土坑として取り上げて注記しながら井戸として新しく番号をつけたものもある。その対応は以下の通りであり、失われた遺構番号は欠番とした。（「」内が現場での番号。「」なしが本報告書における番号。なお、遺物の注記は現場の番号で行った）

「3号井戸」	……………465号土坑	「23号土坑」	……………411号井戸
「4号井戸」	……………466号土坑	「26号土坑」	……………412号井戸
「6号井戸」	……………467号土坑	「27号土坑」	……………413号井戸
「7号井戸」	……………468号土坑	「28号土坑」	……………414号井戸
「6号土坑」	……………409号井戸	「27・28号土坑間土坑」	…415号井戸
「16号土坑」	……………410号井戸	「53号土坑」	……………416号井戸
9. 発掘調査で得られた当遺跡の遺構・遺物の実測図・写真、出土遺物などの資料（1次～4次調査のすべて）は石川県立埋蔵文化財センターが一括して保管している。

目 次

巻頭カラー図版

例言

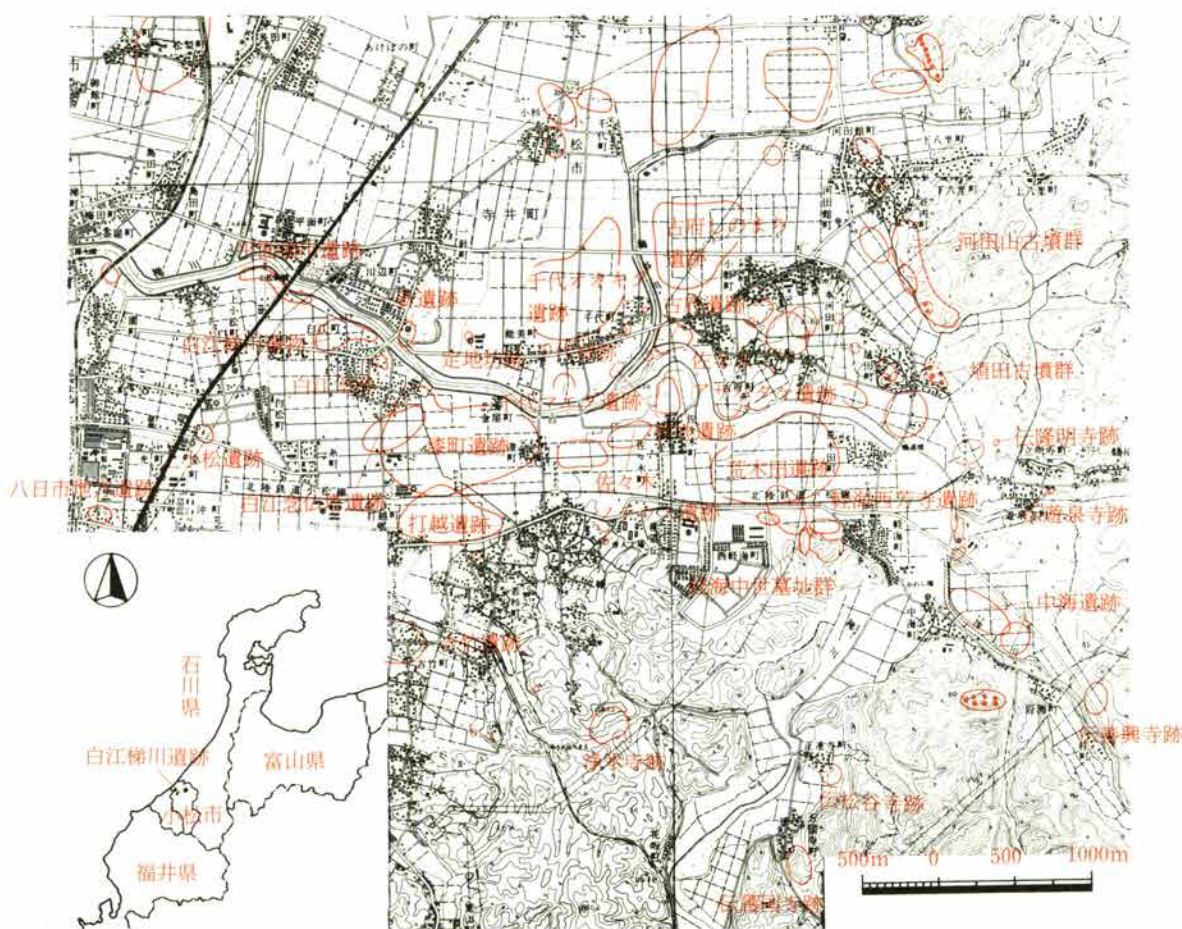
第1章 遺跡の位置	(鳥越浩)	1
第2章 調査の経緯と経過		
第1節 経緯	(鳥越浩)	2
第2節 経過	(鳥越浩)	2
第3章 遺構		
第1節 地区割り	(木立雅朗)	4
第2節 層位	(木立雅朗)	4
第3節 平安末～中世の遺構	(木立雅朗)	7
第4節 平安時代以前の遺構	(鳥越浩・木立雅朗)	13
第5節 近世以降の遺構	(木立雅朗)	22
第6節 保存区域ポンプ場の調査	(木立雅朗)	23
第4章 遺物		
第1節 平安末～中世の遺物	(木立雅朗)	24
第2節 平安時代以前の遺物	(鳥越浩・安英樹)	31
第5章 自然科学的分析		
第1節 白江梯川遺跡出土の木製品の樹種	(鈴木三男・能城修一)	93
第2節 白江梯川遺跡の大型植物化石	(南木睦男)	103
第6章 まとめにかえて	(木立雅朗)	111
写真図版 遺構		
遺物		
付図1 白江梯川遺跡第4次調査遺構平面図(縮尺100分の1)		巻末
付図2 白江梯川遺跡第2・3・4次調査遺構平面図(縮尺200分の1)		巻末

第1章 遺跡の位置

白江梯川遺跡は、県西南部に位置する石川県第2の都市、人口10万余りを数える小松市の白江町地内に所在する。この白江町は国道8号線に近く、近年では市街地北方の農村から住宅地へと変貌しつつある。また、地理的には梯川が蛇行する中流から下流域にさしかかる左岸に位置し、標高3m弱の沖積地に立地する、弥生時代中期から中世に至るまで断続的に営まれた複合集落遺跡である。梯川中流域の沖積平野は多くの遺跡が集中する地域であり、農耕適地として古くから広く利用されてきた。また、梯川は集落間や日本海を連結する水運路として利用され、特に中・近世以降においては、経済・商品流通などに大きな役割を果たしてきた。その反面、氾濫などによる水害を受けやすい地域でもあった。

梯川流域では本遺跡をはじめ、漆町遺跡、佐々木ノテウラ遺跡、佐々木アサバタケ遺跡などの中世集落がすでに発掘調査されている。それらを含めた当遺跡の環境の詳細についてはすでに刊行した『白江梯川遺跡Ⅰ』（1988）の「第1章 遺跡の位置と環境」に譲り、ここでは位置図をあげるだけにとどめたい。

（鳥越浩）



第1図 白江梯川遺跡の位置 (S=1/50,000)

第2章 調査の経緯と経過

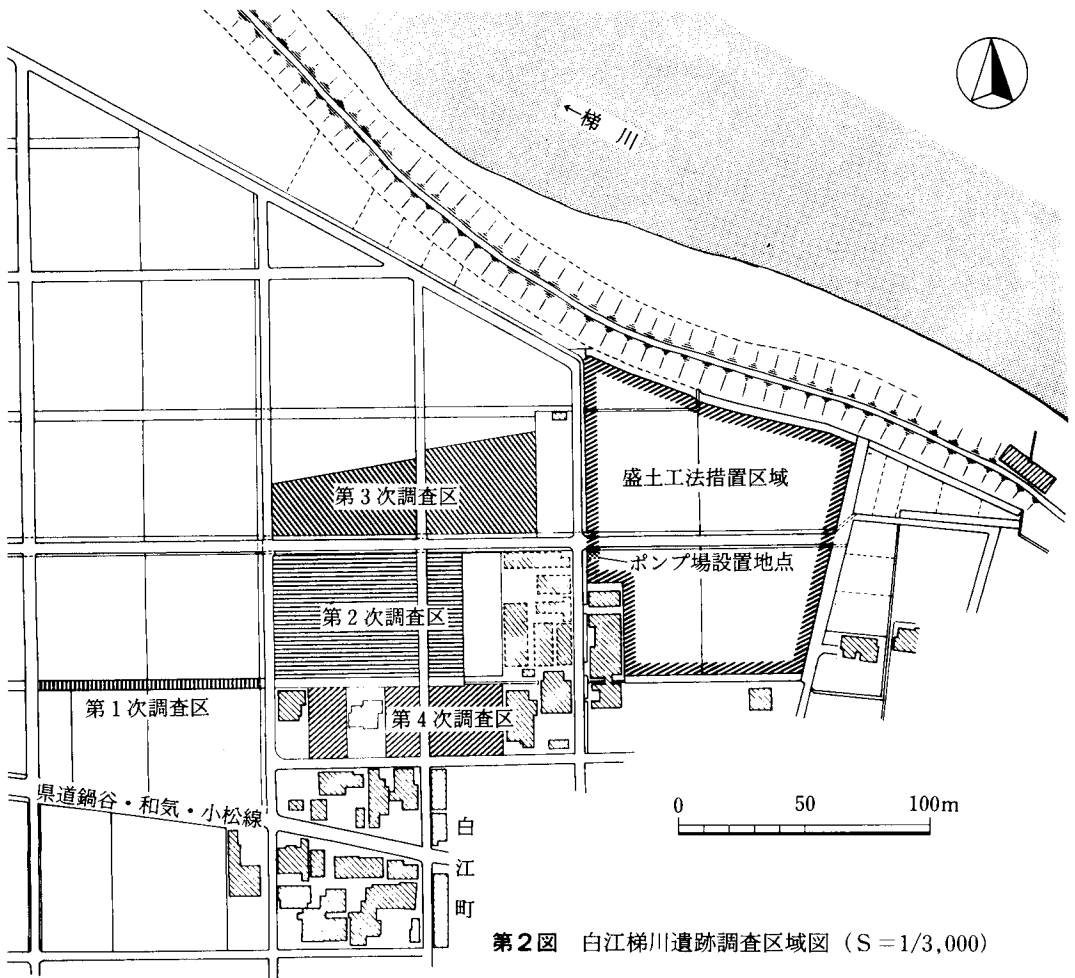
第1節 調査に至る経緯

石川県農林水産部は、昭和52年度から県営公害防除特別土地改良事業を実施してきた。梯川流域地区の鉱業汚染土を除去する目的で、459.7haを対象として年次的に客土工事ならびに区画整理工事が進められ、昭和63年度をもって事業の完了をみた。

石川県立埋蔵文化財センターでは、昭和53年度から当該事業に係る発掘調査を継続して実施してきた。小松市教育委員会の協力も得て9遺跡・約78,600㎡の調査を昭和63年度まで実施した。

第2節 経 過

白江西部工区における事業予定地10.5haに、周知の埋蔵文化財包蔵地である白江梯川遺跡が所在したため、昭和57年、60年に協議と分布調査が行われた。その結果、工法を変更した地区以外の8,600㎡の範囲で発掘調査が必要であるとの結論に至った。



第1次調査（昭和57年度） 幅2mで排水路部分の約160㎡を対象とした。期間は5月10日～31日までである。西へ調査するに従って包含層が薄くなり、本遺跡の西限を確認する。

第2次調査（昭和58年度） 第1次調査の東側約3,500㎡の水田を対象とした。耕土直下で中世ならびに弥生～古墳時代前期の集落跡を確認し良好な資料を得た。期間は5月9日～10月17日。

第3次調査（昭和59年度） 第2次調査区の北側約2,900㎡の水田を対象とした。第2次調査と同様、遺跡の中心部に位置し、中世の掘立柱建物群や井戸、土坑が多数検出された。また、祠跡と推定される遺構が、懸仏3体とともに検出された。遺跡は調査区北側にのびているが、中世以降の梯川の河道によって現存してしない。調査期間は6月18日～10月27日。

第4次調査（昭和62年度） 昭和60年度以降に工区の追加がなされ、第2次調査区の南側水田が、既存の水路等からやむなく田面削除した上で客土工事を実施することとなった。そして、第4次調査として1,600㎡を対象に昭和62年4月24日～9月14日まで発掘調査を実施した。

遺跡は20cmほどの耕作土直下で確認され、下層の弥生時代から古墳時代中期の良好な遺物包含層を切って存在する中世遺構の検出に努めた。第2・3次調査では15・16世紀を中心とする遺構が多かったが、第4次調査では中世でも古い遺構が多く、調査地点ごとに時期差が見受けられた。

なお、深くなった井戸などの埋め戻しには作付けのことを考え砂を用い、工事は石川県立埋蔵文化財センター職員立会いのもとで着手され、下層の遺跡はそのままの状態に埋め戻されたことを付け加えておく。
(鳥越 浩)

〔調査略日誌〕

4月24日 小松土地改良事務所の担当者と発掘調査の実施について打合せを行う。

4月27・28日 バックホーを用いて汚染耕土を除去し、小松市佐美町の指定排土場へ搬出する

4月30日 現場小屋の設置、機材準備。

5月1日 機材運搬。

5月6日 発掘調査に着手。Ⅲ区遺構検出作業からはじめる。

5月7～13日 Ⅲ区遺構検出作業。遺構略図作成。

5月14・15日 Ⅱ区遺構検出作業。遺構略図作成。

5月18・19日 遺構表示作業（Ⅱ・Ⅲ区）。写真撮影。

5月20日 Ⅲ区1・2号溝の発掘。

5月25～29日 排水作業の後に発掘に取りかかる日が続く。

6月1～5日 5日に2本の溝を完掘するが溝間の小ピット群は後回しにする。遺物写真撮影、遺物の平面実測開始。

6月8日 Ⅰ区の耕土剥ぎを人力で行う。

6月11～17日 Ⅰ区の耕土剥ぎ、遺構検出作業。排土運搬。

6月19日 401・402号溝の遺物取上げ。Ⅰ区南側でコの字状にめぐる溝を検出し、多量の土器群が出土する。

6月22・23日 Ⅰ区基準杭を設置。

6月24・25日 ポンプ場予定地をバックホーで掘り下げるが、遺構は検出されなかった。Ⅰ区遺構標示作業を行う。

6月26～30日 Ⅱ・Ⅲ区土置き場の遺構検出。遺構標示作業を行う。

7月1～7日 Ⅱ区の遺構掘り下げを始める。大きな遺構から発掘し、井戸は崩壊しやすいため、何度かに分けて行う。

7月8～10日 Ⅱ・Ⅲ区土置き場の遺構掘り下げ。土坑や井戸から木製品なども出土。

7月13～17日 Ⅲ区東側は遺構が少なく、実測終了後に土置き場とする。

7月20～22日 Ⅲ区の主要な遺構を完掘。土坑や井戸は水が溜まると壁が崩れ、実測が遅れがち。

7月23日 2回目の排土搬出。

7月24～31日 掘り残し遺構の発掘。

8月3～7日 Ⅰ区の発掘を中心に行うが、中世の遺構は削られてしまっており、それ以前の遺構が多い。

8月10～20日 Ⅰ区土器集積の実測・取上げ。Ⅲ区413号井戸の井戸枠取上げなどを行う。

8月18日 航空測量の打合せ。

8月19～25日 セクションベルトの除去、未発掘の遺構検出、土器の取上げを行う。

8月27日 早朝より復旧作業を行い、航空測量を実施。

8月28～31日 5cmほど掘り下げが足りない部分のあることが判明し、掘り下げる。

9月1～10日 Ⅰ区～Ⅲ区の調査区壁断面実測、小ピットの発掘・実測を行う。

9月10日 3度目の排土搬出。機材整理。

9月11日 機材撤収。

9月14日 盛土工事の立ち合い。

調査参加者 〔白江町〕加藤久太郎・坂下義男・村田喜作・畠山たま・田村和彦・小島基嗣・中田睦美・本田番、〔千木野〕山口義隆・土坂新男・岡本歳男・寺越吉男・長瀬愛子、〔漆町〕河南敏子・宮越アイ子、〔打越町〕上田喜久三・竹部光枝、〔扇町〕吉田又一、〔佐々木〕指間勝男・小橋幸吉、〔千代〕田中耕栄・田中柳子・中村喜久枝・北野君子・北本芳江、〔蓮代寺〕宮本幸枝・祭田武治・志田外松、〔本折町〕東敬子、〔寺井町小長野〕林あかね

第3章 遺 構

第1節 地区設定

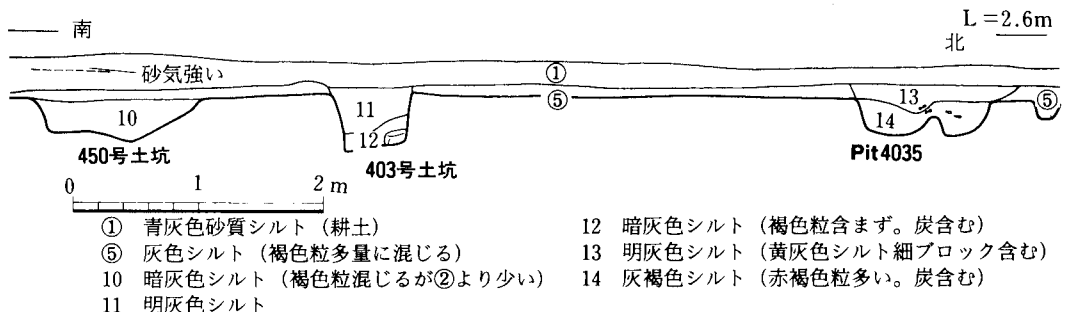
地区杭が毎年調査後に行われる工事によって全て失われてしまったため、遺跡全体を通した共通の地区割りを設定することができなかった。そのため1次～4次の調査ではそれぞれ別々の地区割りをしている。なお、付図の全体図（縮尺200分の1）はコンクリート側溝や道などによって4次調査の航空測量の際に復元したものであり、厳密な意味では多少の誤差が想定される。また、1～3次調査では国土座標をもとめていないが、今回は求めることができた。

4次調査では調査区が3つのトレンチに別れたので、西から東にⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区と名付け、Ⅲ区の401・402号溝の方向にあわせて2mグリッドを設定し、南北方向にアルファベットを、東西方向に数字をあてた。グリッド名は南西隅の杭名で示した。

第2節 層 位

白江梯川遺跡は弥生中期から中世にかけての複合集落遺跡である。大きく分けて弥生～古墳時代前期、および奈良・平安時代の下層遺構、平安時代末～中世にかけての上層遺構に分けられ、包含層もそれにともなって2枚確認される。カドミウムで汚染された土壤の除去は田面から約29cmであり、その高さでは中世の遺構を検出することができる。そのため、調査は中世の上層遺構の発掘に限定し、調査区のほぼ全体に存在する下層遺構は一部を除いて発掘しなかった。

しかし、中世遺構の検出作業によってそれ以前の古い遺物群がまとまった形で浮き上がってしまう部分や中世の遺構が検出されずにすぐに下層遺構が検出される部分があった。下層の遺物がまとまった形で浮き上がってしまう状況は2次調査の際にも認められている。また、調査の最終段階にレベルの確認を行ったところ、Ⅲ区で中世遺構面と認定した面の一部がやや高く、土壤の除去によって削平されることが分かり約5cmほど面的に掘り下げたが、依然として中世の遺物が出土し若干の中世遺構も検出された。これについても発掘することができなかった。下層まで掘り下げていないことからこれ以外にも中世の遺構で検出しきれないものが若干あると想定される。沖積作用と連綿とした削平・整地の繰り返しによって各時代の遺構面の高さや存否がかなり複雑



第3図 II区トレンチ西壁土層断面実測図（部分，S=1/60）

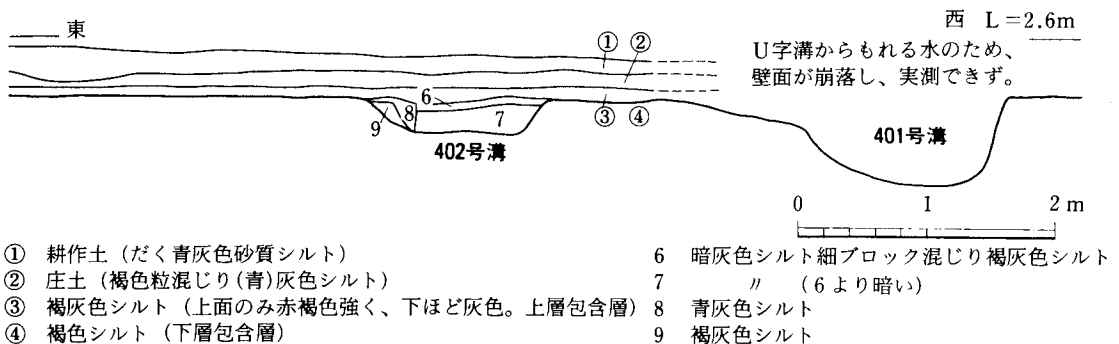
になっていると思われるが、調査担当者の力量不足のため、その認定が十分にできなかった。

なお、奈良・平安時代と判断できる遺構は今回の調査では非常に少なく、中世遺構面下層から当時代の遺物が出土するため、奈良・平安時代を下層遺構に含めた。しかし、このような状況であるため、確実に下層遺構に含まれるとは断定できない。将来は「中層遺構」として細分できる可能性もあるが、今回は便宜的に下層遺構に含まれるものとして理解しておきたい。

4次調査Ⅲ区における当遺跡の基本層位は、①耕作土（だく青灰色砂質シルト。厚さ10～20cm）、②床土（褐色粒子混じりでやや青みがかった灰色シルト。厚さ6～20cm）、③褐灰色シルト（上層整地層～包含層・遺構面。厚さ10～20cm）、④褐色シルト（下層包含層）となり、良好な包含層は耕作によって基本的にはほとんど削平・攪乱されている。また、中世の遺構はⅢ区では③の上面から検出されるものもあれば③の下面で検出されるものもあるが、その区別について十分に明らかにできなかった。Ⅱ区では耕作土直下から遺構が切り込んでおり、⑤灰色シルト（褐色粒子混じり）の上面が遺構面となっていた。Ⅰ・Ⅱ区では③そのものが確認できなかった。③は中世の遺物も多く含むとは言え、包含層だけでなく連綿とした整地による地層も含んでいると考えられる。③が遺構密度のもっとも高いⅢ区で顕著な現象もそう考えれば矛盾しない。この層は3次調査の「3. 茶灰色砂質土」(『白江梯川遺跡Ⅰ』P117)に対応するだろう。

Ⅱ・Ⅲ区以上に削平が著しかったためか、Ⅰ区南半では中世の遺構がほとんど確認されず、下層遺構が直接検出された。そのため、ここでは例外的に下層遺構を発掘することができた。もともとⅠ区にゆくにしがたい高くなっていたのを後世の開田・整備によってⅢ区と同レベルに削平されたため、中世の整地層・包含層が失われたことも原因のひとつであろう。Ⅰ区南半からそれ以南は微高地であったと思われる。なお、この地点の中世遺構のすべてを削平するほど大規模な削平があったとは想定しにくいので、Ⅰ区南半で中世遺構が検出されなかったのは、もともと遺構が少なかったか、もしくは浅い遺構しか存在しなかったためである可能性が高い。

中世遺構面の下層から1m程度の深さに灰色の砂層があり、今でも水が豊富に流れている。この層まで掘りぬいている穴はすぐに水が湧き出すが、この層に達していない穴は水が湧き出さず、雨水が溜まるだけである。そのため本報告では砂層まで達している穴を井戸とし、達していない穴を土坑とした。そのため、溜井戸の可能性もあるものも土坑とした。井戸はポンプで排水しながら調査しなければならなかったが、水とともに砂も流れ出して壁の崩壊が著しかった。



第4図 Ⅲ区トレンチ南壁土層断面実測図（部分、S=1/60）

下層遺構の保存と安全性を考慮した結果、砂層とほぼ同レベルかやや掘り込んだレベルまでしか掘ることができなかった。しかし、実際にはすべての井戸が砂層をかなり掘り込んでいた。

上下2枚の包含層があるため、当遺跡はどの地点、どの遺構を掘っても上下双方の遺物が出土する。そのため、中世の遺構であっても、中世の遺物より弥生土器のほうが多く出土する遺構も珍しくない。また、例外はあるものの、古代末～中世の上層遺構の覆土は灰色を呈するものが多く、弥生～古墳時代の下層遺構は黒色を呈するものが多い傾向が認められた。

第3節 平安末～中世の遺構

(1) 土坑

408号土坑（第5図） P-32区で検出した略円形の土坑。径約1.6m、深さ約1mを測る。小型の井戸状ではあるが、砂層まで達していないため土坑とした。底は小さく、やや急なすり鉢状の断面形をなす。土坑内からは少量の下層土器（弥生～古墳時代前半の土器、および奈良・平安時代の土器類。以下、同様に（「下層土器」と呼ぶ）のほか、中世土師器、珠洲焼、土錘、木片、凝灰岩片、焼石片、鉄滓片が出土した。

411号土坑（第5図） M-27区で検出した方形の土坑。一辺約0.9m、深さ約0.75mを測る。最下層の③が堆積したあと、地山質の②ブロックを含んだ①で一気に埋められている。底はやや丸底風である。土坑内からはごく少量の須恵器のほかに中世土師器、木片が出土した。

429号土坑（第5図） H-29区で検出した略円形の土坑。長径約1.3m、短径約1.1m、深さ約0.4mを測る。隣接する431号土坑を切っている（断面図参照）。土坑内から石が投棄された状況で出土した。そのほかに下層土器、中世土師器と思われる赤焼き土器、凝灰岩片、木炭片が少量出土しているが、明確な時期判定をなしうる遺物は確認できなかった。

430号土坑（第5図） P-33区で検出しただ円形土坑。長径約1.6m、短径約0.9m、深さ約0.2mを測る。土坑内からはごくわずかの中世土師器、下層土器が出土したにすぎない。

431号土坑（第5図） G-29区で検出した略だ円形の土坑。429号土坑に切られている。直径約1.4m、短径約1.1m、深さ約0.2mを測る。SX402とも切り合うがその前後関係をとらえられなかった。土坑内からはごくわずかの中世土師器、中世陶器、石片が出土した。

467号土坑（第5図） M-23・24区で検出した略円形土坑。径約1m、深さ約0.9mを測る。468号土坑を切っている。土坑内からは下層土器、中世土師器、珠洲焼が出土した。

468号土坑（第5図） N-23・24区で検出しただ円形の土坑。467号土坑に切られる。直径約1.1m、短径約0.8m、深さ約0.8mを測る。土坑内から弥生土器が1片しか出土していないが、覆土の色調などから下層遺構ではなく、上層遺構と判断した。

SX402（第7図） F～H-29～31区で検出した略三角形の巨大な土坑。一辺約4～5m、深さ約0.4mを測る。401号集石遺構、469号土坑、421号土坑に切れ、470号土坑を切っている。471号土坑とも切り合うが前後関係を把握できなかった。当遺構内からは少量の中世土師器、珠洲焼、割石、下層土器が出土している。

(2) 小型竪穴状土坑

平面形が方形から略方形、小型で浅い竪穴住居状の土坑を「小型竪穴状土坑」として通常の土坑とは区別して報告する。

401号土坑（第6図） N・O-21・22区で検出した隅丸方形の土坑。長辺約2.1m、短辺約1.8m、深さ約0.1mを測る。401号井戸に切られる。土坑内から下層土器が出土しており、ごく少量の中世土師器と思われる破片と鉄滓、石製品が出土している。

407号土坑（第6図） N・O-32・33区で検出した略隅丸方形の土坑。長辺約3m、短辺約2.8m、深さ約0.15mを測る。土坑内からはスサ入り焼土塊、下層土器の他、ごく少量の緑色凝灰岩剝片、輝石安山岩剝片、中世土師器、石片が出土している。焼土塊が出土しているが、それに伴う焼けた面などは確認されなかった。また、時期を判別する遺物も確認できなかった。

413号土坑（第7図） K・L-28区で検出した略方形の土坑。一辺約2m、深さ約0.2mを測る。複数のピットの重複があるが、現場ではその前後関係をとらえ切れなかった。しかし、いくつかは明らかに土坑より後出である。土坑内から出土した遺物は少ないが、下層土器、緑色凝灰岩片、中世土師器（糸切底）、焼土塊状の細片が確認された。また、木炭片とともに調理済炭化米も出土している。しかし、時期を明確に判別できる遺物は確認できなかった。

414・417号土坑（第6図） I-30・31区で検出した土坑。遺構検出当初は2つの土坑としてとらえられたが、切り合っている上、中央を試掘溝で削平されていたため、切り合う部分の平面形を把握できず、1つの土坑として掘り上げた。検出当初の観察からは414号土坑が417号土坑を切るように見られた。2つあわせると長辺約3.7m、短辺約1.8m、深さ約0.15mを測る。

419号土坑（第6図） G・H-28・29区で検出した略長方形の土坑。長辺約2.2m、短辺約1.6～2m、深さ約0.15mを測る。この土坑と切り合っているピットはほとんどこの土坑以後のものである。土坑内からは中世土師器、ごく少量の下層土器、割石が出土している。

421・422号土坑（第7図） F～I-31～32区で検出した略長方形の土坑。2つあわせて南北に約4m、421号土坑は東西に約2.2m、422号土坑は東西に約1.1m、深さ約0.2mを測る。この土坑も414・417号土坑と同じで、検出当初は2つの土坑としてとらえられたが、掘り進むうちに区別がつかなくなったものである。土坑内からは下層土器のほか、少量の中世土師器が出土している。

424号土坑（第6図） K・M-30・31区で検出した略方形の土坑。1辺約1.9m、深さ約0.15mを測る。この土坑の南辺から南北方向の407号溝が走り、414号井戸・417号土坑と切り合っている。424号土坑と407号溝は覆土の観察からほぼ同時に存在したと推定されるが、その南端の切り合い関係はとらえられなかった。424号土坑内には多数の石が投棄されていたが、土器類は少なく、ごく少量の中世土師器、下層土器が出土している。

431号土坑（第6図） K・L-6・7区で検出した略長方形の土坑。南半を別のピットに切られる。長辺約2.2m、短辺約1.8m、深さ約0.1mを測る。431号土坑と後述の432号土坑は極めて浅く、I区はかなり削平を受けていると思われる。遺物はごく少なく、中世土師器、割石、越前焼細片が出土している。

432号土坑（第6図） M・N-6・7区で検出した略長方形の土坑。南半が内側に凹んでいる。長辺約2.1m、短辺約1.9m、深さ約0.1mを測る。遺物はほとんど確認されなかった。

436号土坑（付図） E-31～33区で検出した東西に長い略長方形の土坑。南辺は試掘トレンチによって削平してしまった。西側は401号溝によって切られる。長辺約5m以上、短辺約1～1.5m、深さ約0.15mを測る。遺物はごく少なく、下層土器が出土している。

S X 415小型堅穴状土坑群（付図） D～G-27～29区で検出した、小型堅穴状土坑が3～4

以上重複したもの。それらの切り合いが複雑で識別が困難であるため、まとめて掘り上げざるを得なかった。南北約6m、東西約2.5m、深さ約0.1~0.2mを測る。土坑内から下層土器、割石、中世土師器、越前焼が出土している。

(3) 集石遺構

401号集石遺構（第5図） G・H-31区で検出した。長辺約1.8m、短辺約0.7mのごく浅い深さ数cmの窪みに石を敷き詰めてあった。窪みそのものは遺構として図化しにくいわずかなもので石を敷き詰めたために窪んだと言える程度のものであった。石のなかには、円礫、割石、石製品の破片があり、中世の土師器、陶器とごく少量の下層土器も含まれていた。

402・403号集石遺構（第5図） E・F-32区で検出した円礫の集積。検出当初、ピット状の遺構内一杯に円礫が詰まっているように見えたが、掘り下げると東側に石が落ち込んでおり、もっと大きな落ち込みの中に投棄されたものであることがわかった。402号と403号と2つにわけたが、本来は一連の集積であったと推定される。土器などを一切含んでいないため時期を特定できなかったが、調査で遺構の平面形を確認できなかったことから、下層遺構に伴う可能性も否定できない。

(4) 井 戸

第4次調査では11基の井戸を発掘したが検出しただけで発掘に至らなかった井戸状遺構が1基確認されたから、あわせて12基の井戸を検出したことになる。2次調査で20基、3次調査では38基報告されており、合計すると白江梯川遺跡から70基もの井戸が検出されている。

井戸は激しい湧き水とそれに伴う壁面の崩壊のため、先にふれた通り底まで掘り下げることができたものは1例しかなかった。そのためほとんど構造を明らかにできなかった。なお、以下に示す深さは発掘した深さであり、実際にはそれ以上あるため、「深さ〇m以上」と言うように示してある。

401号井戸（第8図） N・O-22・23区で検出した。掘り方は径約2.4m、深さ1.4m以上を測る。401号土坑を切っている。井戸のなかでは当井戸を最初に発掘したがその崩壊がもっとも激しく、井戸の完掘を断念する契機となった。下層の覆土はかなり柔らかい泥土であるため、手を突っ込んで深さを確認したが、50cm以上突っ込んででも変化がなく、水溜も確認できなかった。よって深さは1.9m以上となる。なお、井戸下層の覆土は、多くの井戸で共通して、このように手を突っ込むことができるほど柔らかく締まりのない暗灰色シルト層であった。この層を掘る場合、「掘る」と言うよりも「ドブさらい」をする感覚であった（臭いはなかったが）。掘り方内から中世土師器、凝灰岩片などが少量出土している。

405号井戸（第8図） K・L-19区で検出した。井戸の半分以上が調査区外にのびる。掘り方は径約1.7m以上、深さ1.2m以上を測る。掘り方に狭いテラス面があり、2段掘りになっている。井戸内には川原石が投棄されていた。出土遺物は少量の中世土師器、下層土器と、ごくわずかの青磁が出土している。

408号井戸（第8図） P・Q-29・30区で検出した。井戸の半分以上が調査区外にのびる。掘り方は径約2.3m以上、深さ1.1m以上を測る。405号井戸よりもしっかりしたテラス面を持つ。なお、掘り方の肩部に木柱の痕跡が1本確認され、井桁、もしくは覆屋など、なんらかの上部構造施設の一部と推定される。井戸内からはごくわずかの中世土師器が出土している。

409号井戸（第8図） P・Q-23・24区で検出した。井戸の半分以上が調査区外にのびる。掘り方は径約2.2m以上、深さ1.4m以上を測る。発掘した範囲内では井戸側などは確認できなかった。壁が崩落したため土層名の注記をできなかったが、中層付近に大量の中世土師器を投棄した層とシジミ状の貝殻を投棄した層が重なって確認できた。井戸内からは下層土器と木片、堅果類、鉄滓小片、白磁、漆器のほか、大量の中世土師器が出土している。

410号井戸（第8図） M・N-30・31区で検出した。掘り方は径約2m、深さ1m以上を測る。井戸内からは多くの中世土師器、下層土器、少量の割石が出土している。断面図にはあらわれないが、②層と⑤層の間に炭層があった。井戸廃棄後の凹みに堆積した土層であるため、当井戸の存続時期とは若干ずれる可能性もあるが、その層に中世土師器と木製品がまとめて投棄されていた（図版18参照）。

411号井戸（第9図） H・I-32・33区で検出した。掘り方は径約3.2m、深さ0.6m以上を測る。上面の①層から石、石製品、中世土師器、珠洲焼、越前焼などが数多く出土した。なお、かなり大きな井戸であるため、水の湧く砂層まで掘り下げれば危険を伴う上に、崩壊して周囲や下層の遺構をも崩壊させる可能性が高かったため、後述の412号井戸と同様、上層の浅い部分までの掘り下げにとどめた。

412号井戸（第9図） J・K-32・33区で検出した。415号井戸の掘り方に西端を切られている。401号溝とはわずか40cmとかなり近接する。遺物の報告で述べるように、出土遺物の年代から401号溝が後出である。掘り方は径約3m、深さ0.9m以上を測る。断面形は408号井戸に類似した2段掘り的な形を呈する。井戸内からは多量の中世土師器の他、白磁、漆器、木製品、凝灰岩切石、割石、下層土器が出土している。須恵器片が下層遺物として混入しているが、中世陶器は確認できなかった。

413号井戸（第9図） J・K-31区で検出した。掘り方は径約1.2m、深さ1.5m以上を測る。415号井戸の掘り方を切って掘りこまれている。井戸内に縦板組横棧どめ井戸側の横棧の痕跡が確認された。横棧の上に長さ70cm近くの隅柱が1本残されており、それに直交する細い柱状の棒も確認された。横棧のすぐ下で砂層に達して水が激しく湧き、完掘できなかった。下層の覆土はかなり柔らかい泥土であったため、手を突っ込んで深さを確認したが、さらに50cm以上の深さがあることがわかった。そのため、2m以上の深さがあることが分かる。井戸内から中世土師器、珠洲焼、瓦質陶器、木製品、凝灰岩片、割石、下層土器が出土している。

414号井戸（第9図） I・J-31区で検出した。掘り方は径約1.5m、深さ0.8m以上を測る。407号溝が掘り方を切っている可能性が高いが、十分に識別できなかった。井戸側が比較的良く残っており、一辺約1mの方形の縦板組の痕跡が確認できた。当井戸は②暗灰色シルト層によって一気に埋められているが、その際に縦板も埋め込まれていた（②・③層の間）。その下層の④

層は②層と同色だが、柔らかく締まりがない。井戸内からは中世土師器、珠洲焼、木片、割石、凝灰岩片、下層土器が出土している。

415号井戸（第9図） J・K-31区で検出した。掘り方は径約2m、深さ1.1m以上を測る。断ち割りを入れただけであるが、かなり入念に埋め込まれている。412号井戸の掘り方を切り、さらに411号井戸、412号井戸に切られる直径7・8m以上のS X401を切っている。断ち割りから中世土師器、箸、漆器椀（漆膜のみ）が出土している。

416号井戸（第9図） K-29・30区で検出した。4次調査では唯一の素掘り井戸で、規模ももっとも小さい。湧水層の砂層に達しており、調査中にも水が湧いていたため、井戸とした。完掘した井戸としては4次調査では唯一の例でもある。掘り方は径約0.9m、深さ約1.1mを測る。井戸内からはごく少量の中世土師器、凝灰岩片、下層土器が出土している。

(5) 溝

401号溝・402号溝（付図・第4図） 401号溝は34・35ラインに沿って検出した。延長28m以上、幅2～2.5m、深さ約0.5mを測る。溝全体から多数の中世土師器、中世陶器、磁器、三彩、五輪塔、川原石などのさまざまな遺物が出土したが、そのほとんどは覆土の中層～上面の浅い位置から出土している。また、M-34区では溝西肩部からほぼ一括で投棄されたかたちで中世土師器が出土している。

402号溝は37ラインに沿って検出した。延長28m以上、幅約1.5m、深さ約0.3mを測る。401号溝と併行して走るが401号溝より幅が狭く、深さも浅い。当溝も401号溝ほどではないが、さまざまな遺物が出土している。

401号溝とそれに併行して走る402号溝は一体となって集落を画した施設と思われる。この溝の西では遺構密度が薄く、東では遺構密度が極めて高い。401号溝は411号井戸や436号井戸土坑を切るし、後述するように時期差があるが、こうした遺構密度の差は、排水溝の断ち割りなどから下層遺構の弥生～古墳時代についても当てはまる可能性が高い。恐らく長い間自然地形などのなんらかの変換点であったと思われる。ただし、現在の表土や遺構面では標高差はさほどない。

401・402号溝の北側ののびは第2次調査の調査区をぎりぎりでかすめており、確認できていない。2次・3次調査では2本の並列する溝は確認されていないし、方向が同じものや直交するものは確認されていない。ただし、202・201号溝が直交に近い角度をもっており、連続する可能性は否定できない。少なくとも第3次調査の調査区まではのびていないことは確かである。

401号溝・402号溝間には多くの小ピットが密に確認された。小ピットは径約10～30cmとばらつきが大きく、形も円形のもの、楕円形のもの、方形のもの、長方形のものなど様々である。また、深さは10cmに満たない浅いものも稀に存在するが、ほとんどが移植ゴテでは掘り下げることができないほど狭くて深い。調査終了時に部分的に大きく断ち割って深さを確認したところ、40cm以上の深さを確認した。小ピットの覆土は灰色の砂質土で、401・402号溝のような黒っぽいシルト質土とは全く異なり、当初は溝廃絶以後の水田耕作などによるものと考えていた。しかし、この小ピット群は不規則に並ぶとは言え、J～L-35・36区では401号溝の西肩と402号溝の東肩に

沿って配置されている。また、このような小ピットが401・402号溝間に集中し、他地点で検出されなかったことから両溝に伴うものと考えた。小ピット群はその形や深さから杭状のものを深く突き刺して、「逆茂木」状の区画を成したか、あるいは両溝間を堤状にするための盛土の土留め的な役割を果たしたと推定される。その分布から恐らく数度の補修がなされていると推定される。円形のものほかにきれいな方形や長方形の平面形ものは、角材状の杭を打ち込んだためであろう。また、杭等であるために溝とは埋積時期・状態が異なり、違う覆土で覆われたのだろう。なお、両溝間に堤状の盛土があったか否かは、確認できなかった。また、小ピット群を検出する段階でP・Q-36から平安時代の須恵器が出土しており、この下層に古代の包含層が存在することが分かったが、調査の性格上から掘り下げなかった。

403号溝（付図） 21・22ラインの間をラインに沿って検出した。延長12m、幅約1.2m、深さ約0.25mを測る。ほぼ南北方向に走る。南端は420号溝をさけるようにして細くなってゆくが、420号溝に切られている可能性がある。溝内から中世土師器が出土している。

404号溝（付図） L-37～41区で検出された。延長約13m、幅約1m、深さ約0.3mを測る。ほぼ東西方向にのびる溝状遺構。覆土の識別が難しく、東西の端を十分に判断できなかった。もう少し東西にのびるか、もしくはやや掘り過ぎた可能性が高い。溝内からは下層土器しか出土しておらず、平安時代頃の須恵器がもっとも新しい遺物である。

405号溝（付図・第7図） E・Dラインの間をラインに沿って検出した。延長8m以上、幅約1m、深さ約0.1mを測る。東端で402号溝に合流する直前で浅くなり途切れているが、本来は402号溝と交差していた可能性が高い。溝内からは下層土器しか出土しておらず、平安時代頃の須恵器がもっとも新しい遺物である。

407号溝（第9図） J・K-31で検出した溝。幅約0.3m、深さ約0.2m、長さ約3mを測る。424号土坑と414号土坑をつないでいる。424号土坑と当溝は一体的である可能性が高いが、414号土坑と当溝とは、切り合い関係にある可能性がある。溝内からはごく少量の中世土師器、割石、下層土器が出土している。

408号溝（付図） I区北端でPラインに沿って検出した。延長10m以上、幅約1.5m、深さ約0.2mを測る。O・P-7で2次調査で検出された202号溝の南端と思われる溝が検出されているが、それを切っている。202・203号溝とほぼ併行する方向に走っているが、II区まではのびていない。

409号溝（付図・第7図） Jラインに沿って検出した。延長14m以上、幅約1m、深さ約0.1mを測る。ほぼ東西方向に走り、方向からすると420号溝に接続する可能性がある。420号溝からは下層土器しか出土していないため、平安時代以前の遺構としてあつかったが、前述のように当遺跡では中世の遺構でも下層遺物のほうが多い例もあり、中世まで下がる可能性も否定しきれない。

410号溝（付図） I区北端で5ラインに沿って検出した。今回の調査区では延長4m以上、幅1.5～2m、深さ約0.1mを測る。この溝は2次調査の204号溝に接続する溝である。4次調査で溝の南端が、2次調査で溝の北端が検出されており、双方の調査から延長約44mの直線的な溝であることがわかる。

（木立雅朗）

第4節 平安時代以前の遺構

下層遺構にあたる中世以前の遺構は第1節で述べたように原則として発掘しなかったため、限界のある調査しかなかった。よって当代の遺構・遺物については不明確な点が多い。

なお、下層まで掘り下げたものの他、古代末～中世の遺物を出土していない遺構も平安時代以前の遺構としたが、さらにその下層から下層遺物を出土する遺構も含まれている。それらの中には上層遺構であったが、たまたま上層遺物を含まなかったために下層遺構としてしまったものも含まれる可能性が高い。

(1) 弥生・古墳時代

413号溝 (第10図) 1区の南で検出したほぼ「コ」の字状にめぐる溝。幅は不揃いで1.7～2.7m、深さ約0.15～0.2mを測る。溝内から大量のまとまった土器が出土した。遺構検出作業中、まず411 (第48図) が検出され、徐々にその他の土器が検出された。遺構の輪郭が検出できたのは、それらの土器群がやや浮き上がった状態の段階であった。東側は上面に細かい土器片が集中していたが、断ち割りをいれたにもかかわらず溝の輪郭を検出できなかった。この部分では徐々に浅くなって途切れるらしい。なお、この断ち割りで下層の414号溝を検出し、発掘現場では413号溝の延長と考えたが、整理段階でレベルや出土遺物から別の溝と考えた。また、西側は南に向かって曲がるが、後述のように稲架木穴によって一部を切られている。ただし、稲架木穴の北壁に認められる遺構断面は当溝以外の遺構か、当溝の一部としか考えられず、複数時期ある当溝はその東側にもさらに広がっており、全体の平面形をとらえきれしていない。当溝が複数時期あることは遺物の報告でふれるが、発掘現場ではその切り合い関係などは確認できなかった。

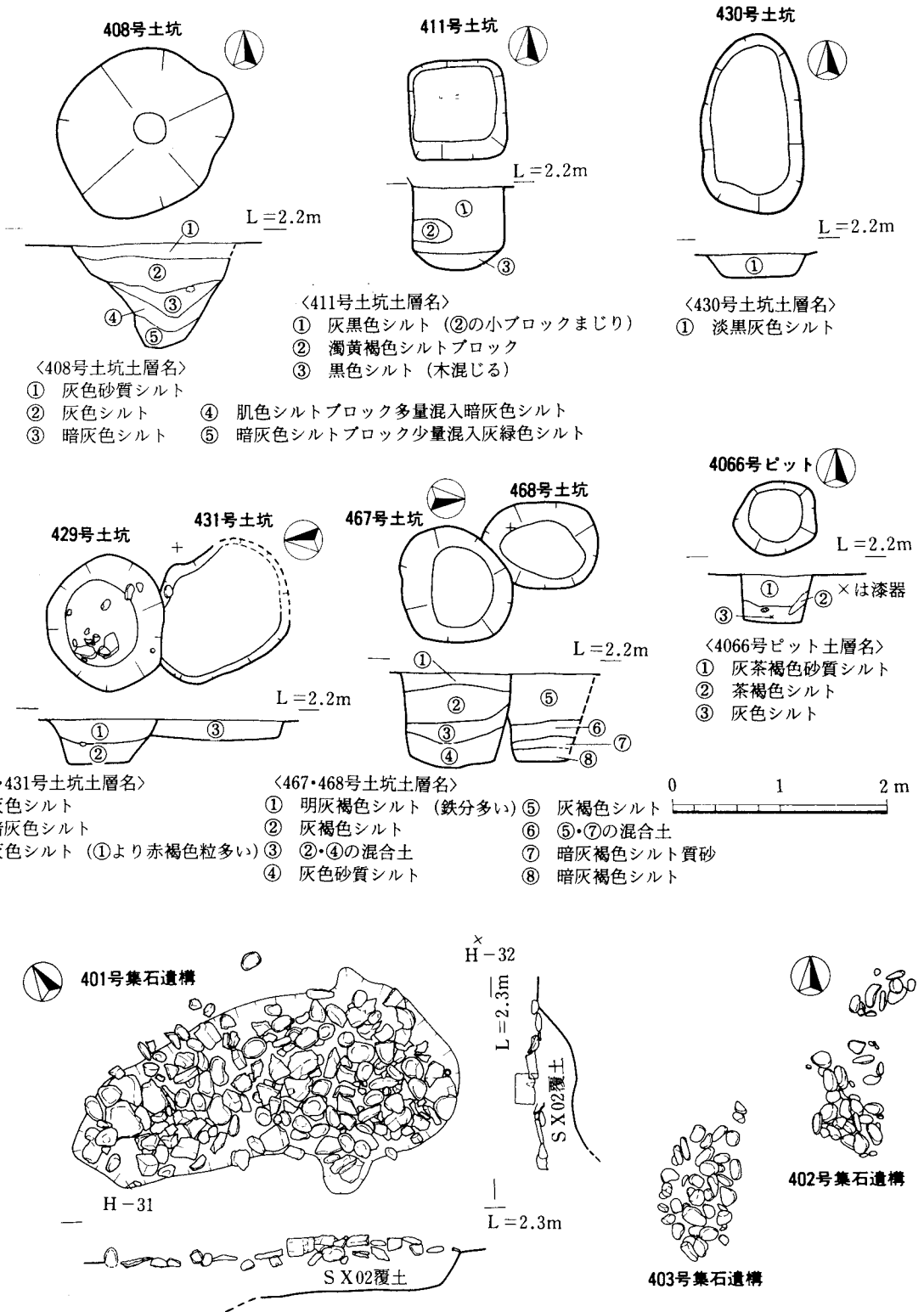
414号溝 (第11図) F-8～D-9区で検出された、413号溝の下層をほぼ同じ方向に走る溝。幅約0.6～1m、深さ約0.15m、長さ約5mを測る。南端は浅くなって途切れる。北端は411号溝に一部切られているが、411号溝より北・西側には伸びていないと考えられる。溝内からは少量の弥生土器片と有茎石鏃が出土している。

S X 403 (第11図) H-9・10～E-9・10区で検出した、大きな落ち込み。過半は調査区外へ伸びており、全体の規模・形は不明だが、東西3m以上、南北8m以上、深さ約0.3mを測る。

409号土坑 (第12図) J・K-36区で検出した不整形形の土坑。長軸約1.8m、短軸約1.2m、深さ約0.5mを測る。

418号土坑 (第12図) J・K-23区で検出した略楕円形の土坑。東北部分を掘り過ぎたために平面形がいびつになっている。なお、東北部分を掘り過ぎたのは土坑の壁面に下層土器が顔をだしていたため、この部分に下層遺構が存在することが明らかである。出土遺物は下層出土のものと同区別できなかった。長軸約1.4m、短軸約0.8m、深さ約0.3mを測る。

440号土坑 (第12図) P・Q-22区で検出した土坑。北端が調査区外に伸びており、全体の規模・形は不明だが、東西約1.9m以上、南北0.9m深さ約0.3m以上を測る。



<408号土坑土層名>

- ① 灰色砂質シルト
- ② 灰色シルト
- ③ 暗灰色シルト
- ④ 肌色シルトブロック多量混入暗灰色シルト
- ⑤ 暗灰色シルトブロック少量混入灰緑色シルト

<411号土坑土層名>

- ① 灰黒色シルト (②の小ブロックまじり)
- ② 濁黄褐色シルトブロック
- ③ 黒色シルト (木混じる)

<430号土坑土層名>

- ① 淡黒灰色シルト

<429・431号土坑土層名>

- ① 灰色シルト
- ② 暗灰色シルト
- ③ 灰色シルト (①より赤褐色粒多い)

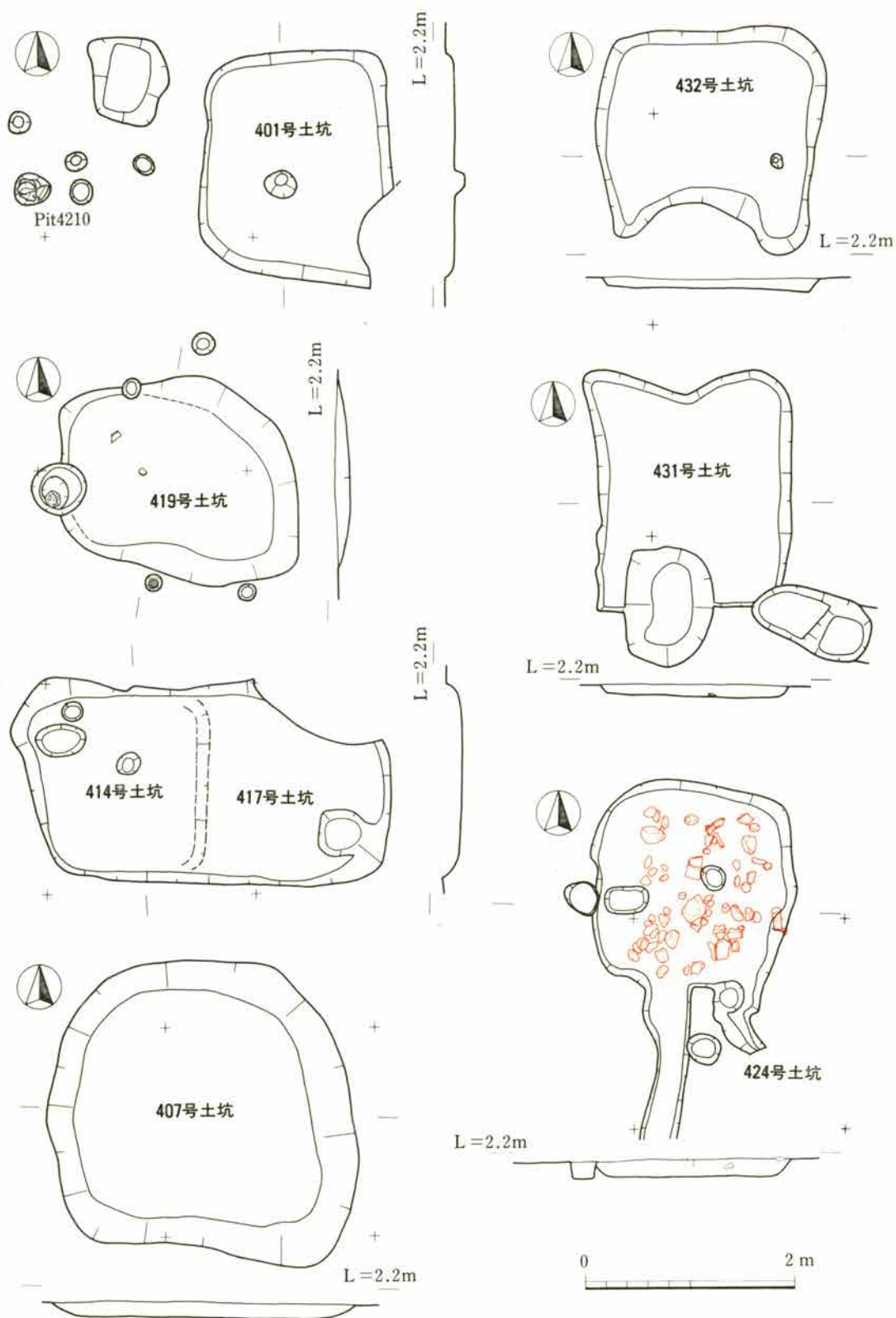
<467・468号土坑土層名>

- ① 明灰褐色シルト (鉄分多い)
- ② 灰褐色シルト
- ③ ②・④の混合土
- ④ 灰色砂質シルト
- ⑤ 灰褐色シルト
- ⑥ ⑤・⑦の混合土
- ⑦ 暗灰褐色シルト質砂
- ⑧ 暗灰褐色シルト

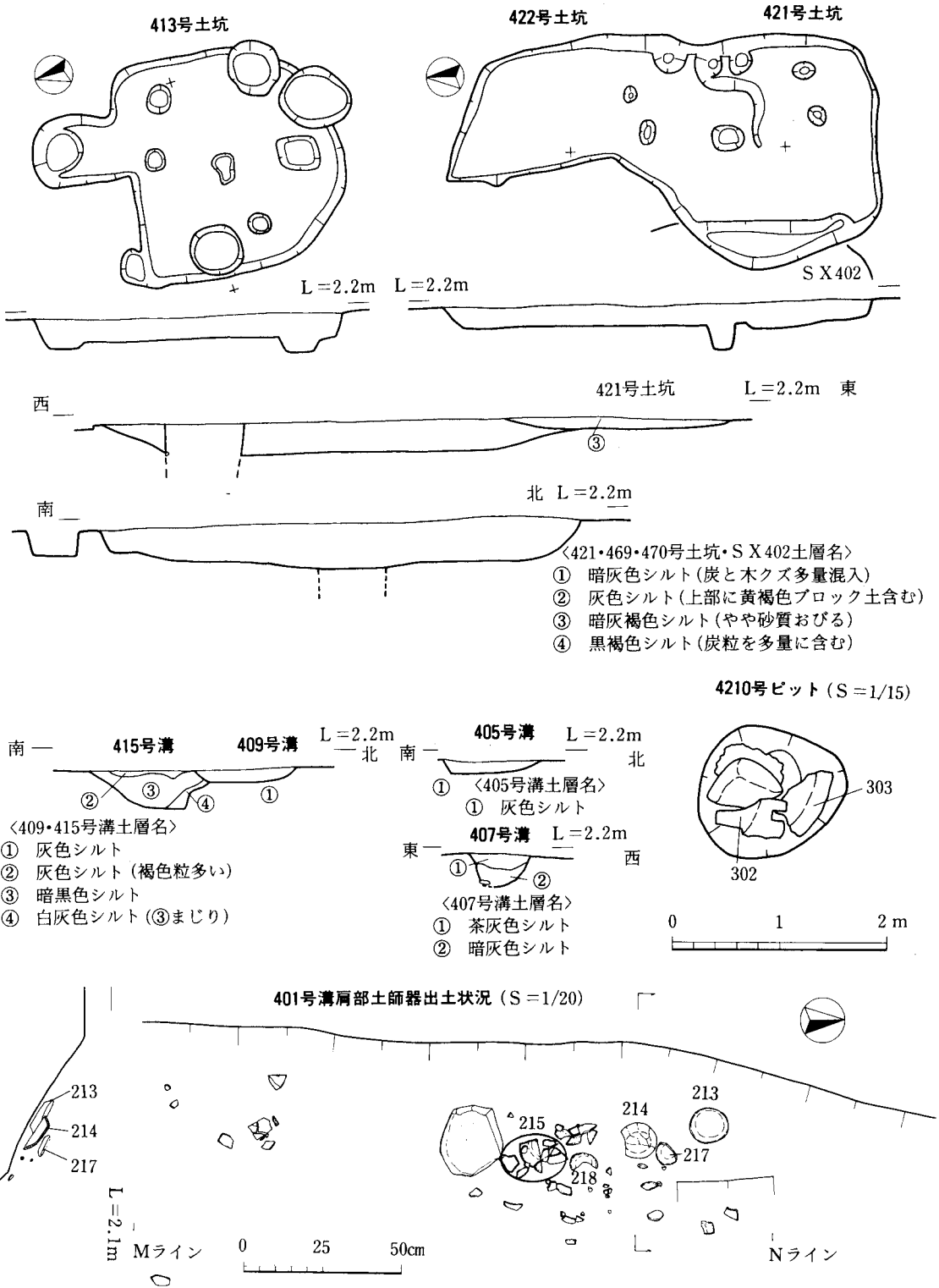
<4066号ピット土層名>

- ① 灰茶褐色砂質シルト
- ② 茶褐色シルト
- ③ 灰色シルト

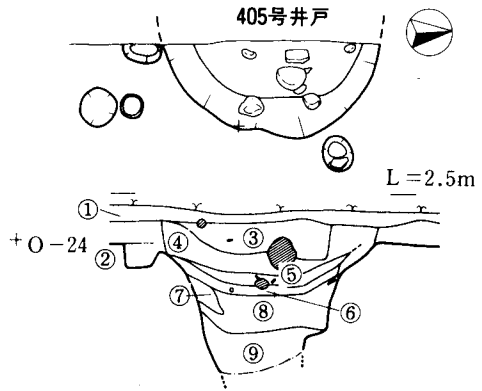
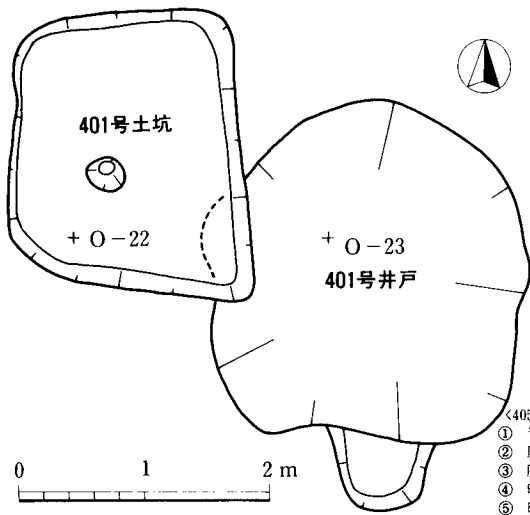
第5図 土坑・集石実測図 (S=1/60。集石は1/30)



第6图 小形竖穴状土坑实测图(1) (S=1/60)



第7図 小形竪穴状土坑実測図(2X2)・溝実測図・ピット実測図
(S=1/60, 4210号ピット=1/15, 401号溝=1/20)



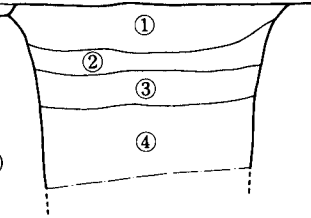
<405号井戸土層名>

- ① 青灰色砂質シルト(耕作土)
- ② 灰色シルト
- ③ 灰色砂質シルト(赤褐色粒多い)
- ④ 暗灰色砂質シルト
- ⑤ 暗灰色シルト(④より褐色粒・砂気少い)
- ⑥ 紫色シルト(硬い)
- ⑦ 暗灰色シルト(赤褐色粒・白灰色シルトブロック含む)
- ⑧ ⑦と同じだが赤褐色粒含まず
- ⑨ 青灰色シルト(緑灰色シルト細ブロック含む)

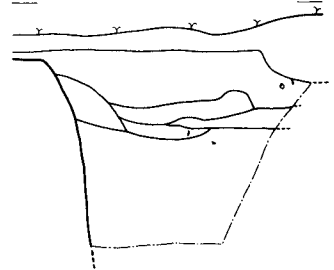
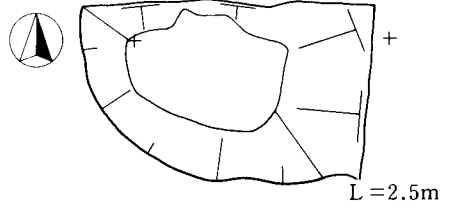
401号土坑 401号井戸 L=2.2m

<401号井戸土層名>

- ① 茶褐色砂質シルト
(灰色っぽい砂混入)
- ② 茶褐色シルト
(砂が少なく、粘性強い)
- ③ 暗灰褐色シルト
- ④ 緑灰褐色シルト

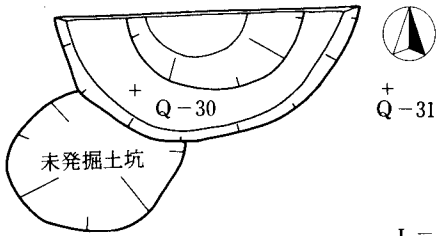


409号井戸



(壁崩壊のため、土層名記録できず)

408号井戸



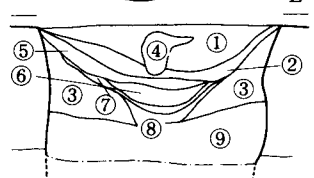
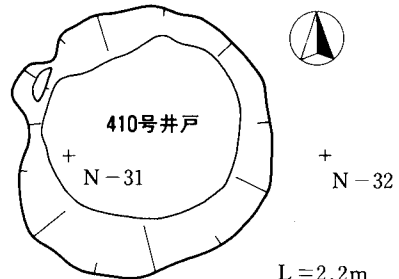
<408号井戸土層名>

- ① 黒色シルト
- ② 黄灰色シルト
- ③ 黄灰色シルト混じり黒色シルト
- ④ 暗黒色シルト(土器含む)
- ⑤ 暗灰色砂質シルト
- ⑥ ⑤と同じ
- ⑦ 灰色シルト(⑤・⑥よりやや明るい)
- ⑧ 灰色シルト
(青灰色シルトブロック混じり)
- ⑨ 灰黒色シルト
- ⑩ 青灰色シルト
(⑨・⑩のみ褐色粒・砂気なし)

灰色砂質シルト
淡緑灰色砂質シルト

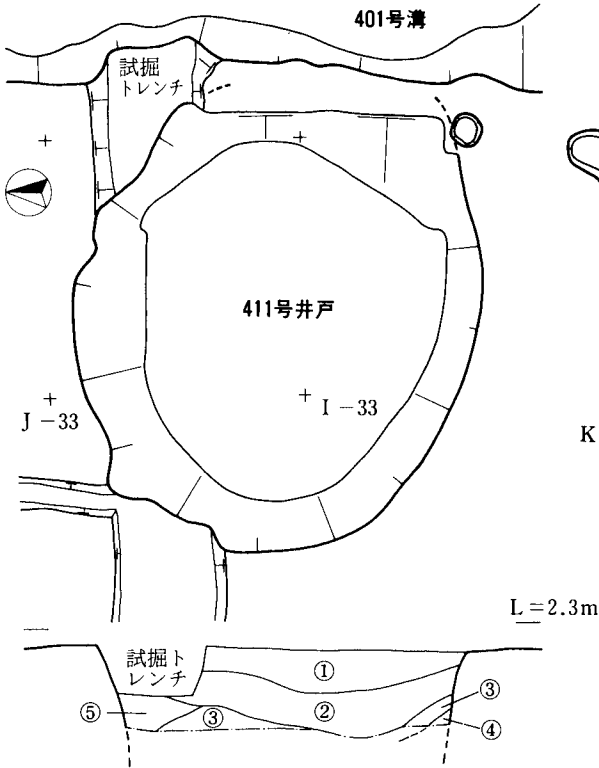
<410号井戸土層名>

- ① 灰色シルト
- ② 炭混じり淡茶灰色シルト
- ③ 地山土混入暗灰色シルト
- ④ 炭・土器混じり灰黒色シルト
- ⑤ 淡茶灰色シルト
- ⑥ 淡緑灰色シルト
- ⑦ 灰黒色シルト
- ⑧ 暗灰色シルト
- ⑨ 暗緑灰色シルト

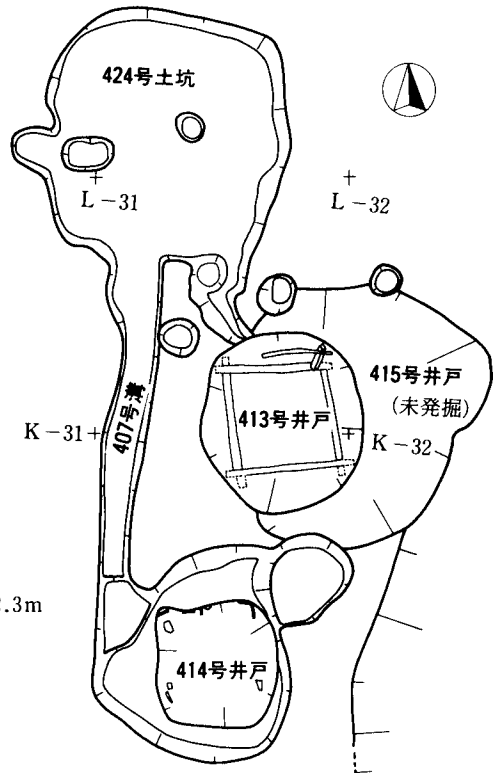


砂とシルトの互層

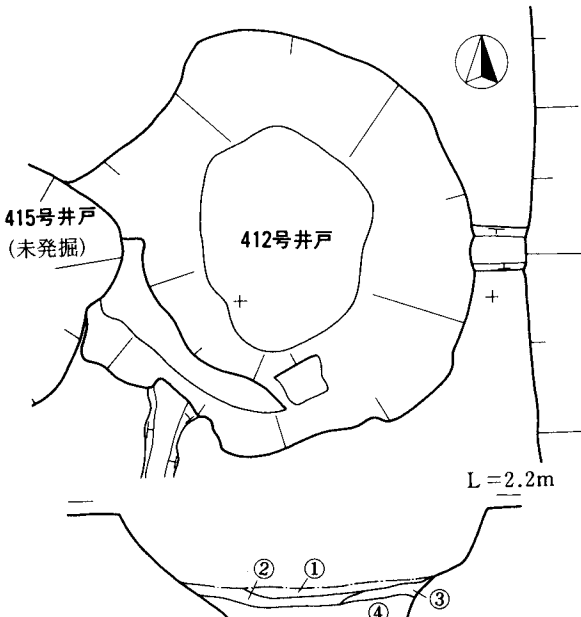
第8図 井戸実測図(1)



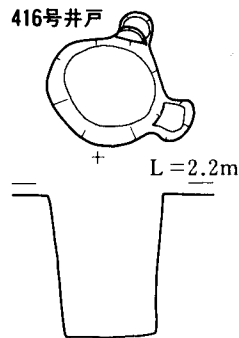
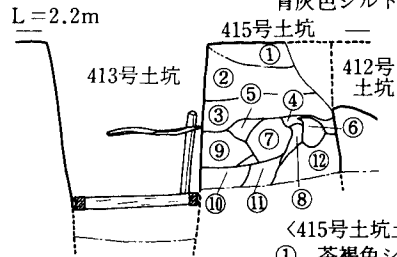
- <425号井戸土層名>
- ① 淡灰褐色シルト
 - ② 灰色シルト
 - ③ 灰白色シルト
 - ④ 暗灰色シルト
 - ⑤ 灰黄褐色シルト



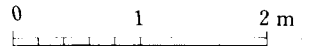
- <414号井戸土層名>
- ① 灰色シルト質極細砂
 - ② 暗灰色シルト(硬い)
 - ③ 黄褐色地山質土ブロック
 - ④ 暗灰色シルト(やわらかい。青灰色シルトブロック含む)



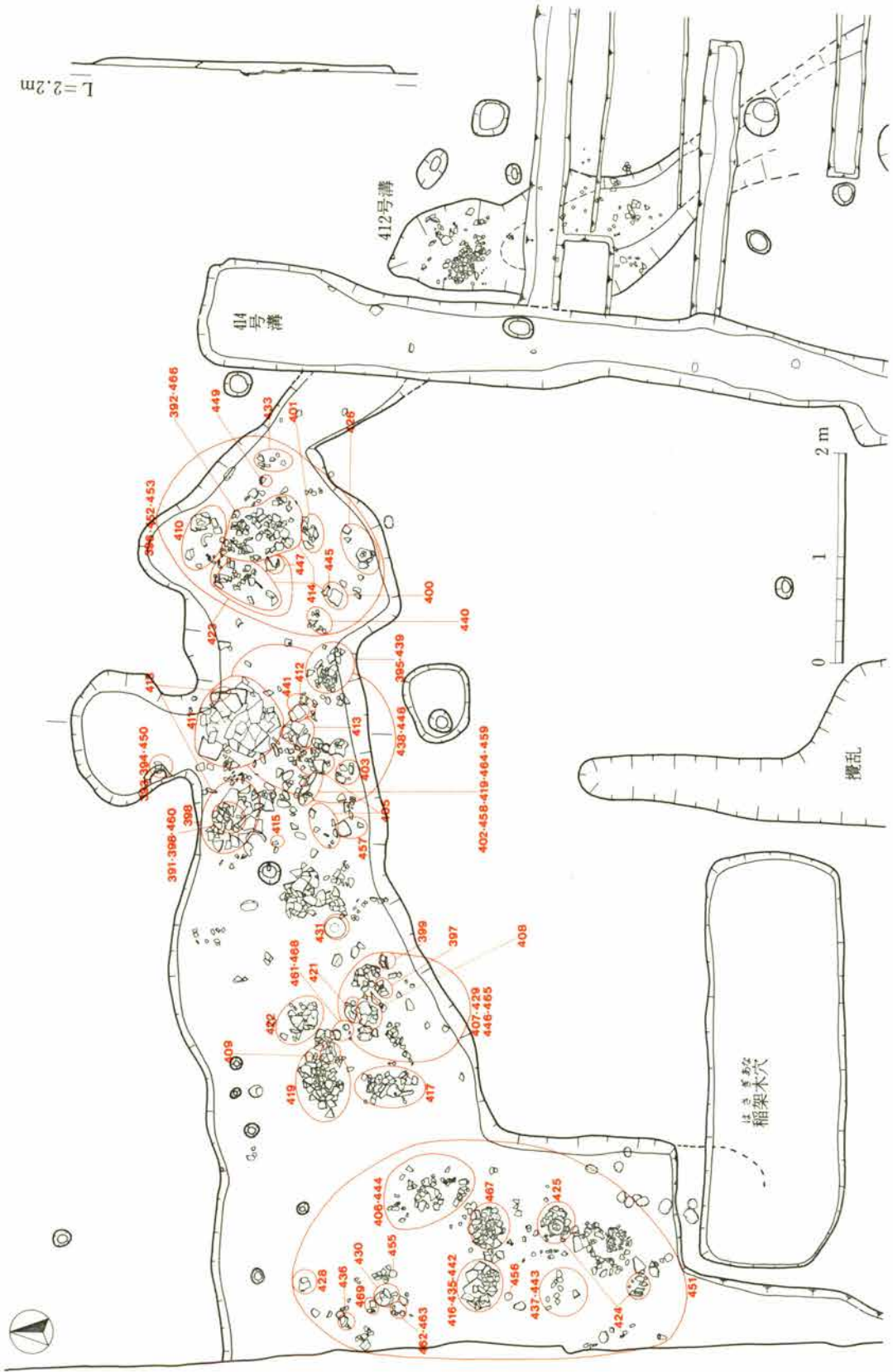
- <412号井戸土層名>
- ① 黒色シルト
 - ② 暗黒色シルト
 - ③ 灰色シルト
 - ④ 淡茶褐色シルト質極細砂
- (まだら状に青灰色シルトブロック含む)



- <415号土坑土層名>
- ① 茶褐色シルト
 - ② 暗茶褐色シルト
 - ③ 暗黒灰色シルト
 - ④ 黒色炭層
 - ⑤ 青灰色シルトブロック
 - ⑥ 緑灰色シルトブロック
 - ⑦ 青灰色シルトブロック
 - ⑧ 混じり黒色シルト
 - ⑨ 濁青灰色シルト
 - ⑩ 黒色シルト混じり青灰色シルト
 - ⑪ 青灰色シルト
 - ⑫ 濃紫色シルト



第9図 井戸実測図(2) (S=1/60)

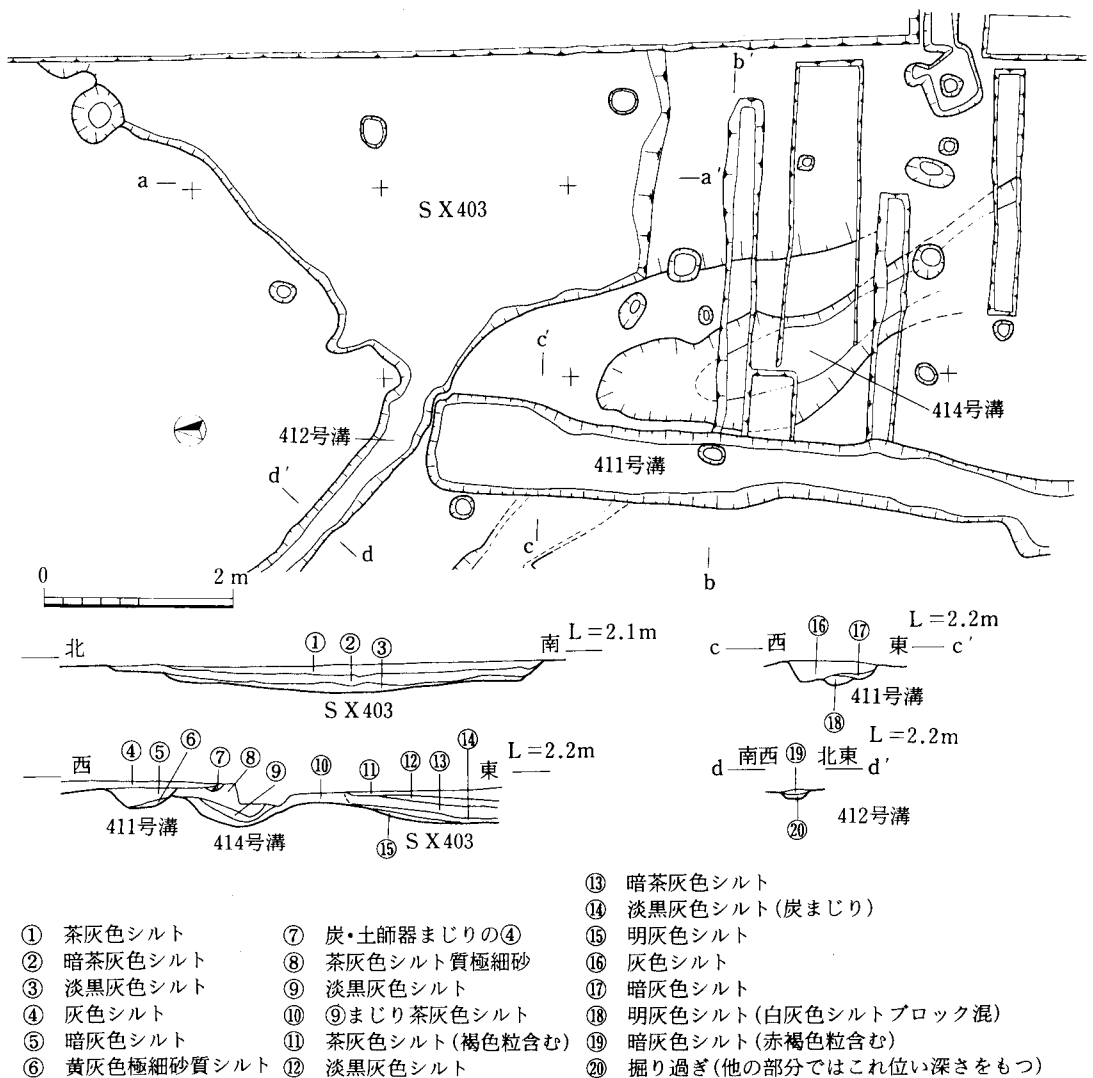


第10図 413号溝平面図 (番号は土器図版番号と同じ。)

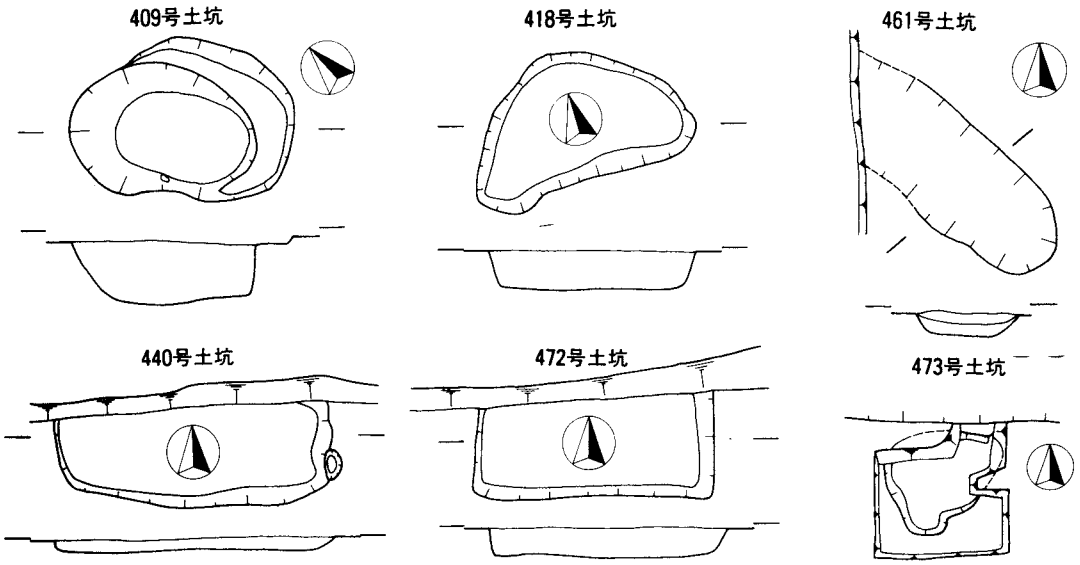
461号土坑（第12図） J・K-3・4区で検出した溝状の穴。調査区外に伸びており、全体の規模・形は不明だが、幅約0.8m、長さ2m以上、深さ約0.2mを測る。

472号土坑（第12図） P・Q-18・19区で検出した土坑。北端が調査区外に伸びており、全体の規模・形は不明だが、東西約2.2m、南北0.8m以上、深さ約0.1mを測る。

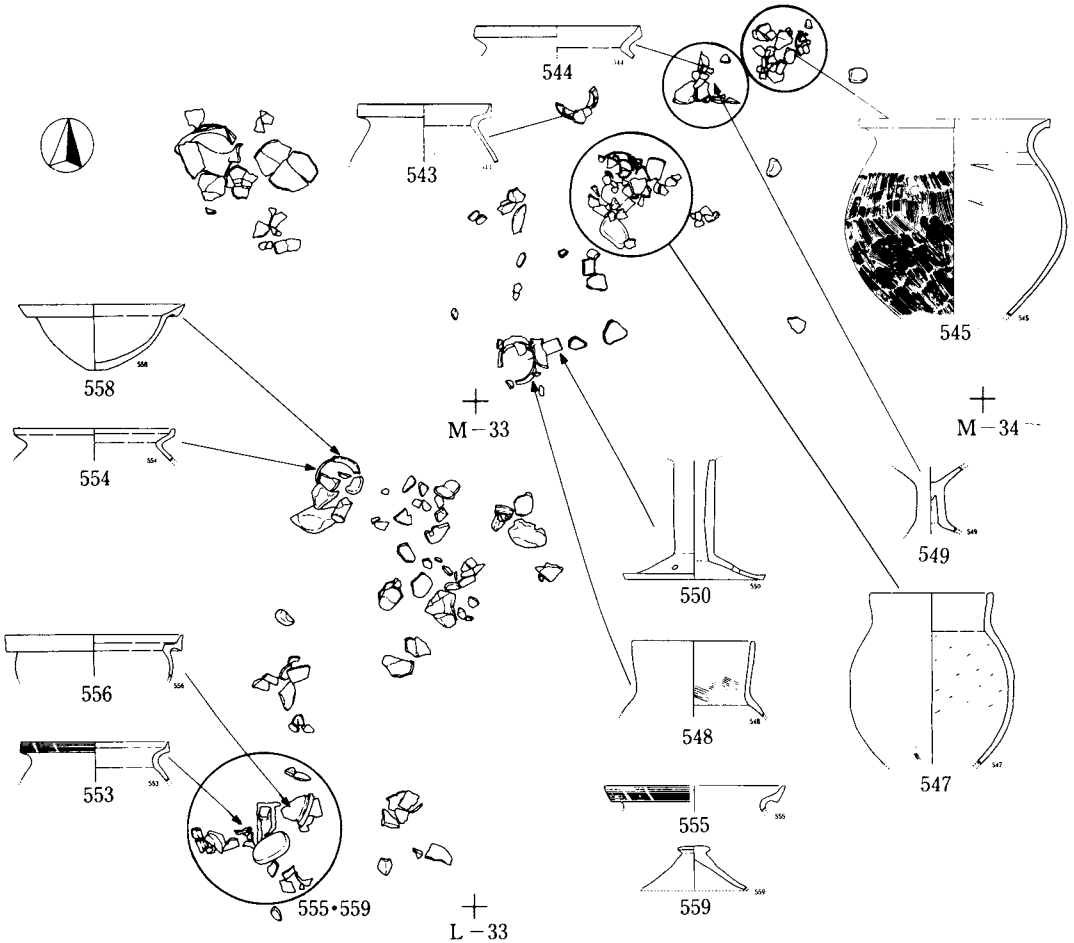
473号土坑（第12図） I-19区で検出した不整形の浅い凹み状の土坑。径約0.8m、深さ約0.1mを測る。土坑内から土器がかたまって出土した。この土坑は420号溝の南肩が不明確なために断ち割りを設けたところ、多量の遺物が出土したため、たまたま部分的に下層まで掘り下げた遺構である。限られた部分的な掘り下げであり、土坑と言うより、単なる凹み的なものである可能性も否定できない。



第11図 SX 403, 411, 412, 414号溝実測図 (S=1/80)



第12図 土坑実測図 (S=1/60)



第13図 III区L・M-32・33地区土器集積実測図

M-32・33区土器集積（第13図） 中世遺構の検出段階に下層の土器がまとまった形で出土した。中世段階に下層土器が攪乱されて浮き上がったか、もしくは下層に遺構があり、その覆土上面に集積した土器を検出したかのどちらかであろう。中世以降の「攪乱」だとしても遺物の出土状況や残り具合からそれほど大きく動いたものとは考えられず、この地点の下層に下層遺構が存在する可能性が高い。

(2) 奈良・平安時代

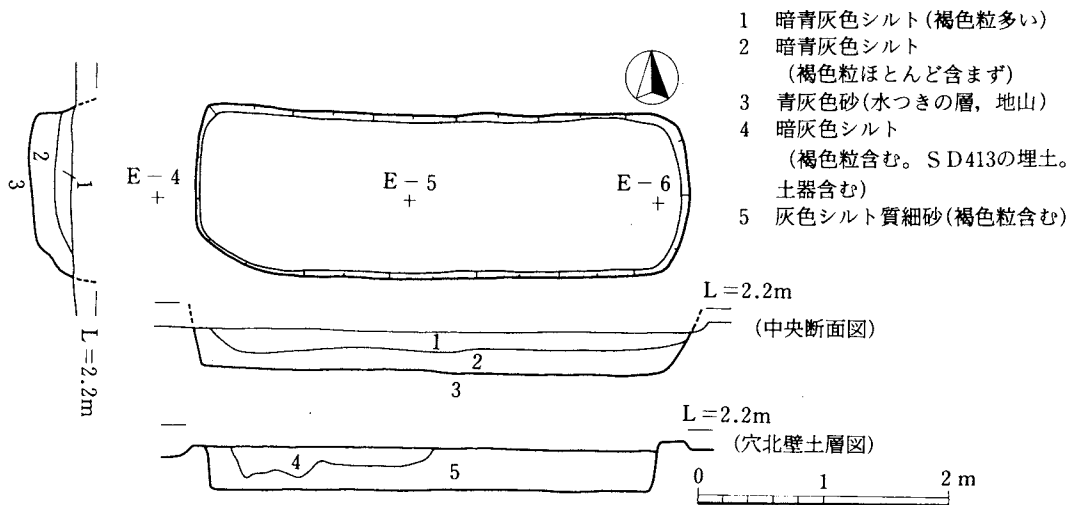
411号溝（第11図） G～D-8区で検出した、南北方向の溝。幅約0.7～1 m、深さ約0.2 m、長さ8 m以上を測る。南端近代以降の攪乱にあっているが、さらに南に伸びると思われる。溝内からは、須恵器が出土している。（鳥越浩・木立雅朗）

第5節 近世以降の遺構

稲架木穴（第14図、図版9）

D・E-4・5区で検出された長方形の土坑。長辺約3.9 m、短辺約1.3 m、深さ約0.36 m以上をはかる。他の遺構より浅い地層のところで平面形を確認できたが、調査進行の関係上若干上部を削平して発掘した。埋土の上面には樹皮が敷き詰められており（図版9）、木の枝なども出土したが時代を示すような遺物は確認できなかった。この穴はS D413号溝を切っており、穴の北壁にはS D413号溝（もしくは別遺構）と思われる断面形が認められた。なお、S D413号溝は南壁・西壁では認められず、その途中で途切れていたと思われる。

近年のコンバイン普及以前には稲架木に稲を干すのが普通だったが、小松市周辺ではその稲架木を使わないときは穴に埋めて腐らないように保存していたと言う。地元の農家の方々の話して



第14図 稲架木穴実測図 (S=1/60)

はこの穴はそうした稲架木をを保存する稲架木穴にそっくりだと言うことなので、稲架木穴としてとらえておきたい。この穴は浅いが含水層（砂層）に達しており、木の保存に適している。Ⅱ、Ⅲ区では含水層が深いのでⅠ区を選んで稲架木穴を作った可能性が高い。時代は不明だが、近世・近代のものと想定される。なお、性格不明の長方形の土坑のなかにはこのような稲架木穴が含まれているものと推定される。また、同様の穴は当遺跡の第2次調査でも検出している。

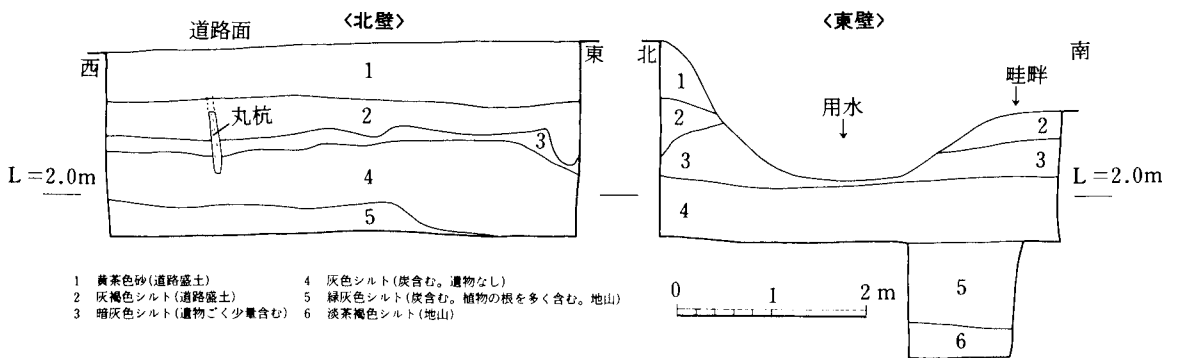
（木立雅朗）

第6節 保存区域ポンプ場の調査

盛土工法によって遺跡が保存される区域に小型のポンプが設置されるため、その部分に限り重機で約20㎡（4×5m）を掘り下げたが、遺構を確認できなかった。遺物もほとんど出土しなかった。試掘調査によって盛土工法区域に遺跡がのびていることが確認されているが、ポンプの設置地点はちょうど遺構・遺物の空白地点にあったと考えられる。

この地点の基本層序は、2層にわたる農道盛土（①・②）、旧耕作土および包含層（③）、地山（⑤・⑥）であった。④は上面が古代末以降の、下面がそれ以前の遺構面になると推定されるが、遺構・遺物が検出されなかったため、確認できなかった。

（木立雅朗）



第15図 盛土保存区域ポンプ場設置地点土層断面実測図 (S=1/80)

第4章 遺物

第1節 古代末～中世の遺物

当遺跡では下層遺構、および下層包含層の土器量が極めて多いため、ほとんどの上層遺構に下層の土器が混入している。また、上層遺構を掘りすぎた場合、下層遺構もしくは包含層の土器が出土し、上層遺構の遺物として誤って取り上げる場合もある。そのため、第1節ではそうした混入品と考えられる下層土器は一部を除いて原則として取り上げなかった。

(1) 土坑出土の遺物

401号土坑（第22図2～7、図版24）

2・3は土師器小皿。4・5は土師器椀。6は石製アンカの蓋。7は灯明に用いたと考えられる石で、上面にススの痕跡が残る。この石は灯明専用の石製品として作られたのではなく、当初、略三角形の平面形であったものを底辺をえぐるなどして再加工して用いている。

411号土坑（第23図8～20、図版24）

8は須恵器杯蓋で混入品と考えられる。9は柱状高台をもつ土師器皿と推定される。10～13は土師器椀。14は柱状高台をもつ土師器小皿。15～20も土師器小皿ですべて底部に回転糸切痕をもつ。21・22もロクロ成形である。土器量はさほど多くはないものの、非ロクロの土師器は一片も確認できなかった。

412号土坑（第23図23～26）

すべて非ロクロ土師器で中皿、24～26は大皿である。

415号土坑（第23図33、図版24）

瀬戸美濃焼の瓶子底部が出土した。

420号土坑（第23図28）

てづくね成形の土師器小皿が出土した。

421号土坑（第23図38）

越前焼すり鉢が出土した。口縁部外面に沈線がめぐる。内面にはオロシ目を確認できなかった。

425号土坑（第23図34）

珠洲焼の甕の口縁部が出土した。

431号土坑（第23図29）

てづくね成形の土師器中皿が出土した。

434号土坑（第23図27）

天目茶碗の胴部片が出土した。なお、この破片は包含層出土品と接合した。

450号土坑（第23図36・37）

36は天目茶碗。37は越前焼の壺である。

451号土坑（第23図30）

てづくね成形の土師器大皿が出土した。

460号土坑（第23図35、図版24）

青磁椀が出土した。

465号土坑（第23図31、図版24）

口縁部に小さな玉縁をもつ白磁が出土した。

S X 402（第23図32、図版24）

口縁部に大きな玉縁をもつ白磁が出土した。

S X 415（第24図39・40、図版24）

39は越前焼大甕の肩部片で、刻印が押捺されている。40は越前焼の片口すり鉢。

408号土坑（第24図47～50、図版25）

47～50は土師器だが、50だけが非ロクロ成形の土師器であとはすべてロクロ成形の土師器である。47は柱状高台をもつ小皿。48は小皿。49は椀。50は大皿である。

422号土坑（第24図45・46、図版25）

45はてづくね成形の土師器小皿。46は珠洲焼の底部である。

424号土坑（第24図51、図版25）

石臼の破片が出土した。

401号集石（第25図52～57、図版25）

52は瀬戸美濃焼の椀で全面にオリーブ灰色の釉薬が施されている。53・55は越前焼大甕片。54は珠洲焼の胴部片。56・57は石製アノカの蓋片である。

(2) 小形竪穴状土坑出土の遺物

413号土坑（第16図1、図版23）

炭化木、下層土器とともに調理済炭化米が出土した。現存する寸法は長辺7.7cm、短辺5.0cm、最大厚3.7cm、乾燥重量22.2gを測る。復原すると直径約8cmの偏平な円形を呈する。粃殻は一切確認されず、粒が押しつぶされて変形しているものすら認められる。また、A面には指で押さえたような痕跡があり、その部分は米粒が押さえられて変形しており、指紋もしくは掌文状の圧痕も認められる。B面には絞り込んだような痕跡が認められ、この炭化米が絞り込むようにして握られた可能性が高い。これらの痕跡から調理・加工されたものであることに間違いない。

米粒は長さ約4～5mm、幅約3mmを測り、見た目には現在の米粒よりやや小振りな印象を受ける。米粒間には異質な繊維質の物質を含む箇所が一箇所あり、握るときにまわりのものが混入したかもしくは「具」として繊維質の食物等を混ぜた可能性がある。また、割れ口には板状の木目の反転痕が認められる。板状の棒に米を巻き付けたか、もしくは握った米に板状の棒を差し込んだのだろう。なお、この棒は一本とは限らず、数本であるか、もしくは一本の棒を何度も差し込んだものである可能性が高い。あるいは先端のささくれだった棒であった可能性もある。

なお、413号土坑から出土した土器は弥生時代に限られ、中世の土器類を確認できなかったが、遺構の形状や検出面から413号土坑と炭化米は古代末～中世の所産と推定される。

(3) 井戸出土の遺物

412号井戸（第26図～28図58～106、図版3～8）

58・59は須恵器で混入品と考えられる。60・61は白磁。62・63は土錘でいずれもほぼ完形で、明灰色～灰色を呈し、焼成はやや甘い。最長4.5～4.7cmを測る。64～67は柱状高台を持つ土師器碗の底部で全体の形を知ることはできないが、64・65は高台の径が小さいのに対し、66・67は大きく裾広がりになっている。68～79は土師器碗。80～100は土師器小皿。小皿の口径は8cm前後を測る。16は焼成前に底部をくり抜いている。101～103は漆器碗。66の内外面、70の見込みと割口部分、80の口縁部内外面に煤が付着している。104は付札状木製品。105は筒状木製品。106は柔らかい岩石の切石で表面に煤などが付着している。竈・囲炉裏など火を焚く施設の構築材として利用されていたと考えられる。

410号井戸（第28図107～124、図版9）

当井戸からはロクロ成形の土師器とともにてづくね成形の土師器もほぼ等量出土している。107～114はロクロ成形で、107～109は碗、110～114は小皿である。110は小皿のわりに大きく、碗との中間タイプであるかも知れない。115～122はてづくね成形の土師器で、115～119は大皿、120～122は小皿である。磨耗のため明確ではないが、115は口縁部に連続2段なでを施したものと推定される。それ以外は指頭圧痕を明瞭に残すなど、成形が雑である。大皿は口径13～16cm代、小皿は7～8cm代を測る。123は瓦質の甕片、124は珠洲焼の甕片である。

409号井戸（第29図125～171、図版9・10）

125は青白磁の合子片、170は内外面に漆器碗、171は板状木製品、169は珠洲焼の甕片である。それ以外はすべて土師器で126は碗状の底部片でロクロ成形でないとは言い切れない。それ以外はすべててづくね成形で、127～134は大皿、135～143は中皿、144～156は小皿である。ほとんどの資料が口縁部をていねいな2段から1段のなで調整を施している。大皿は口径13～16cm代、中皿は10～12cm代、小皿は7～8cm代を計る。この他、しじみの貝殻膜も多量に出土した。

401号井戸（第30図172、図版10）

青磁の小皿が出土している。

406号井戸（第30図173、図版10）

青磁碗が出土している。

405号井戸（第30図175、図版10）

青磁の瓶片が出土している。越州窯の製品と推定される。

411号井戸（第30図176～185、図版11）

176・177はてづくね成形の土師器大・中皿、181は越前焼の片口すり鉢、178は須恵器蓋片、179は土師器長甕、180は土師器甕類、182・183は珠洲焼の甕片、184は越前焼のすり鉢、185は茶臼の破片である。

413号井戸（第31図186～193、第32図210～212、図版11・12）

186～189は土師器で、186がロクロ成形である以外はてづくね成形である。190は土錘、191は瓦質の甕片、192は両面に切り傷のある板状木製品、193は箸である。210～212は井戸側でそれぞれ

れが組合った形で出土した。組方と形状によって木取りの原則を守っており、210・209、211・212は共通の木取りが確認できる。

414号井戸（第31図197～203、第32図207・208、図版11・12）

197は竈や囲炉裏の構築材と思われる切り石である。切り込みが確認され、組み合わせて構築したことが分かる。198～203はてづくね成形の土師器である。207・208は井戸側の栈板である。

415号井戸（第31図194・204）

194は箸、204はてづくね成形の土師器である。

416号井戸（第31図205・206、図版11）

てづくね成形の土師器が出土した。いずれも口縁端部にていねいな調整を施している。

(4) 溝出土の遺物

401号溝（第33図～36図213～255、図版12～14・21）

当溝からは多種にわたる遺物が多量に出土している。218～228はてづくね成形の土師器。213～221は溝西肩に投棄された状態で出土している。229は土師器の鍋である。230はカマドの脚端部、231は須恵器双耳瓶の口頸部片である。230・231は前代の遺物の混入であろう。232は珠洲焼の壺の口縁部片、233は珠洲焼の大甕、234は常滑焼の大甕、235～237は珠洲焼のすり鉢、238～240は越前焼のすり鉢である。241は中国製の三彩盤で、緑釉を基本として暗褐色の釉薬が流し掛けられている。2次調査で出土した別破片も同一個体と推定されるが、それは底部外面を除く全面を施釉しており、暗褐色が薄く、黄色がかった部分が確認できる。242～245は青磁、246～248は瀬戸美濃焼である。249は五輪塔、250は何らかの台であるが、上面にススが付着していることから、灯明具として使用していることが分かる。251は砥石、252は石製アンカの身、253は石臼である。254・255は銅銭で254は洪武通寶、255は元豊通寶である。初鑄年代は洪武通寶が1368年、元豊通寶が1078年である。洪武通寶は当溝の上面に近い位置で出土したため良好な資料とはいえないが、当溝の上限を示す可能性がある。

402号溝（第37図256～269、図版14）

401号溝ほど大量の遺物は出土していない。256は須恵器碗の底部である。257・258はてづくね成形の土師器である。259は三彩盤の底部片である。241や2次調査で出土したもの（第17図）と同一個体であろう。260・261は青磁碗、262は越前焼の甕の口縁部片、263・264は珠洲焼の甕類、265～267は越前焼甕の胴部で刻印を施された部分、268は越前焼すり鉢、269は石製アンカの身の破片である。

403号溝（第38図270～274、図版15）

270～273は土師器で、270・273がロクロ成形、271・272はてづくね成形である。274は珠洲焼の甕片である。

408号溝（第38図275～278、図版15）

275は須恵質の陶硯で裏面はアーチ状に抉られている。側縁に沿って小さな突帯が付くが、端縁には突帯は付かない。276は青白磁かと思われる。277は外面に条痕文を施す弥生土器、278は

土師器で台付の壺類と思われる。

(5) ピット出土の遺物

ピット4108 (第39図293)

ロクロ成形の土師器碗が出土した。

ピット4042 (第39図294)

ロクロ成形の土師器碗の底部が出土した。

ピット4130 (第39図295)

ロクロ成形の土師器碗が出土した。

ピット4067 (第39図296)

ロクロ成形の土師器碗の底部が出土した。

ピット4071 (第39図298)

板状に加工した石が出土した。

ピット4096 (第39図297)

石製アンカの蓋破片が出土した。

ピット4073 (第40図299～301)

299は竈、囲炉裏などの石製構築材、300は板状に加工された石、301は砥石である。

ピット4084 (第41図305)

底部径約18cmを測る柱痕で底部はやや丸みを帯びている。

ピット4137 (第41図304)

底部径約25cmを測る柱痕で側縁の端を切り落として、底部を若干尖らせている。

ピット4210 (第41図302・303)

石臼の破片が出土した。

(6) 包含層出土の遺物 (第42～44図306～372)

306～315は土師器で、312は土人形の足部分で、306・310・313がロクロ成形である以外はずくね成形である。316～321は瓦器で、316～318は火鉢類、319～321は外面に刻印をもつ花瓶類と思われる。322～324は瓦質の陶器で内外面に刷毛目調整を施している。325も同様に内外面に刷毛目調整を施すが須恵質に良く焼き締まっている。326は外面に格子状の叩きを施す陶器である。322～326とも類例は2・3次調査で出土しているが、その産地については特定されていない。

金属製品

①銅銭 (第45図373～385、図版21)

包含層からは6種15枚分の古銭が出土している。文字面で重なった2枚と残りが悪い2枚の計4枚分の銭種が不明である。そのほか、寛永通寶5枚を除けば、すべて北宋銭であった。北宋銭のうち、最古はⅢ区から出土した至道元宝(初鑄年代995～997年)で、もっとも新しいのは永楽

通宝（初鑄年代1408年）である。

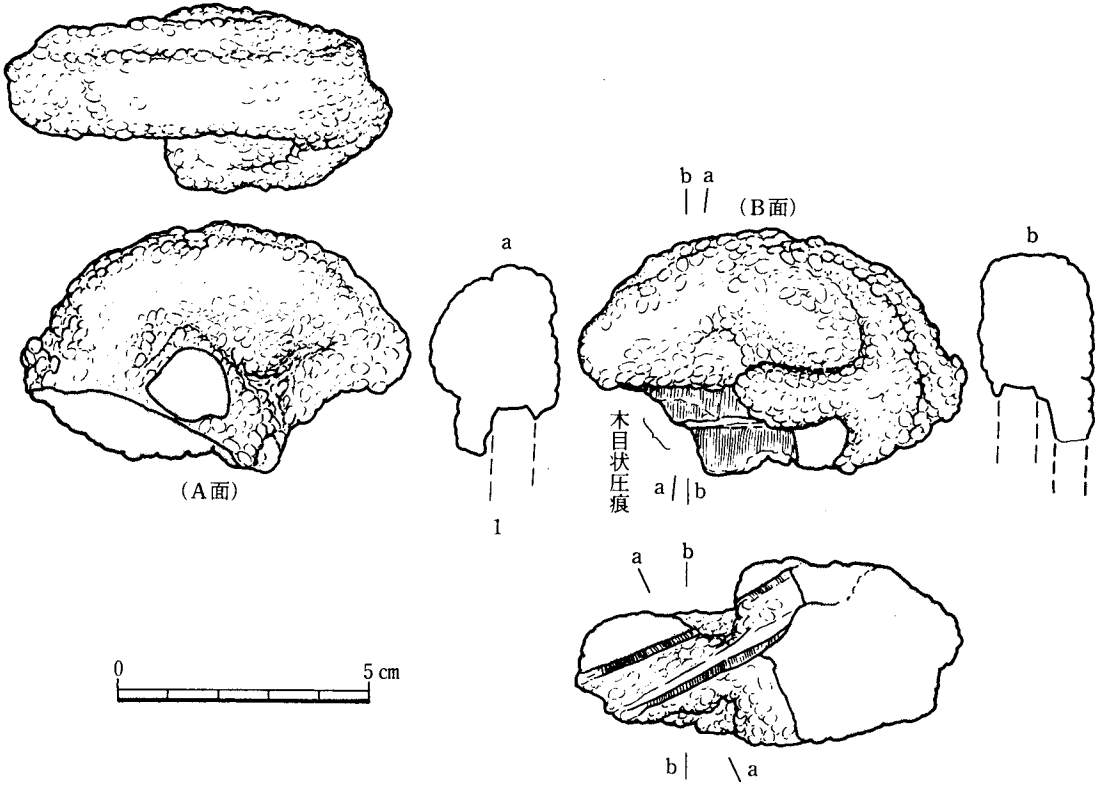
②青銅製品（第45図386・387、図版20）

386は宝珠形をした中空の青銅製品で脚端部が欠けている他はほぼ完形である。薄い銅板でできている。387は小刀の鞘止めの金具と思われる。

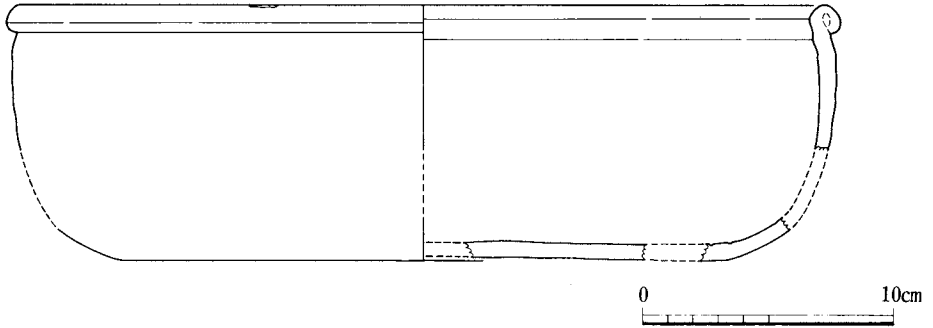
その他の金属製品としては銅椀の小片1、銅製で端部が耳かき状になった筭の破片1、鉄釘小片1がある。
(木立雅朗)

表1 出土古銭計測表

番号	出土地区・遺構・層位	銭貨名	書体	重量g	直径cm	直径横	内径cm	内径横	備考（初銭年代等）
254	Ⅲ区401号溝 f 区灰茶土	洪式通宝	楷書	1.7	2.26	2.25	0.56	0.58	1368年～98年
255	Ⅲ区401号溝	元豊通宝	行書	(0.8)	2.38	—	0.69	—	1078年
373	Ⅲ区包含層	至道元宝	草書	(1.6)	—	—	—	—	995～7年
374	I区包含層	祥符元宝	楷書	1.6	2.39	2.40	0.65	0.66	1008年
375	Ⅲ区包含層	祥符通宝	楷書	(1.4)	2.47	—	0.64	0.64	1008年
376	Ⅲ区包含層	元祐通宝	行書	1.8	2.31	2.28	0.66	0.70	1086年
377	Ⅲ区包含層	聖宋通宝	行書	1.1	2.23	2.29	0.65	0.66	1101年
378	Ⅲ区包含層	永楽通宝	楷書	3.1	2.56	2.55	0.55	0.52	1408年
379	I区包含層下面	?元?宝	楷書?	1.7	2.28	2.30	0.68	0.70	
380	Ⅲ区包含層	?	?	4.4	2.41	2.42	0.62	0.65	2枚重。縦横不明。
381	Ⅲ区包含層	寛永通宝	楷書	3.8	2.43	2.44	0.55	0.55	
382	Ⅲ区包含層	寛永通宝	楷書	2.8	2.45	2.46	0.58	0.59	
383	I区包含層上面	寛永通宝	楷書	4.3	2.75	2.78	0.66	0.66	
384	I区包含層	寛永通宝	楷書	3.8	2.79	2.80	0.66	0.67	
385	Ⅲ区包含層	寛永通宝	楷書	(1.9)	—	2.51	—	0.60	
図無	I区包含層	?	?	(0.3)	—	—	—	—	腐食著しい。小片。



第16図 413号土坑出土調理済炭化米 (スクリーン・トーンは割れ口, S=2/3)



第17図 2次調査出土三彩盤実測図

第2節 平安時代以前の遺物

平安時代以前の遺物では、弥生後期（一部中期も含む）から古墳時代にかけての弥生土器・土師器が、主体的で、きわめて多量であるため、壺・甕・鉢・高坏・器台・椀・手づくね小型土器の器種をそれぞれ形態等により分類した。分類に当たっては『漆町遺跡Ⅰ』『吉竹遺跡』を参考とした。

この分類は『白江梯川遺跡Ⅰ』にならい、それを補填するものであると同時に、『白江梯川遺跡Ⅰ』を含めた本遺跡出土土器をまとめてみたものである。1～4次にわたる調査から、「白江梯川遺跡の全体像を考えるうえでの参考にしたい。

なお、分類するのに類例の不足するものは強いてあてはめず個々に記述した。

(1) 甕形土器（第18図）

A類 頸部から上は短く、下はそれに比して長いが、胴部はあまり張らない。短い口縁は外反する。口径・頸部径・胴部最大径の差が少なく、それらに比して器高の大きい弥生中期から通有の甕形土器である。口縁端部を刻むものが多い。

B類 「く」字に屈曲する口縁の端部をなでて面取りを行うもの。但し、口縁上端または下端を拡張し、有段状とするものはC類との差異が明確でない。口縁帯に凹線もしくは擬凹線を施すものが多い。施さないものはF類の一部との区別が難しくなる。（『白江梯川遺跡』Ⅰ改）

C類 発達した有段口縁をもつもの。口縁帯に施す擬凹線の有無によってC₁・C₂の2類に分けた。但し、ヨコナデの程度により凹線との区別が難しいものがあり、その分類は明確でない。

（『白江梯川遺跡』Ⅰ改、『漆町遺跡』の甕A類と同じ）

C₁類 口縁帯に擬凹線を施すもの。頸部から下は、外面刷毛目調整、内面ヘラケズリ調整を行うものが多い。（『吉竹』の甕A類）

C₂類 擬凹線を施さないもの。（『吉竹』の甕B類）

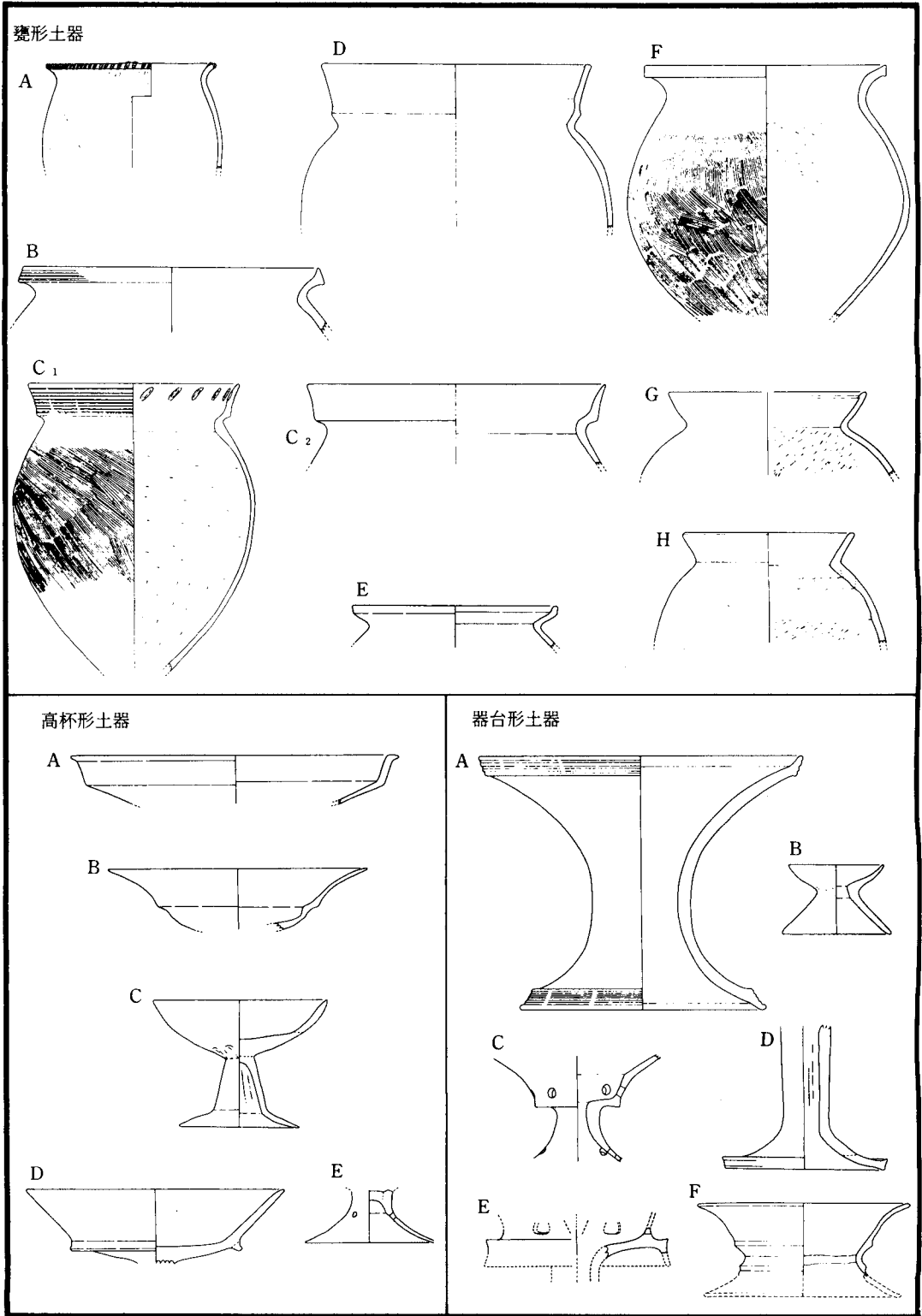
D類 発達した外開きの有段口縁の下端が突出し稜を持つ、山陰地方の甕に類似したものである。（『漆』の甕B類）

E類 頸部で強く屈曲し、開いていく口縁端をより垂直に近くつまみ出すもので、近江・東海地方の甕形土器と類似するもの。本遺跡ではきわめて少量である。（『漆』の甕D類、『吉竹』の甕E類）

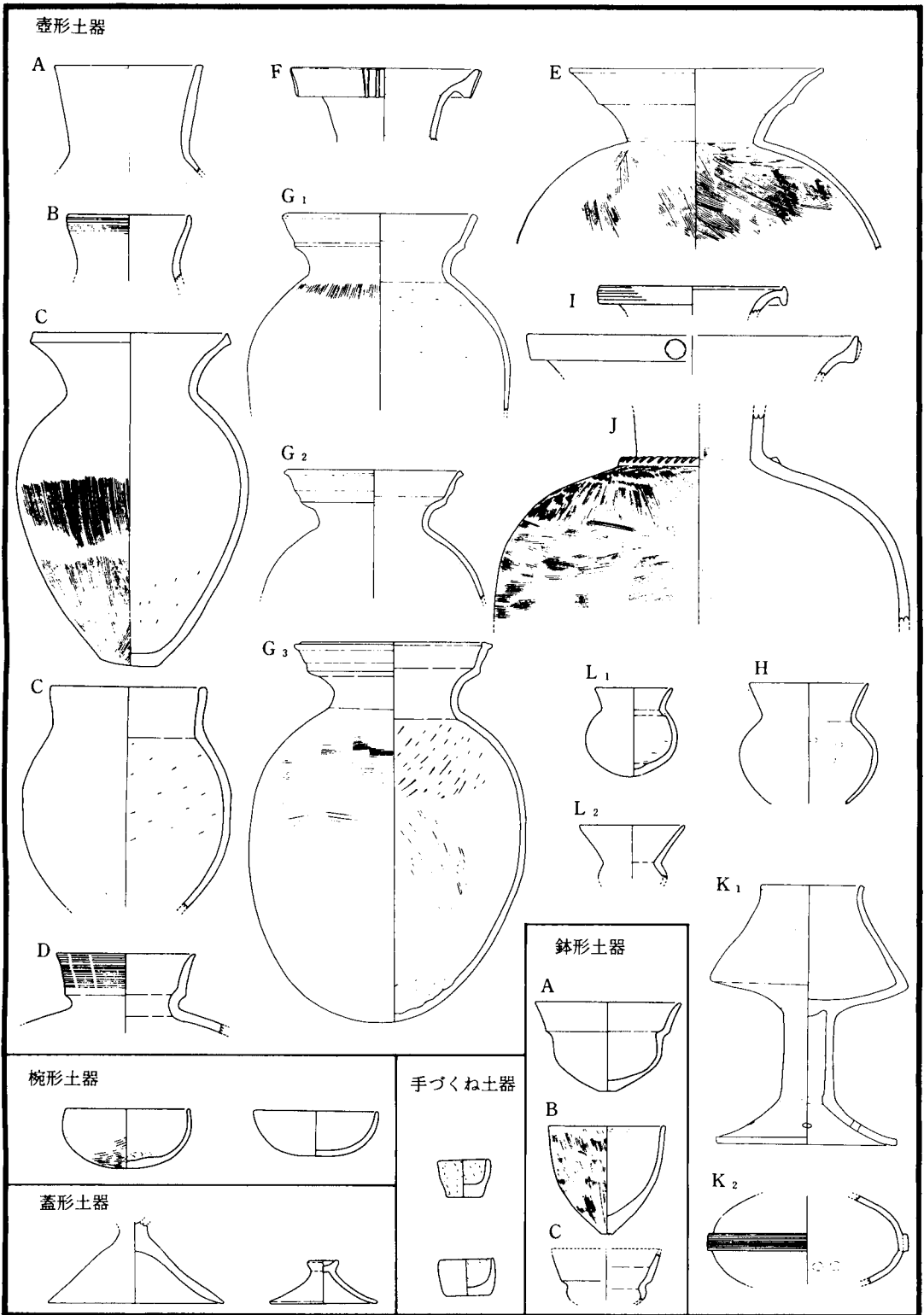
F類 頸部に強い屈曲をもつ「く」字口縁で、胴部は張り出し、ほぼ球形となる。外面に刷毛目調整をよくのこすようである。能登地方の古墳時代前期に多い甕形土器に類似するものも含むが、ここでは一括した。ただし、口縁端部をなでて面をとるものは甕Bとの区別が不明確なものも少なくない。（『漆』の甕F・G類、『吉竹』の甕C・D類）

G類 口縁端部内面を肥厚するもので畿内の布留式甕形土器に類似するもの。（『漆』の甕I類、『吉竹』の甕G類）

H類 全体につくりの雑な「く」の字口縁甕形土器で、内面には粘土紐接合痕や指圧痕をのこ



第18图 土器分類图(1) (S=1/6)



第19図 土器分類図(2) (S=1/6)

す。口縁部は長いものと短いものがあり、胴部はおおむねナデ肩で長胴のものとなる。（『漆』の甕J類）

(2) 壺形土器（第19図）

A類 長頸壺、口縁部は直線的に立ち上がりひらく。短い有段口縁をもつものもある。（『吉竹』の壺A類）

B類 細頸壺、頸は長めで、口縁は端部が内湾し、中位のふくらむ袋状となる。胴部は球形の低平なものか。（『吉竹』の壺C類）

C類 「く」字口縁で短頸の広口壺を一括した。細かい器形や調整などはバラエティーに富む。（『漆』の壺I類、『吉竹』の壺G類他）

D類 頸の短い有段口縁の壺で、幅の広い有段口縁をもつ擬凹線を施す甕形土器に類似したものが多く。「月影式」土器を象徴するタイプである。（『漆』の壺A・B類、『吉竹』の壺D類）

E類 ゆるく外反して開く頸部にさらに開いた口縁部を持つもので一般に胴部は球胴となる。（『漆』の壺D類）

F類 外反する口縁部先端を垂直に幅広く拡張し、棒状浮文などの装飾を施すもの。近江・東海地方の壺形土器に類似する。（『漆』の壺F類、『吉竹』の壺I類）

G類 口縁部下端が突出し、稜をもたせる山陰地方のものに類似した壺形土器で、口縁端部は肥厚・ヨコナデにより突出し、胴部は縦長の楕円形、底部は丸底となるものが多い（『漆』の壺E類）。本遺跡で多量に出土した。口縁端部の形態から、3類に分けることできる。

G₁類 口縁端部を肥厚しないもの。丸くおさめるものと斜め外傾方向に面を取るものがある。

G₂類 口縁部の上端を肥厚し、ヨコナデにより斜めに面をとるもの。

G₃類 G₂同様に口縁端部の上端は肥厚し斜めに面を取るが、より強いヨコナデにより、中凹み状とするもの。

H類 球形の体部から外反して伸びる長い口縁部をもった壺形土器でやや小型のものである。（『漆』の壺M類、『吉竹』の壺G類）

I類 口縁端部を上方や下方へ拡張してできた面に浮文・凹線文等の加飾を行うもので、頸部から下の形態は不明確である。畿内第V様式土器の影響を強く受けているものと考えられる。

J類 大型壺で、頸部に凸帯などをもつ。（『漆』の大型壺A類）

K類 台付装飾壺。壺と器台が合体したものと考えられる。器形により2種に分かれる。（『漆』の壺K類）

K₁類 壺部分は口径が大きく、頸部は明確でない。脚部は器台ときわめて類似する。

K₂類 長く細い頸部と胴の強く張り出す球形の体部をもつもの。

L類 小型のもの。形態等により2種に分かれる。

L₁類 他の壺形土器のミニチュア品的な器形のもの。（『漆』のE類以外の小型壺）

L₂類 小型丸底壺（『漆』の小型壺E類）

(3) 高环形土器（第18図）

A類 口縁端部に幅広のほぼ水平な面をもつもの。脚柱部は直線的なもの、脚裾部は有段のもの

のと無段のものがあると考える。(『吉竹』の高坏A類)

B類 坏部が有段鉢形土器に類似する段をもつもの。脚部の形態はA類と同様であろう。(『吉竹』の高坏B類)

C類 坏部は外方へ広がるが、坏低部付近の屈曲が弱く、脚部は脚裾部で強く屈曲し外反するもの。畿内地方の影響を受けたもので、多く出土した。(『漆』の高坏H類)

D類 坏口縁部と坏低部の境に凸帯を持つもの。(『漆』の高坏I₂類)

E類 椀形の坏口縁部先端が外反するもの。脚部は不明であるが、脚裾部で屈曲して外反するものが付くと考える。(『漆』の高坏J類)

(4) 器台形土器 (第18図)

A類 器受部と脚部が有段となる器台で、端部面に擬凹線を施すものがある。弥生時代後期後半の指標の一つである。(『吉竹』の器台A・B類)

B類 小皿状の器受部に比して大きめな脚部がゆるやかに外反する小型のもので、器高は10cm内外の、いわゆる小型器台である。(『漆』の器台I類、『吉竹』の器台F類)

C類 器受部底から屈曲し、外反して大きくのびる口縁をもつ器台。(『漆』の器台B類)

D類 その存在は明確ではないが、脚部は直線的な筒状のものが大きく開き、端部は面を取るものもある。器受部は有段状に屈曲し、口縁は外反するもの、と定義しておく。(『吉竹』の器台C類)

E類 器受部を上下に拡張した器台形土器に鉢形土器を結合させたかのような特異な器形を呈するもの。一般に、装飾器台あるいは結合器台と呼称しているものである。(『漆』の器台A類、『吉竹』の結合器台A～C類)

F類 山陰地方に多い鼓形器台に類似するもの。(『漆』の器台L類)

(5) 鉢形土器 (第19図)

A類 有段口縁もしくは有段状の口縁を呈するもので、底部は平底。(『漆』の鉢A類)

B類 砲弾状の器形のもので、底部は平底。(『漆』の鉢C類)

C類 小型丸底鉢(『漆』の鉢J類)

(6) 椀形土器 (第19図) 丸底の底部に浅い体部、内湾して伸びる口縁部をもつ。

(7) 蓋形土器 (第19図) 外反してのびる体部をもつものである。紐頂部が凹むものと凹まないものがあり、紐頂部先端は突出するが個体によって程度の差が大きい。

(8) 手づくね成形による小型土器 (第19図)

I区SD410出土土器 (第55図473) 473は口径11.9cm、器高6.5cmの鉢Bで、底部は小さな平底となる。

I区SD411出土土器 (第55図470～472) 470～472は須恵器。470は甕の口縁部で第66図620と同一個体であろう。口径10.1cmを測る。471・472は須恵器甕で、同一個体であろう。471は口縁部で、口径47.8cmを測る。472は胴部で、外面に平行叩き、内面に同心円叩きを施す。470は古墳時代中期の和泉陶邑窯の所産で田辺遍年のTK208型式に相当するものだろう。471・472は8世

紀後半まで時期が降るものである。

I区SD412出土土器（第55図474～478）474～477は甕形土器である。474は「く」字に屈曲し、先端を丸くおさめる口縁をもつ。口径約15cm、甕Hであろう。475は甕C₁で、口径約21cmを測り、口縁部は先端がやや外反し外面には6条の擬凹線を施す。476・477は甕Gであり、口径はほぼ等しく約17cmを測る。476はやや器壁が厚い。478は高坏の脚柱部である。

I区SD413出土土器（第46図391～第54図469）

平安時代以前の遺構としては、規模・遺物量ともに最大のものである。

甕C₁（393・394） 393は口径約13cm、394は口径約18cm、どちらも摩滅しており、擬凹線は明確でない。

甕D（391・392） 391は口径25.1cm、口縁端を水平にほぼ丸く収める。392は口径29.9cmで、口縁部上端を肥厚し面を取り、より強いヨコナデにより中凹み状とする。外面はわずかに刷毛目をのこし、内面は頸部から下に粗いヘラ削りを行う。

甕G（397～404） 397は口径17.2cm、器壁は薄く、やや摩滅している。398は口縁約17cm、器壁は薄い。399は口径約18cm、厚手の作りで、頸部以下の内面はヘラケズリ調整を行う。400は口径15.4cm、内面胴部に指押さえ痕をのこす。401は口径14.9cm、器壁は薄い。402は口径14.9cm、胴部内面のヘラケズリ調整の効果もあって、きわめて器壁を薄くしている。403は口径15.9cm、やや摩滅している。404は口径17.0cm、胴部内面に当て具痕をのこす。

甕Gの大きな特徴である口縁端部内面の肥圧に着目するならば、397・398は端部上端にはほぼ水平な面をもたせ、肥厚突出部をできるかぎり上方へもってきている。これに対して、399～404は口縁上端が内傾気味になり、肥厚突出部をやや下げている。さらに、399・402が突出部を丸くおさめているのに対して、401・403・404は角ばらせ、突出をより明確にしている。400はきわめて突出が控えめなものである。

甕H（405～410） 405は口径約18cm、短く「く」字口縁を呈し、端は丸くおさめる。口縁内面と胴部外面に細い刷毛目をのこし、内面頸部以下はヘラケズリ調整を行う。406は口径19.2cm、内面頸部以下に接合痕・指圧痕をのこす。407は口径18.5cm、短めの「く」字口縁で、端は先細りとなる。口縁部と頸部の接合部が明確になっている。408は口径16.0cm、端は丸くおさめる。胴部外面と刷毛目調整、内面は上位接合痕・指圧痕、下位はヘラケズリ調整を行う。409は口径17.4cmを測り、摩滅が激しい。410は口径13.7cm、頸部が深く屈曲して有段状となる。胴部は縦長の球胴形で、底部は丸底となろう。胴部外面は刷毛目調整、内面はヘラケズリ調整を行う。胴部内面上位には4段の接合痕をのこす。

壺G₁（413・417・424・425） 413は口径17.0cmを測る。417は口径17.8cm、器高32.3cmの完形であり、内面底部近くに指圧痕をのこす。424は口径18.1cmを測る。胴部外面刷毛目調整、内面ヘラケズリ調整である。425は口径14.0cm、やや小振りな口縁部をもつ。外面刷毛目調整、内面ヘラケズリ調整である。

壺G₂（411・412・414～416・420・421） 411は口径36.8cm、頸部径27.7cm、胴部最大径60.0cm、器高79.2cmの大型品であり、胴部内面下位に4段の接合痕をのこす。底部は径6.8cmの平底

である。412は口径18.8cm、外面刷毛目調整、内面は当て具痕らしきものをのこす。414は口径17.7cm、胴部内面と上位に当て具痕をのこし、下位にヘラケズリ調整を行う。415は口径27.5cmと大型のわりに器壁は薄い。口縁端部はG₃に近い形態をとる。口縁部上端・下端の突出はいずれも強い。416は口径17.6cm、底部を欠く。胴部外面はわずかに刷毛目調整をのこし、内面はヘラケズリ調整を行う。420は口径17.8cm、口縁端部の形態はG₃に近い。胴部内面には指圧痕と4段の接合痕をのこす。421は口径16.6cm、口縁部はとても丁寧な作りである。

壺G₃ (418・419・422・423) 418は口径18.3cm、胴部は外面刷毛目調整、内面ヘラケズリ調整を行う。419は口径18.5cm、器高34.7cmの完形である。口縁部の作りは丁寧で稜が明確である。胴部は外面が刷毛調整をのこし、内面は2種の原体でヘラケズリ調整を行う。422は口径18.2cmを測る。内面頸部付近に指頭圧痕をのこす。423は口径16.0cmを測る。

なお、426・427は壺底部である。

壺L₁ (455・456) 455は口縁部を欠く。456は口径7.1cm、器高8.1cm、ミニチュア土器の類にしては、胴部に比して口縁は短く小さい作りである。

高坏C (431~435・438) いずれも坏部のみ残存する。431は径16.4cm、口縁端部がわずかに外方へ屈曲する。432は口径15.5cmを測る。433は口縁部先端を欠く。434は口径15.7cm、浅い椀状の坏部である。435は坏部・脚部の先端を欠くが、脚部は「八」字状にゆるく広がる。438は坏部・脚裾部を欠く。

高坏D (428~430) 428・429は坏部のみ残存する。428の凸帯は比較的小振り、突出も控えめである。429は口径19.1cmである。凸帯は先細りでやや上方へそり返る。430の凸帯は厚めで、直線的な作りである。

また、439~441は坏部を欠くが、高坏CかDの脚部と考える。

高坏E (450) 底径12.3cm「八」字状に大きく外反して開く脚部で、透穴を穿つ。低平な小型高坏であろう。

器台B (451) 小型器台の器受部である。口径7.7cmで、口縁端をわずかにつまみ上げる。

器台E (449) 装飾器台(結合器台)の器受部である。口径16.9cmで、結合した口縁部下端に雨滴形透穴を穿っている。

鉢C (453・454・457) 小型丸底鉢であり、いずれも口縁端部と底部を欠く。453は有段状の口縁となる。457はより胴部径が大きく、口縁部はやや丸みを帯びるものであろう。

椀形土器 (467・468) 467は口径11.6cm、器高4.2cmとやや浅めである。468は口径11.4cm、器高5.5cm、口縁部はやや内湾気味となる。外面は粗い刷毛目、内面は指押さえ痕をのこす。

蓋形土器 (452) 中凹みするツマミ部のみが残存している。

手づくね土器 (458~464) いずれも胎土は精選されたものを用いており、内外面に指押さえ痕、指ナデ痕をのこす。458・459はやや赤め、461・463は黒めの色調を呈する。464は底径4.6cmとやや大型なものとなろう。

須恵器 (469) 坏蓋で、口径13.1cm、器高4.6cmを測る。天井部と口縁部を先細りの凸帯で界し、天井部中位までは単位の細い丁寧な回転ヘラケズリ調整を行う。口縁部はゆるく外開きとな

り、端部は丸くおさめる。古墳時代中期和泉陶邑窯の定型化以前の所産であり、田辺遍年ではTK208型式に相当する可能性が高い。

ほか、不明甕型土器（395・396）、底部（465・466）、分類不可能な高坏（436・442～448）がある。435は坏部口縁部と脚底部を欠き、摩滅しており、胎土に小石を多く含む。437は脚部で、3方に穿孔する。おそらくは高坏AかBに付くものであろう。また、442～448は底部を欠く脚部で、おそらくは高坏Cもしくは高坏Dにつくものであろう。443は外面ヘラミガキ・内面ヘラケズリ調整を施す。

I区SD413出土土器小結 本遺構出土の土器のうち、土器投棄のピーク時期に深く関わるといえるものは、甕D、甕G、甕H、壺G、高坏C、高坏D、器台B、鉢C、壺L、椀、手づくね土器、古墳時代中期（5世紀後半末頃）の須恵器が挙げられるだろう。そのうち、甕D・甕G・壺G・壺L・鉢C・高坏C・器台Bは漆・10群土器に、甕H・高坏D・手づくね土器・椀・須恵器は漆・13群土器に比定することができる。（田嶋1986）。また、甕C₁・高坏E・器台Eは弥生時代終末～古墳時代初頭に比定することができよう。グラフ表2～5は本遺構出土土器の土器組成を全体と上記の3時期にわけてそれぞれ表したものである。計量の方法は個体識別法と口縁部計測法を併用した。

漆・10群併行期は、大型のみのこる甕D・斉一性を保つ甕G・盛行し壺の主体となる壺G・急減していると考えられる小型土器3点セットから位置付けた（表4参照）。この時期のものが量的に本遺構出土土器の主体であり、土器組成もほぼ揃っているものと考え、計量分析を行い法量についてまとめてみた。（グラフ1・2）以下、その成果を交えながら、該期の土器様相について述べたい。

グラフ1によれば、甕Dすなわち山陰系甕は口径24cm以上の大型品のみで、中型・小型のものは存在しない。それと対照的に甕Gすなわち畿内布留系甕は、口径17cm前後の中・小型のものが多く、法量・調整等にある程度の斉一性が観察できる。本遺跡の中・小型の甕Gは、大型のみがのこる甕Dと補完関係にあるものと考えられる。逆に、盛行する甕Gが中・小型の甕Dと交替したとも言うことができよう。壺Gは大型・中型のバラエティーがあるが、成形・調整技法にはある程度の斉一性をもちつつ盛行していると考えてよい。グラフ2で口径18cm前後のものに分布が集中していることがわかる。さらに、G₂がその主体であり、かつ最も幅広い大小のバリエーションを有することが観察できよう。小型土器3点セットのうちで、ここで確認できるものは器台B（小型器台）・鉢C（小型丸底鉢）であるが、量的には少ない。壺L₂（小型丸底壺）ははっきりとは確認できなかった。

漆・13群併行期は、甕形土器における甕Hへの集約・定量の手づくね土器・椀の定着・須恵器の出現から位置付けた（表5参照）。甕Hは「く」字口縁粗製甕で、甕D・甕G衰退後の土器様式の組成主体となるものである。手づくね土器は一定量確認できた。椀・須恵器は出現期のものでこれらと共伴する。

本溝はこの2時期に土器投棄のピークがあり、その他の時期の遺構との切り合い、遺物の混入があったもので、甕C₁・高坏E・器台Eなどがそれを示すと考える（表3参照）。

I区SD414上層出土土器（第55図479～482・第56図486）479～482はいずれも甕形土器である。

表2 SD413 出土土器の土器組成 (全体)

甕	壺	高杯	鉢	器台	手づくね	椀	須恵器
46 (7.6)	17 (7.2)	11 (3.3)	3 (0.0)	2 (0.5)	7 (3.8)	2 (1.0)	1 (0.5)

(数値は個体識別法、割弧内は口縁残存率による。高杯・器台は杯部または器受部と脚部で多いほうの数値を採用した。単位 n 個体、以下の表も同じ。)

表3 同 (弥生時代終末～古墳時代初頭)

甕B or C	壺D	高杯E	器台E
6 (0.4)	1 (0.0)	1 (0.5)	1 (0.2)

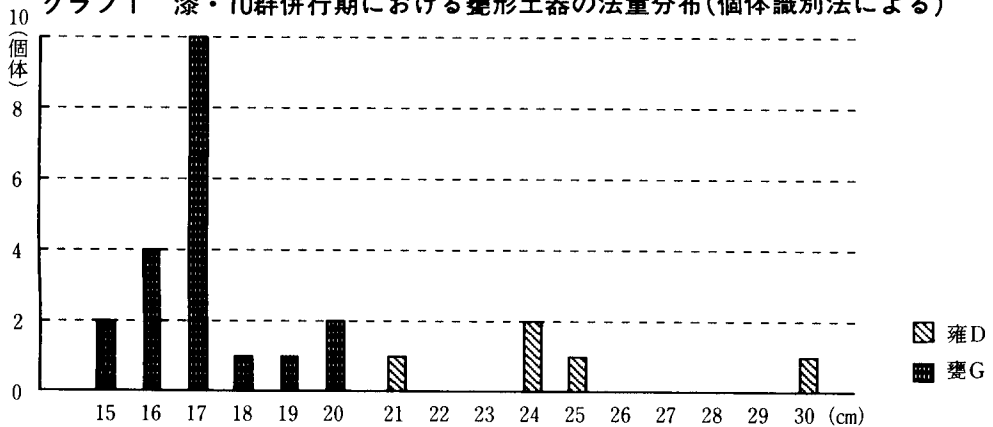
表4 同 (漆・10群併行期)

甕		壺		高杯	鉢	器台
甕D	甕G	壺G	壺L	高杯C	鉢C	器台B
5 (2.9)	21 (2.9)	15 (6.9)	1 (0.3)	7 (2.7)	3 (0.0)	1 (0.3)

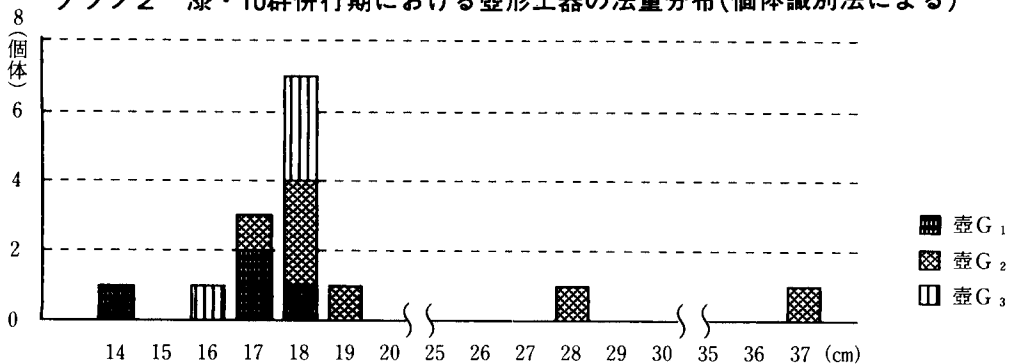
表5 同 (漆・13群併行期)

甕H	高杯D	手づくね	椀	須恵器
14 (1.4)	3 (0.1)	7 (3.8)	2 (1.0)	1 (0.5)

グラフ1 漆・10群併行期における甕形土器の法量分布(個体識別法による)



グラフ2 漆・10群併行期における壺形土器の法量分布(個体識別法による)



479は甕C₂で、口径約19cmを呈する。480～482は「く」の字に屈曲する口縁を呈する甕Hで、口径は480が約17.9cm、481が13.0cm、482が17.0cmを測る。486は高坏C坏部で口径16.4cmを測る。摩滅が著しい。

I区SD414下層出土土器（第56図483～485）483～485はいずれも弥生時代中期に溯る甕形土器であり、本書の分類では甕Aとなる。483は口径約28.6cmを測り、ほぼ水平方向に強く外反する。胎土には多くの砂粒を混ぜ、焼成はよくない。器面は刷毛目調整を施すが、外面が縦方向なのに対して、胴部内面上位は横方向。口縁端部内面は横ハケの上から2条もしくは3条の櫛描波状文を施す。口縁端部先端はヘラ状具で刻んでいる。484は483と同一個体であろう。485は口径約15.7cmを測る。器面は内外面ともナデ調整を行うが、外面はわずかに刷毛目調整をのこす。口縁端部は器面調整具と同じ用具で刻んでいるが、2点一対の特に迷い刻みが2か所あり、わずかに盛り上がっている。復元状態では、等間隔で4ヶ所に施していたものと考え。

I区SD414出土土器小結 本溝は、プランがきわめて不明確であり、13号溝と重複する可能性が高い。上層出土土器は13号溝に帰属するかまたは強く関連したものであろう。下層出土土器が本遺構に帰属する可能性が高い。483の口縁部内面の櫛描波状文は畿内第Ⅱ様式後半併行期に近江・山城地方で盛行する手法である。（国分1989）。485の口縁端部の2点押圧の手法は金沢市矢木ジワリ遺跡（畿内第Ⅱ様式後半併行）で顕著である。また、図化し得なかったが、下層より摩滅した条痕調整土器が数点出土しており、483～485など櫛描丈土器と共伴するものと考え。この3点から見ると、本溝下層出土土器は畿内第Ⅱ様式後半～第Ⅲ様式前半併行、北陸では増山遍年の2期・3期（増山1989）に位置付けることができよう。

I区SK461出土土器（第56図491） 491は斜方向に条痕調整を行う土器であるが、小破片で摩滅しており、詳細は不明である。

I区SX403出土土器（第57図498～502・第62図571） 498～502は条痕調整を行う土器である。498・499は条痕というよりむしろ沈線文である可能性が高い。501は棒か指による押圧痕が看取できる。いずれも小破片で摩滅しており、詳細は不明であるが、本遺跡の他の出土遺物から考えるとSD414下層出土土器と時期の近いものであろう。571は小破片であるが甕Bであろう。

I区Pit4191出土土器（第57図503・504） 503は甕C₁で口径18.7cm、器壁は薄く、外面刷毛目調整を行う。内面は摩滅している。504は高坏Bで坏部径20.0cmを測る。摩滅している。

II区SK409出土土器（第56図487） 487は直線的で長い筒状の柱部から判断すると高坏AもしくはBであろう

II区SK418出土土器（第56図488～490） 488・489は「く」字口縁の端部に面をとるもので甕Bもしくは甕Fであろう。488は口径16.5cmを測る。489は口縁端部を欠き、内面頸部以下にヘラケズリ調整を行う。490は摩滅しているが器高が低めでふくらみ気味に広がる脚柱部であることから高坏Cであろう。

II区SK440出土土器（第56図492～497） 492は甕Bであるが、口径約14cmと小型で鉢形土器の可能性もある。口縁端部に3条の凹線を施す。493は甕C₁であるが、有段口縁は短めで、先端を欠く。494は鉢Aで口径18.8cmを測る。口縁端部に2条の凹線を施し、底部は欠損する。495は

口縁端部を肥厚する大型の甕形土器と思われ、口径約26.3cmを測る。詳細は不明である。496は高坏坏部で、胎土に大粒の礫を含む。器形が直線的で大きめなことから、途中で屈曲し有段となる高坏AもしくはBであろう。497は器台A脚部であろう。径は19.3cmである。

Ⅱ区P i t 4104出土土器（第57図508） 508は高坏で坏部口縁と脚裾部を欠く。分類しえず、詳細は不明。

Ⅲ区P i t 4160出土土器（第57図505・506） 505は「八」形に開く高坏脚部であろう。底径11.0cmと小型である。506は器台柱部であろう。縦長形の孔を上下方向に穿っており、その間に凹線4条を施す。

Ⅲ区P i t 4161出土土器（第57図507） 507は甕形土器の底部であろう。

I区SD413・SD414以外の遺構からの出土土器小結 いずれも遺構の造営年代や用途を考察するには出土遺物は微量であるものの、弥生時代中期・後期前半・後期後半や、古墳時代前期、奈良時代（8世紀後半）に比定できる遺物を含む。流入した品である可能性もあるが、SK461・SX403出土土器は遅くとも弥生時代中期、P i t 4191・SK440出土土器は弥生後期後半から終末、SK418は古墳時代前期、SD411出土土器は8世紀後半が主体、といった年代観を与えることができよう。

I区下層及び包含層出土土器（第60図530～542・第64図590・第65図608・609・614・第66図616～620・624） 590は下層出土土器、それ以外はすべて包含層出土土器である。

甕C₁（530・531） 530は径13.0cmと小型である。531は口径27.8cm、擬凹線は摩滅したものであろう。

甕G（532） 口径は18.4cm、長胴であり張り出さない器形となる。

壺L₂（539） 口径9.7cm、胴部に比して口縁部は大きめで開きも大きい作りである。

高坏C（536・537） 536は坏部径16.1cm、脚部径11.1cm、器高11.6cm、ゆるやかに内ぞりして伸びる坏部と、徐々に広がり底部付近で大きく外反する脚部をもつ完形資料である。坏脚の接合時のナデ痕をのこす。537は同様の脚部で、径約10.8cmである。

高坏D（533～535） いずれも坏部である。533は径30.3cmの大型品であるが作りは粗く、壺・甕の可能性がある。534は径23.9cm、屈曲部に付く凸帯はやや反り返り気味である。535は534に比して、径26.0cmとやや大型だが、凸帯は小さくその突出も控えめである。

器台B（540・541） 540は器受部径8.7cm、脚部径10.0cm、器高6.4cmで、摩滅しているが、完形資料である。541は小破片であるが器受部と考える。

蓋（608・609） いずれも完形でつまみ部が中凹みするタイプであり、608は径6.9cm、器高3.8cm、609は径10.0cm、器高4.0cmを測る。608が小型で直線的な輪郭をとるのに対して、609はやや大型で、曲線的・偏平であり、胎土もこちらのほうが精良である。

脚台（538・590） 538は底径9.0cm、摩滅している。590は台付き甕となるものか。径6.7cmで器面に接合時の指押さえ痕をのこす。胎土には大粒の礫が混じる

把手（614） 甕形土器に付くものであろう。胎土は細かい砂粒を多く含み、やや摩滅している。

須恵器（542・616～620・624） 542は坏蓋で、径13.1cm、器高4.1cmである。天井部は回転へ

ラケズリ調整を行い、口縁部との境には先細りの凸帯を付す。口縁端部は沈線状の中へこみとする断面四角形でおさめる。616は甕口縁部で口径28.9cmを測る。口縁直下に小さい凸帯を付す。617は坏身口縁部で口径12.3cmを測る。胴部以下は619のようになるものだろう。618・619は同じく坏身で、口縁端部直下にカエシをもつ。618はやや焼成が悪い。620は甕形土器で口縁部を欠く。624は小破片であるが甕口縁部である。端部に面を取り中凹み状としている。542は古墳時代和泉陶邑窯の定型化した時期の所産であり、田辺編年のTK23型式前後に相当するものであろう。616～620・624は和泉陶邑窯の定型化以前の所産で、542より1型式古いTK208に相当する可能性が高い。

Ⅱ区中世遺構面下層出土土器（第57図509～512・第58図513～520・第59図521～529・第62図560・564・565・567～570・第63図573～577・580・583・584、第64図585～589・592・593・596・598・601・第65図602・603・605・607・610・611）調査に際しては中世遺構面の下層は調査せず、現状で保存するよう留意したが、遺構の下層および局部的なトレンチ・たちわりから多くの遺物が出土した。Ⅱ区ではI～J-19、N～O-21～22などから出土のものを一括する。

甕B（519・520・560・564・565・568） 519は口径16.4cm、520は口径24.1cmで、共に摩滅しているが、口縁端部をわずかに上下に拡張した面に1～2条の凹線を施す。564・565もこのタイプで、564は口径16.2cm、565は口径24.5cmを測る。560は口径17.3cm、端部の上方への拡張で有段状とする口縁部は、かなり厚手で、擬凹線3条を施す。体部は内面にヘラケズリ調整を行うようである。568も同様であるが、擬凹線は摩滅している。口径は18.7cmである。

甕C₁（509～514・517・573～577） 509～514・517・575・577はいずれも発達した有段口縁に擬凹線を施す弥生時代末～古墳時代初頭に通用の在地系土器である。その特徴がもっとも顕著に看取できるのが514である。口径19.5cm、胴部最大径22.3cmを測り、口縁部外面は擬凹線、内面に連続した指頭圧痕をのこし、頸部以下は外面刷毛調整、内面ヘラケズリ調整を行う。底部は欠損しているが、おそらくは513と同様のかぎりなく矮小化した平底のものであろう。509は口径18.7cm、510は口径18.8cmである。511は口径18.8cmで、やや口縁が直線的・直立気味である。512は口径20.3cm、摩滅している。513と口径17.1cm、やや作りが雑で、頸部と胴部に接合痕をのこす。517は口径20.7cm、擬凹線は摩滅している。575は口径18.7cm、口縁端部内面を肥厚している。577は口径20.3cm、擬凹線は4条施す。573・574・576はむしろ甕Bに近い口縁部をもつ。573は口径17.0cmを測り、擬凹線4条をもつが、器壁は薄い。574は口径17.8cmで、肩部に刷毛状具による刻みを連続して施している。576は口径21.0cm、器台A脚部の可能性もある。

甕C₂（516・518・567） 516は口径20.4cm、焼成は良好で、口縁内面には端部近くに指頭圧痕をのこす。518は口径18.4cm、ややゆがんだ雑な作りの口縁をもつ。体部も接合痕をのこすなど作りは雑で、外面は刷毛目調整、内面は上位はヘラミガキ、下位はヘラケズリ調整を行う。567は口径16.7cm、口縁端を上方へ拡張して有段状に厚く作る。

甕F（569・570） 569は口径15.7cm、口縁部は端部を下方にわずかに拡張しヨコナデする。頸部は屈曲が強く、胴部が張り出すものであろう。570は口径10.7cm、端部を強くヨコナデし中凹み状とする。

壺A (580) 口径13.6cm、口縁部が直立に近くなる広口の長頸壺である。

壺D (522) 口径12.3cm、大きく張り出す球形の胴部をもつものであろう。器壁は厚く作られている。

壺I (585・586) 口縁端部を拡張し、加飾するもので、畿内第V様式土器の影響を受けたと考える。585は口径17.0cm、上下に口縁端部を拡張し、凹線を施す。586は口径30.4cm、口縁端部を上方へ拡張し、円形浮文を貼り付ける。

壺J (521) 口縁部を欠くが、大型の広口壺であらう。頸部には刷毛状具で連続して刻み目を入れた凸帯を付す。頸部以下の外面は刷毛目調整をのこす。

壺K₂ (523) 胴部である。口縁部は細く長い筒状のものが付くだろう。胴部最大径付近に擬凹線を施した幅広の凸帯を伏す。

赤彩装飾壺 (588・589) 588は頸部付近で、凸線を付している。589は屈曲する胴部付近であらう。内面にヨコハケを行う。文様は沈線間を細い刷毛状具による文様を交互に斜行させたものである。

高坏A (524・592・593) いずれも坏部破片である。524は径26.3cm、屈曲して段を作り上方へ外反しながら立ち上がる。胎土に礫を多く含む。592は坏部破片で、径26.3cmを測る。593は径26.1cm、口縁端部がほぼ水平となる。

高坏B (525) 525は径24.0cm、小型有段鉢に類似した段をもち大きく外反して広がる器形をとる。

高坏C (601) 坏部を欠くが、600のような坏部になると考える。底径10.9cm、やや摩滅している。

器台A (587・602・603・605・607) 587は器受部で、端面に擬凹線を施す。径20.8cmであるが、脚部の可能性もある。602は器受部で径25.3cm、端部に擬凹線3条を施す。603は脚部で径21.8cm、端部は凹線2条を施す。605は器受部径30.0cm、脚底部径22.3cm、器高23.2cmを測る。器受部・脚部とも端面に擬凹線を施している。607は脚部で底径10.4cm、胎土に礫を多く混ぜる。

鉢A (527) 口径13.5cm、器高8.3cm、底部は径1.7cmの平底である。内外面とも丁寧なヘラミガキを行う精製品である。

鉢B (526・611) 526は口径10.7cm、器高10.0cmとやや胴長な器形を呈し、底部は径1.0cmの平底である。外面は刷毛調整をはっきりのこす。611は口径9.0cm、器高7.2cmで、口縁先端直前でわずかに「く」字に屈曲して外反し、底部は径2.4cmの平底である。

壺(610) つまみ部を欠くが底径16.2cmの大型品である。体部は直線的に開く器形である。

ほか、脚(528)、底部(515・583・584)、不明高坏(596・598)、不明(529)がある。

Ⅲ区中世遺構面下層出土土器(第61図546・549・552、第62図553・554・556・558・559・561～563・566、第63図572・578・579・582、第64図594・595・597、第65図604)

Ⅱ区同様、Ⅲ区I～J-27～31、L-32～33などからの中世遺構面下層出土土器を一括した。

甕B (546・553・561・562・563・566・578) 546は口径27.3cmと大型で厚手で、凹線3条が確認できる。553は口径17.6cm、胎土は礫を多く含む。561は口径15.2cm、端部は上方に拡張し、

凹線 2 条を施す。562は口径16.2cm端部は凹線 2 条が確認でき、頸部以下は外面刷毛、内面ヘラケズリ調整を行う。563は口径15.3cmとやや小型である。566は口径16.1cm、内面にヘラケズリ調整を行う。578は口径14.0cm、端部を上方へ拡張し、凹線 2 条を施す。

甕C₁ (572) 572は口縁部先端を欠く。頸部に蓋用と考える穿孔を行うが、小破片のため、筒所等は不明である。貯蔵用壺とも考えられる。

甕C₂ (556) 556は口径21.0cm、端部を上下に拡張し、ヨコナデを行う。鉢の可能性もある。

甕E (554) 口径19.2cm、胎土は礫を多く含む。

壺B (579) ゆるく外反する口縁部が先端で内湾気味となる器形で、口径11.1cmである。凹線を 4 条施している。

壺C (582) 完形で、口径17.9cm、胴部最大径21.4cm、底径5.3cm、器高30.5cmを測る。口縁部は端部にヨコナデによる面をもち、胴部下位は、外面刷毛目調整、内面ヘラケズリ調整を行う。

高坏A (594) 坏部であり、径30.3cmと大型品である。摩滅している。

器台A (597・604) 597は脚部径14.4cm、端部はヨコナデを行い、垂直に面を取る。直線的な筒状の柱部をもつ。604は脚部径20.8cm、端部にわずかな面をもつ。

鉢A (558) 口径19.6cm、器高7.6cmとやや偏平な器形をとり、「く」字に屈曲する口縁部の外面を肥厚し、有段状としている。底部は2.4cmと小型の平底である。

蓋 (559) 口縁下端をわずかに欠損する。つまみ部は中凹みしない作りである。

ほか、土錘 (552) がある。幅3.5cm、長さ3.6cm、厚さは残存部で2.9cm、重さ34.9gを測る。

Ⅱ区包含層出土土器 (第64図600、第65図606・612) 600は高坏C坏部であるが、やや直線的な器形を呈し、口径は16.6cmを測る。606は器台A器受け部であり、径16.4cmを測る。摩滅しており、端面の擬凹線は明確でない。612は手づくねの脚台であろう。底径5.4cm、丁寧な指ナデがなされている。

Ⅲ区包含層出土土器 (第62図555・557、第63図581、第64図591・599、第65図615、第66図621～623・625～628) 555は甕C₁である。有段口縁はあまり発達していない。口径約21.3cm、摩滅が激しい。557は把手付きの鉢である。ゆるく「く」字に屈曲する口縁で口径11.6cmで、底部を欠く。外面刷毛調整をのこし、内面はヘラケズリ調整を行う。581は口径12.8cmの短頸壺の器形をとると考える。591は径6.9cm、台付土器の脚台であろう。599は径13.1cm、器台もしくは高坏の脚部であろう。体部五方向に穿孔を行う。615は剝片であろう。色調は赤く、石材は瑪瑙と考える。621～623・625～628は須恵器である。621は無台坏で口径12.5cm、底径6.0cm、器高2.9cmを測る。底部はヘラ状具による切り離しを行う。622は盤で口径14.7cmを測る。623は有台坏で高台径7.2cmを測る。底部をヘラ状具で切り離し、高台を貼り付ける。625は長頸壺頸部で沈線を 3 条施す。626は双耳瓶肩部であり、貼り付けた双耳は上部にのみ穿孔したものである。627は甕底部、平底で底径16.4cmである。外面は平行叩きを行う。628は台付壺であろう。高台径18.2cmである。621～623・625～628の須恵器は 9 世紀代の所産であろう。

Ⅲ区M32～33土器集積出土土器 (第61図543～545・547・548・550・551) 遺構プランは検出できなかったが、グリッドM32～33付近を中心として中世遺構面に集中してあらわれた土器群を

一括した。下層の土器が浮上したものであろう。543は口径15.9cm、甕Bもしくは甕Cであろう。「く」字に屈曲する口縁の端部をさらに上方へ拡張している。544は口径19.5cm、甕Bもしくは甕Fであろう。口縁端部をヨコナデし、面を取る。545は甕Fであろう。口径22.2cm、同部最大径は25.9cmと、底部を欠くが球胴の器形となる。外面は刷毛目調整を施し、内面は頸部付近にヘラケズリ調整を行う。547・548はいずれも壺Cとした。547は、径14.3cmで口縁部は短く丸みをもって立ち上がる。548は径14.5cmで、口縁部は長く直線的に開いていく。550・551は器台A脚部であろう。550は底径16.4cm、端部うヨコナデ・面とりし、柱部は直線的なもので、穿孔を行う。551は底径14.4cmを測る。

その他（第65図613）

613は出土土地点は不明であるが、管玉未製品である。

中世遺構面下層及び包含層出土土器小結 ここでは出土遺物の大まかな期間をまとめようと思う。まず、定量存在する甕B・甕C・高坏A・高坏B・器台A・鉢Aは、弥生時代後期後半～古墳時代初頭にかけての範疇で捉えることができよう。また、壺A・壺B・壺Iなどは一部が弥生時代中期末～後期前半に溯るものがあり、須恵器からは、5世紀後半と8世紀後半～9世紀前半の2時期を考えることができる。これらをまとめると、弥生時代中期～古墳時代中期・奈良時代～平安時代の遺物を間に比較的長い断絶をおいて出土していると言えよう。

参考文献

石川考古学研究会『シンポジウム「月影式」土器について』報告編 1986年

小田木治太郎「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『北陸の考古学』Ⅱ 近刊予定

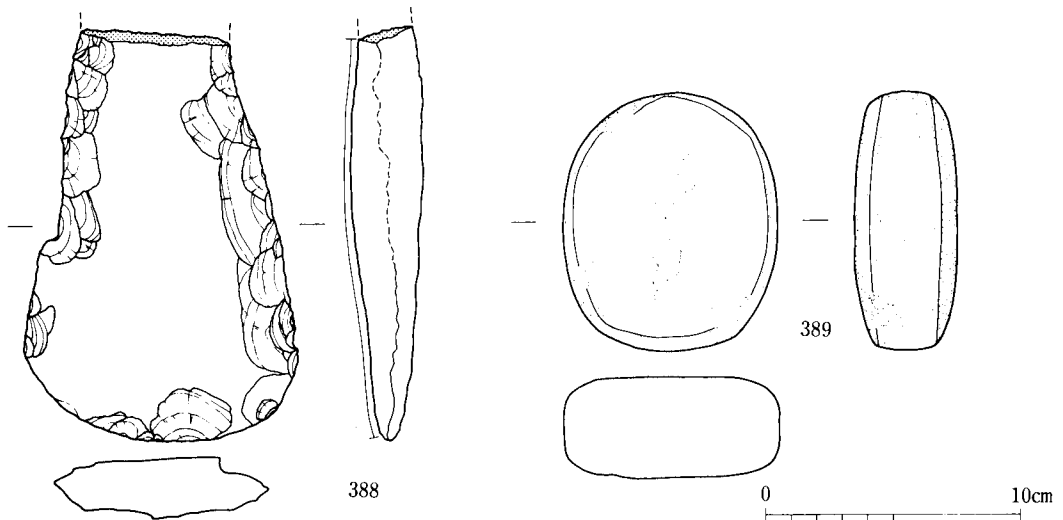
国分政子「弥生土器地域論－畿内第Ⅱ様式の系譜をめぐって－」『滋賀考古』第2号 近刊予定

田嶋朋人「Ⅳ 考察」『漆町遺跡Ⅰ』 1986年

栃木英道他「吉竹遺跡」 1987年

中島俊一・湯尻修平他「白江梯川Ⅰ」 1988年

増山 仁「小松式土器の再検討」『北陸の考古学』 近刊予定



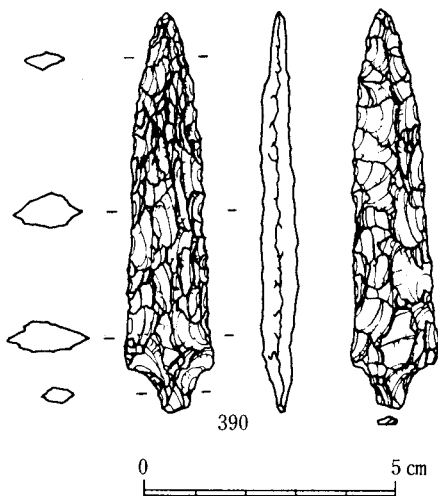
第20図 413号溝出土石器 (S=1/3)

(2) 石 器

413号溝出土石器（第20図） 389は磨石である。平面形は寸づまりな楕円形であり、側縁全周に面取りが施されたあたかも石鱗のような形状を呈する。その面には明瞭な段や屈曲はみられないが、上下両端では敲打痕が主体的に認められるのに対し、左右両側では磨痕が優越的なあり方を示す。また、表面では2つの凹みを観察することができる（裏面にも小さな凹み状のものが存在するが判然としない）。加えて表裏両面ともに弱い磨痕が認められると思われるが、粗い粒子からなる石質ゆえにその判断は難しい。以上のように同一個体内に凹み・磨痕・敲打痕といった複数の異なる使用痕を合わせ持つこと、それに丁度片手の掌の中に収まる大きさであることなどが、本石器の機能・用途を考える際に留意すべき点といえそうである。石質は粗粒砂岩と考えられる。なお、計測値は長さ10.3cm、幅4.1cm、厚さ4.1cm、重量567.1gである。

399は打製石斧である。撥形を呈する比較的薄手の大型品で、基部が欠損している。右側縁が最大幅を測る刃部やや上方から基部にかけて直線的に伸びるのに対して、左側縁はその3分の1付近において小さく緩やかな段を形成する。これは裏面のほぼ同位置にみられる広く平坦な剝離とそれに続く側縁での急斜度な調整に対応すると考えられる。このうち平坦な剝離面については主軸線を挟んだ反対側（すなわち裏面左側縁）にも認められ、これらが恐らく裏面でも最も新しい部類に属する剝離であることを勘案するならば、以上は着柄の際において紐・蔓を巻きつけることを意識した加工であるという予想も成り立とうか。次に器表面の磨耗について肉眼観察を行えば、新しい破損面を除いて全体的に弱いそれがみられ、廃棄後の状態が必ずしも良好ではなかったことをうかがわせるものの、特に刃部寄り3cmは表裏ともに激しく磨耗しており、これについてはやはり使用痕とすべきであろう。どちらかといえば裏面側の方が磨耗が進んでいるといえる。石質は凝灰岩系のものと思われる。なお、計測値は長さ16.4cm、幅10.9cm、厚さ2.9cm、重量545gである。

これからの石器は413号溝から出土したが、時期的にはむしろ414号溝に伴う可能性が高い。

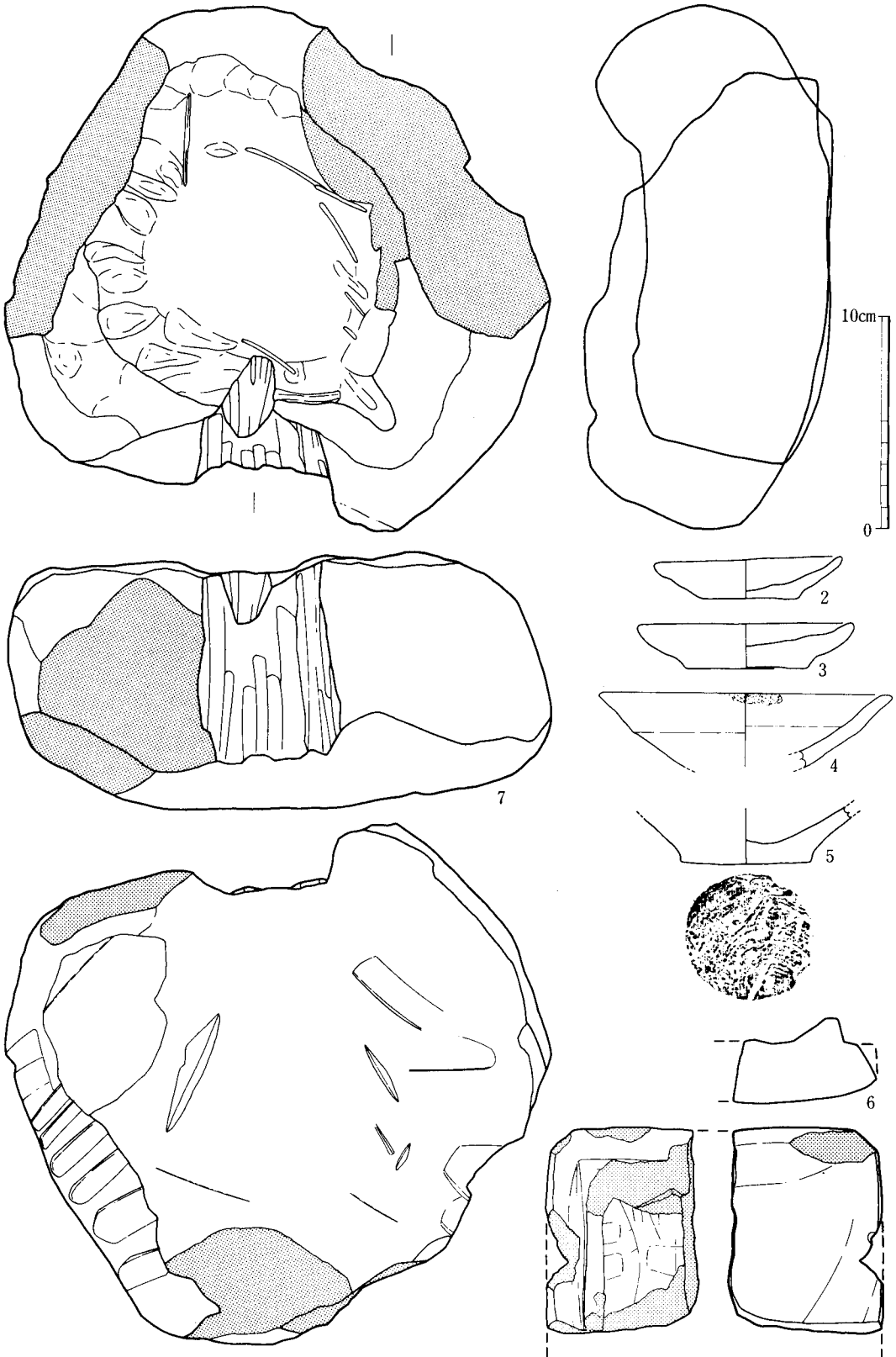


（鳥越浩）

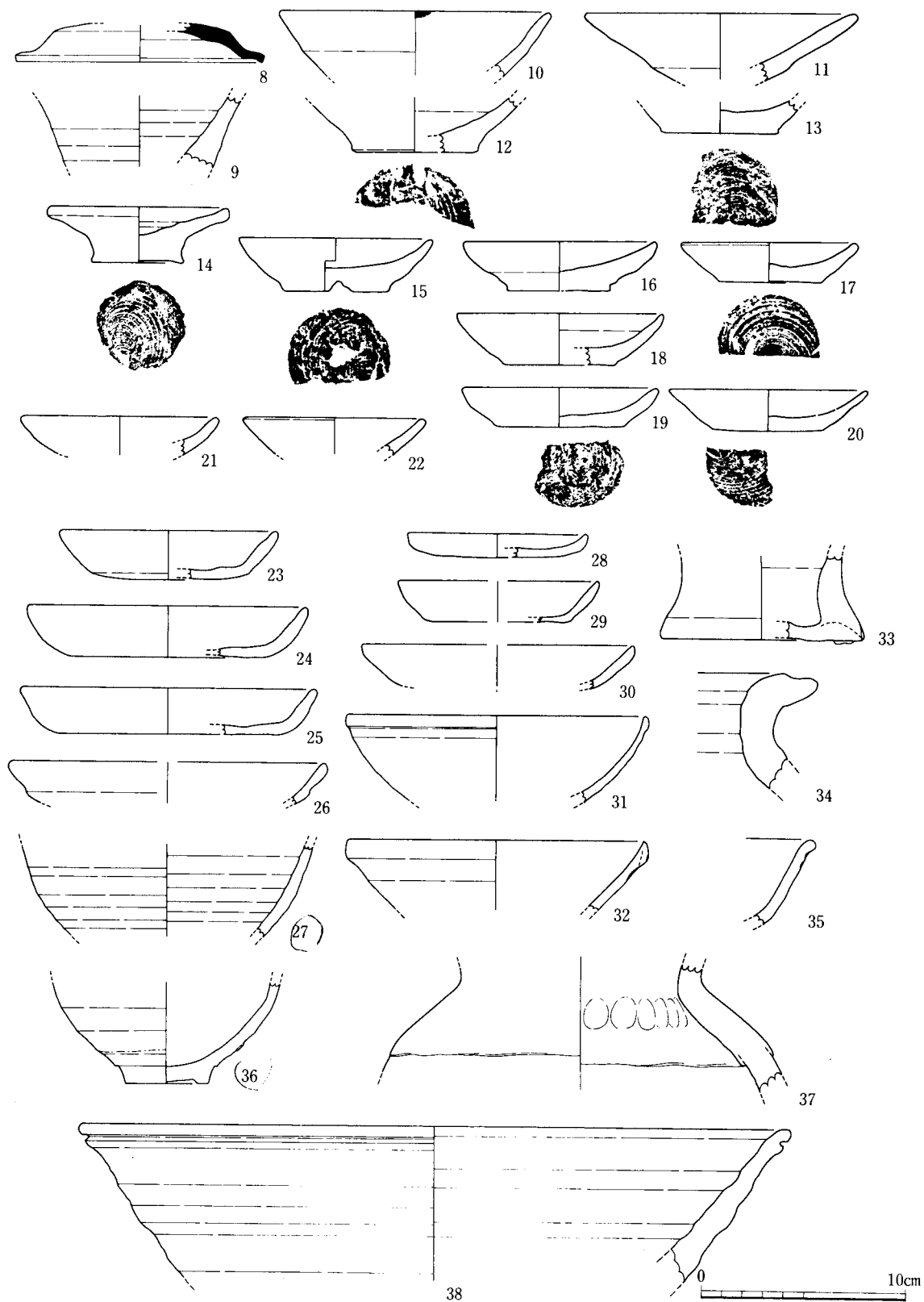
414号溝出土石器（第21図） 390は有茎石鏃で全長7.9cm（茎部0.9cm）、最大幅1.7cm、最大厚0.7cm重量8.4gである。先端部分がごく僅かに剝落している以外は完形で極めて残りが良い。輝石安山岩系の石質で、床に落とすと綺麗な高音を発する。縄文時代などの通常の輝石安山岩に比べて極めて良好な石質である。表面は風化してわずかに白っぽい。発掘当初は旧石器かと考えたが、樫田誠氏のご教授によると弥生時代中期に伴うものと考えられる。共伴した土器とも矛盾しない。

（木立雅朗）

第21図 414号溝出土有茎石鏃（S=2/3）
（樫田誠氏原図，本田秀生氏トレース）

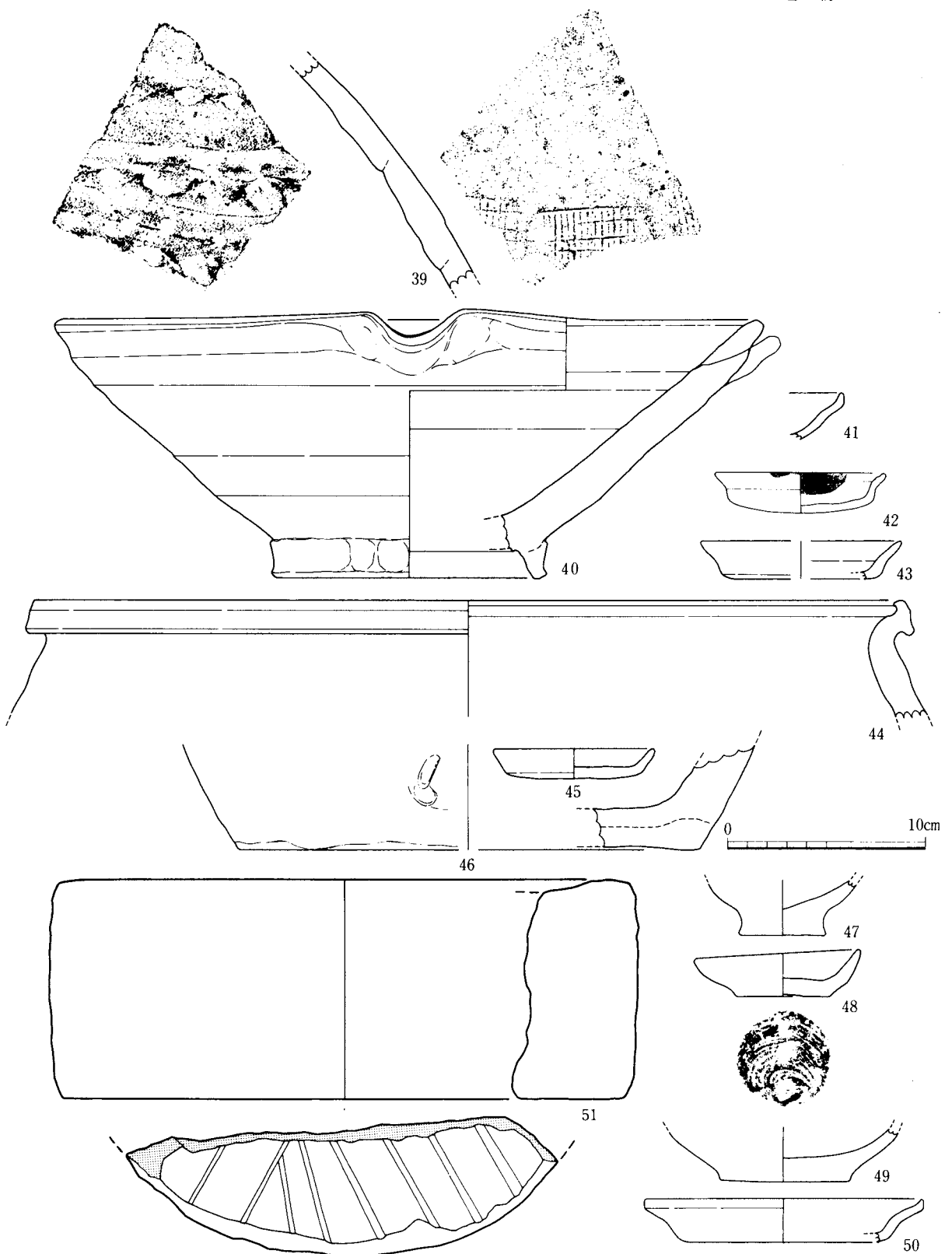


第22図 古代末～中世 出土遺物(1) (401号土坑：2～7)



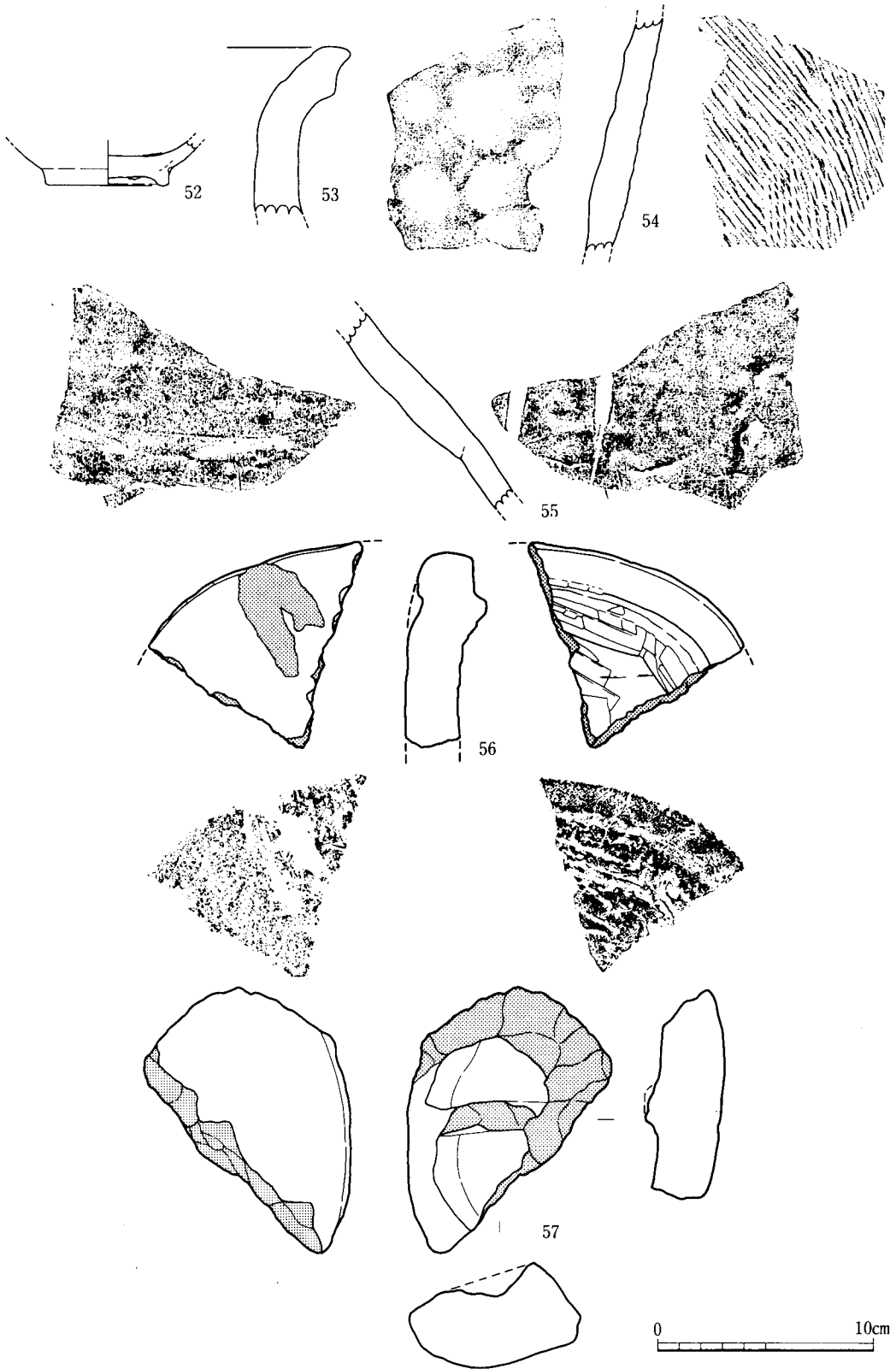
第23图 古代末~中世 出土遺物(2)

(411号土坑：8~20, 412号土坑：23~26, 415号土坑：33, 420号土坑：28,
 421号土坑：38, 425号土坑：34, 431号土坑：29, 434号土坑：27,
 450号土坑：36·37, 451号土坑：30, 460号土坑：35, 465号土坑：31, S X 402：32)

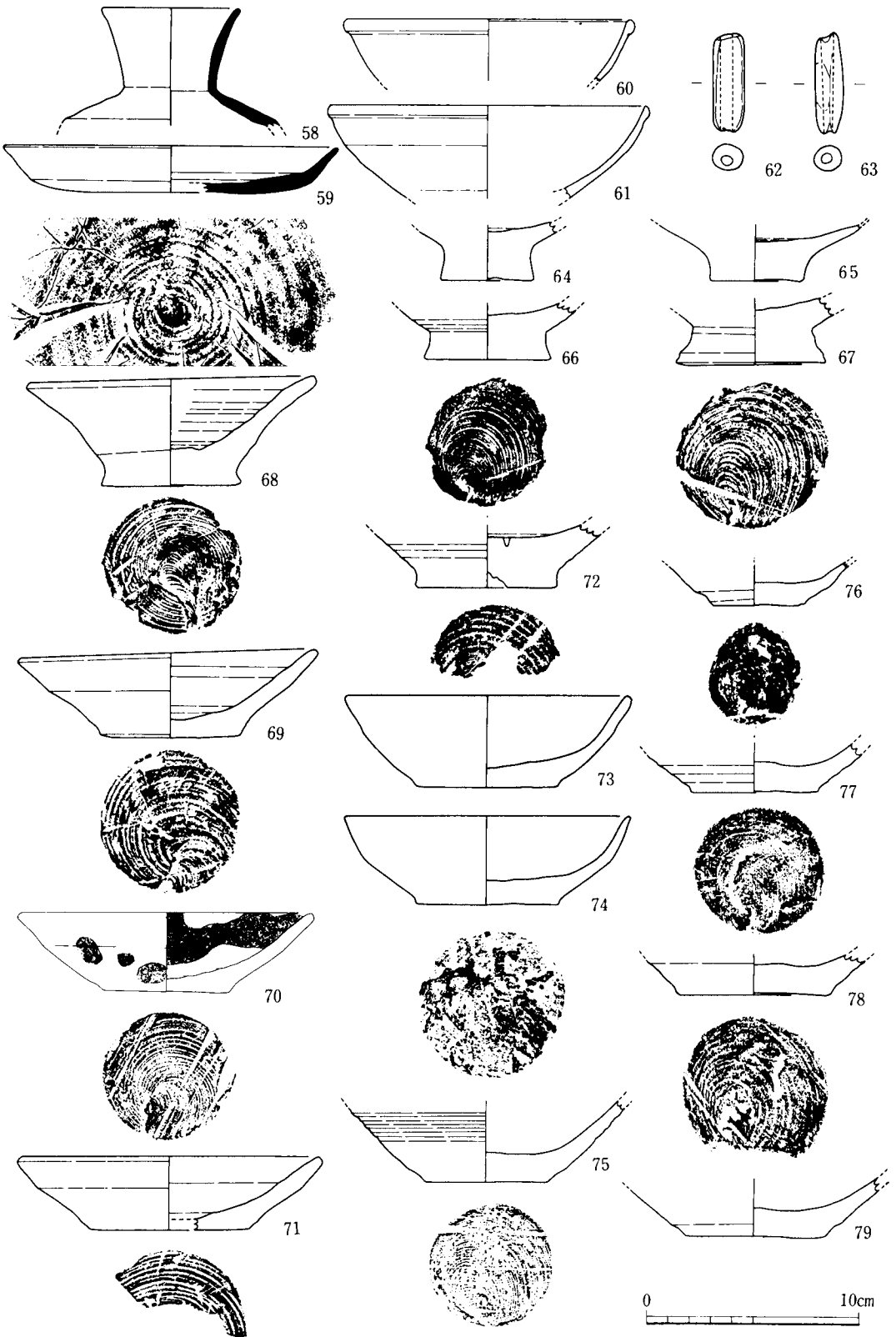


第24図 古代末～中世 出土遺物(3)

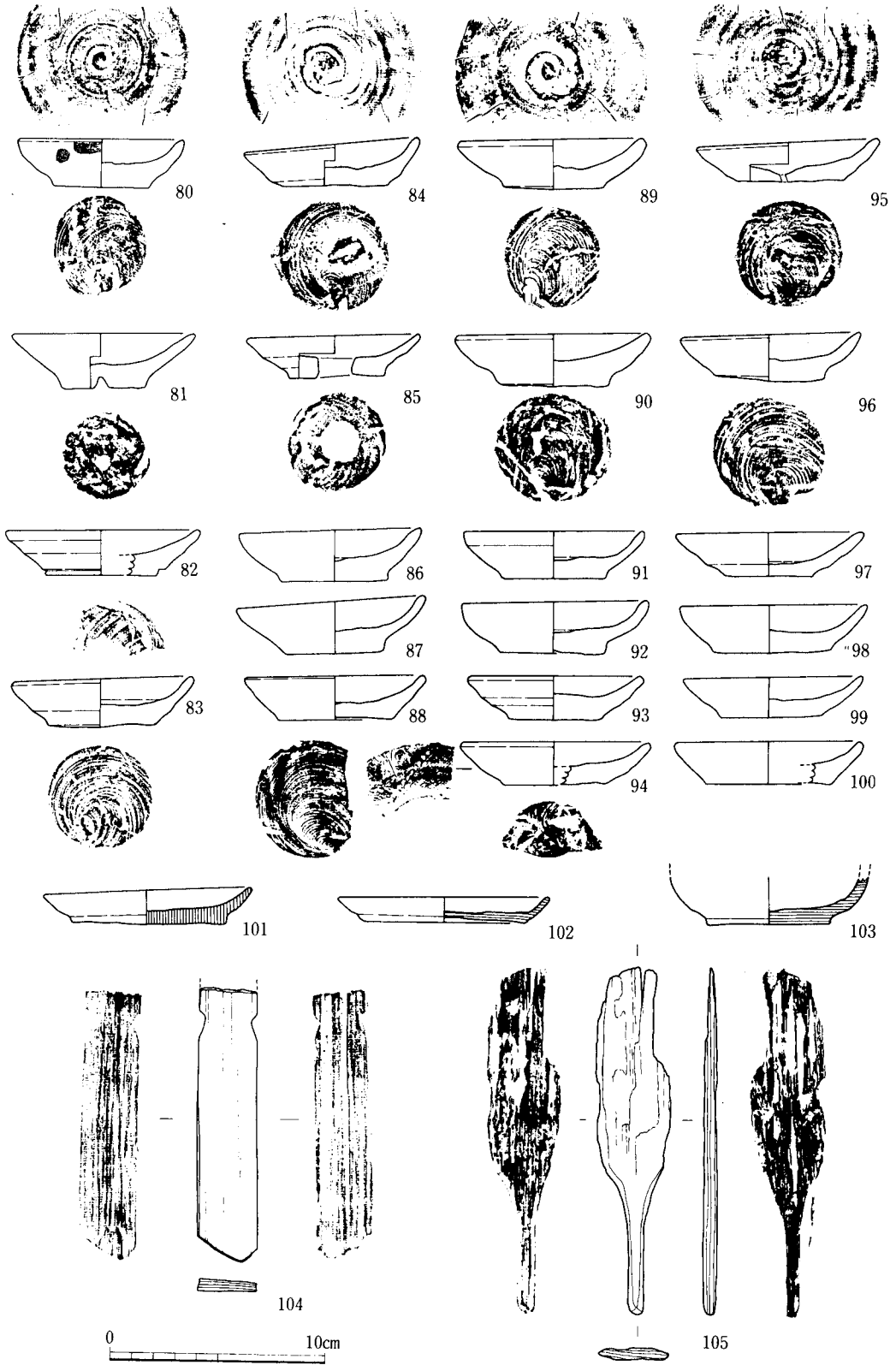
(S X 415 : 39・40, 408号土坑 : 47～50, 419号土坑 : 41～44, 422号土坑 : 45・46, 424号土坑 : 51)



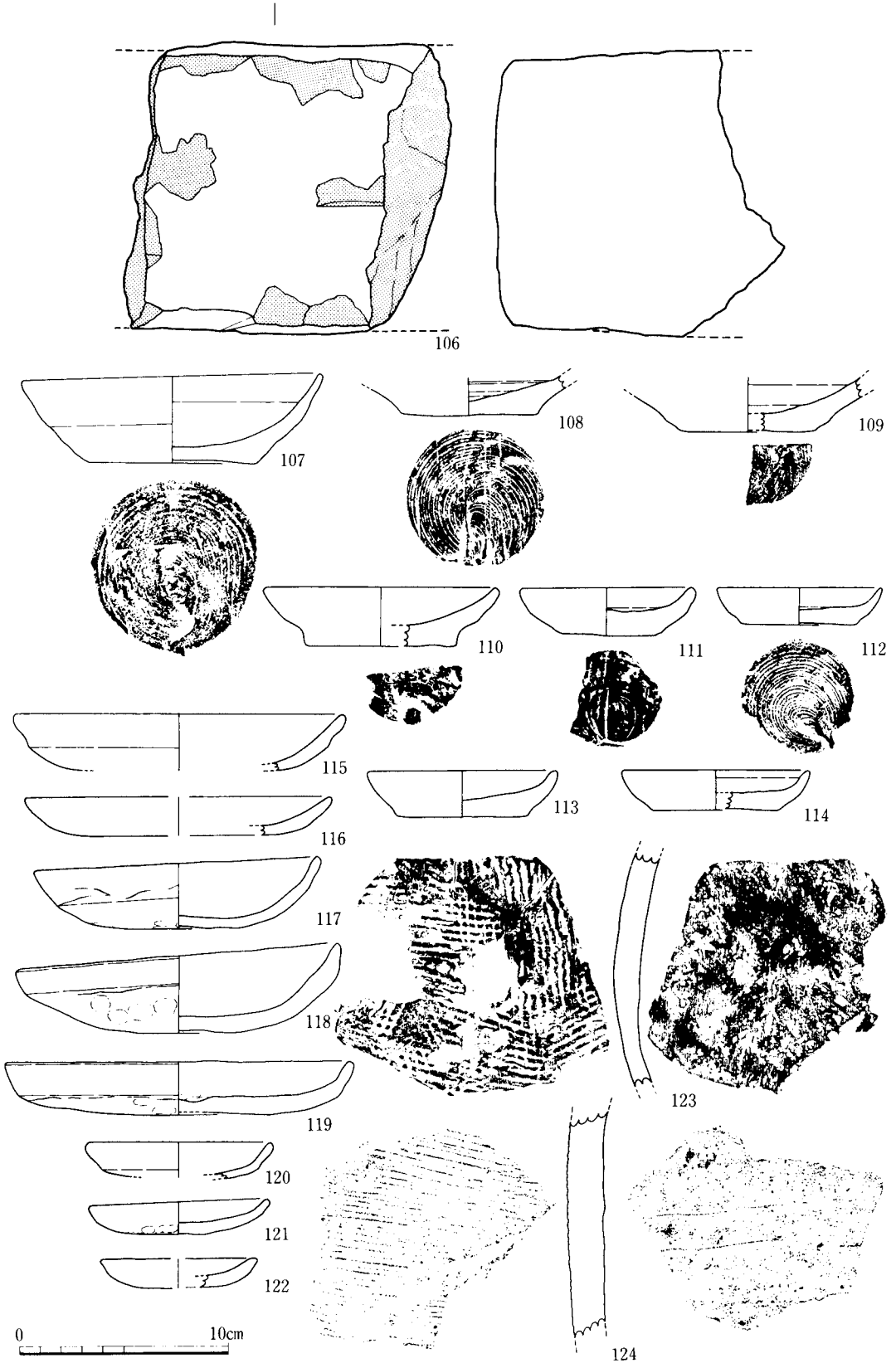
第25図 古代末～中世 出土遺物(4) (401号集石：52～57)



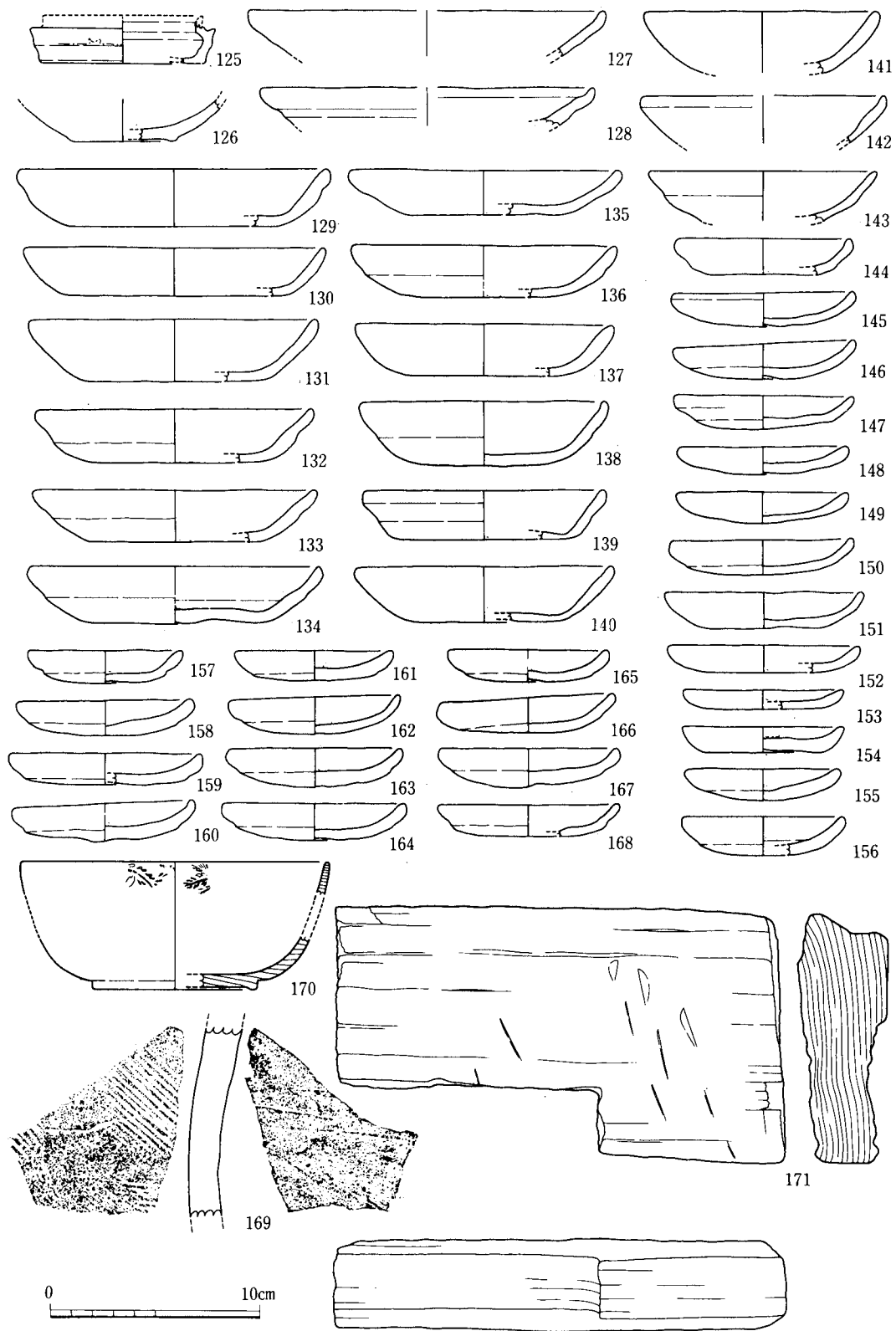
第26图 古代末~中世 出土遺物(5) (412号井戸：58~79)



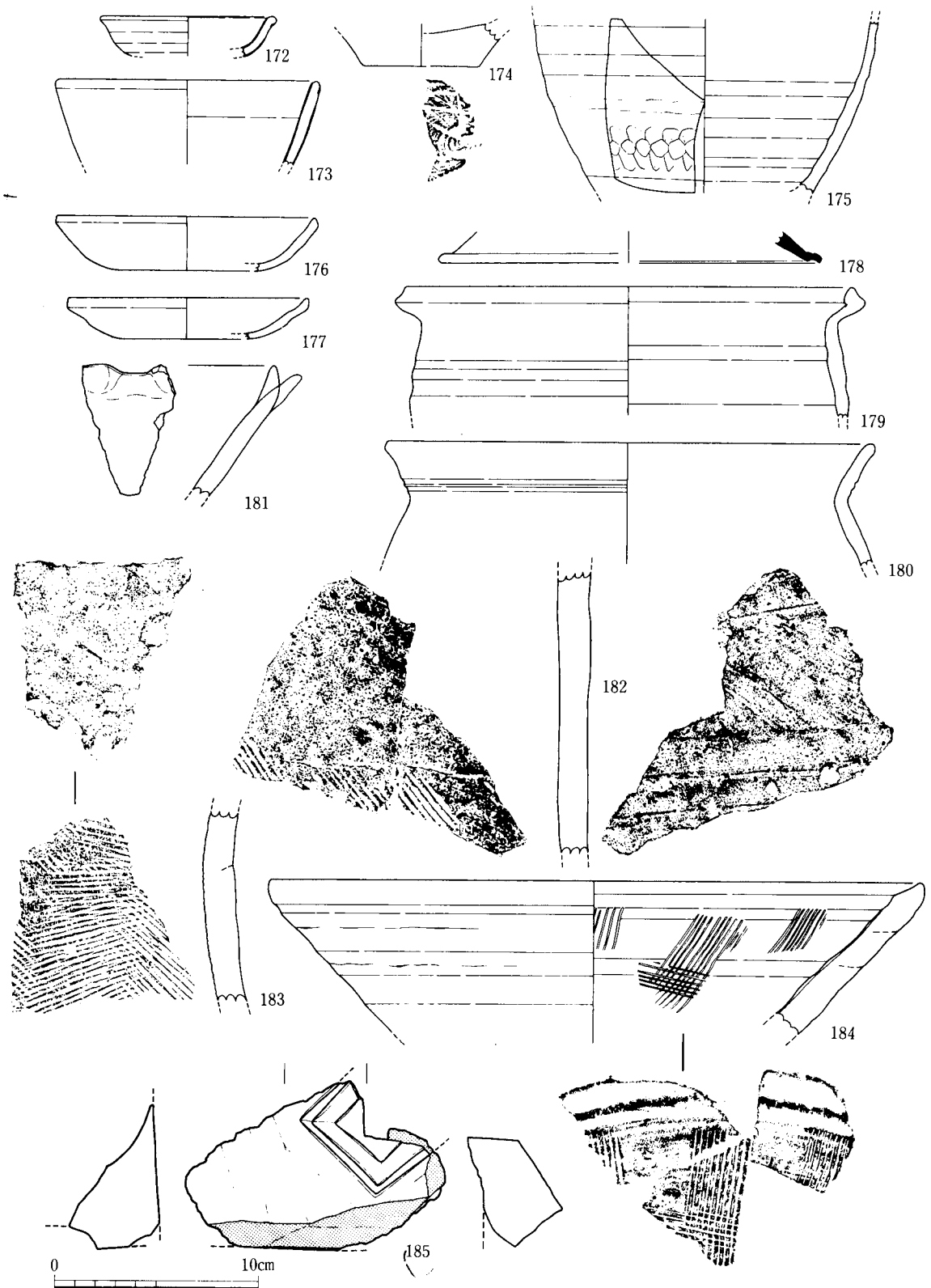
第27图 古代末~中世 出土遺物(6) (412号井戸: 80~105)



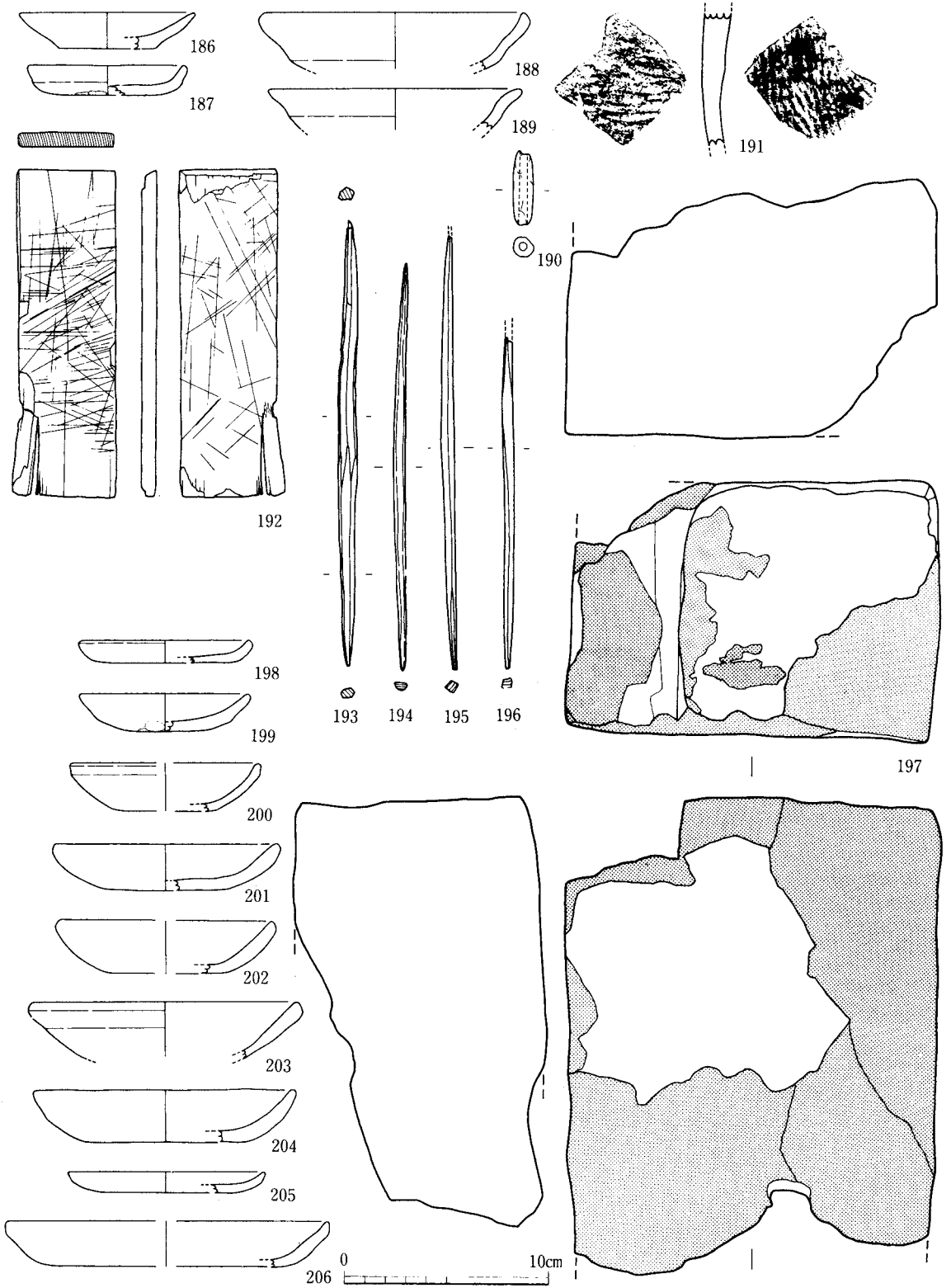
第28図 古代末～中世 出土遺物(7) (412号井戸：106, 410号井戸：107～124)



第29図 古代末~中世 出土遺物(8) (409号井戸: 125~171)

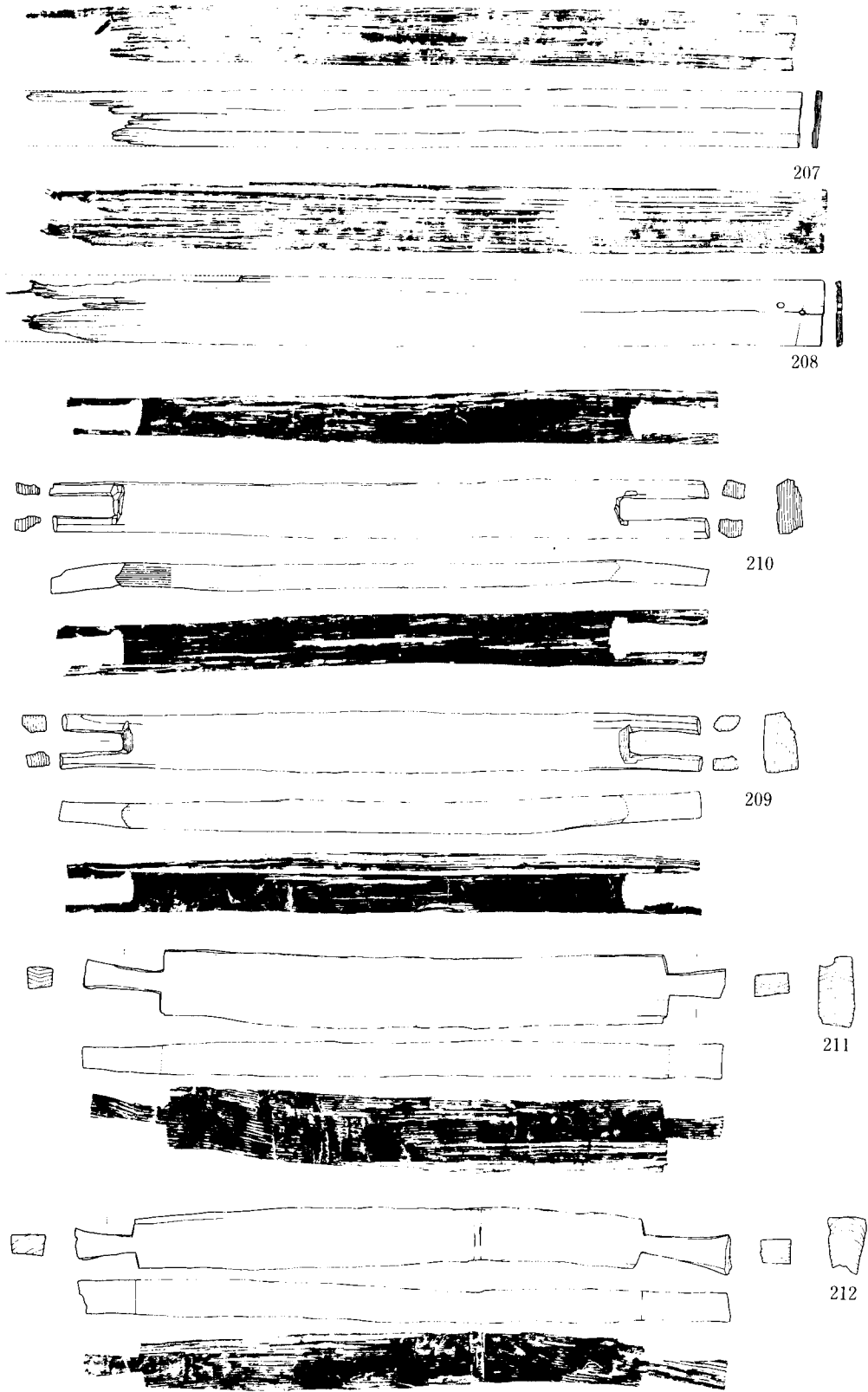


第30図 古代末～中世 出土遺物(9)
(401号井戸：172, 406号井戸：173, 405号井戸：175, 411号井戸：176～185)

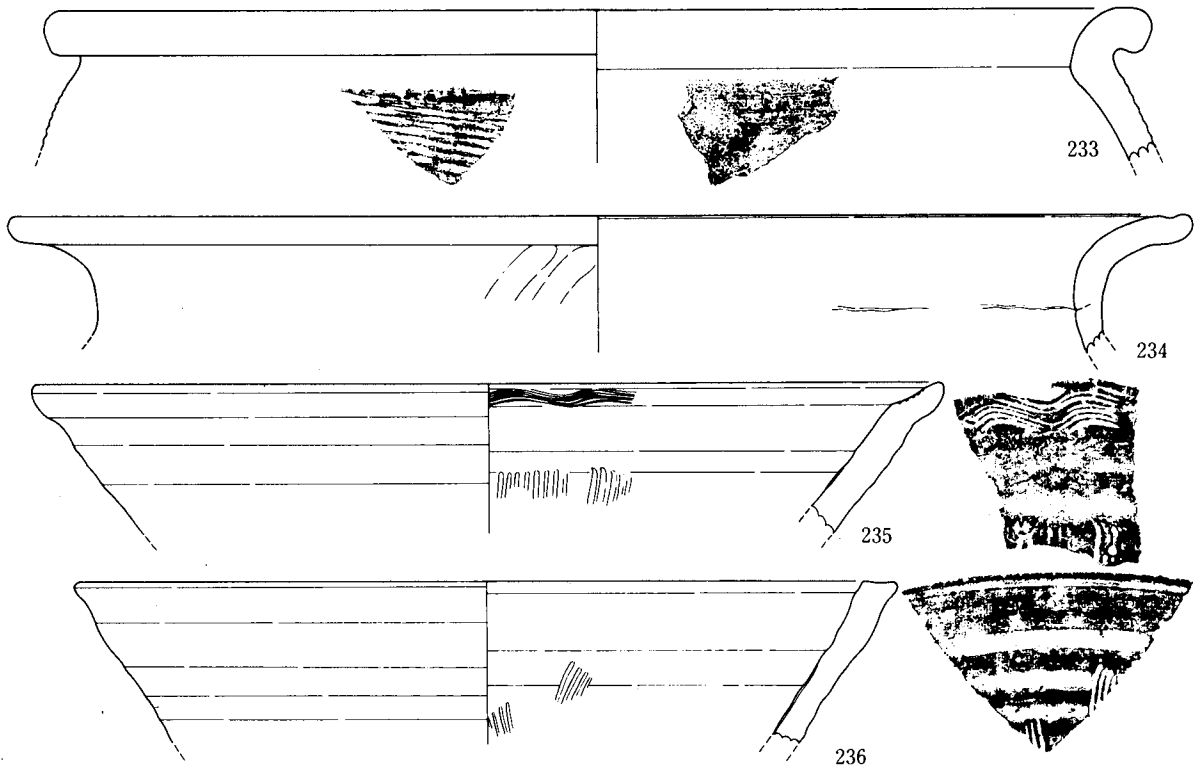
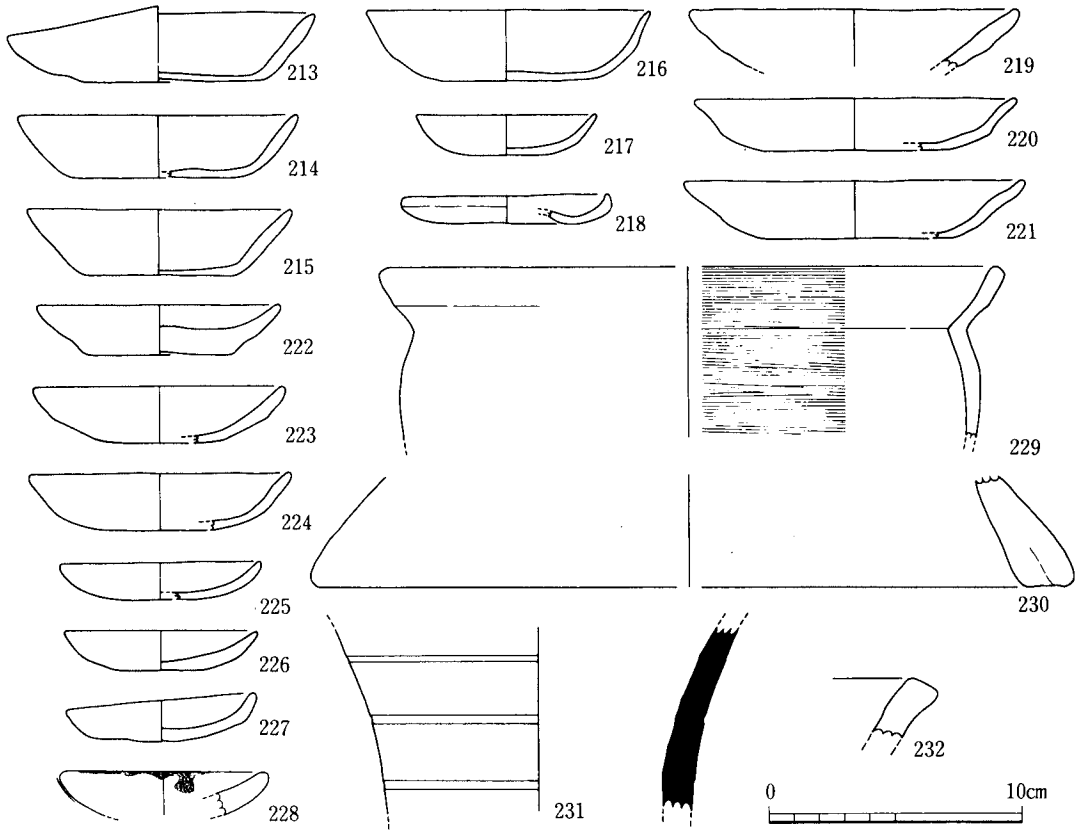


第31図 古代末～中世 出土遺物(10)

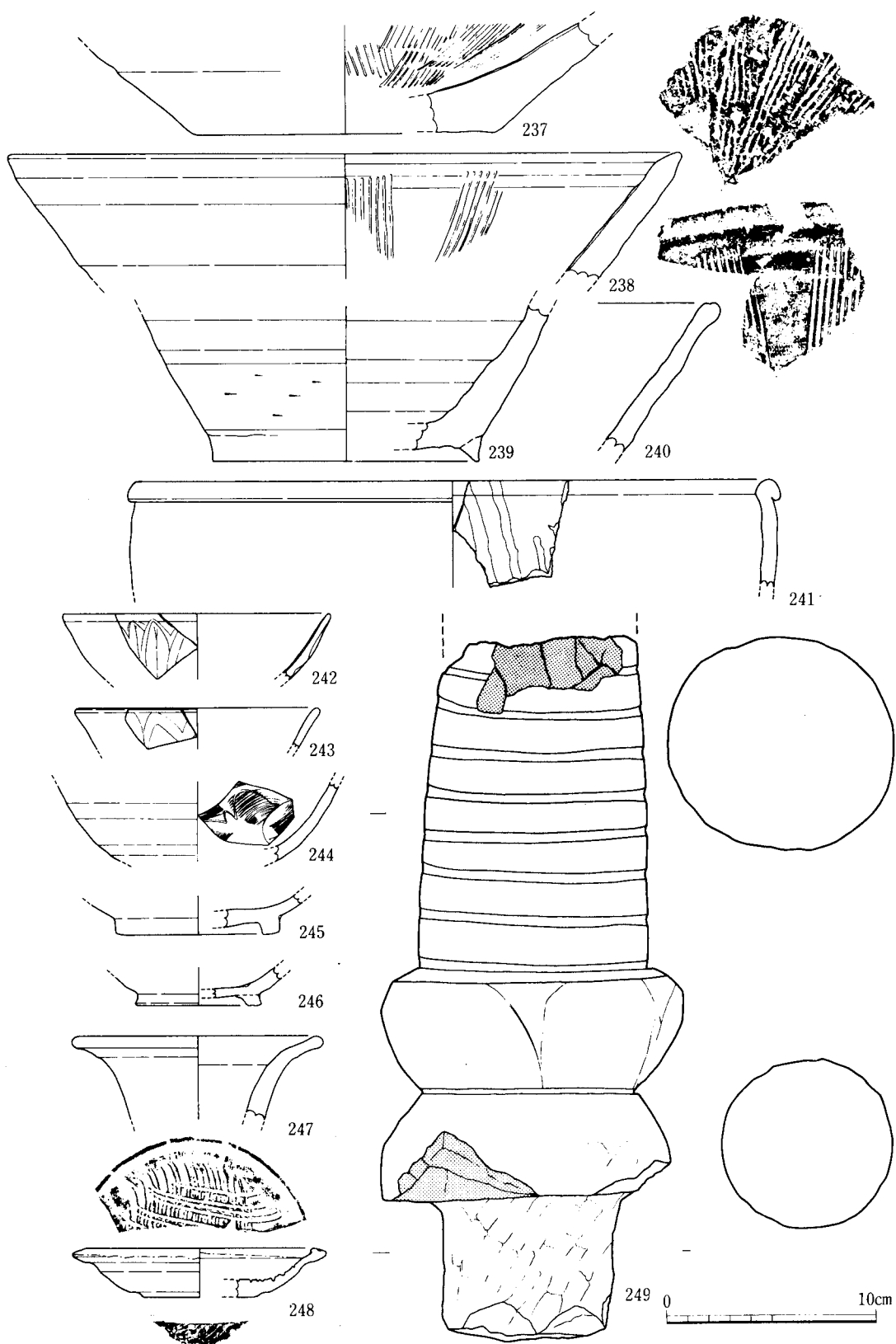
(413号井戸：186～193，414号井戸：197～203，415号井戸：194・204，416号井戸：205・206)



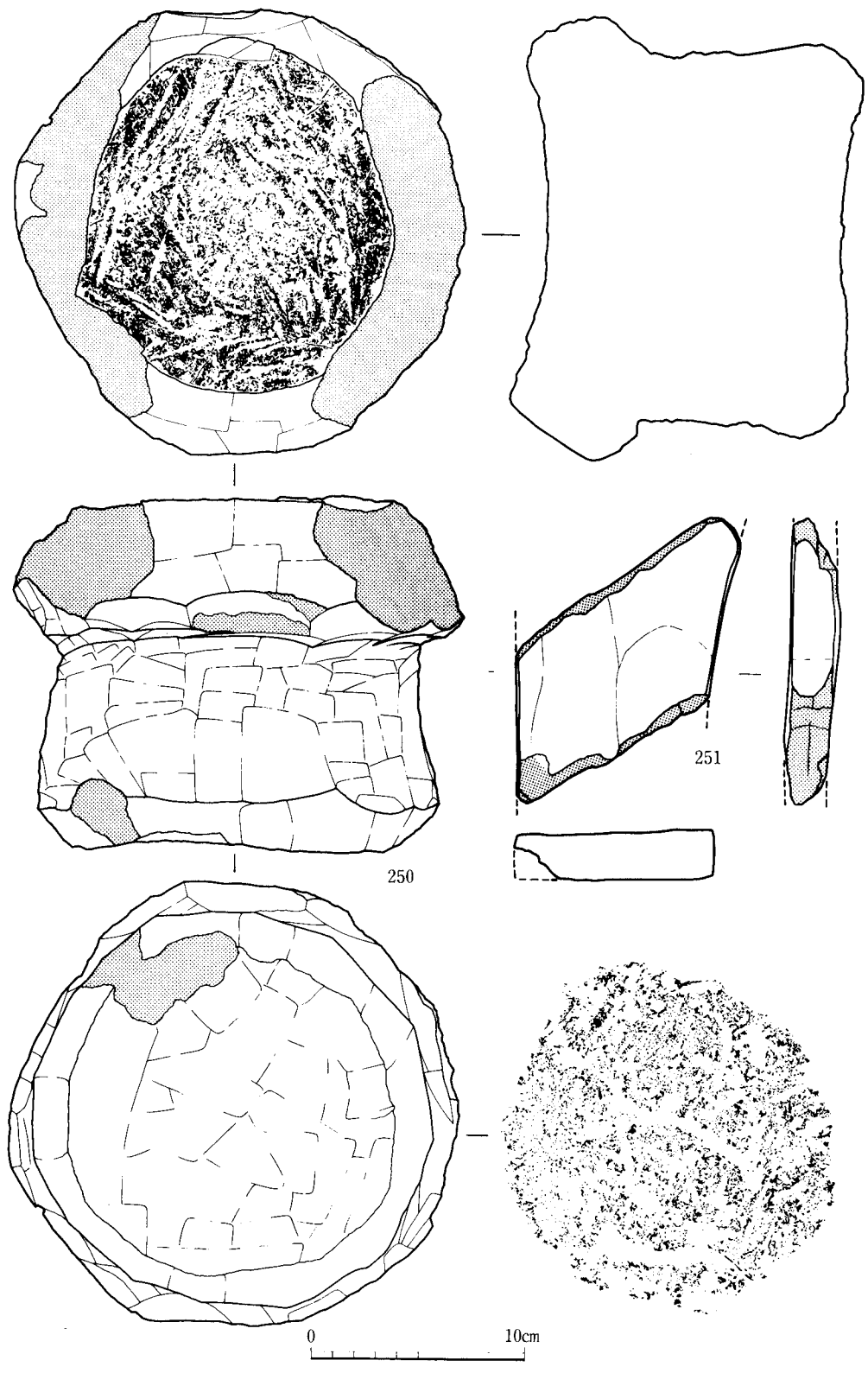
第32図 古代末～中世 出土遺物(II) (413号井戸：210～212, 414号井戸：207・208, S=1/10)



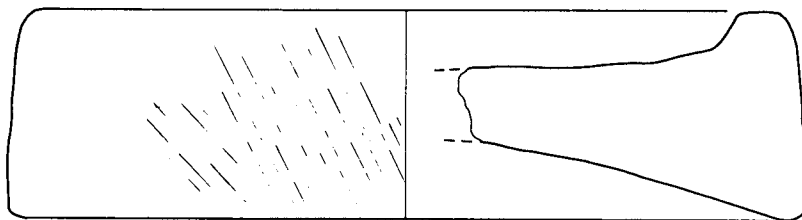
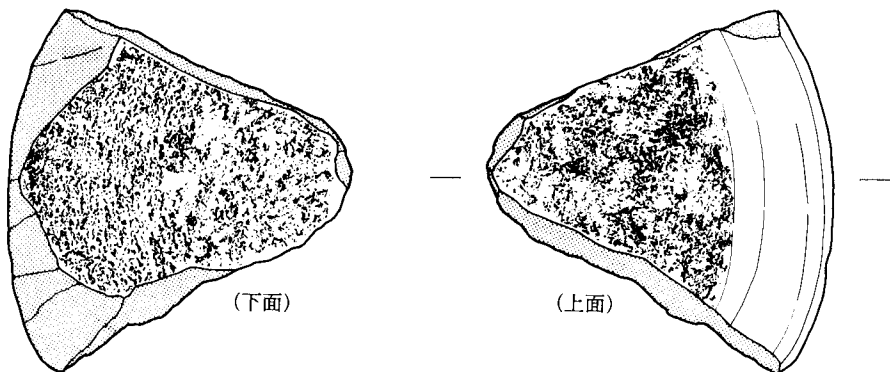
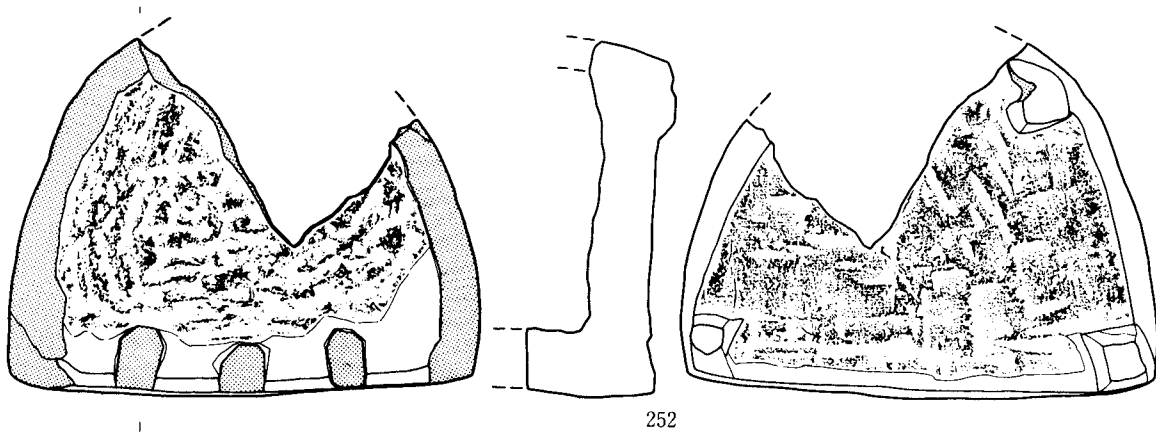
第33图 古代末~中世 出土遺物(12) (401号溝: 213~236)



第34図 古代末～中世 出土遺物(13) (401号溝：237～249)



第35図 古代末～中世 出土遺物(14) (401号溝：250・251)



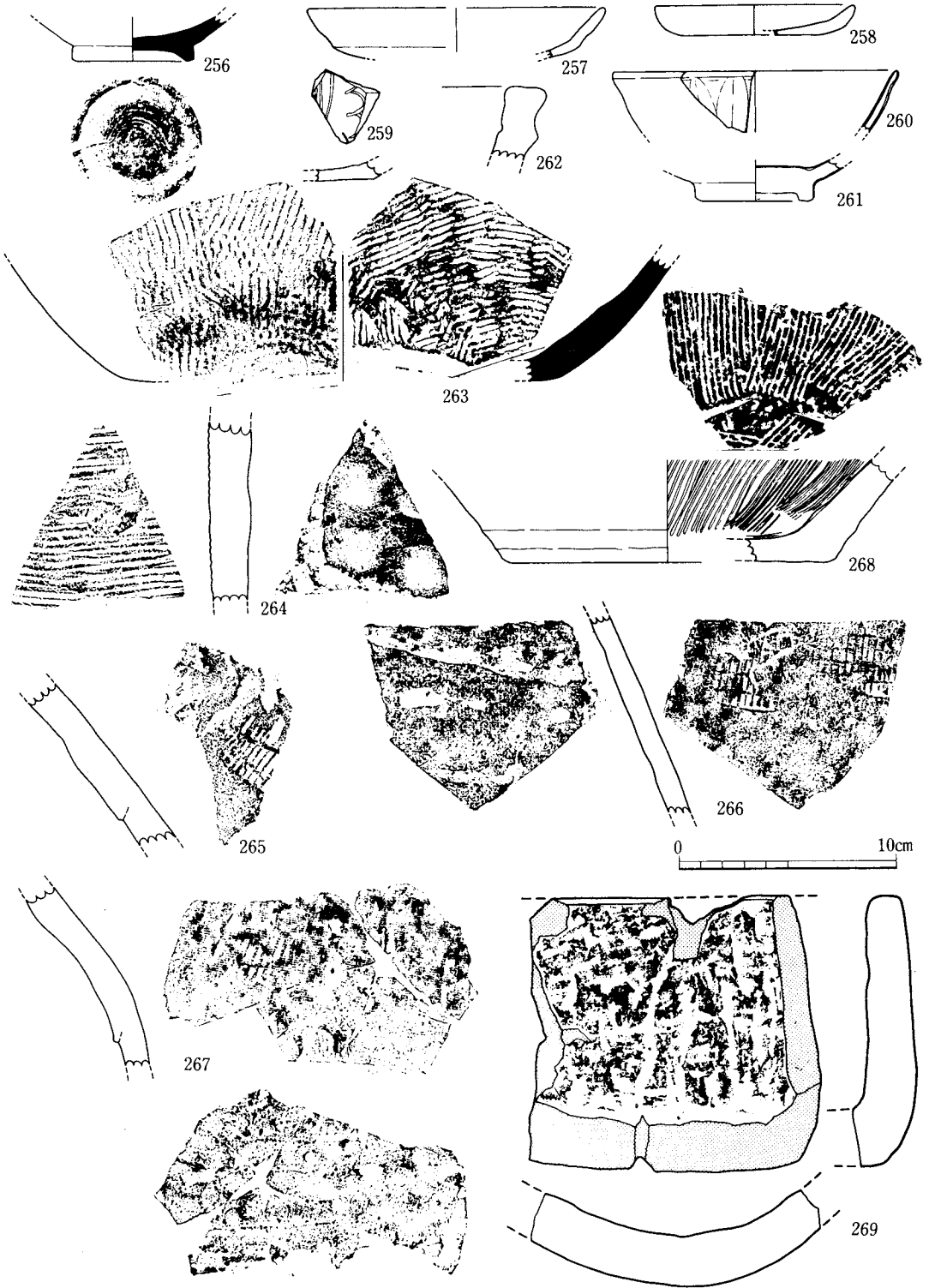
254



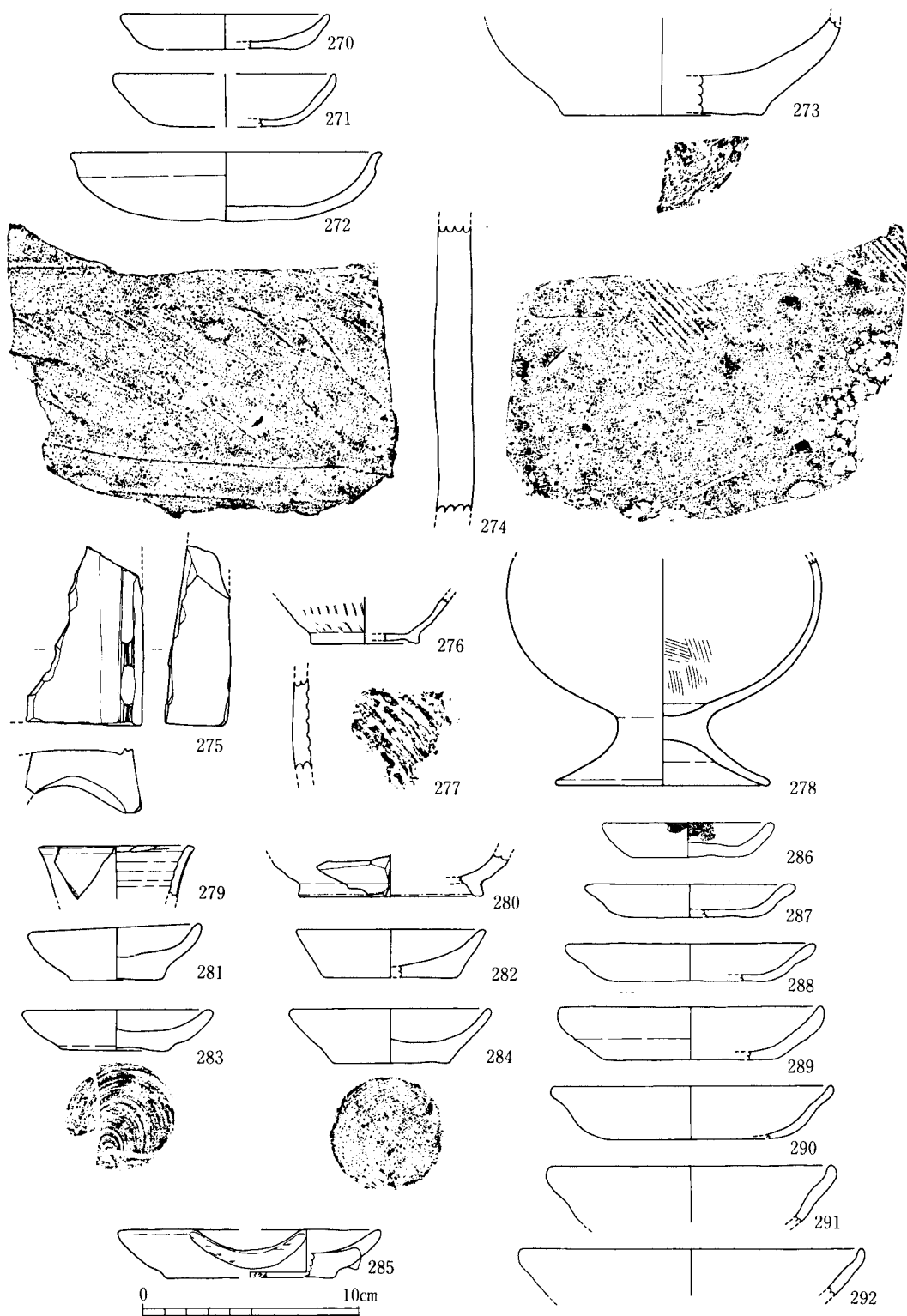
255



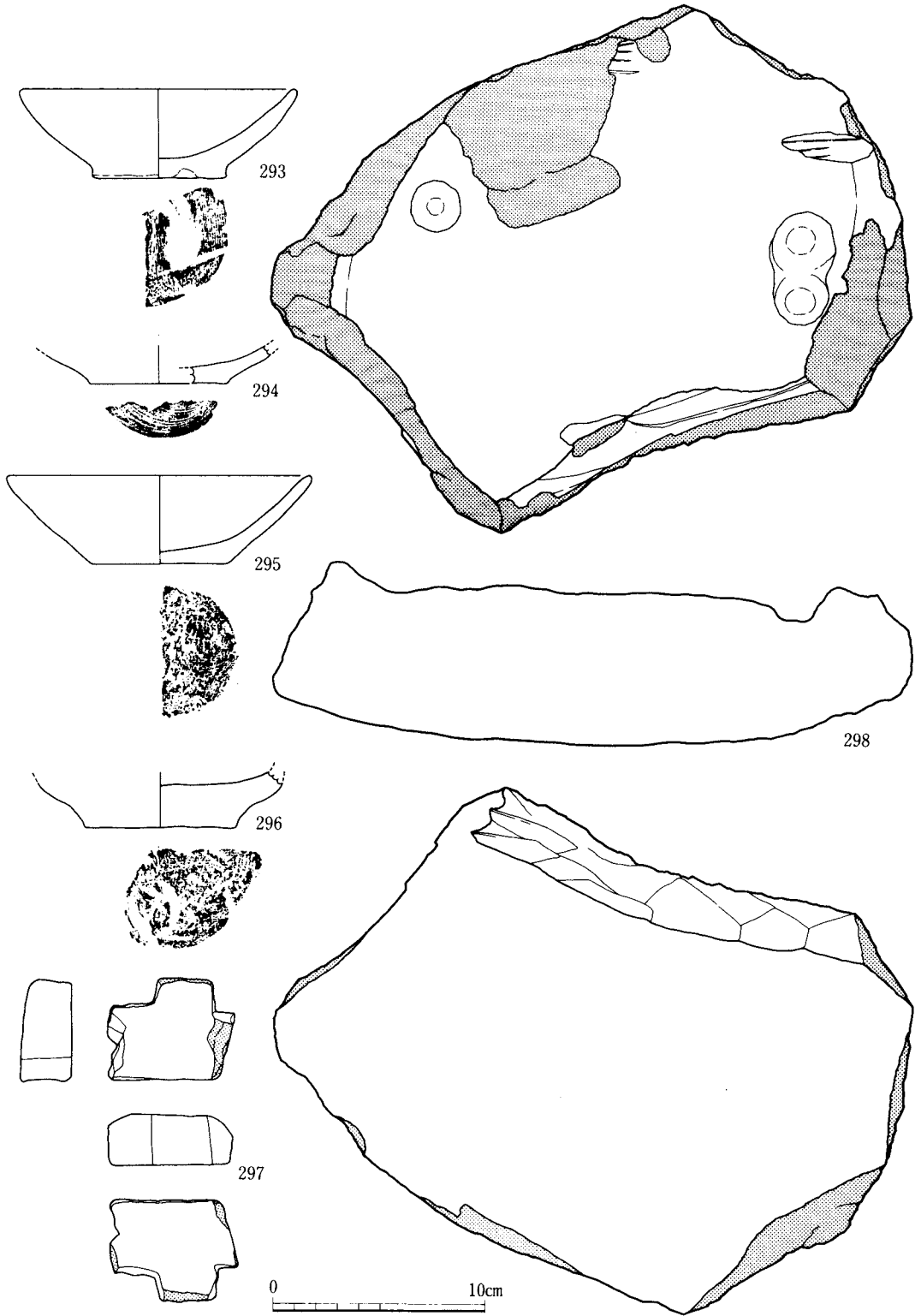
第36図 古代末～中世 出土遺物(15) (401号溝：252～255, 254・255のみ原寸)



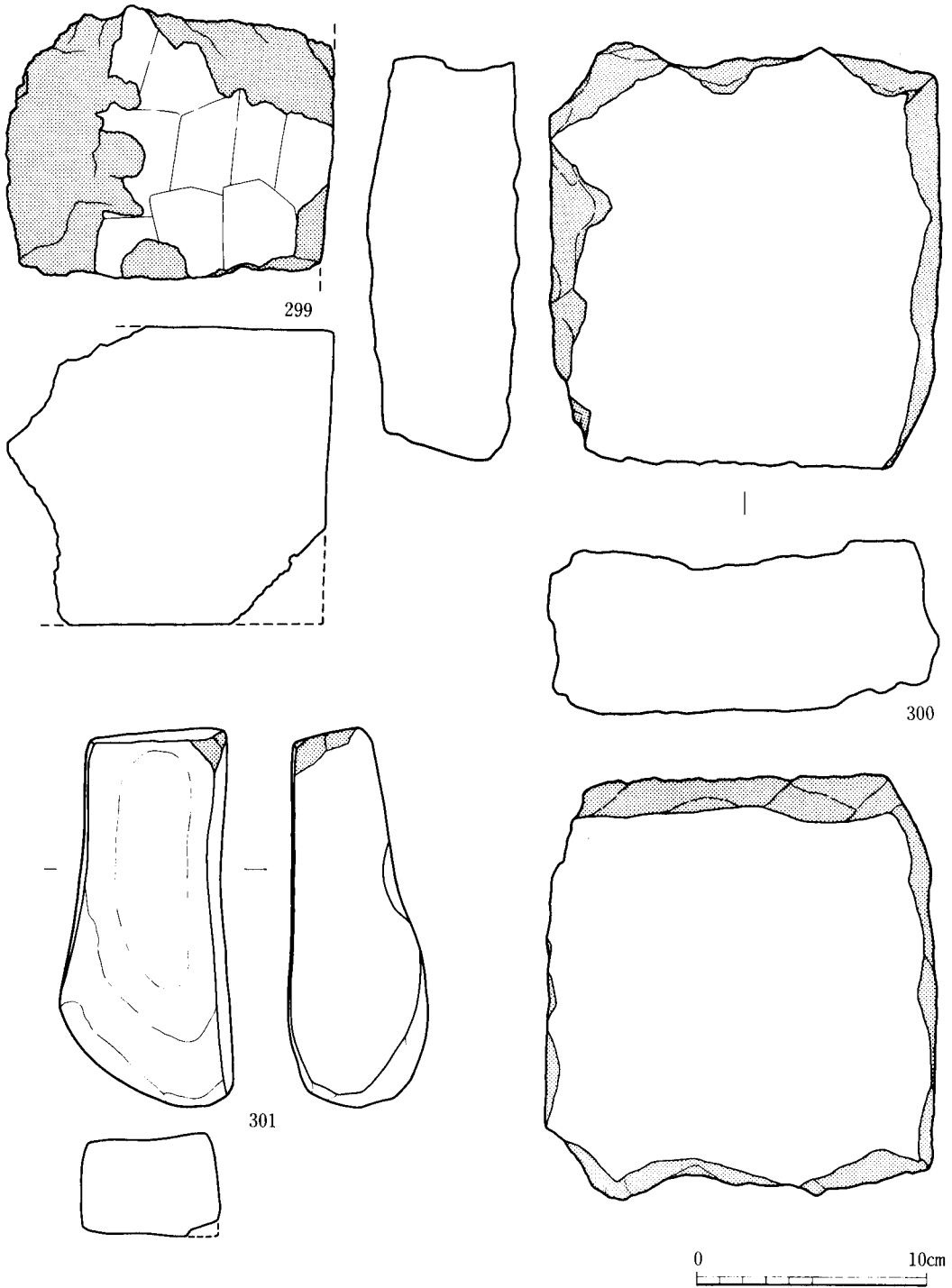
第37図 古代末～中世 出土遺物(16) (402号溝：256～269)



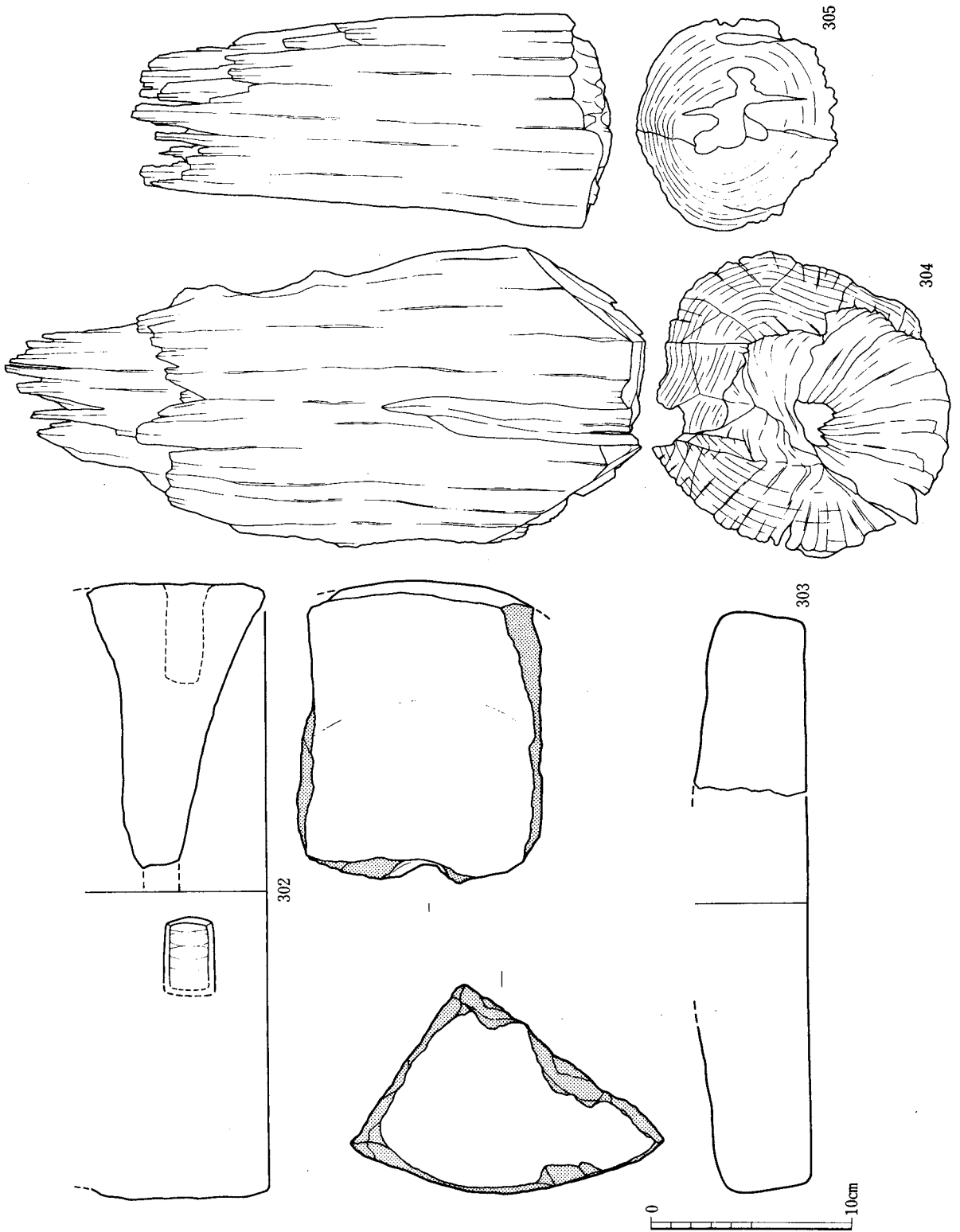
第38図 古代末～中世 出土遺物(17)
(403号溝：270～274, 408号溝：275～278, ピット：279～292)



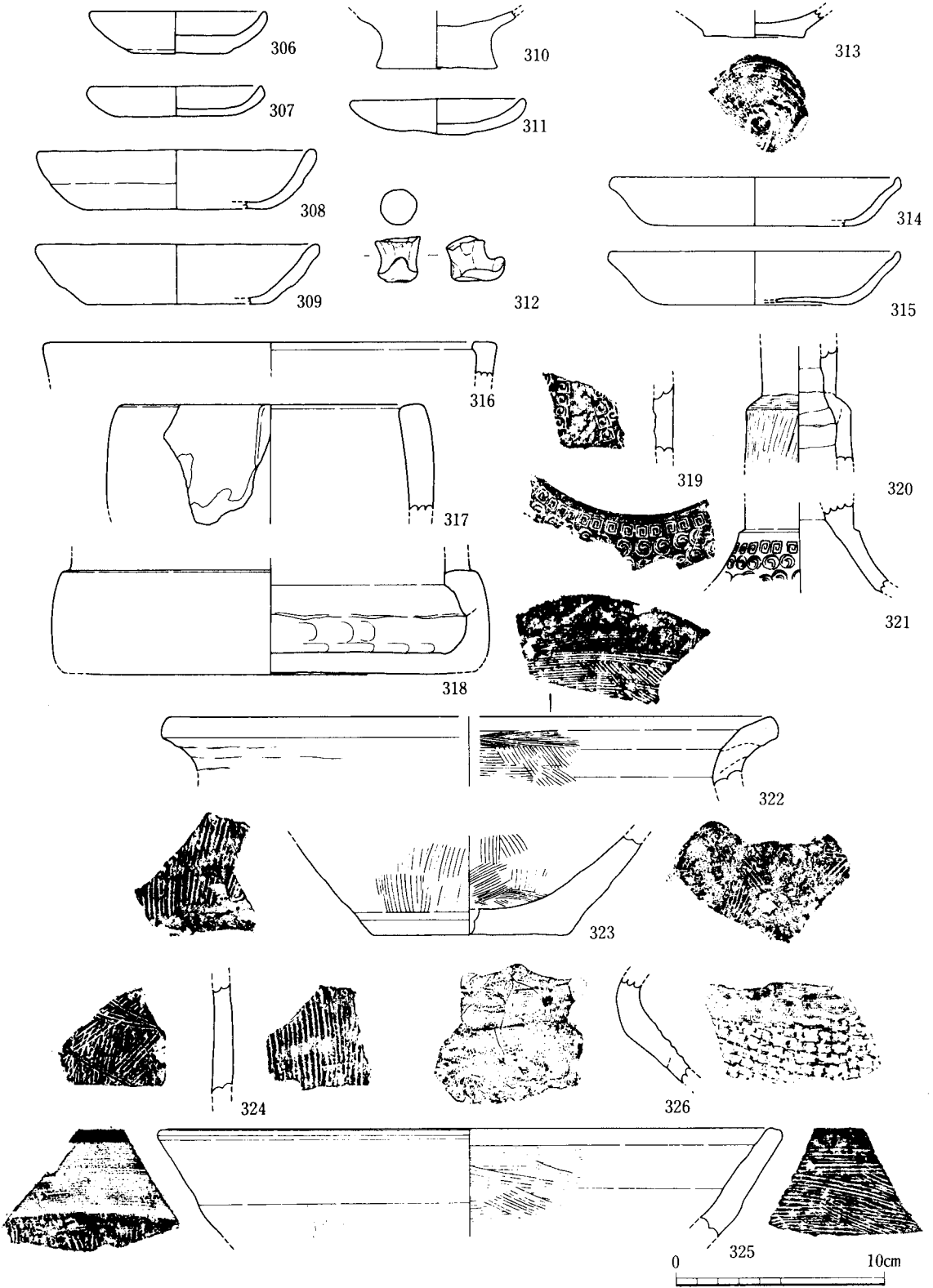
第39図 古代末～中世 出土遺物(18) (ピット)



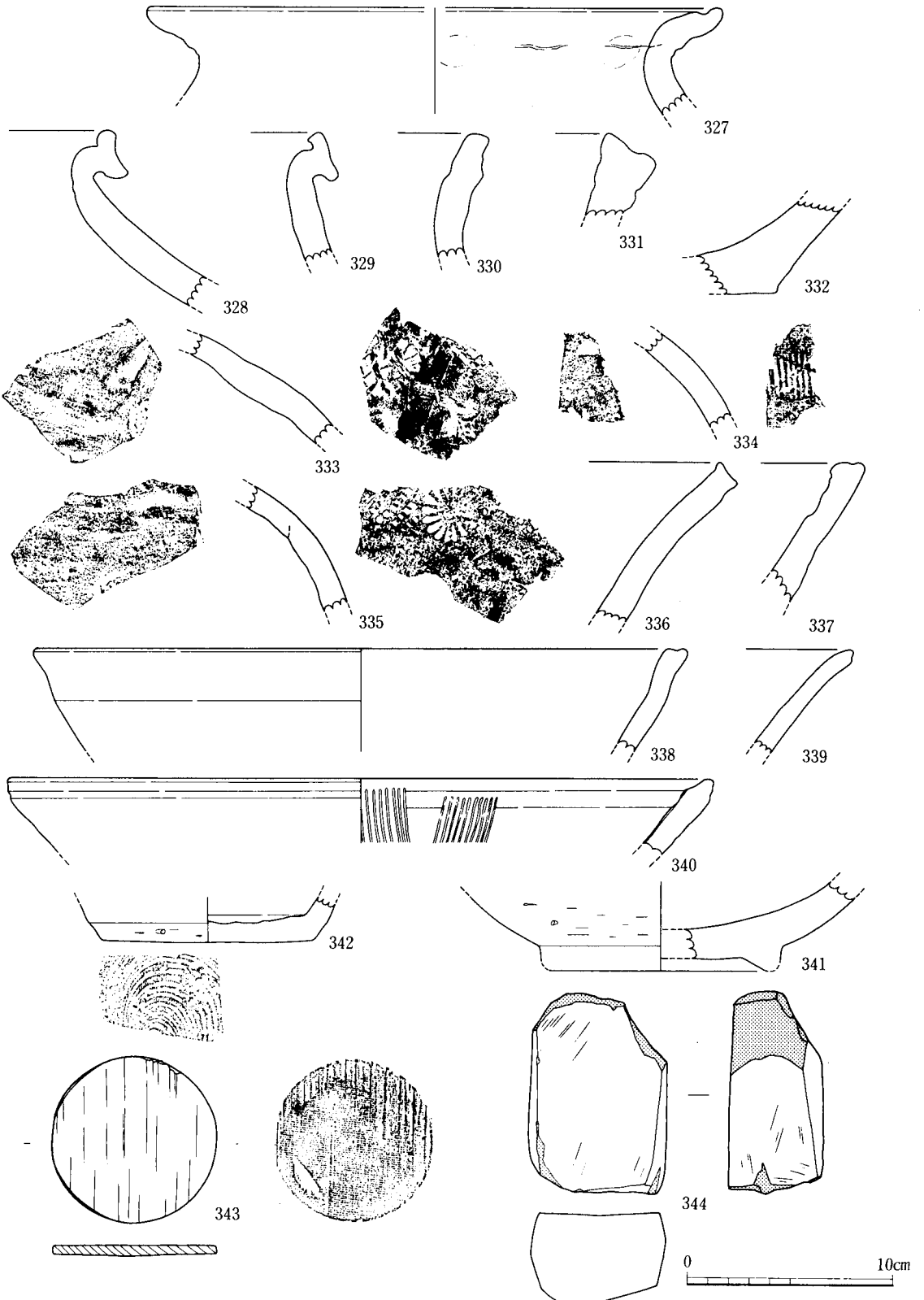
第40図 古代末～中世 出土遺物(19) (ピット)



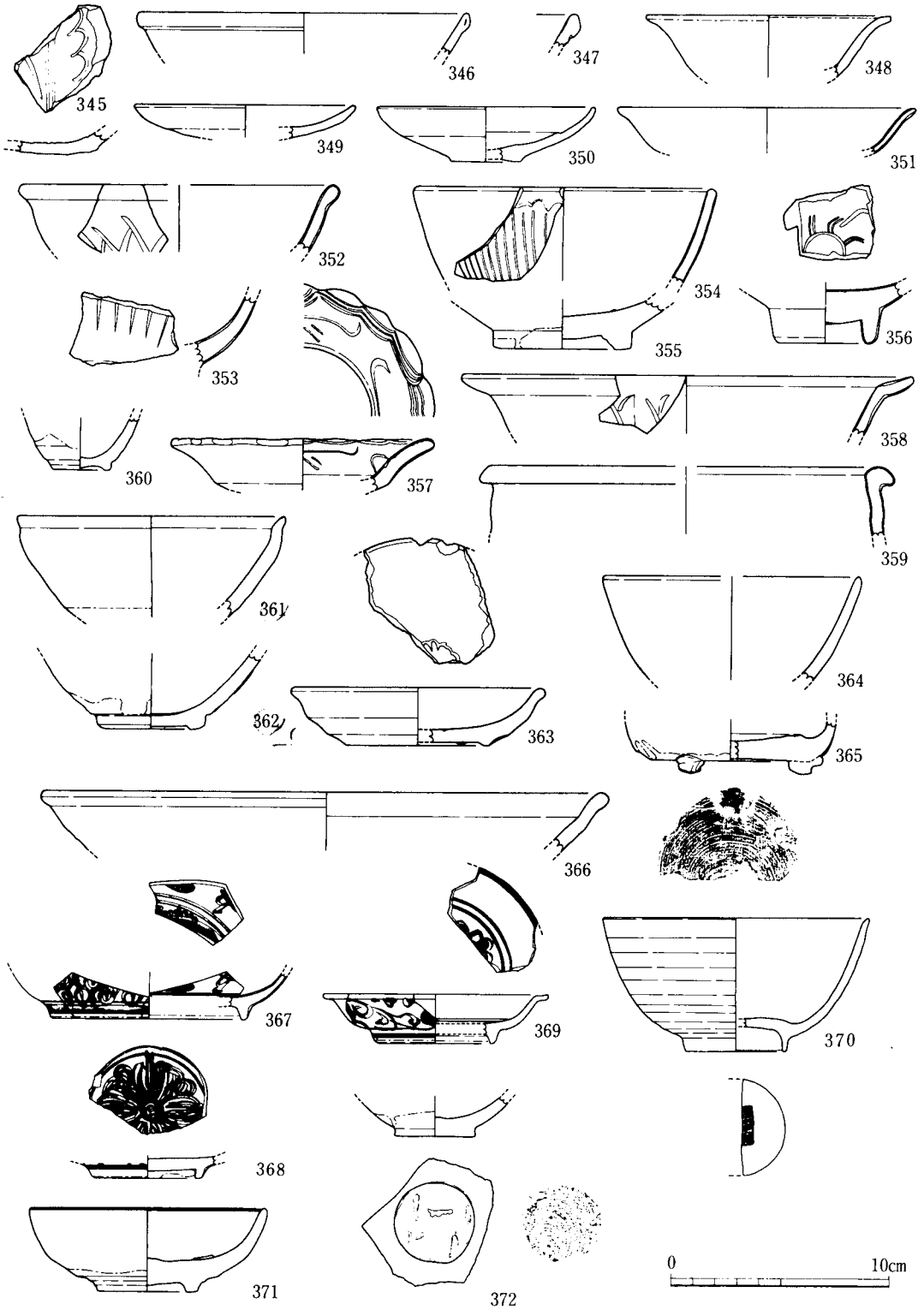
第41図 古代末～中世 出土遺物(20) (ピット, 304・305はS=1/5)



第42図 古代末~中世 出土遺物(2) (包含層)



第43図 古代末～中世 出土遺物(22) (包含層)



第44図 古代末~中世 出土遺物(2) (包含層)



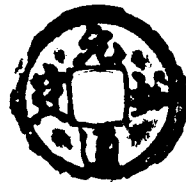
373



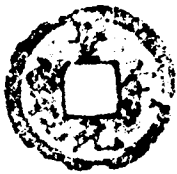
374



375



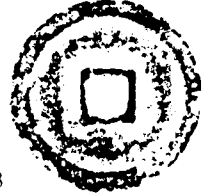
376



377



378



379



380



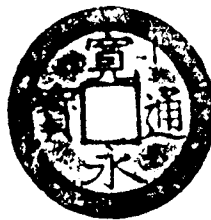
381



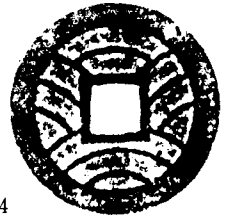
382



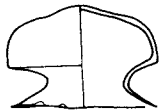
383



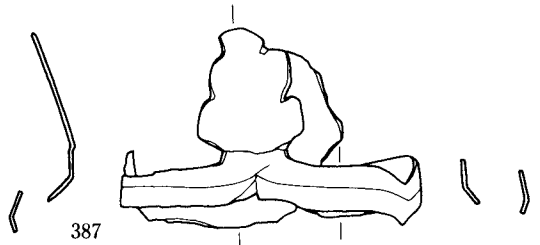
384



385

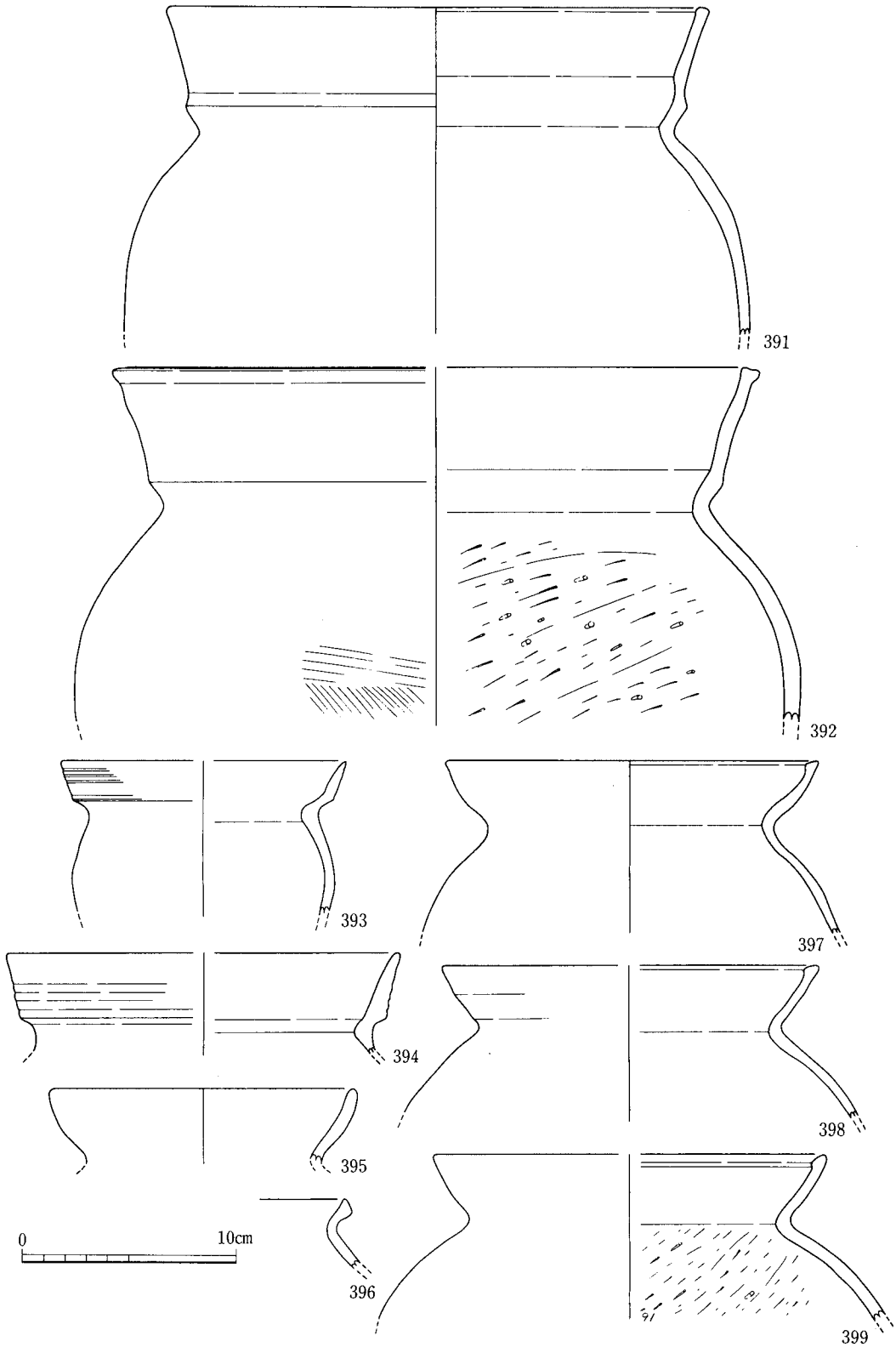


386

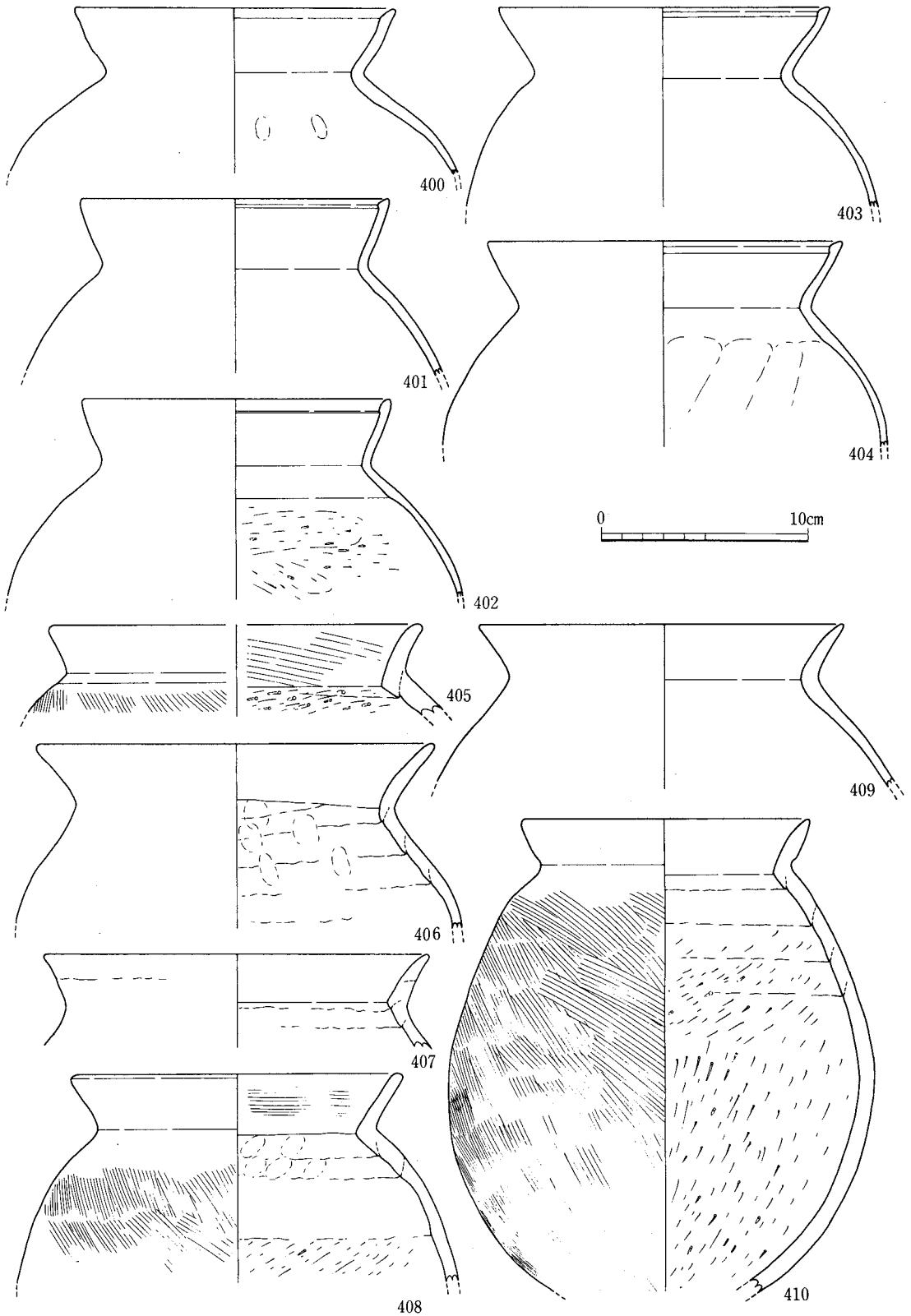


387

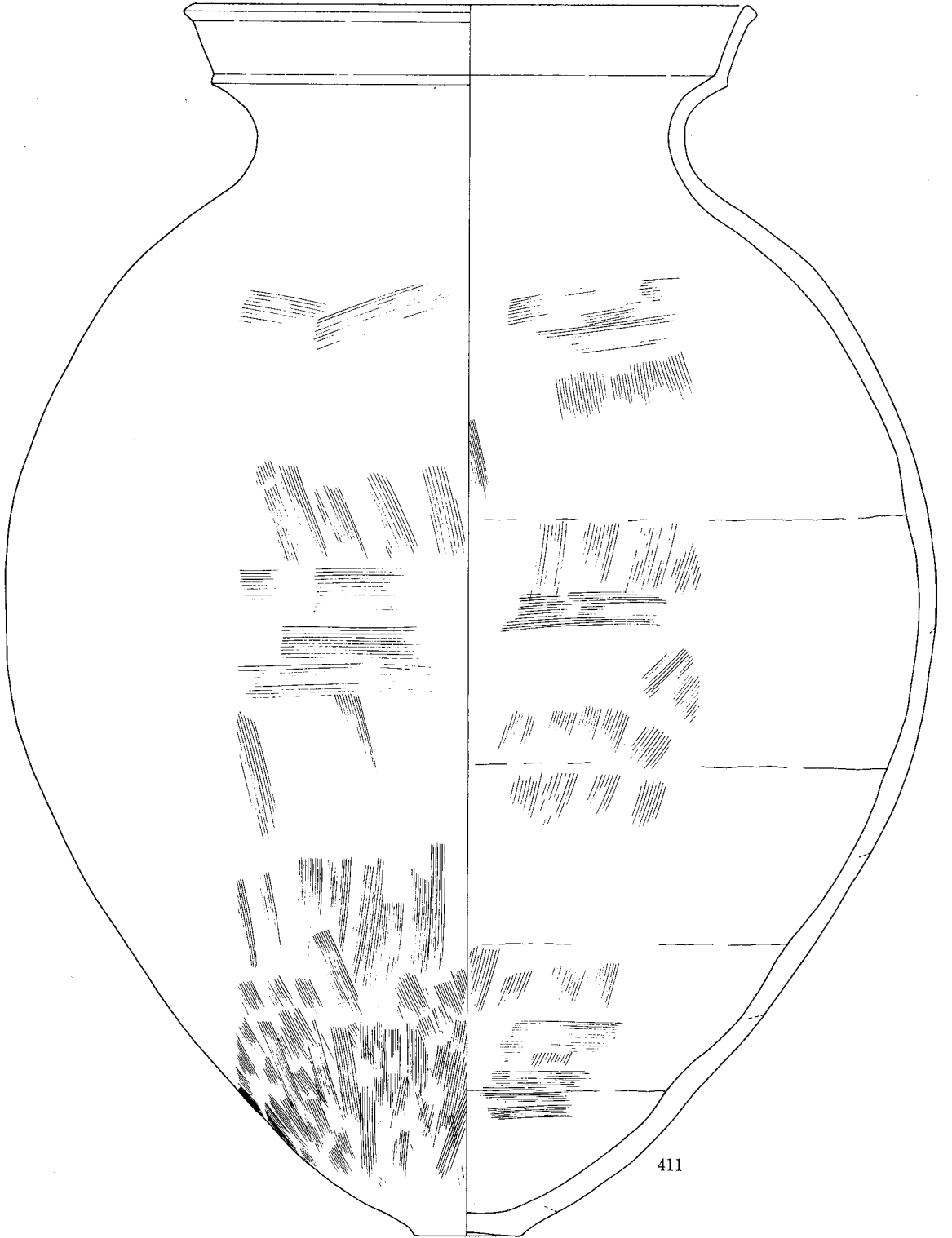
第45図 古代末～中世 出土遺物(24) (包含層, 原寸)



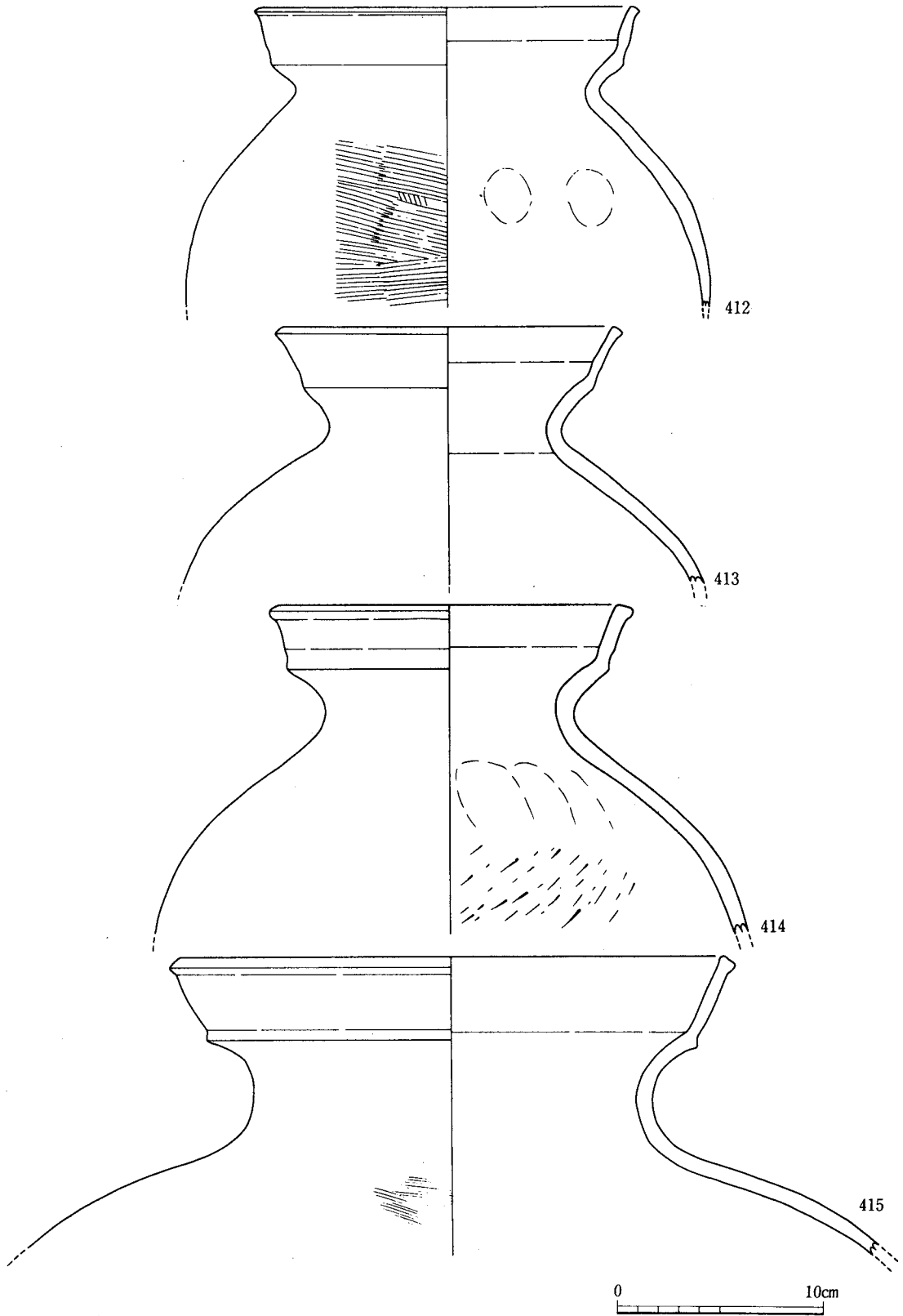
第46図 平安時代以前 出土遺物(1) (413号溝：391~399)



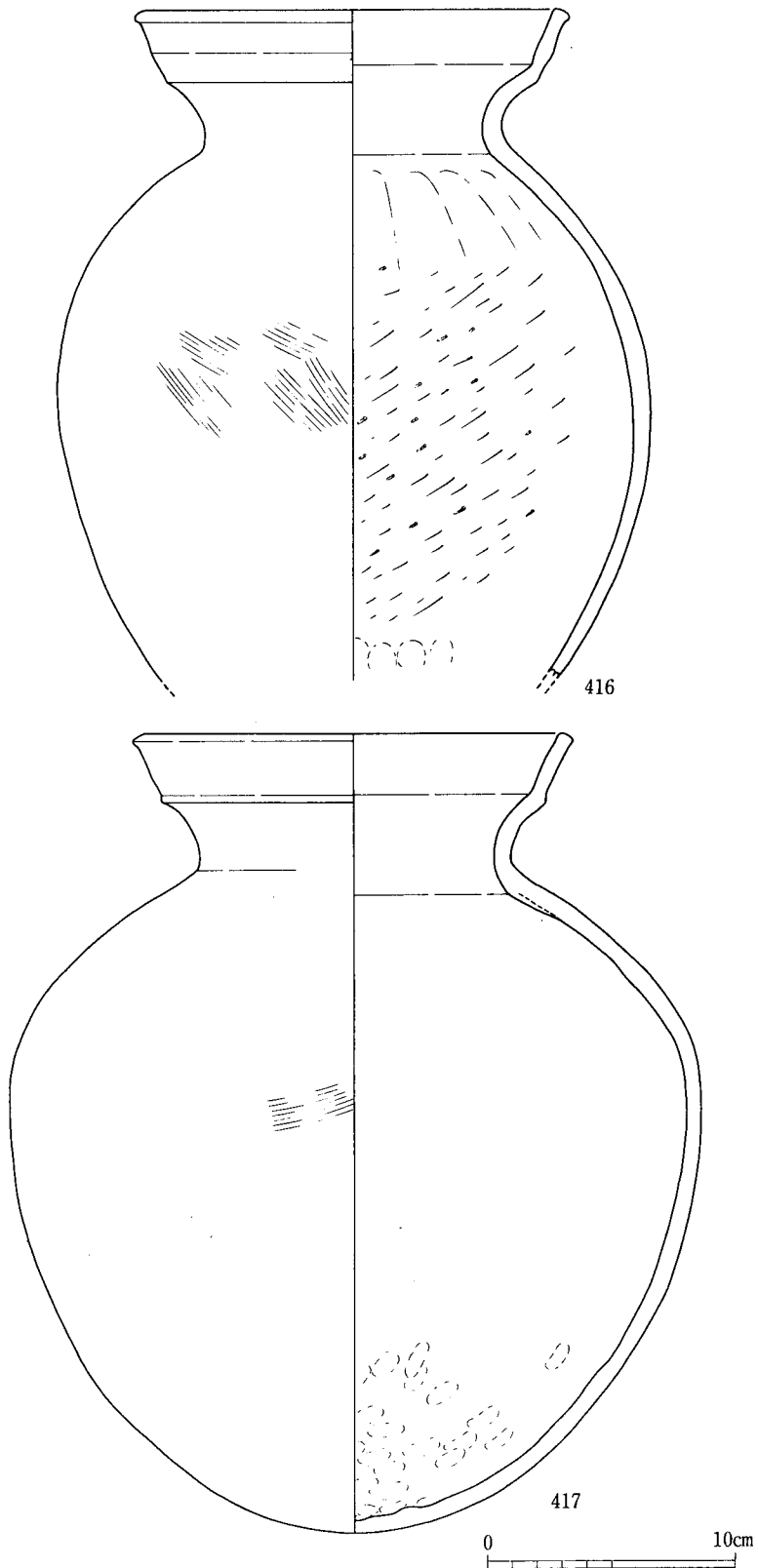
第47図 平安時代以前 出土遺物(2) (413号溝：400~410)



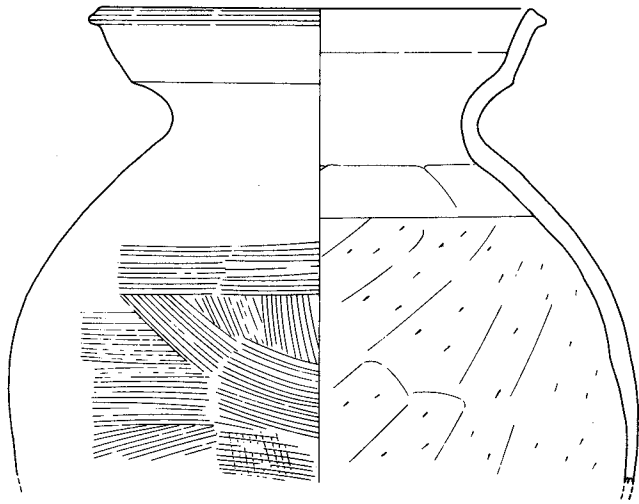
第48図 平安時代以前 出土遺物(3) (413号溝:411)



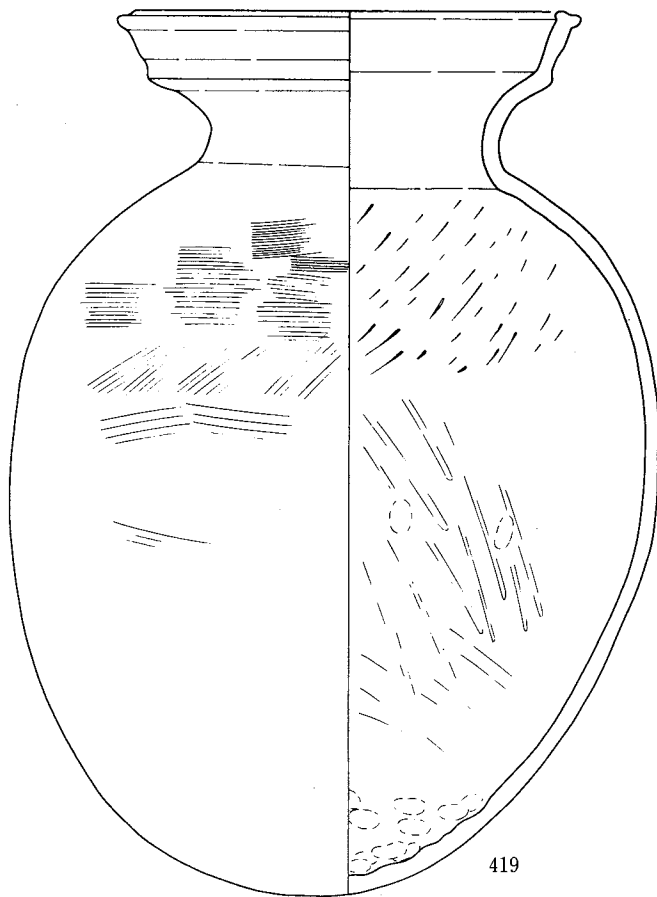
第49図 平安時代以前 出土遺物(4) (413号溝：412~415)



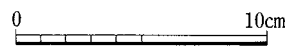
第50図 平安時代以前 出土遺物(5) (413号溝：416・417)



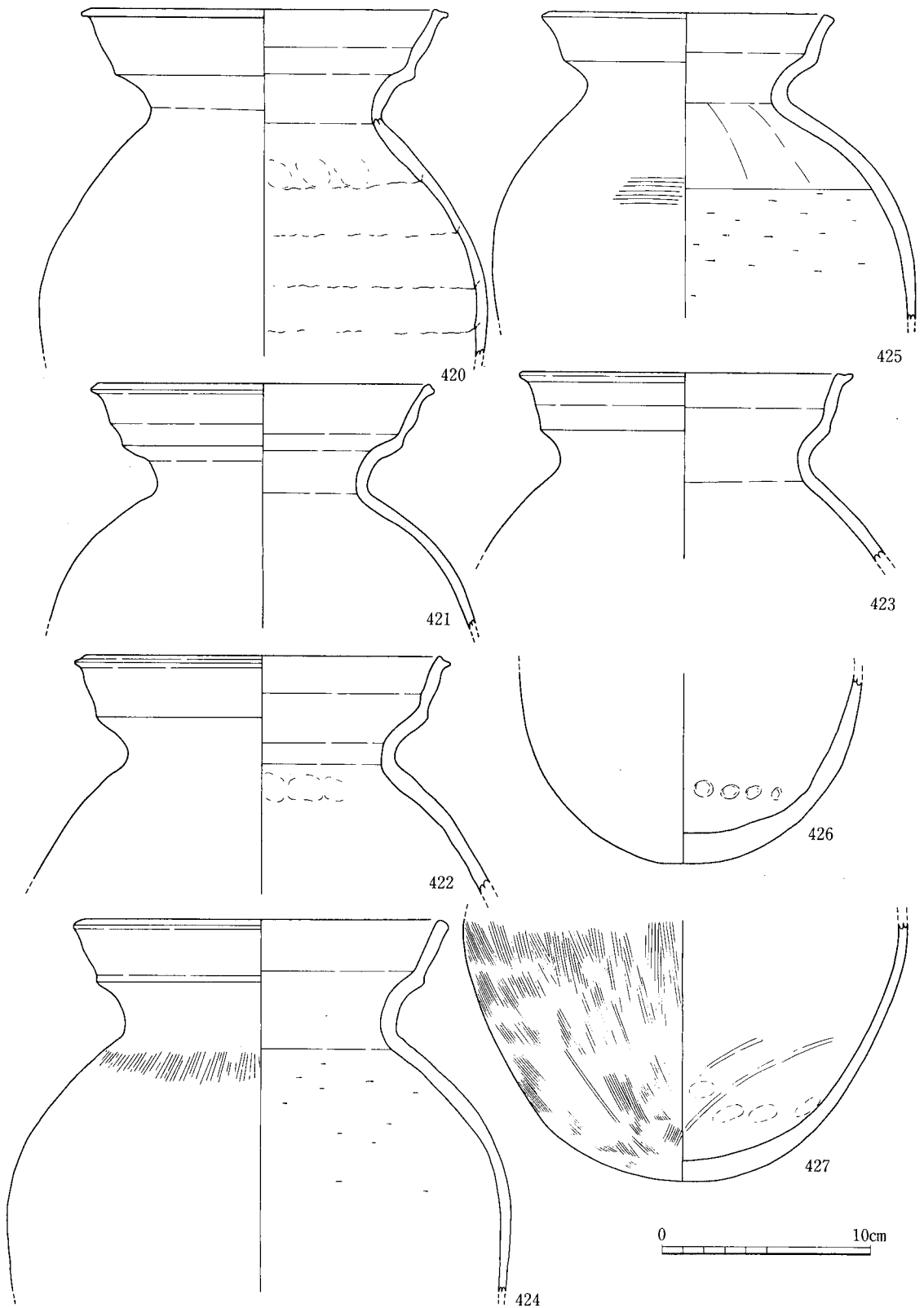
418



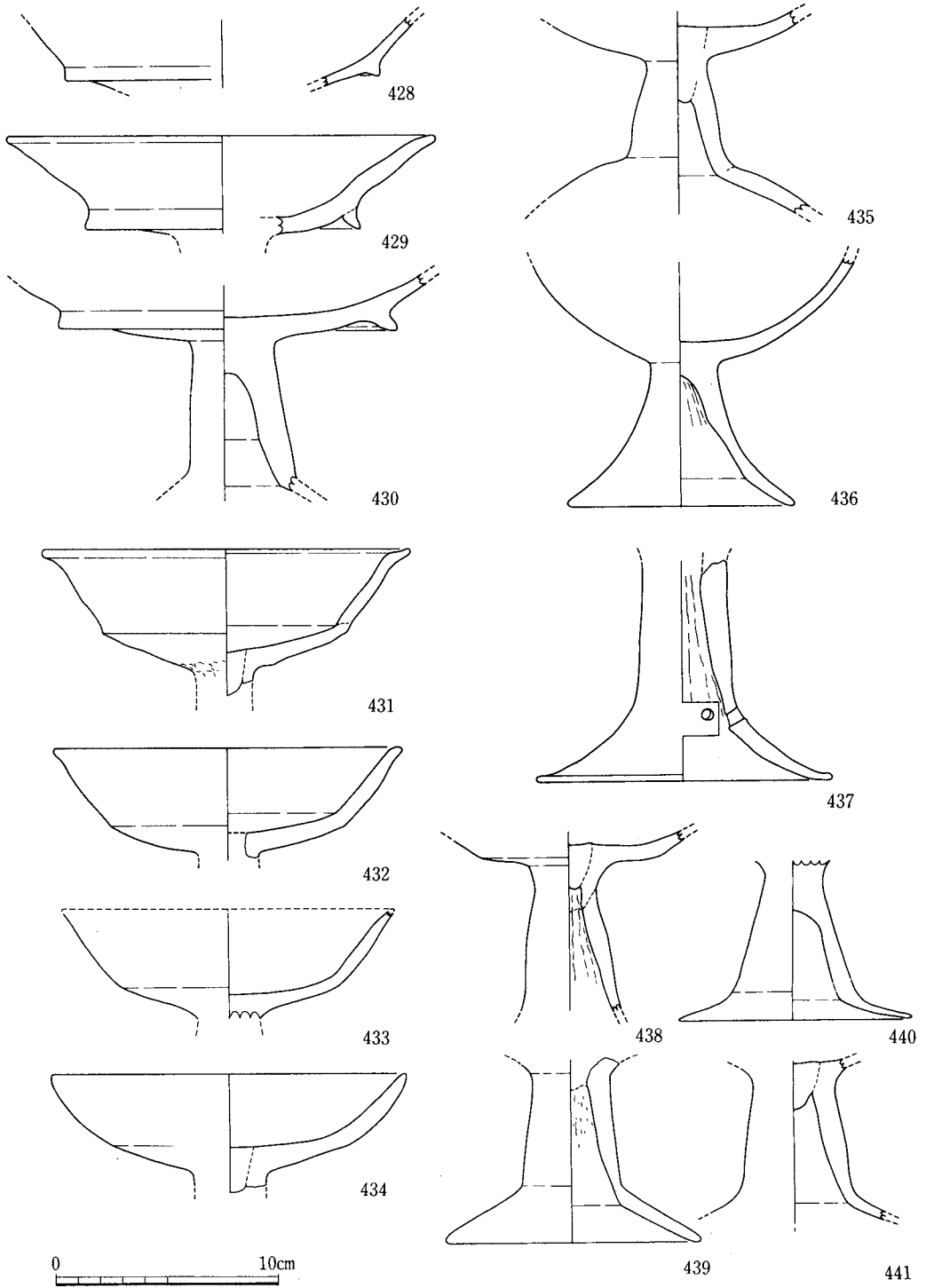
419



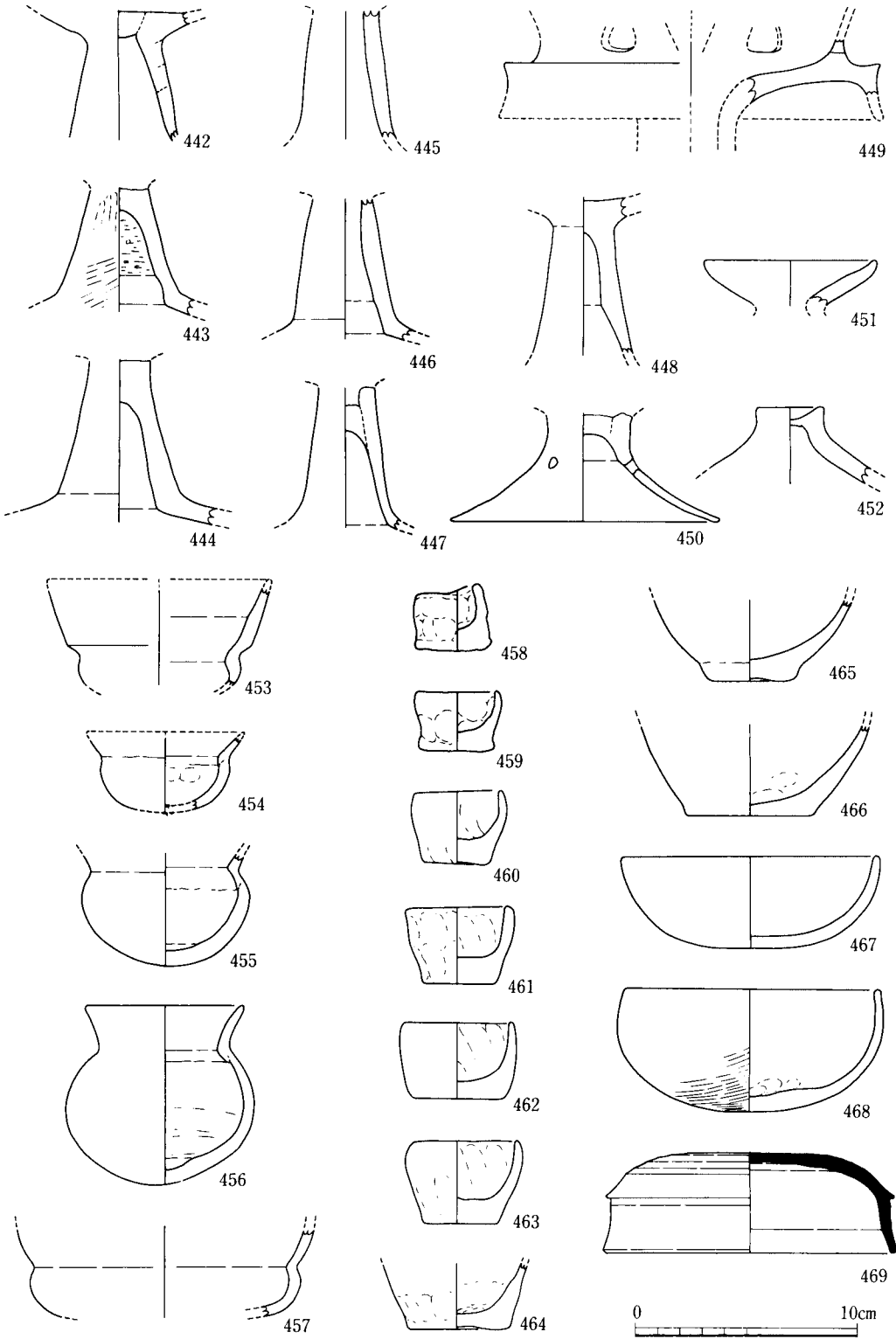
第51図 平安時代以前 出土遺物(6) (413号溝：418・419)



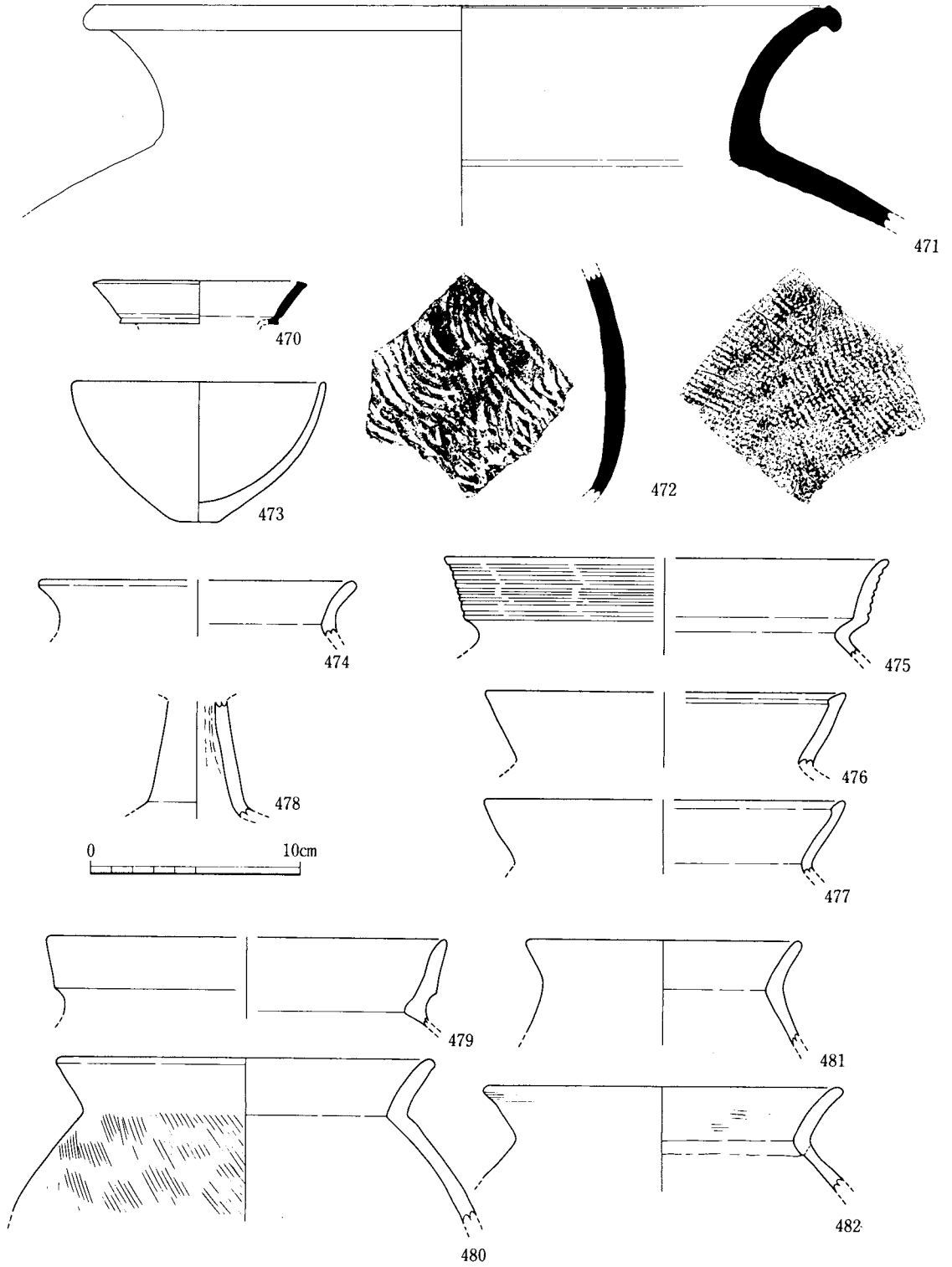
第52図 平安時代以前 出土遺物(7) (413号溝：420~427)



第53図 平安時代以前 出土遺物(8) (413号溝：428~441)

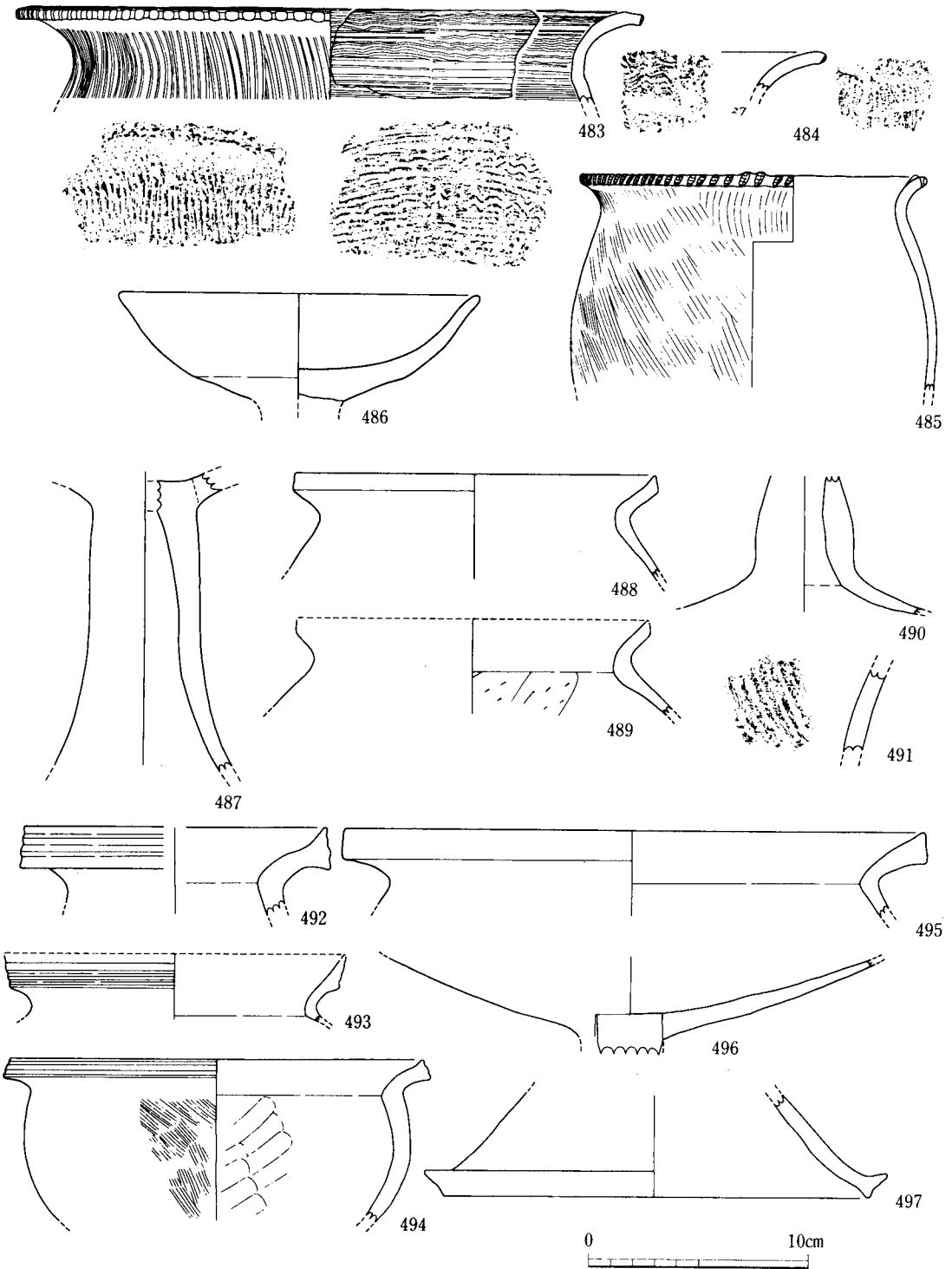


第54図 平安時代以前 出土遺物(9) (413号溝：442～469)



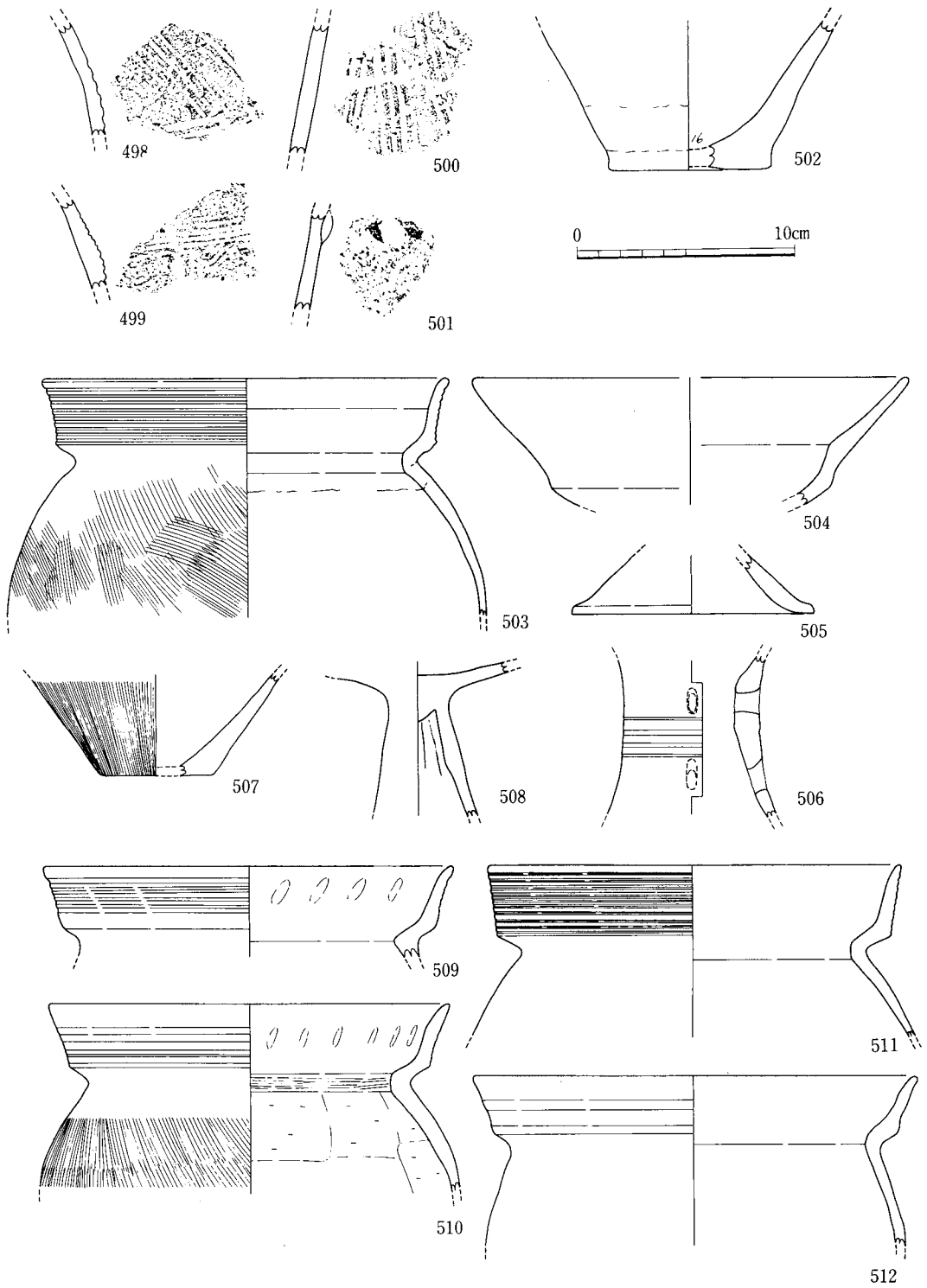
第55図 平安時代以前 出土遺物(10)

(410号溝：473, 411号溝：470~472, 412号溝：474~478, 414号溝上層：479~482)



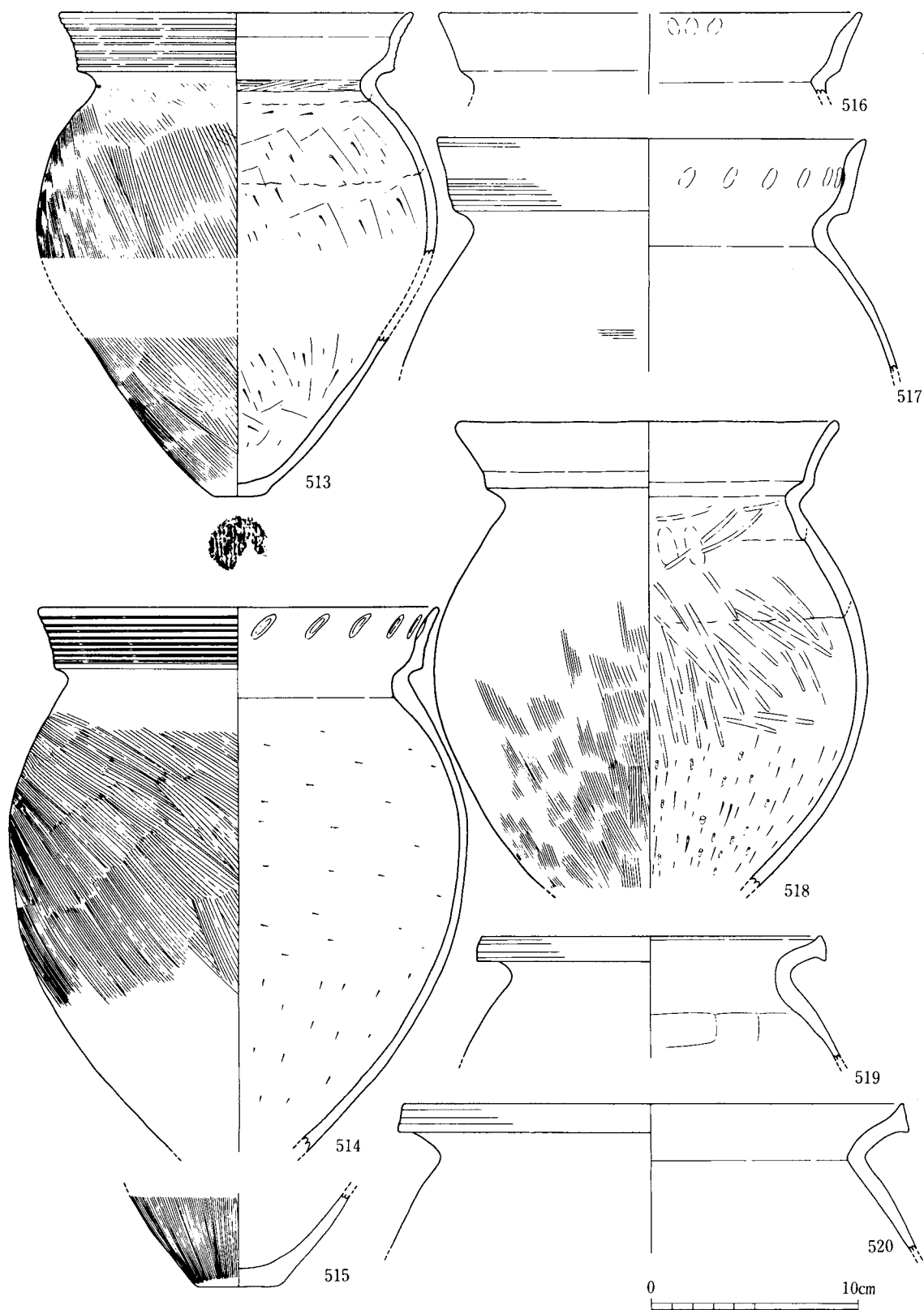
第56図 平安時代以前 出土遺物(11)

(414号溝下層：483～485, 414号溝肩部：486, 409号土坑：487, 418号土坑：488～490, 461号土坑：491, 440号土坑：492～497)

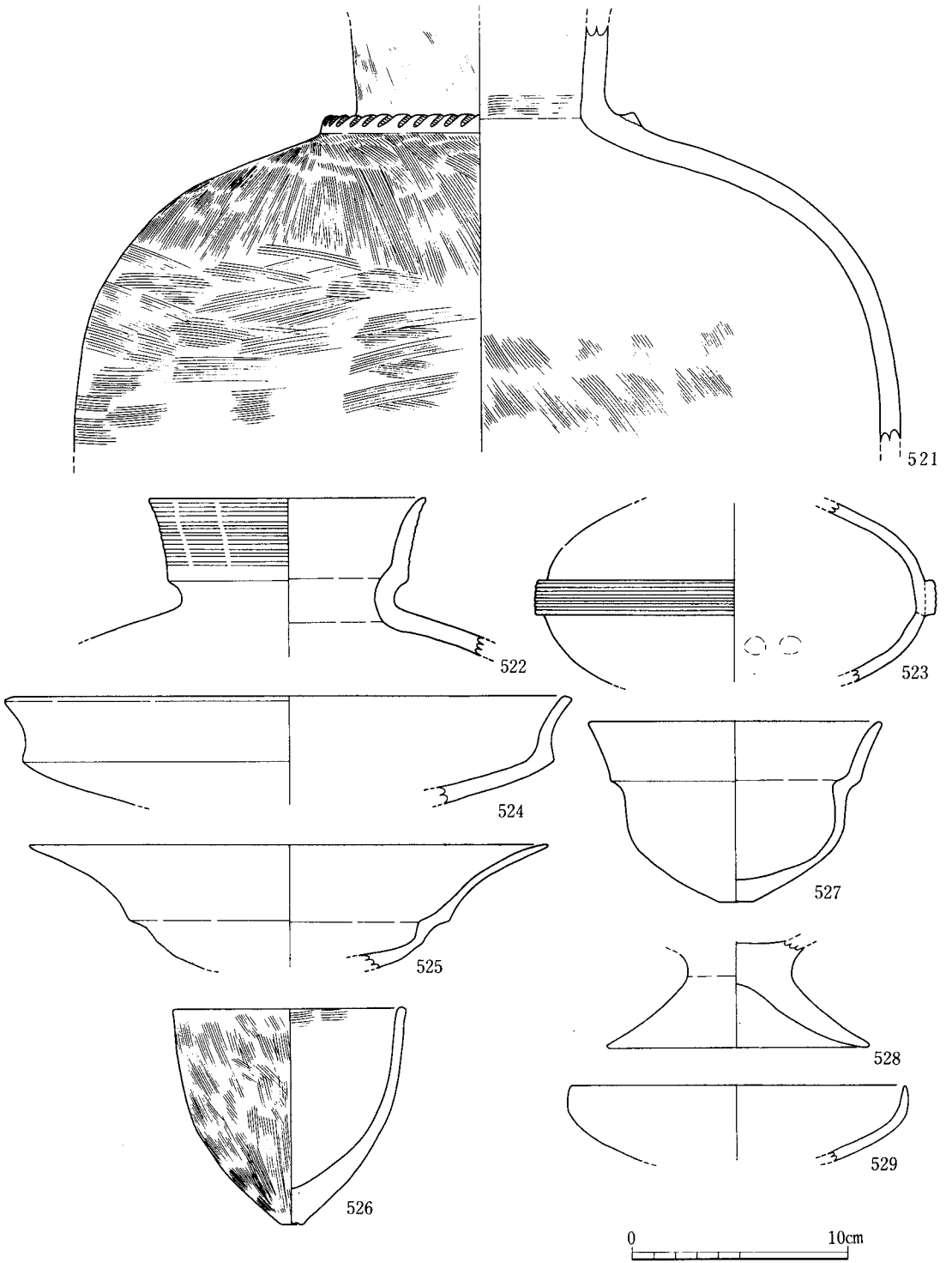


第57図 平安時代以前 出土遺物(12)

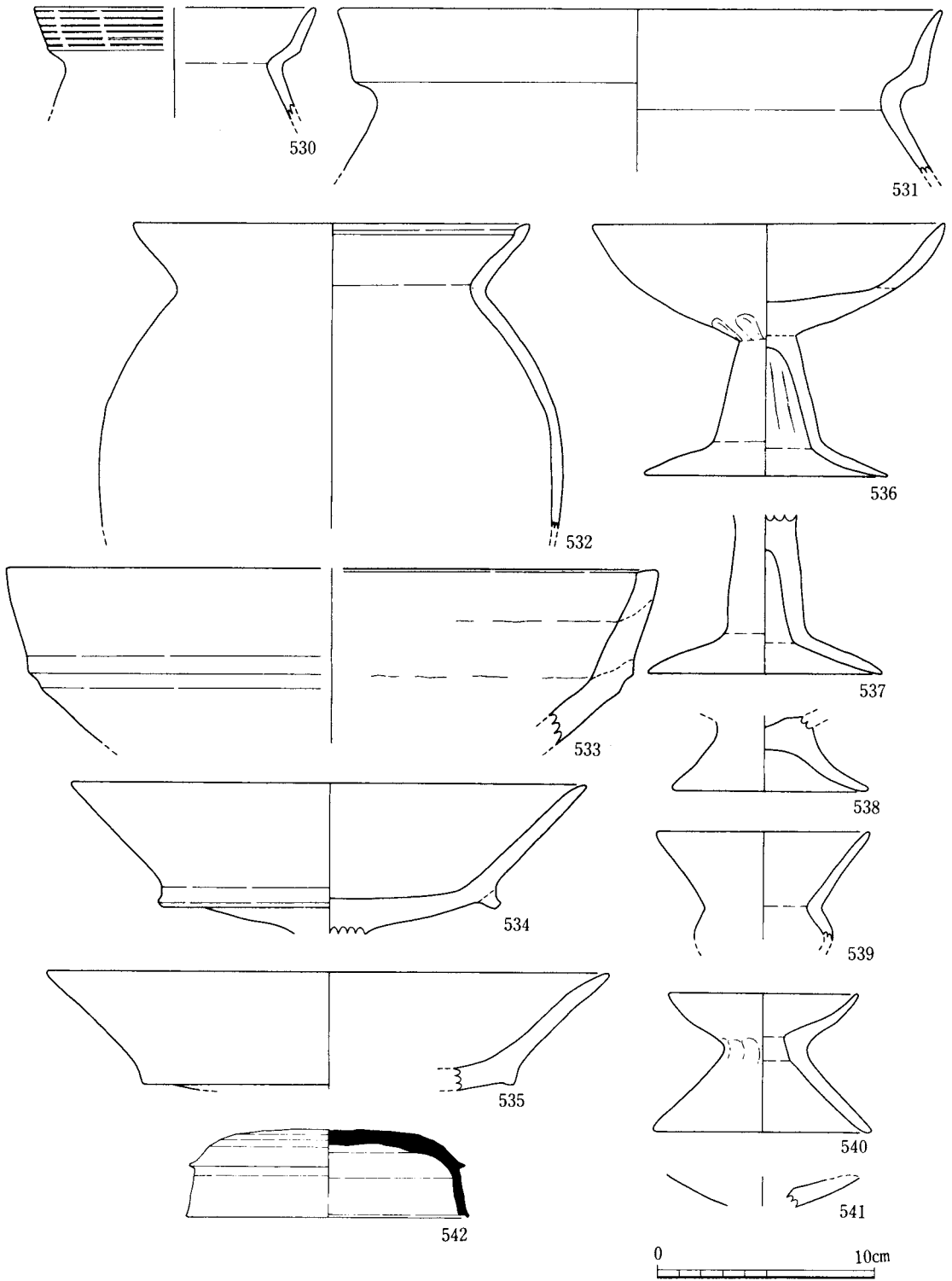
(S X 403 : 498~502, ピット4191 : 503・504, ピット4160 : 505・506,
ピット4161 : 507, ピット4104 : 508, 下層包含層 : 509~512)



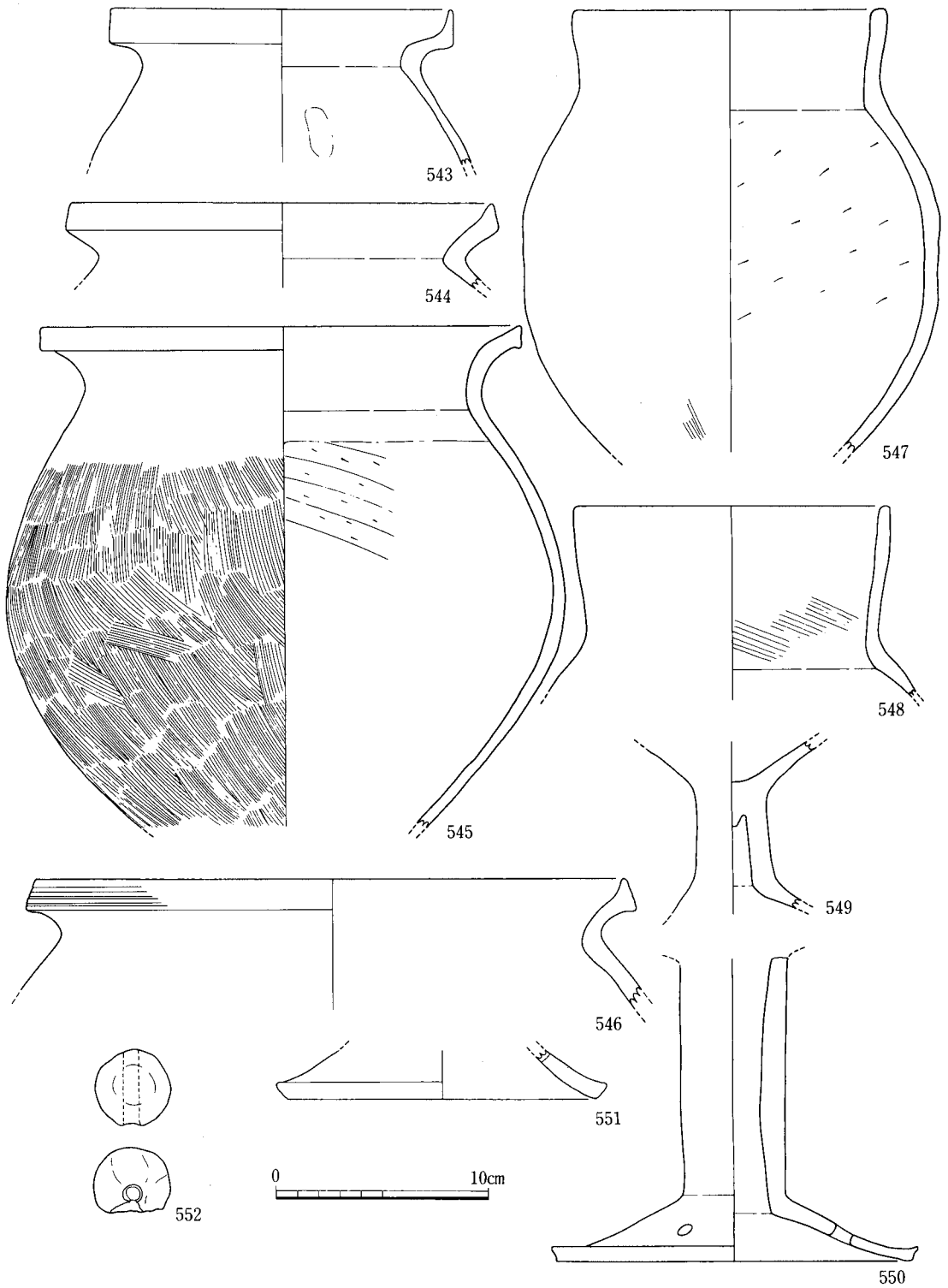
第58図 平安時代以前 出土遺物(13) (下層包含層)



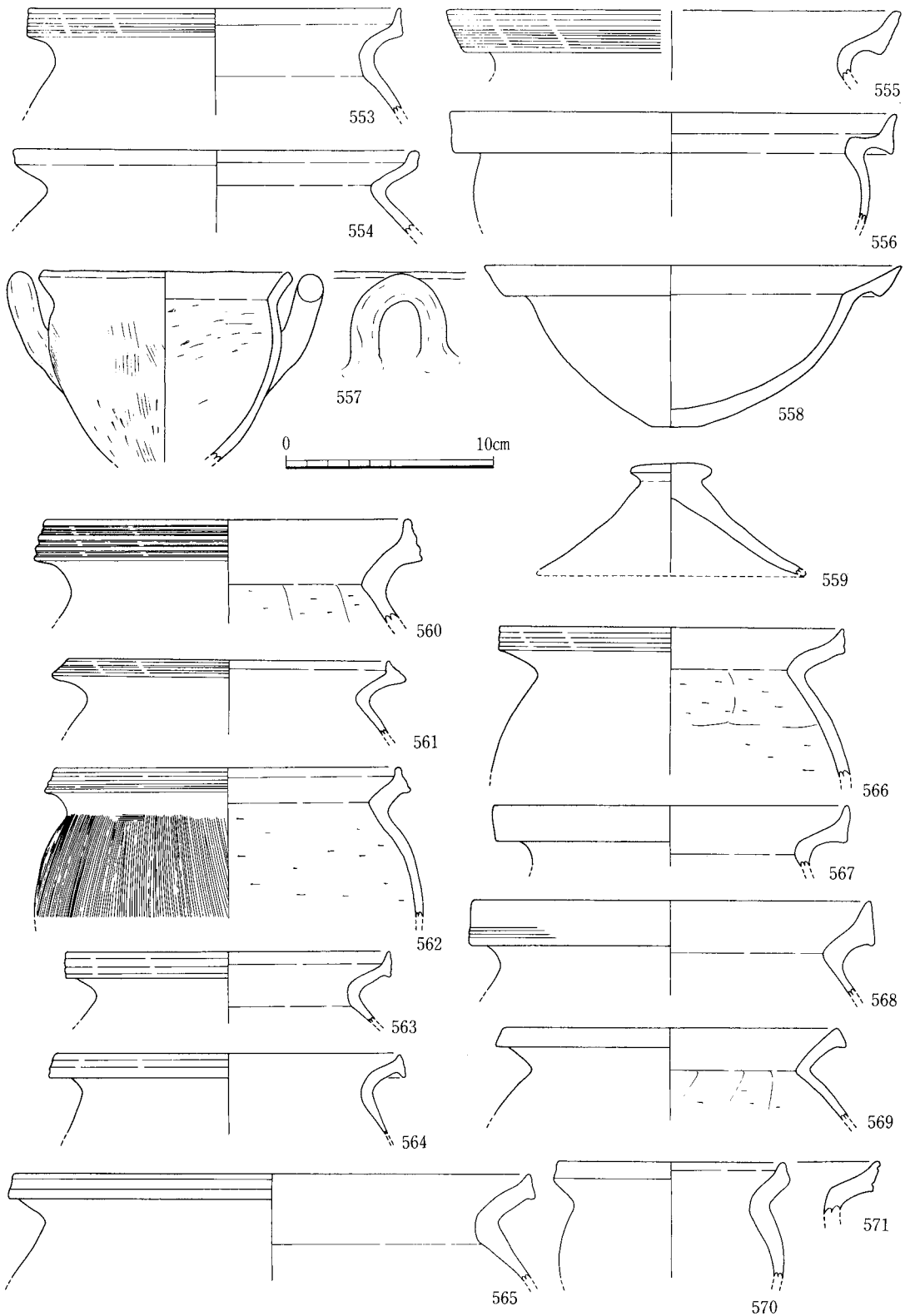
第59図 平安時代以前 出土遺物(14) (下層包含層)



第60図 平安時代以前 出土遺物(15) (I区包含層)

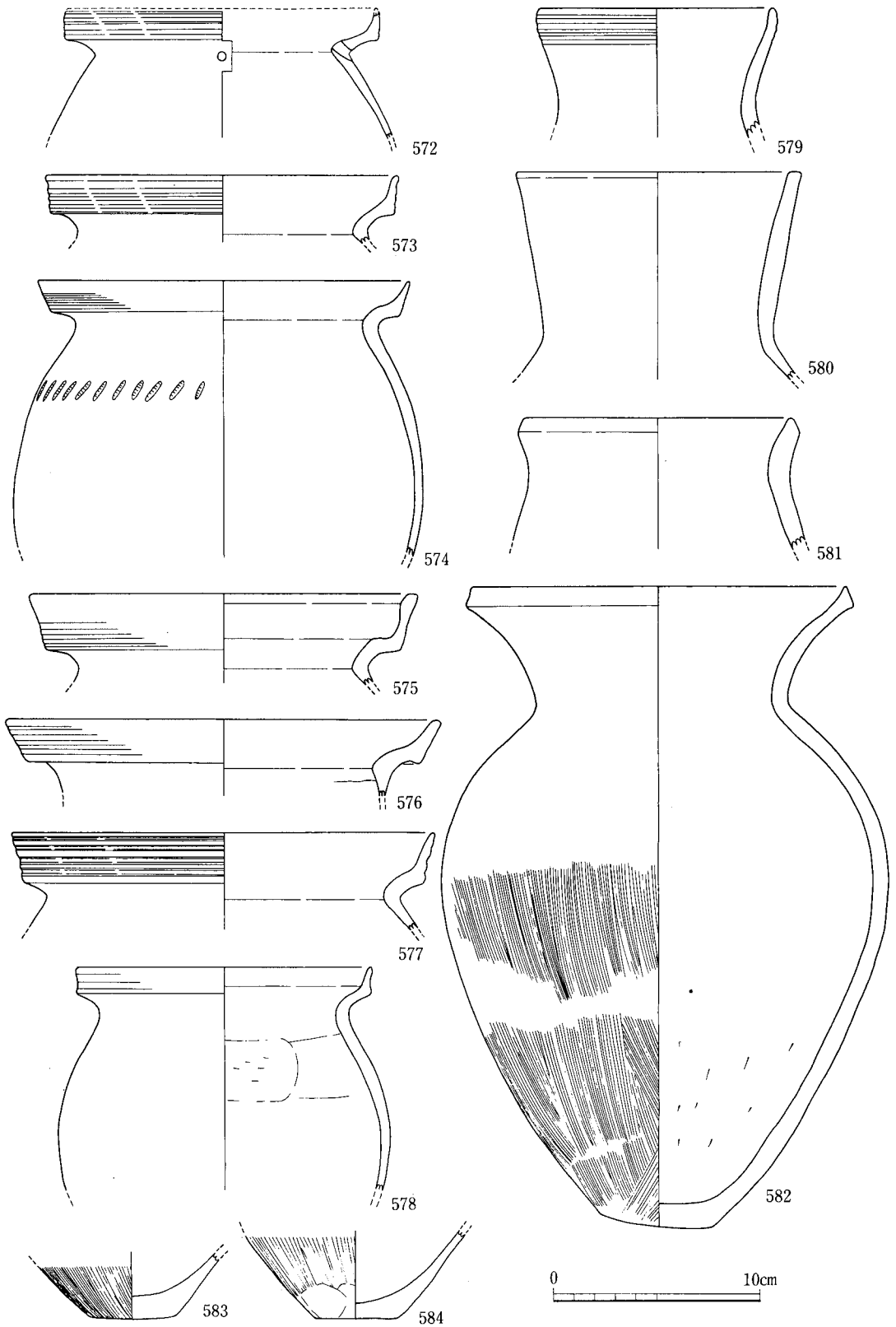


第61図 平安時代以前 出土遺物(16)
 (Ⅲ区 中世遺構面下層：546・549・552, Ⅲ区 M32~33土器集積：543~545・547・548・550・551)



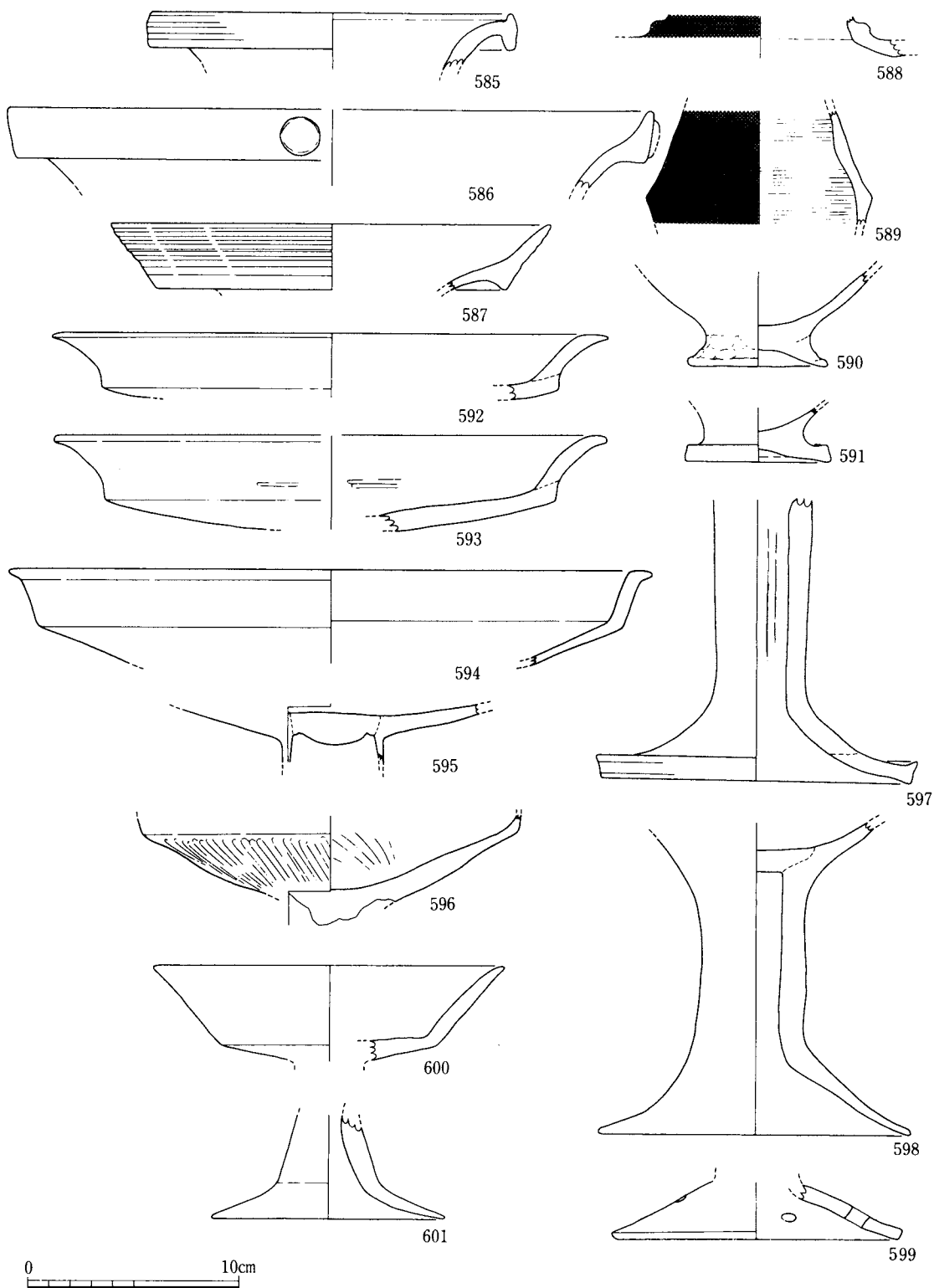
第62図 平安時代以前 出土遺物(17)

(S X 403 : 571, II区中世遺構面下層 : 560・564・565・567~570, III区中世遺構面下層 : 553・554・556・558・559・561~563・566, III区包含層 : 555・557)



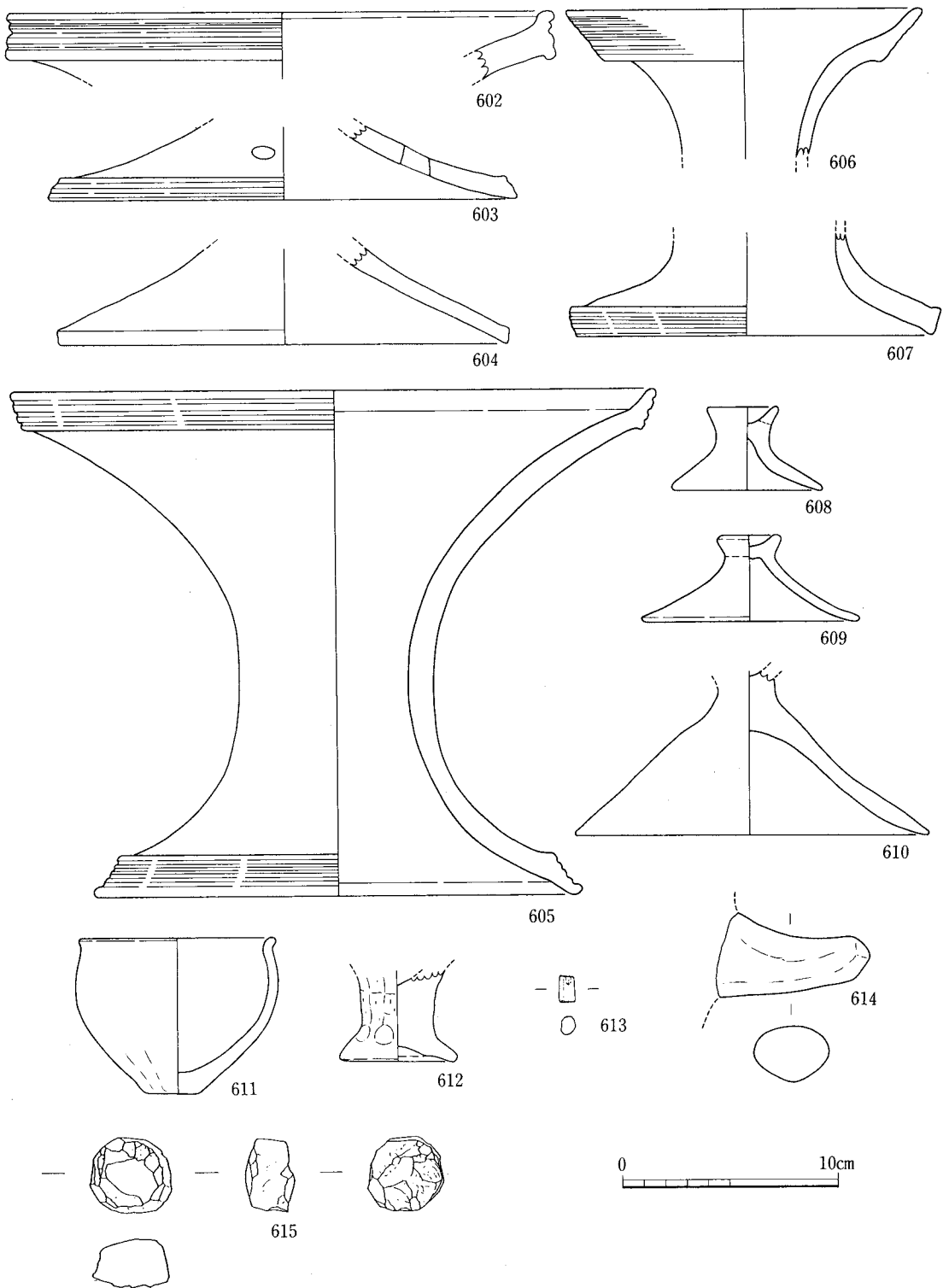
第63図 平安時代以前 出土遺物(18)

(II区中世遺構面下層：573・577・580・583・584，III区中世遺構面下層：572・578・579・582，III区包含層：581)



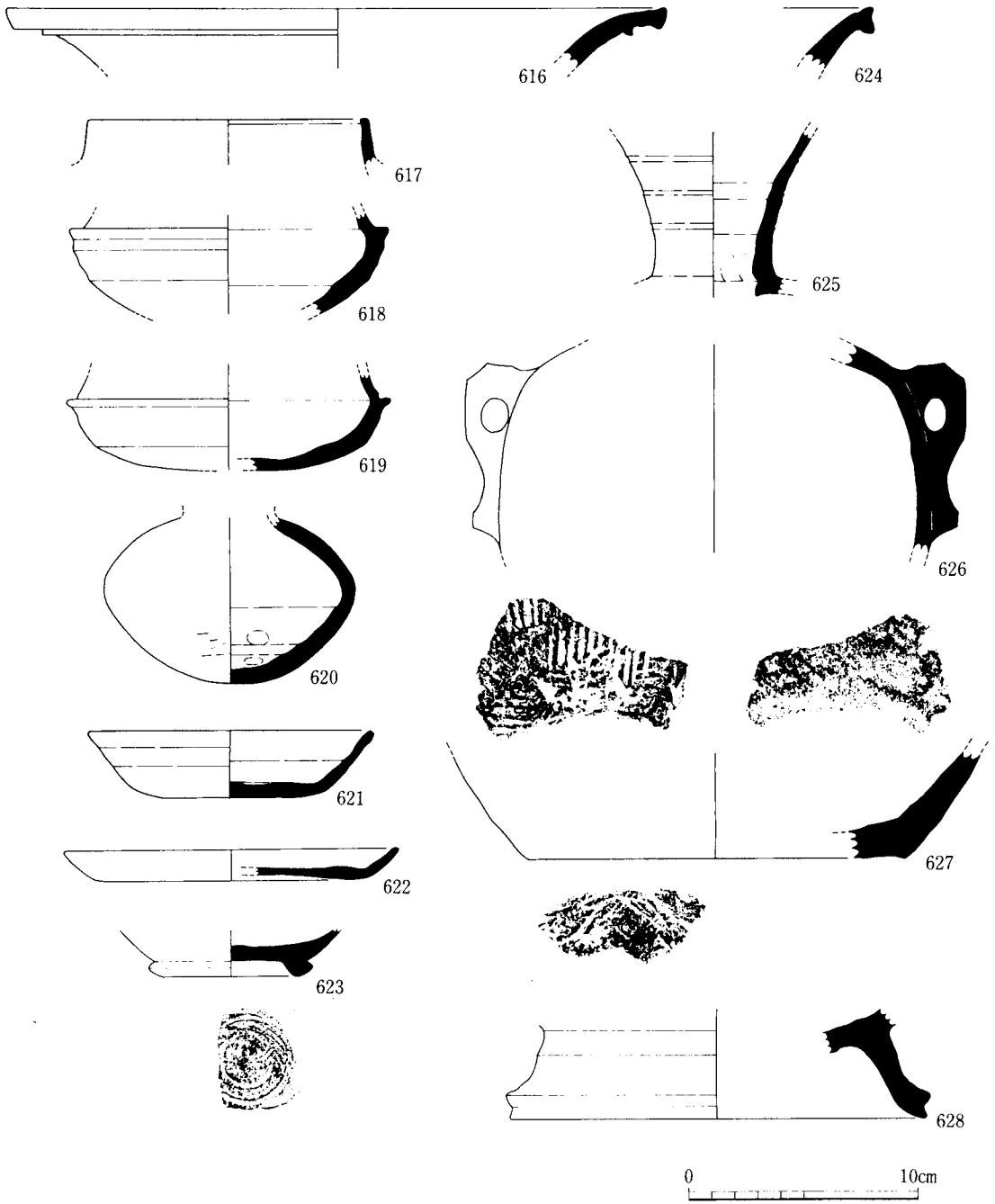
第64図 平安時代以前 出土遺物(19)

(I区下層：590, II区中世遺構面下層：585~589・592・593・596・598・601,
II区包含層：600, III区中世遺構面下層：594・595・597, III区包含層：591・599)



第65図 平安時代以前 出土遺物(20)

(I区下層:608・609・614, II区中世遺構面下層:602・603・605・607・610・611,
 II区包含層:606・612, III区中世遺構面下層:604, III区包含層:615, 不明:613)



第66図 平安時代以前 出土遺物(2)
(I区下層：616～620・624, III区包含層：621～623・625～628)

第6章 まとめにかえて

白江梯川遺跡の発掘調査は4次に渡り、遺跡の輪郭がかなり分かりかけてきた。しかし、調査担当者の力量不足のため、いままでの調査成果を十分にまとめきれしていない。ここでは、ごく一部ではあるが、4次調査の成果を中心にまとめておきたい。

第1節 下層遺構について

先にふれたように、工事での削平面の関係から一部を除いて下層遺構を発掘していない。しかし、遺物の出土状況から調査区のほぼ全面にわたって下層遺構が存在する可能性が高い。ただし、401・402号溝の東側については上層遺構・下層遺構ともに密度が極めて低い。自然地形の復原をできなかったが、I区が微高地でIII区がそれより低くなっていることから、401・402号溝より東側が低地で遺構が存在しなかったと推定される。

時期的には弥生時代中期から古墳時代前期までの遺物が出土し、1～3次調査区とあわせて連綿と集落が営まれていたと推定される。また、古墳時代中期、奈良・平安時代の遺物も出土するが、それ以前に比べると断続的である可能性が強い。

第2節 上層遺構について

遺跡の拡大

第2・3次調査では中世でも13～15世紀に遺跡の最盛期があったが、今回の調査区は第2次調査区に接しているにも係わらず、12～14世紀に最盛期があったと思われる。このことから、南（第4次調査区）から北（第2・3次調査区）の方向へ遺跡が拡大、もしくは移動していったことが確認された。現在の集落が存在するさらに南の部分はこれらの調査区より小高く、集落の適地であったと推定される。おそらく、現在の集落周辺から遺跡が徐々に拡大していったのだろう。なお、平安時代の遺物は全調査区で散見され、移動や拡大の傾向を確認できない。

溝による区画

401・402号溝は溝間の柵状遺構とあわせて主要遺構を区画するものと推定される。出土遺物などからも2つの溝はほぼ同時期に機能していたことが確認される。おそらくは方形をなしたと推定されるが、4次調査区の北側である2次調査区ではこのようなセットの区画は存在しない。201・202・203・204号溝がそれに連続した可能性もあるが、そうした場合、2本の溝は途中で別れたことになる。201号溝と401号溝が接続したと推定した場合、一辺80m以上の区画が想定できる。

なお、202号溝、204号溝が401号溝と接続したと推定した場合、東西約60m、南北42m以上の区画が想定できる。ただし、2次調査で確認した溝が4～8度東側に傾いているのに対して、401・402号溝はほぼ真北を向いており、やや歪んだ方形区画を想定しなければならない。2次調

査の溝と401号溝、402号溝との接続関係は将来の調査に委ねなければならない。

土師器の一括廃棄

また、第2・3次調査区ではまとめて中世土師器が出土することは無かったが、第4次調査区ではいくつかの井戸でまとめて投棄されていることが確認できた。当遺跡で土師器の一括投棄が確認される最初は、411号土坑、および412号井戸で12世紀前半頃に比定される。最後は、401号溝であり、14世紀代に比定される。いずれも第4次調査区の遺構である。井戸そのものは第2・3次調査区でも引き続き作られており、井戸などに土師器を一括投棄する行為そのものがすたれた可能性が高い。藤田邦夫氏のご教授によれば、土師器の一括投棄は平安時代後期から鎌倉時代の遺跡で目立って確認されることが多く、当遺跡の状況は当地域での普遍的な現象と言える。

小型竪穴状遺構

小型竪穴状遺構とよんだ穴は用途不明であるが、遺物の出土量も少なく、時期を決定できないものもある。時期的には近接する遺構と同時期のものと推定されるが、井戸や溝などとは異なり、土器などを一括投棄する場ではなかった。垣内光次郎氏のご教授によると、こうした竪穴状遺構は作業小屋と物置を兼ねたような施設である可能性がある。類例は関東などの中世遺跡にも確認されると言う。中世の集落構造を知る上で重要な遺構であろう。

第3節 井戸出土中世土師器の分類について

中世土師器の編年については藤田邦夫氏が研究を進められ、加賀を中心とした編年案を組み立てている（近刊予定〔藤田 1989〕）。また、藤田氏は形態や胎土・色調の特徴から分類を試みている〔藤田 1988〕。この試みは京都方面の「かわらけ」研究の影響を受けたものと考えられるが、その生産と流通を考える上で重要な研究である。これとは別の契機で進められている研究として北野博司氏の古代土師器の生産と流通の研究〔北野 1988〕がある。これは吉岡康暢氏が『東大寺領横江庄遺跡』で行った須恵器の生産と流通の研究をさらに発展させた研究として評価される。

以下に、これらの研究を参考にして井戸と溝から比較的まとめて出土した土師器の製作技術・胎土の特徴・色調から分類を試みたい。

基本的には製作技術でロクロ土師器（A類）とてづくね土師器（B類）に大別できる。A類は胎土に粒の大きな有色砂粒（0.2～1.0ミリ）を多く含むが、B類は殆ど含まず、含んでいたとしても粒が小さい。B類は白色粘土粒を含むものが多いが、A類は殆ど含まない。それぞれの類を胎土の特徴と色調から、412号井戸、410号井戸、409号井戸の土師器（実測した遺物に限る）を以下のように細分して分類した。なお、観察は肉眼によっており、砂粒の観察のために7倍のルーペを使用した。なお、白色粘土粒としたものは、肉眼観察による限り鉱物とは判定できなかった粒子で形態も様々である。小松市内出土の縄文土器にもこれより粒子の大きいものが確認される例がある。筆者の経験から、この白色粘土粒は陶土の調整段階で「だま」になった粘土を完全に均一化しきれなかったためにできたのではないかと想像している（乾燥しかかった粘土に水を加えて練ろうとした時、粘土に「だま」ができた経験がある）。仮にそうであるとしたら陶土の調

整方法の差を示すことになるだろう。

A a - 1 類

胎土はやや粗く、橙色～灰色を呈する。焼成がやや甘いためか、器表面が溶けて「ずるむけ」状態になるものが多い。A a - 2 類に比べて胎土の粒子がきめ細かく、手に持つと粉が付く状態である。赤色酸化粒を多く含む。

(A a - 1 類 73、74、81、86、87、90、91、92、97、98、99、100)

A a - 2 類

器表面が溶ける特徴はA a - 1 類と良く似ているが、有色砂粒（流紋岩などか）、石英粒、赤色酸化粒などの粗い砂粒を多く含む。砂粒は0.2～1 ミリ程度。

(A a - 2 類 107、110、112、113、114)

A b 類

A a 類に比べて胎土が緻密で締まっており、橙色～肌色を呈する。焼成も堅緻で、器表面が溶けることはない。砂粒もA a 類に比べて細かく、白色粘土粒を僅かに含む。ロクロ土師器ではあるが、胎土の特徴はてずくね土師器を指向しているように思われる。

(A b 類 82、83、84、88、89、94、95、108、109、111)

A c - 1 類

赤橙～肌色を呈する。A a 類以上に多量の砂粒を多く含み、稀に黒雲母片を含むものもある。

A a 類より焼成はよく器表面が溶けることはない。

(A c - 1 類 65、66?、67?、76、78?、79)

A c - 2 類

暗い灰色を呈する。A c - 1 類より砂粒が細かい。稀に黒雲母片を含むものもあるなど、A c - 1 類に類似する。

(A c - 2 類 64、72、77、85、93)

A d 類

赤っぽい肌色～橙色を呈するA d 類と、灰色を呈するA d' 類がある。細かい砂粒を多量に含むものがあるが、粘土そのものが極細砂粒を凝縮したようにざらついている。ただし、胎土は緻密で焼成も良い。

(A d 類 68、70、75、80、96)

(A d' 類 69、71)

B a 類

胎土は灰～白灰色を呈する。白色粘土粒を多量に含むことが、他とは違う大きな特徴になっている。胎土はやや緻密で、器表面が溶けることはない。

(B a 類 117、118、119、132、133、134、137?)

B b 類

胎土は灰～肌色を呈するB b 類と、橙色を呈するB b' 類がある。焼成がやや甘いためか、A a 類と同じく器表面が溶けて「ずるむけ」状態になるものが多い。器表面のしっかりしたB a 類

とは異なる。赤色酸化粒、白色粘土粒を少し含む

(B b 類 115、116、120、130、131、135、138、141、145、146、148、150、152、158、159、160、162、164)

(B b' 類 129、140、144、149、151、153、157、168)

B c 類

胎土は緻密で、灰～肌色を呈する。胎土のしまり方がA b 類にやや近い。

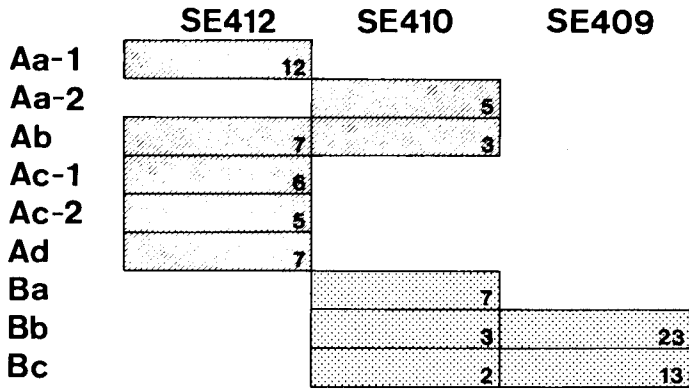
(B c 類 122、128、136、139、142、143、147、154、155、156、161、163、165、166、167)

各群の変遷

藤田邦夫氏によれば412号井戸は12世紀中頃、410号井戸は12世紀末頃、409号井戸は13世紀初頭頃に比定されると言う〔藤田 1989〕。それぞれ時期差があることは明瞭であり、グラフに示したように各時期にすべての群が併存するわけではない。

412号井戸の段階では土師器に多くのバリエーションがあったが、410号井戸ではロクロ土師器の多様性が失われ、新しく加わったてづくね土師器によって全体では多様性を保っている。しかし、ロクロ土師器が消滅する409号井戸の段階になると、てづくね土師器の多様性も失われてしまう。土師器の多様性が生産地、もしくは生産組織の違いによるものであると仮定するならば、こうした現象は生産地、もしくは生産組織の集約を示すものと考えられる。新しい技法であるてづくね土師器の導入にあたっては、技術のみならず、生産組織の解体と集約をも伴った可能性が高い。ただし、器表面が溶ける梯川流域の弥生時代以来の特徴は残されており、生産地、もしくは生産組織が集約されたとは言え、産地が梯川周辺から離れることはなかった。ロクロ土師器の胎土には多様性が認められるのに、てづくね土師器のそれは画一的であると言う現象は他のいくつかの遺跡でも確認できる。ロクロ土師器には砂粒が多く、特徴を捉えやすいという側面も考慮されるべきであろうが、てづくね土師器の画一性は砂粒の有無だけでは説明できないことも確かであろう。また、てづくね土師器の一括資料は一括購入されたものを廃棄した可能性も考慮される。そうだとすれば流通の質・量の問題と一括廃棄の状況についても問題が波及するだろう。

なお、ここでは果たしえなかったが、梯川流域の各遺跡出土の土師器を今回のような視点で総合的に分析すれば、当地域の土師器の生産と流通の問題にも迫ることができ、産地の比定もある程度可能になるだろう。今回の分析は、生産地や組織の識別を目的にしたとは言え、ごく一部の土師器しか対象にしなかったため、産地や組織をどの程度反映しているか不明確である。今回の分類はあくまで当遺跡のごく一部の土師器の基準に過ぎず、将来的にはより広い地区に普遍化しうる分類概念が必要であると考えている。



グラフ 土師器各群の変遷（グラフ内数字は実測個体数）

引用文献

- 北野博司 1988 「土師器の生産と供給」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』
 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 藤田邦雄 1988 「出土遺物の検討 中世」『辰口西武遺跡群Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 藤田邦雄 1989 「中世土器素描－加賀地方の土師器を中心として－」『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会（近刊予定）



白江梯川遺跡遠景(西北・梯川下流から)



第1～4次調査区全景(北から)



4次調査区全景(西から)



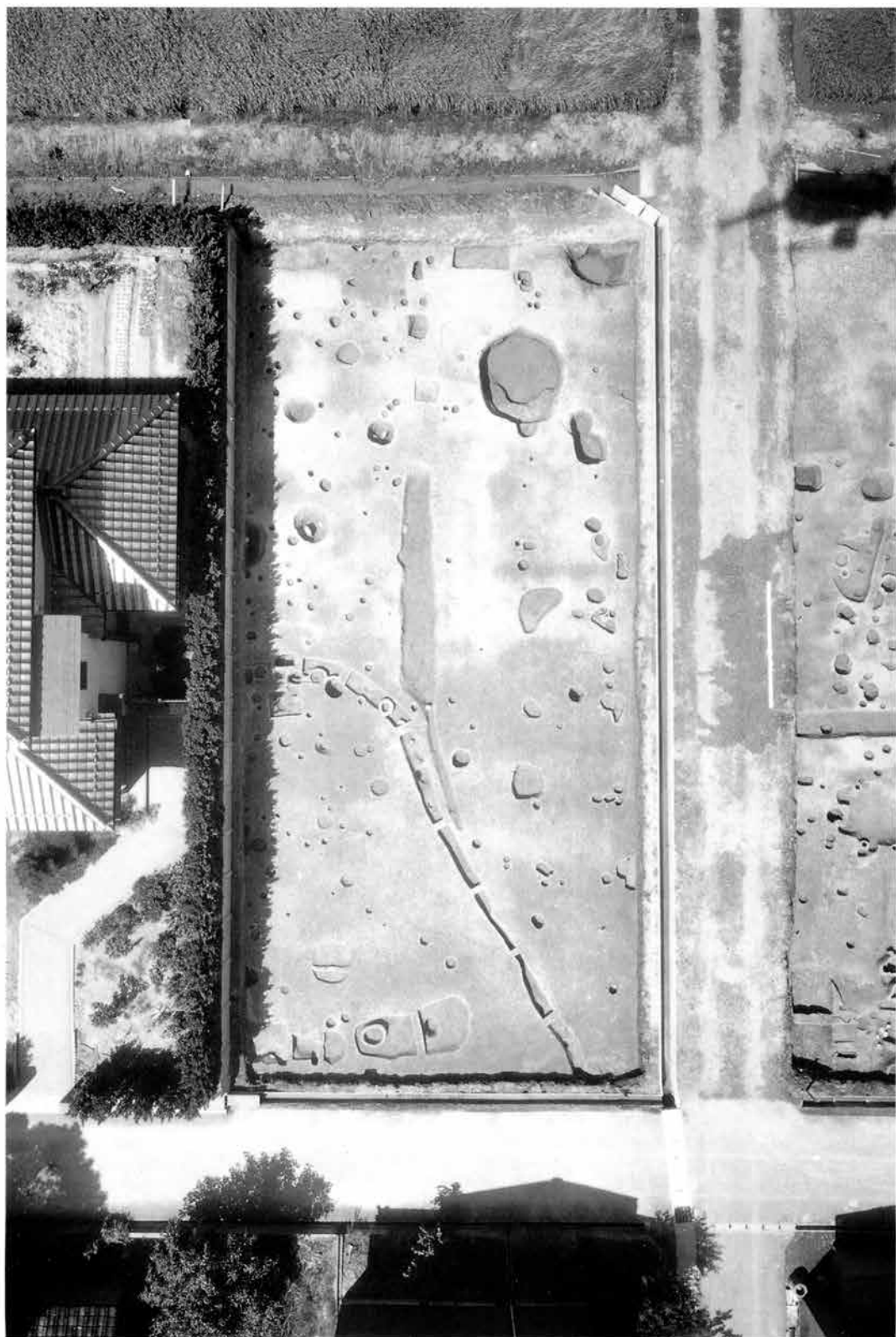
4次調査区全景(西から)

第4次調査区全景垂直写真





1区垂直写真



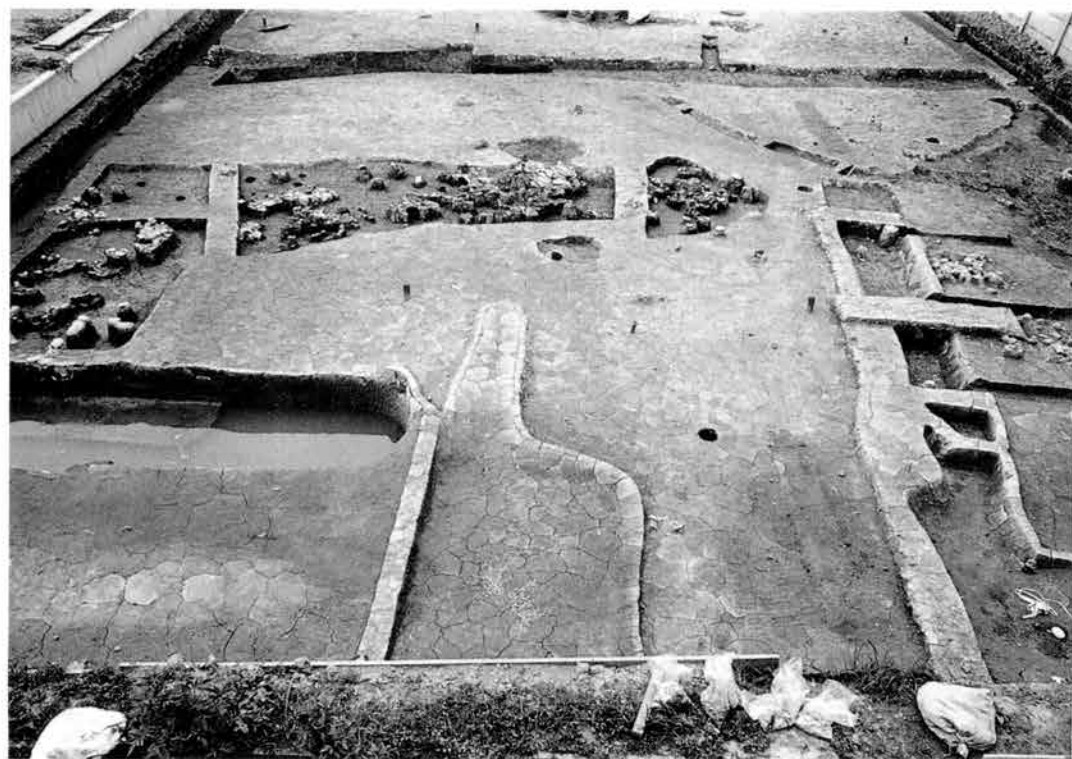
Ⅱ区垂直写真



Ⅲ区垂直写真



I区遺構検出状況(南から)



I区S D413土器出土状況(南から)



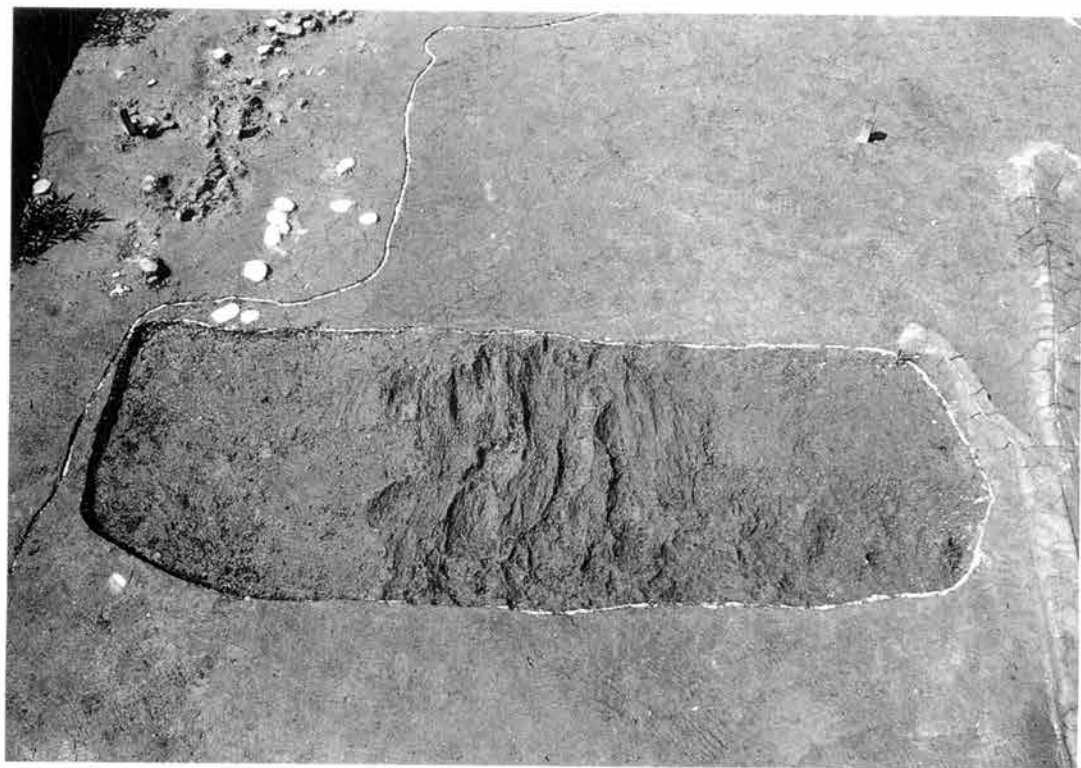
I区S D 413検出状況(西から)



I区S D 413土器出土状況(西から)



I区S D 413大形壺(411)検出状況(遺構検出面より浮き上がる)



I区稲架木穴検出状況(南から)



Ⅱ区遺構検出状況(南から)



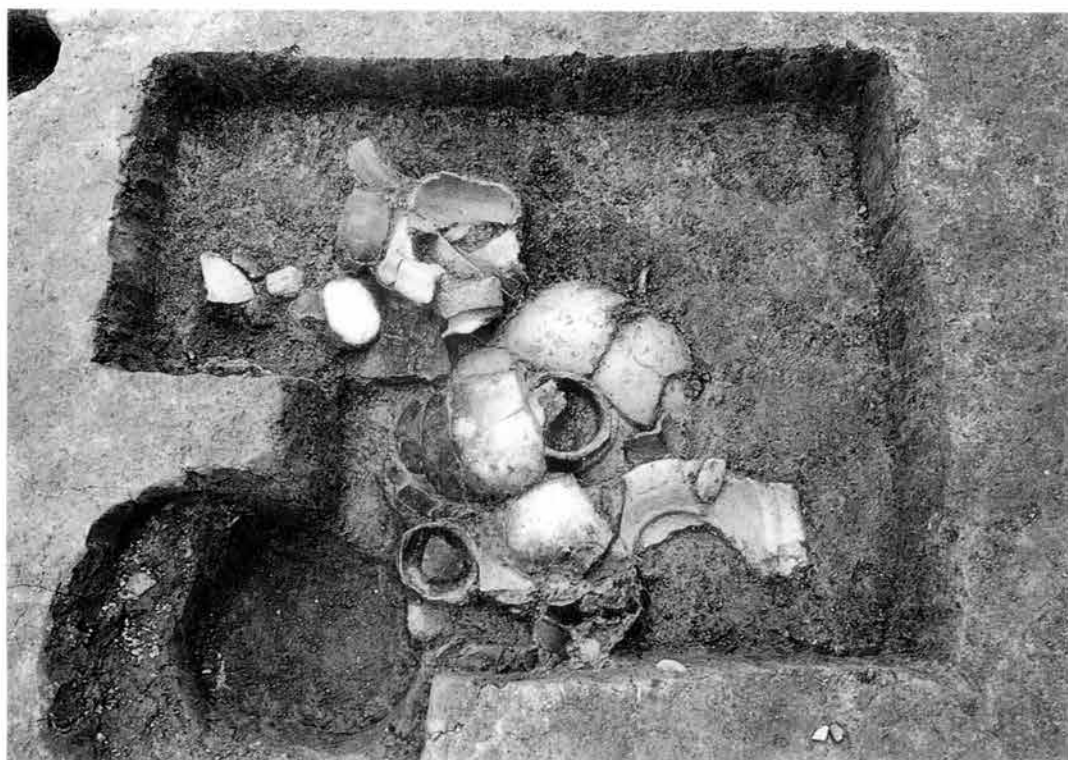
Ⅱ区405号井戸(東から)



Ⅱ区4210号ピット石臼出土状況



Ⅱ区ピット土師器出土状況



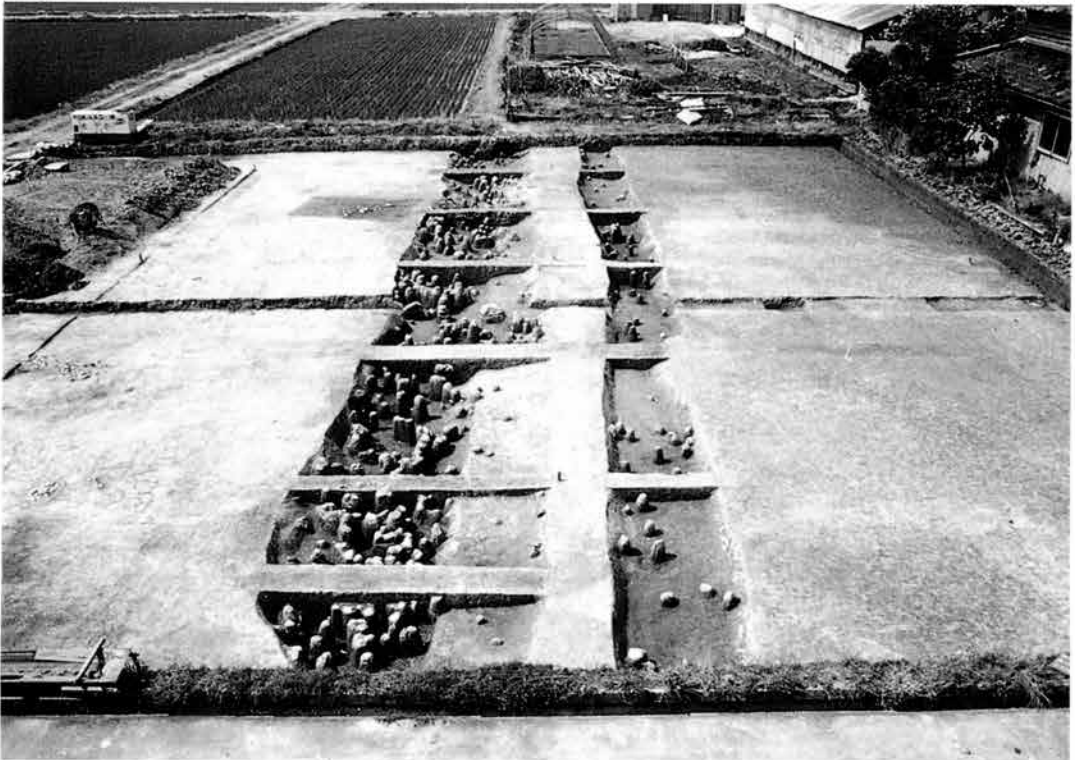
Ⅱ区下層土器出土狀況



Ⅱ区SK418下層・下層土器出土狀況



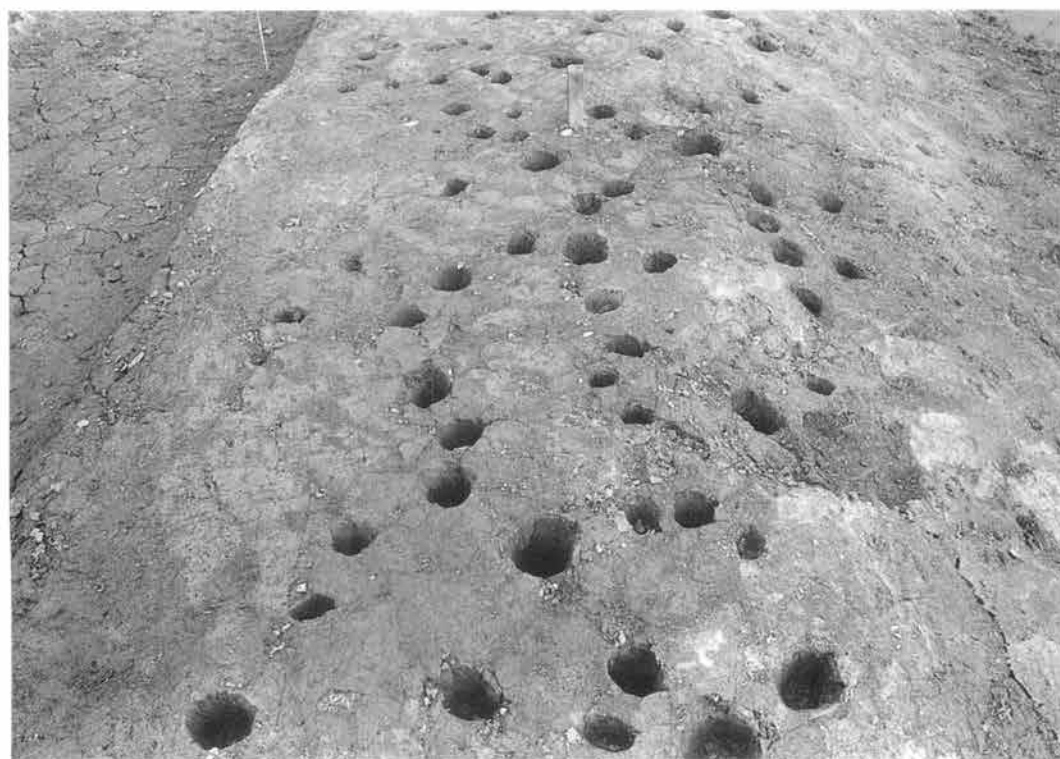
Ⅲ 区遺構検出状況(南から)



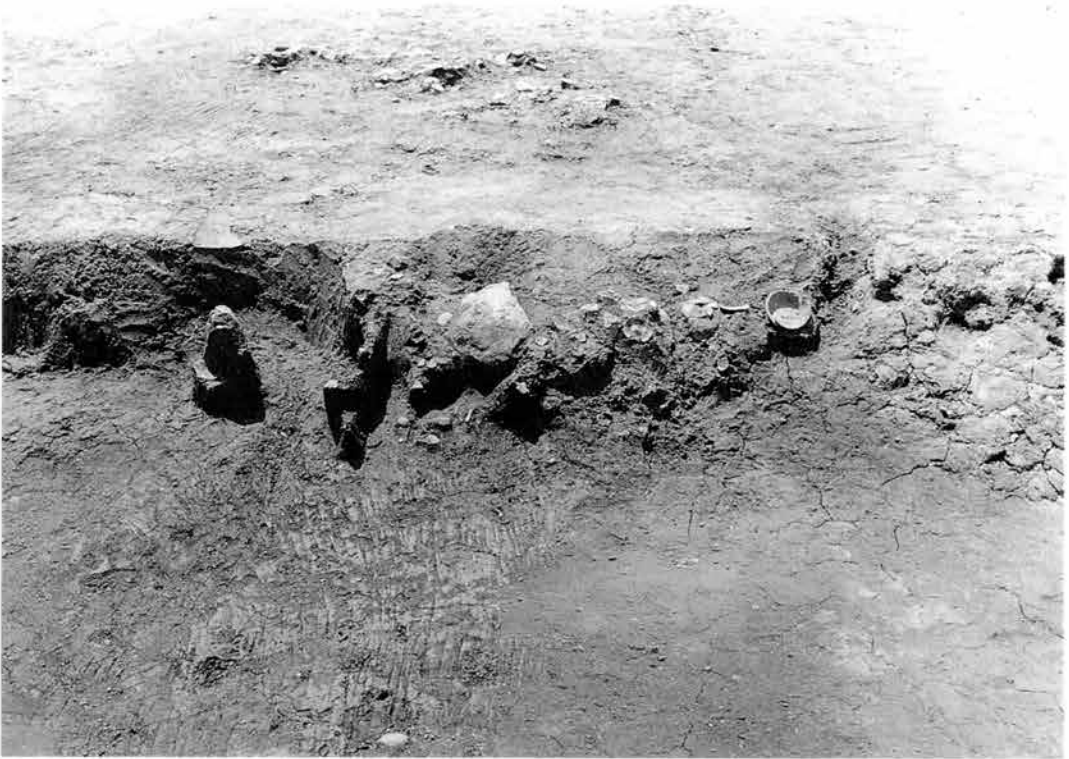
Ⅲ 区401号溝・402号溝遺物出土状況(南から)



Ⅲ区 S D 401・402 完掘状況(北から)



Ⅲ区 S D 401・402 間の棚状遺構(北から)



I区S D401土師器及びL・M-32・33区下層土器出土状況(東から)



I区S D401遺物出土状況



Ⅲ区遺構完掘状況(南から)



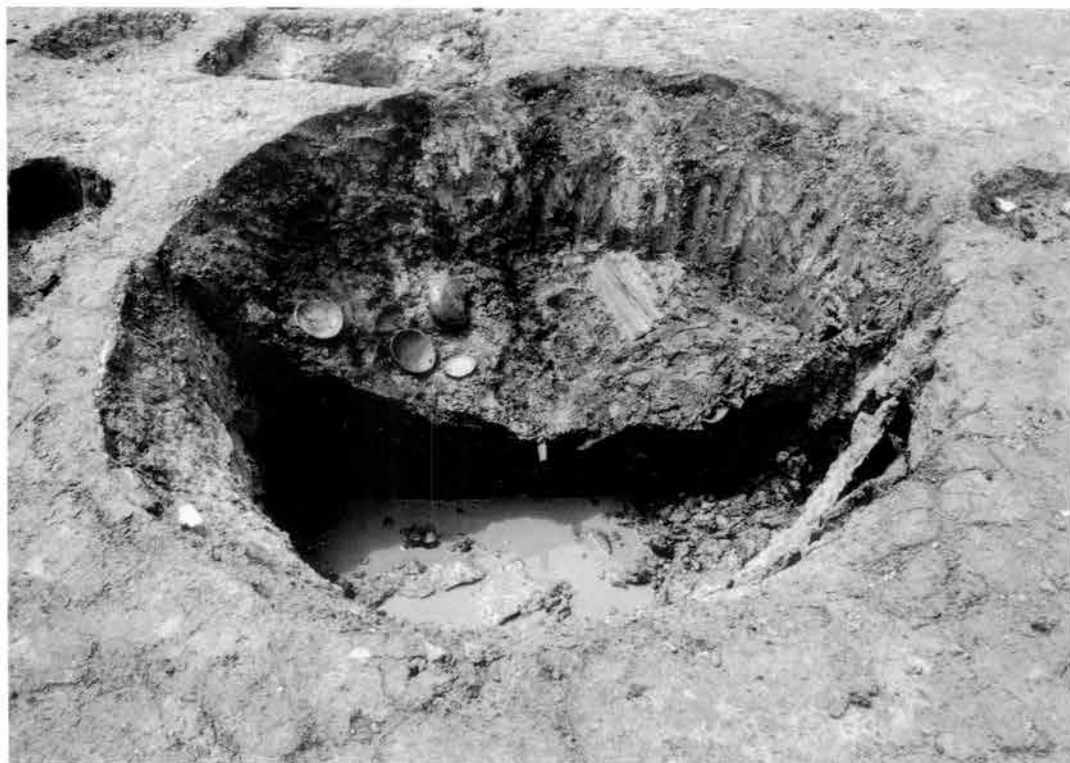
Ⅲ区SE413(南から)



Ⅲ区S E414(南から)



同上 桟板出土状況



Ⅲ区S E410(北から)



Ⅲ区S E411(西から)



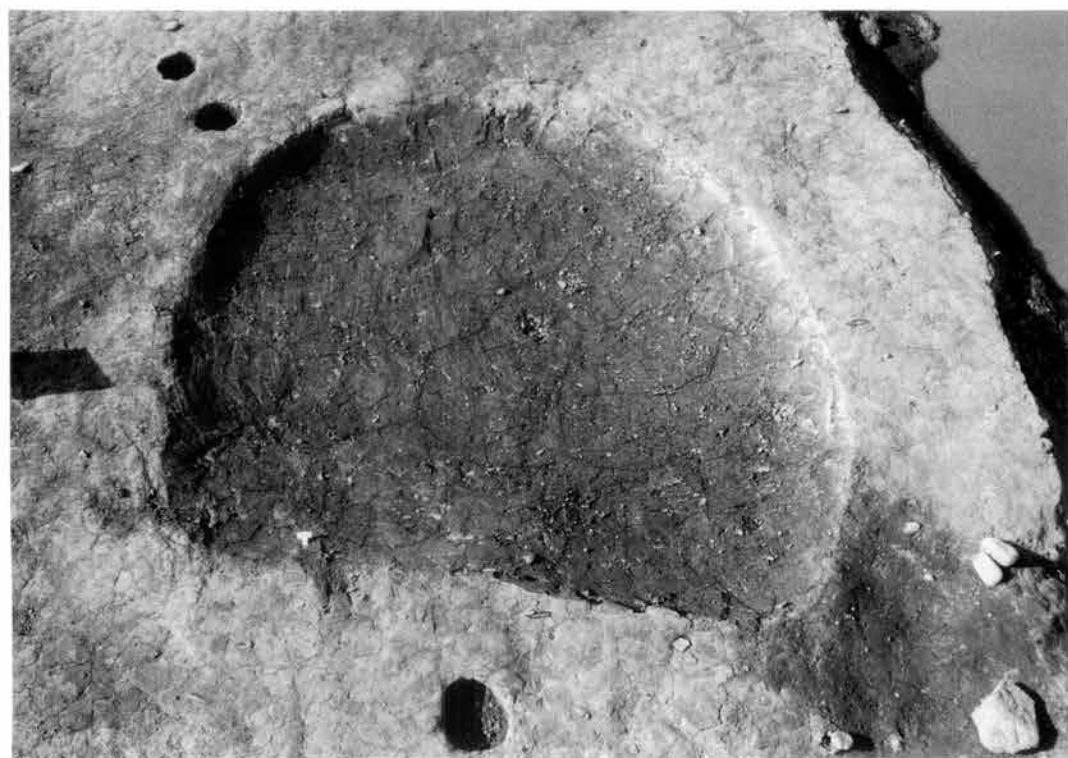
Ⅲ区S E 412遺物出土状況(南から)



同上(北から。掘削を断念したレベル)



Ⅲ区 S K 424(北から)



Ⅲ区 S K 407(南から)



Ⅲ区402・403号集石(西から)



Ⅲ区S K419(南から)

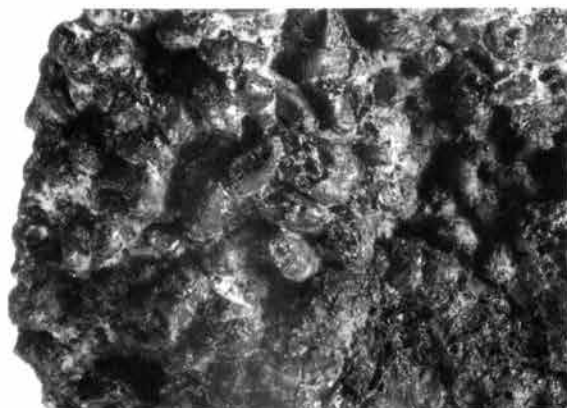


Ⅲ区401号集石(北から)





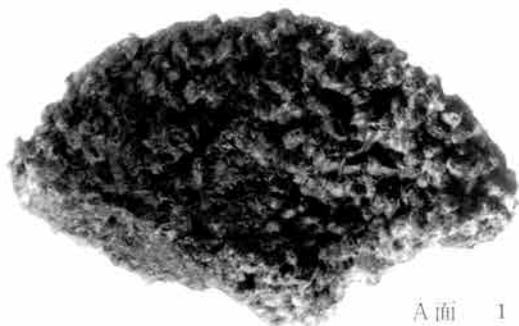
B面細部拡大(指紋状圧痕。約2倍)



A面細部拡大(約2倍)



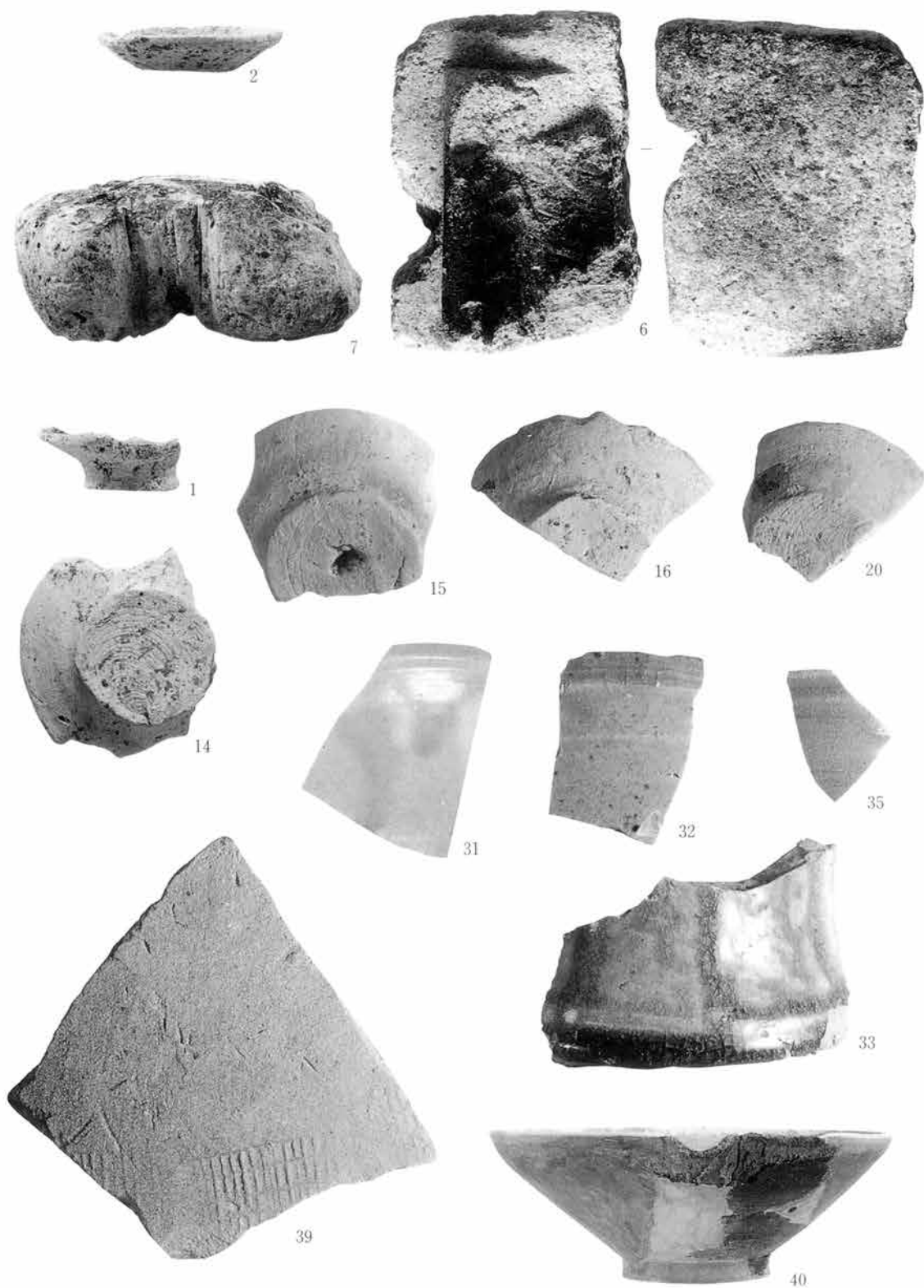
(ほぼ原寸)

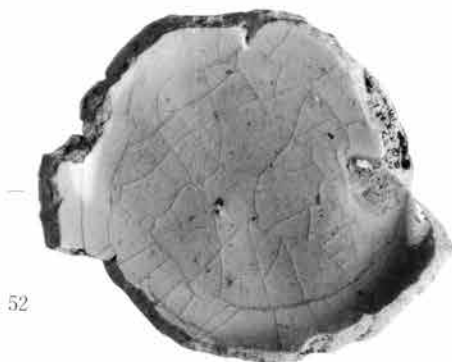
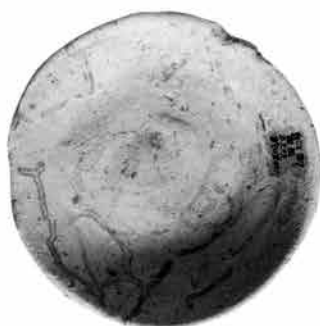
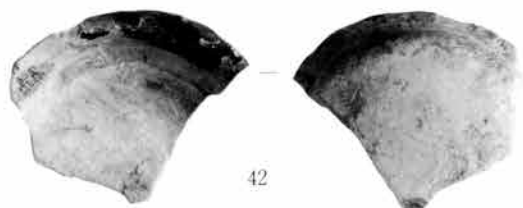


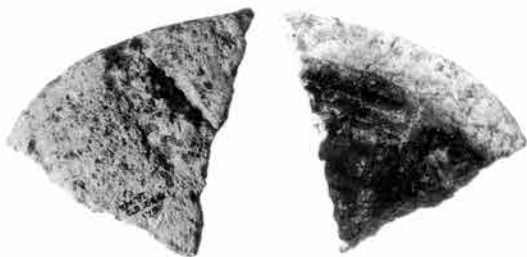
A面 I



B面







61



63



62



64



65



68



66

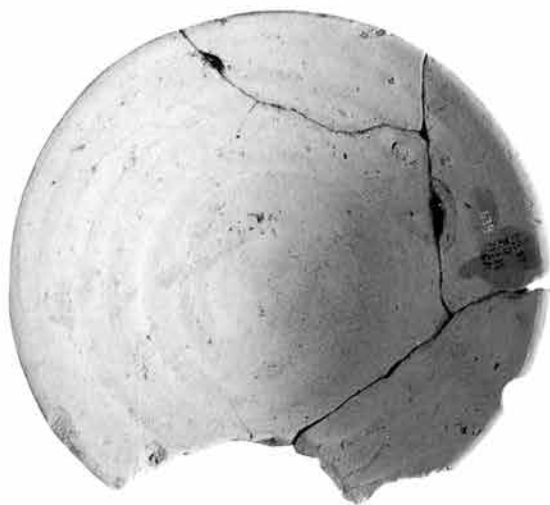


67

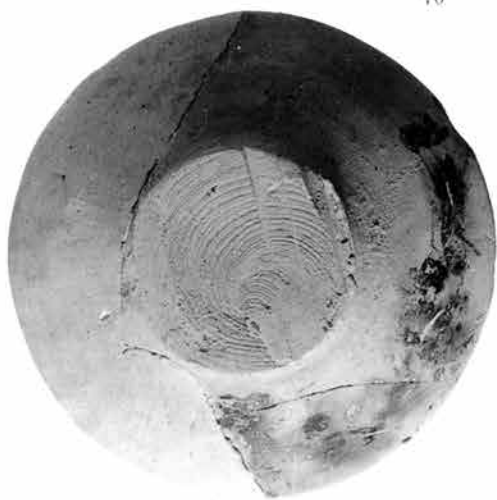




70



69



71



72



73



74



88



75



76



77



86



80



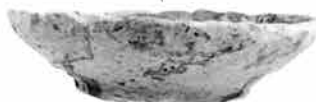
83



84



85

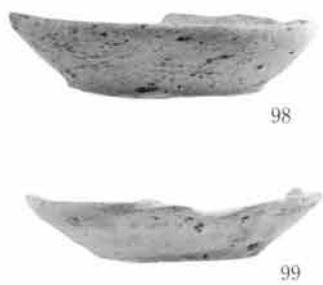
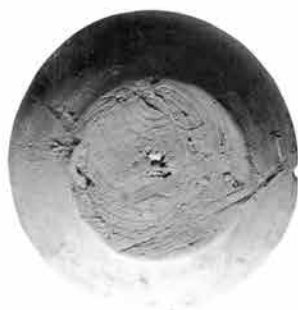
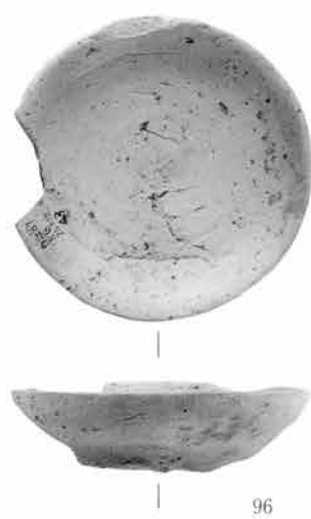


87



89







107



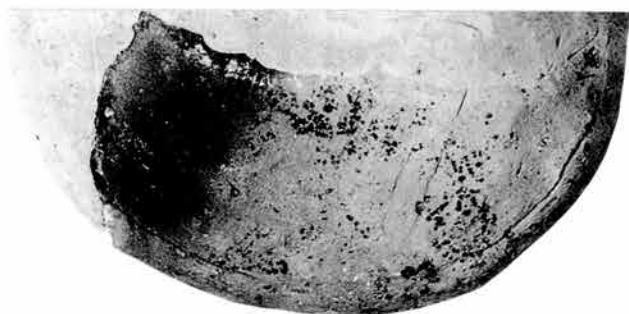
118



117



119



121



125



123



124



128



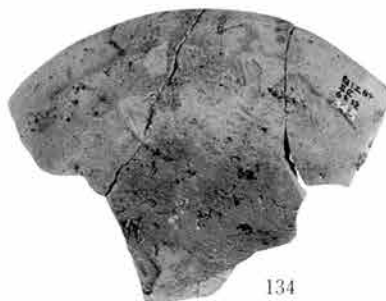
132



136



133



134



138



163



172



147



157



160



166



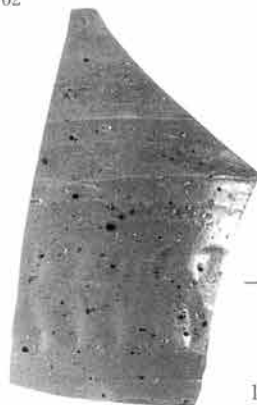
162

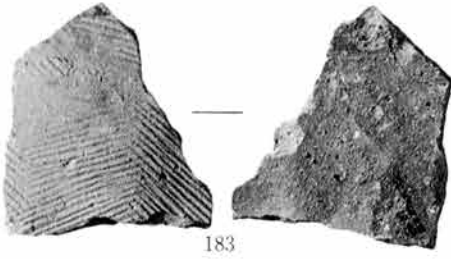


150

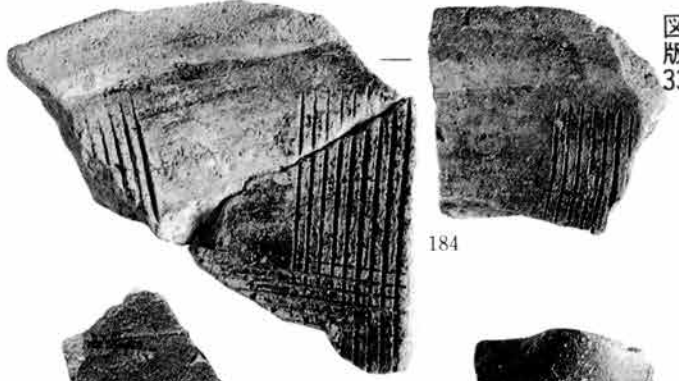


158

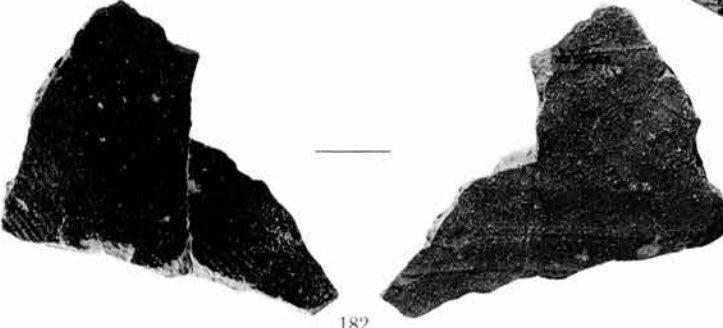




183



184



182



181



187



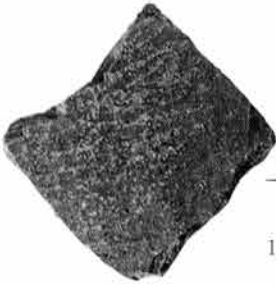
189



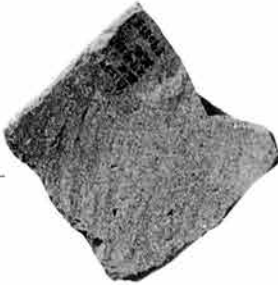
190



185



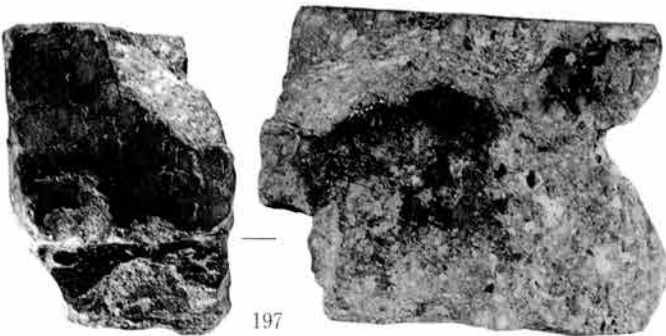
191



198



199



197



203

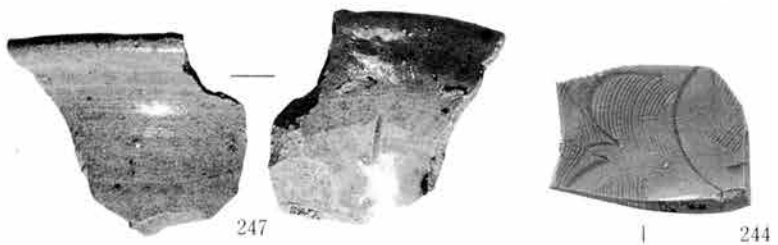


204



206







250



253



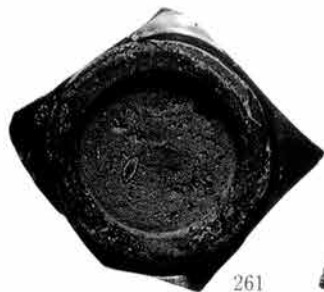
257



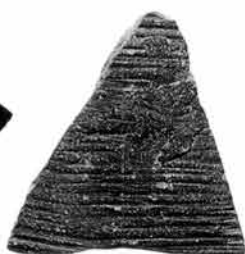
258



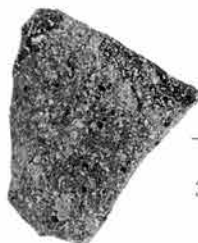
260



261



264



345



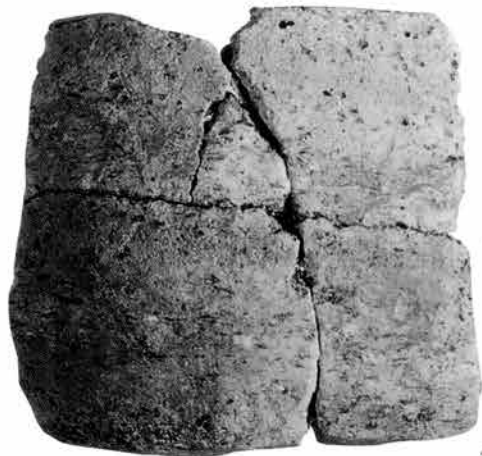
265



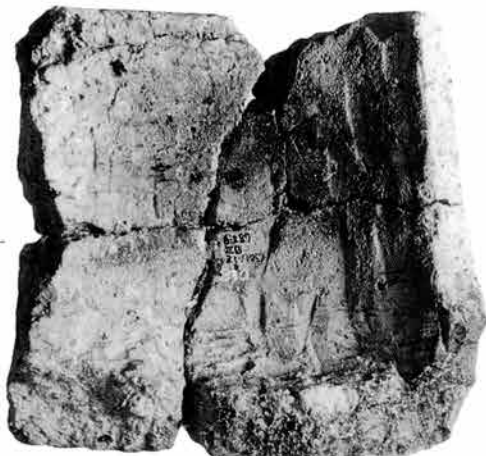
266



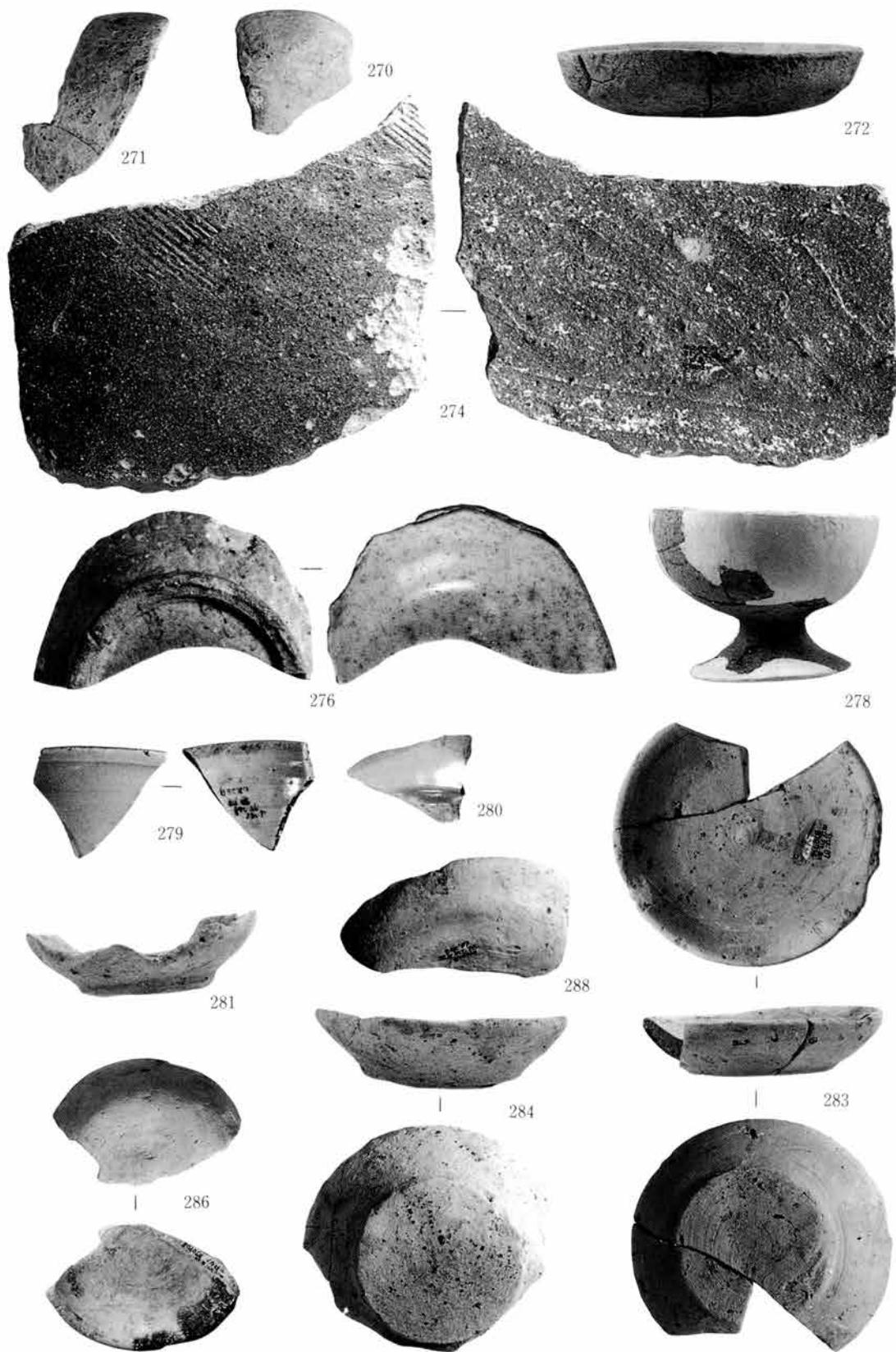
267



269



6157
20
21/195





291



292



293



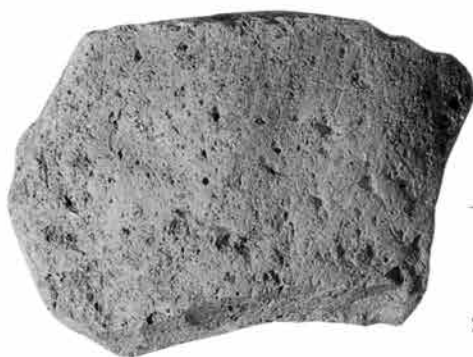
296



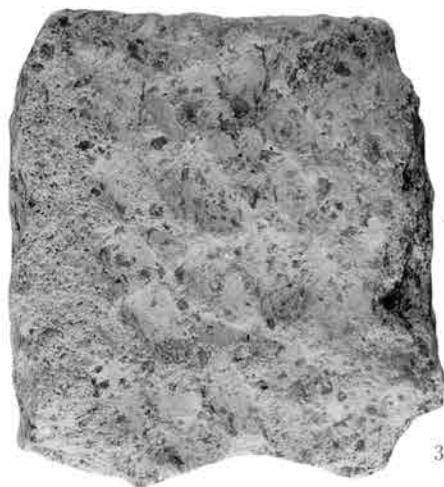
294



297

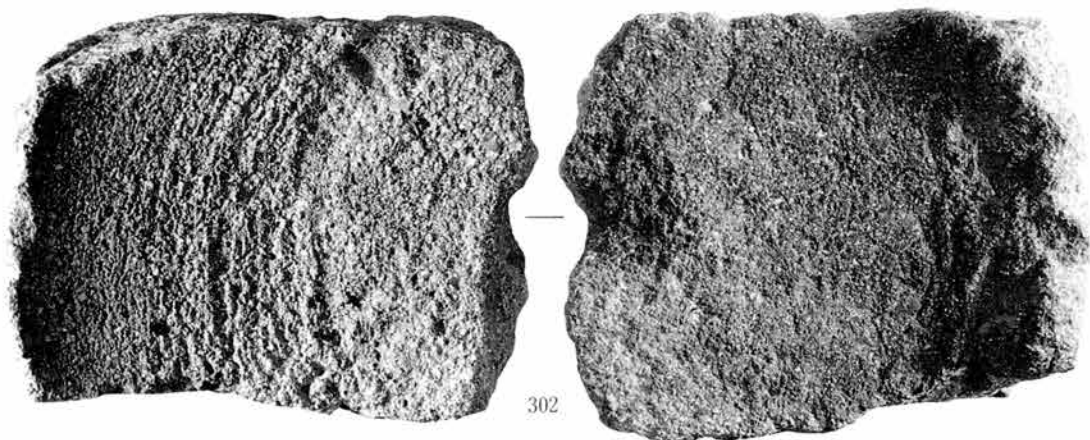


298

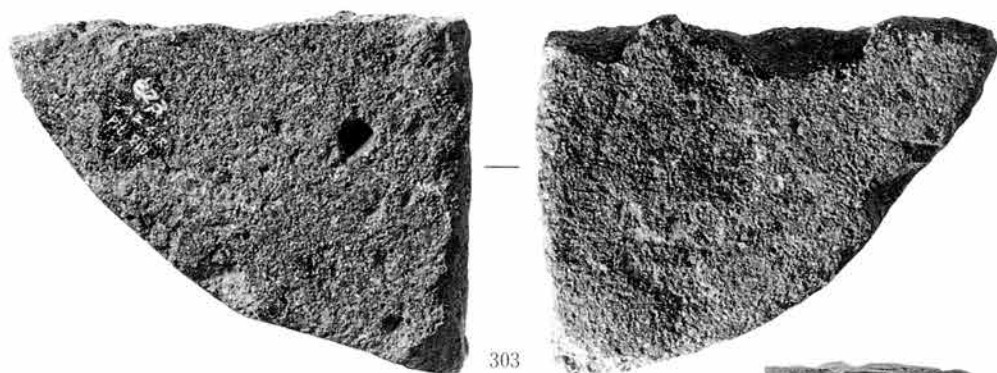


300





302



303



305



304



306



307



308



309



310



311



313



312



317



314



316



315



318



319



320



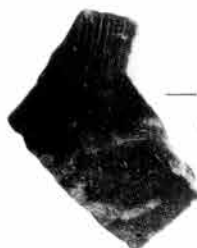
321



322



323



324



325



326



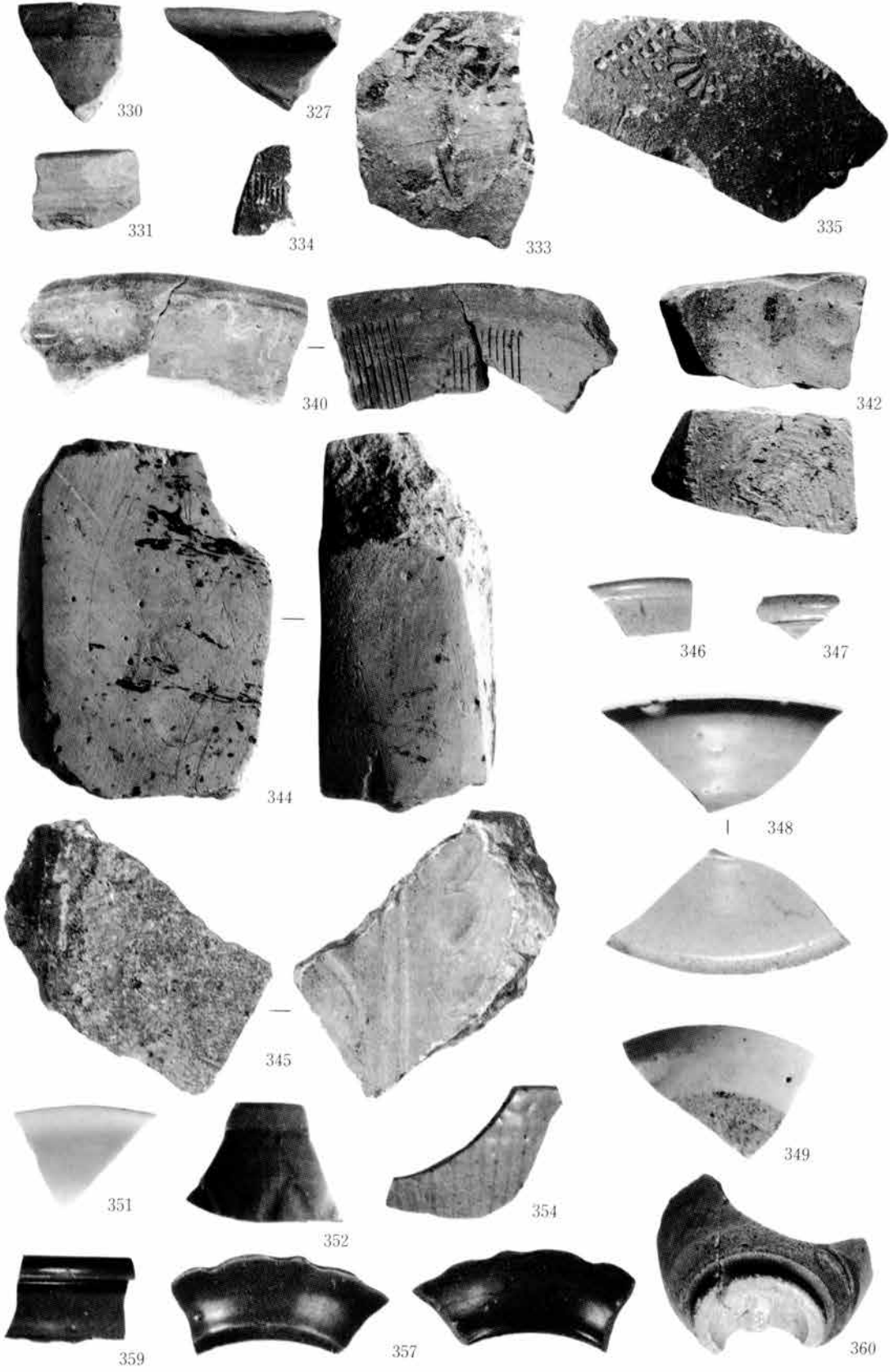
327



328



329

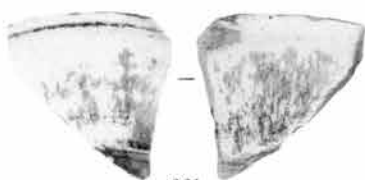




356



355



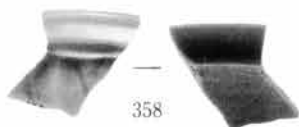
361



364



363



358



362



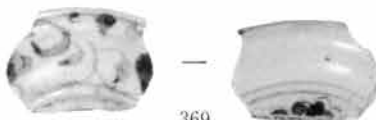
363



365



367



369



366



370



368



371



370



372



387



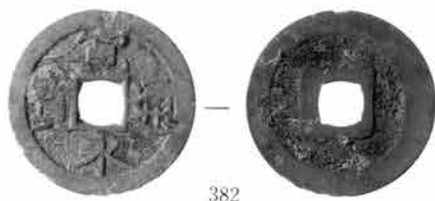
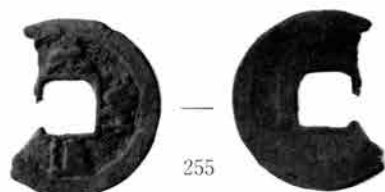
387



386

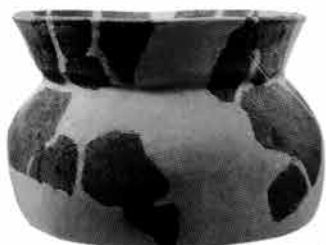


386





391



392



393



395



394



397



398



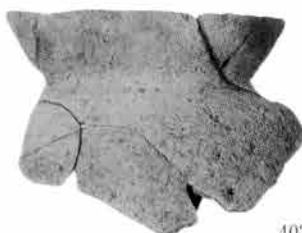
399



400



401



402



404



406



407



408



409



410



412



414



416



415



418



420



417



419



421



424



422



425



411



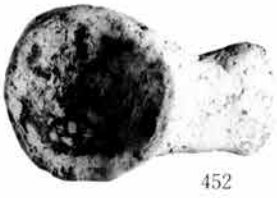
423



429



430





467



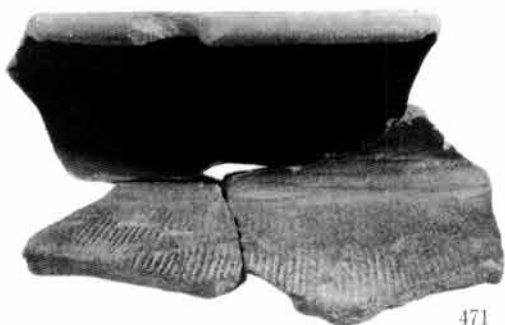
468



469



470



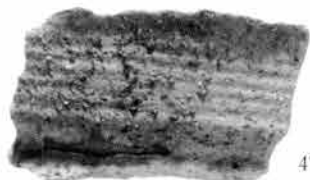
471



472



473



475



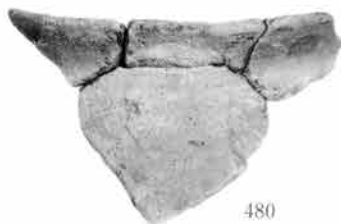
476



478



479



480



483



484



485



488



490



491



492



493



494



495



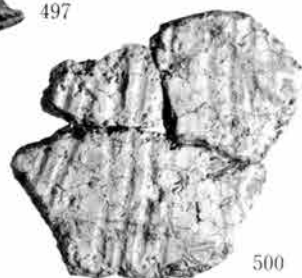
497



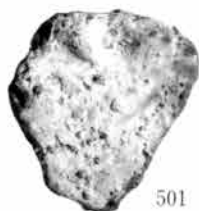
498



499



500



501



503



506



507



508



510



511



512



513



514



518



517



519



520



521



524



525



522



526



527



523



528



533



536



540



539



542



549



547



545



552



550

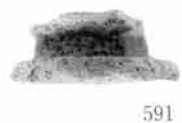
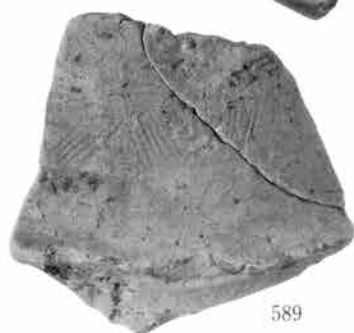
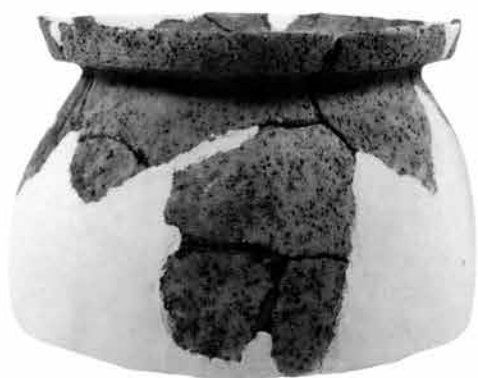


559



557







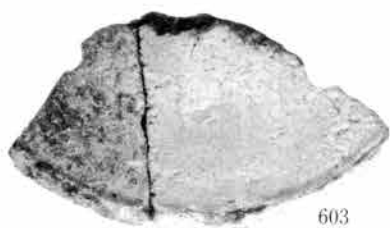
602



606



608



603



607



609



605



611



610



612



614



615



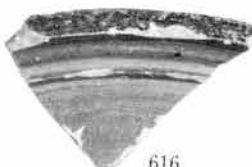
613



617



614



616



624



618



619



620



626



621



628



622



623



盛土保存地区ポンプ場予定地試掘調査



第4次調査参加者

白江梯川遺跡 Ⅱ

県営公害防除特別土地改良事業に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成元年3月31日 発行

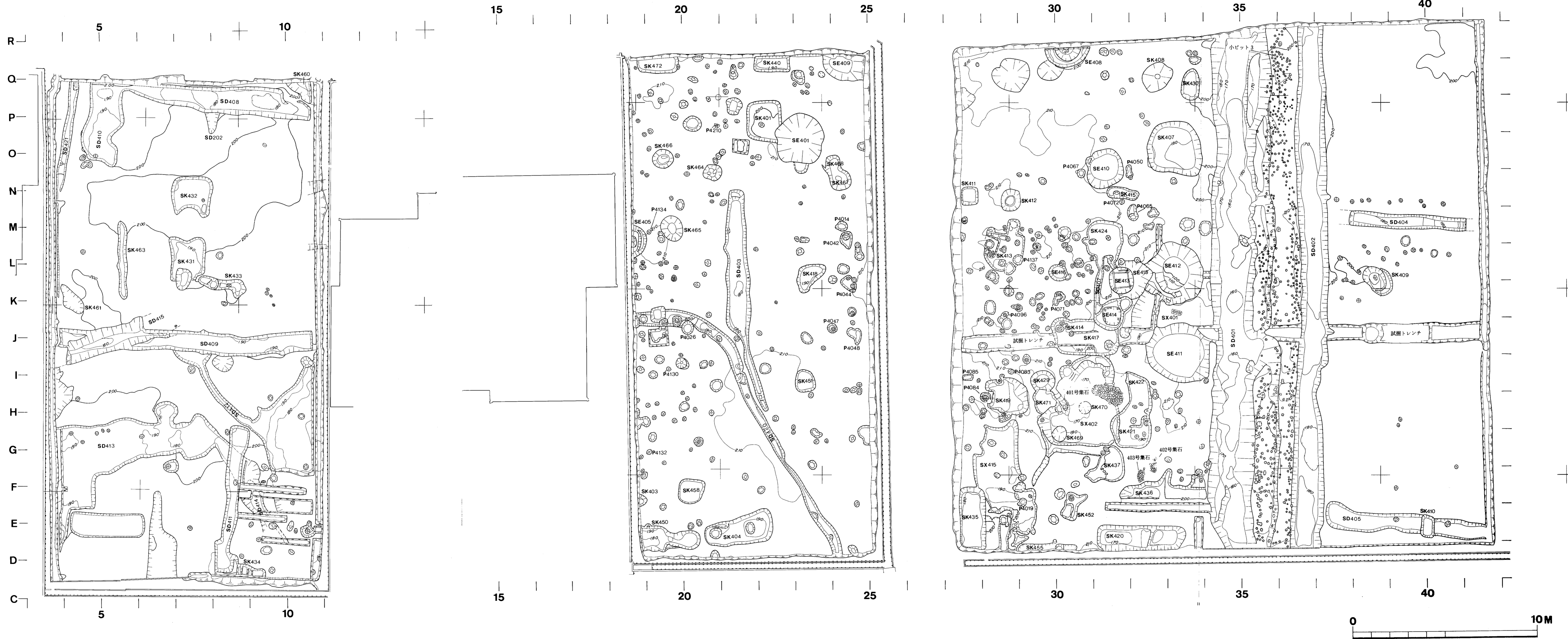
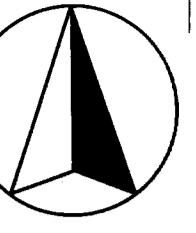
編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉4丁目133番地
電話(0762)43-7692番

印 刷 中川大正印刷株式会社
石川県金沢市北安江町447-2

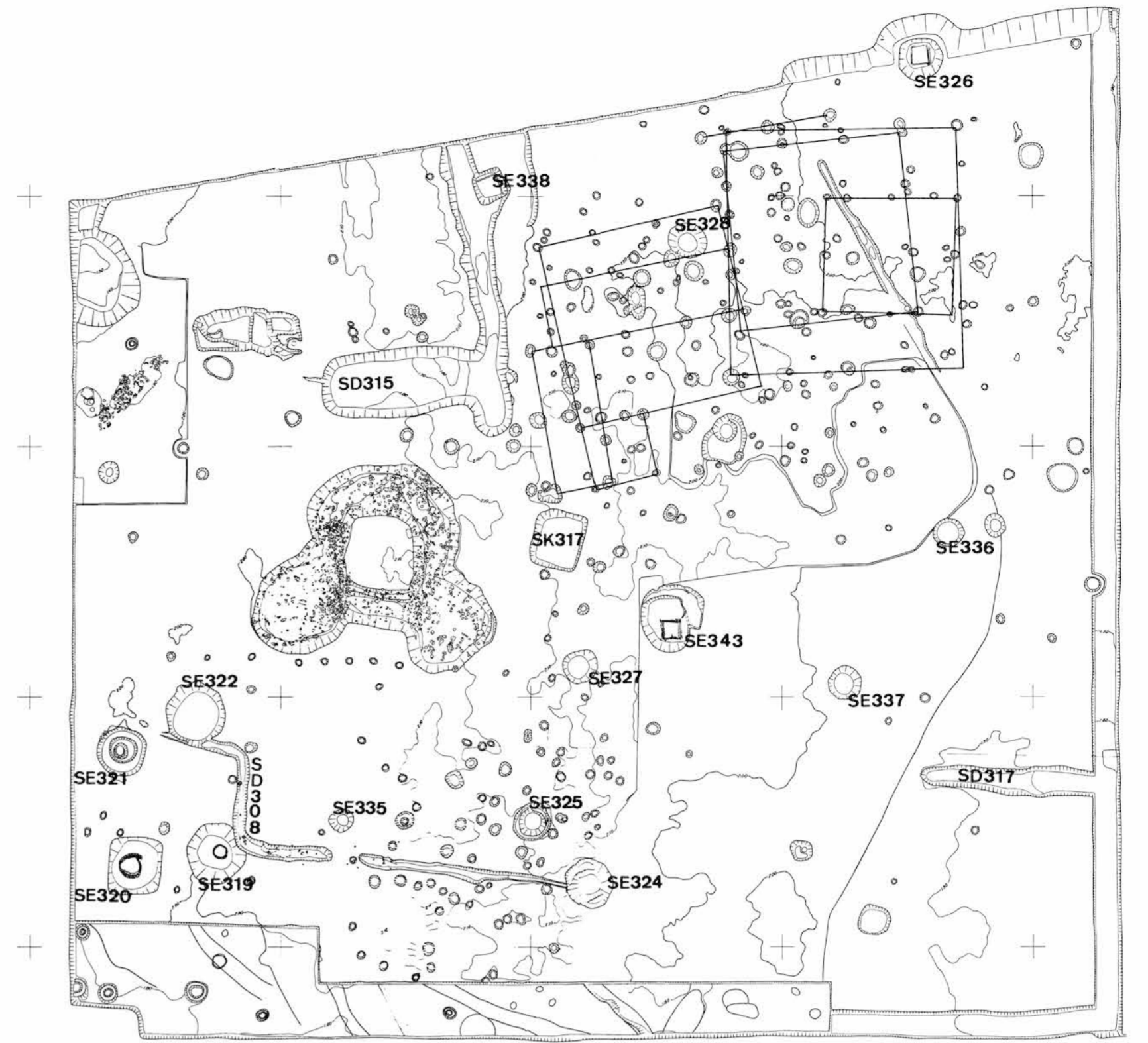
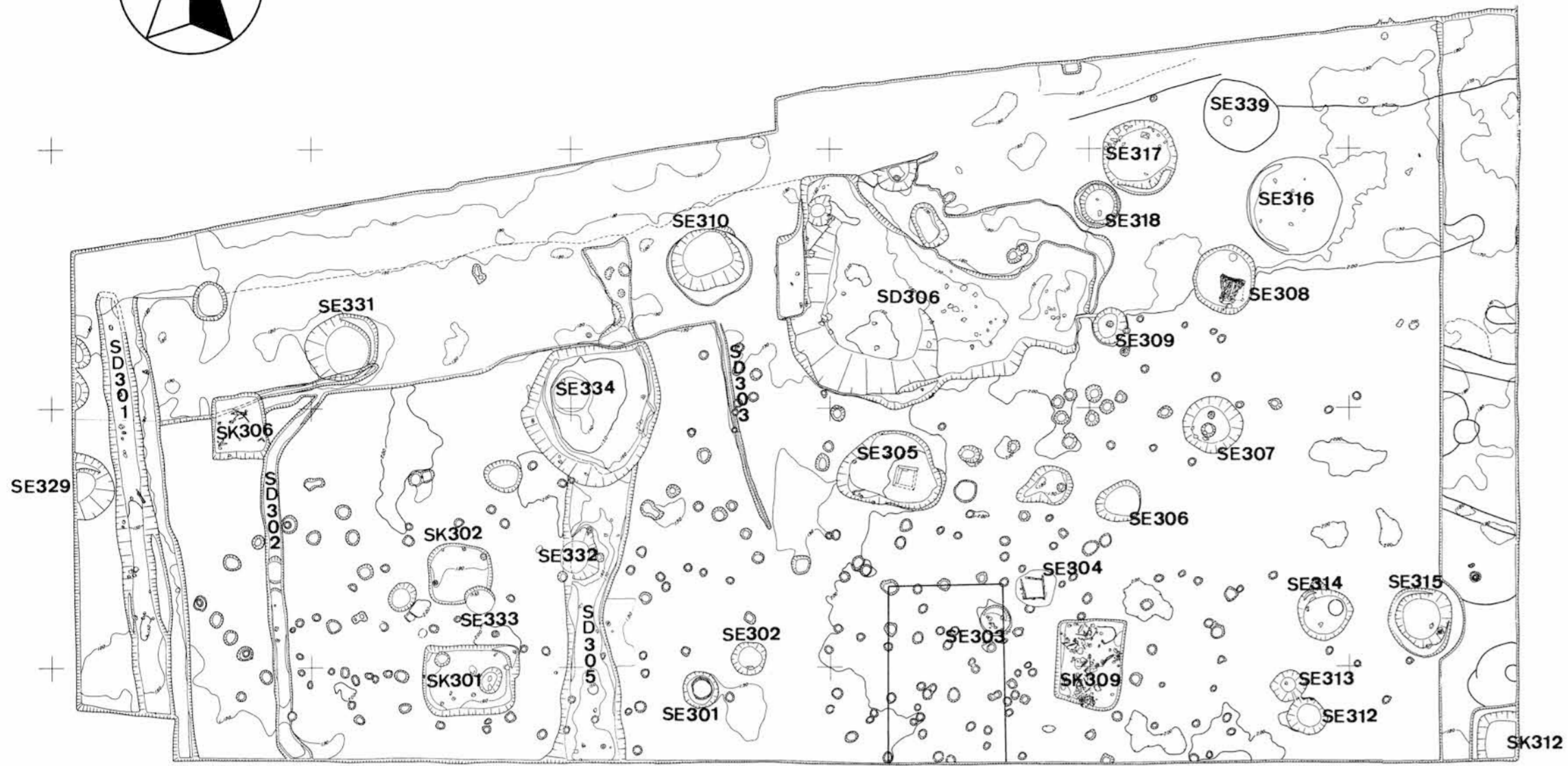
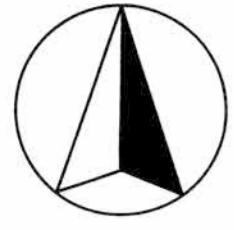
©石川県埋蔵文化財センター1989

本文用紙：書籍用紙イエロー（中性紙）72kg

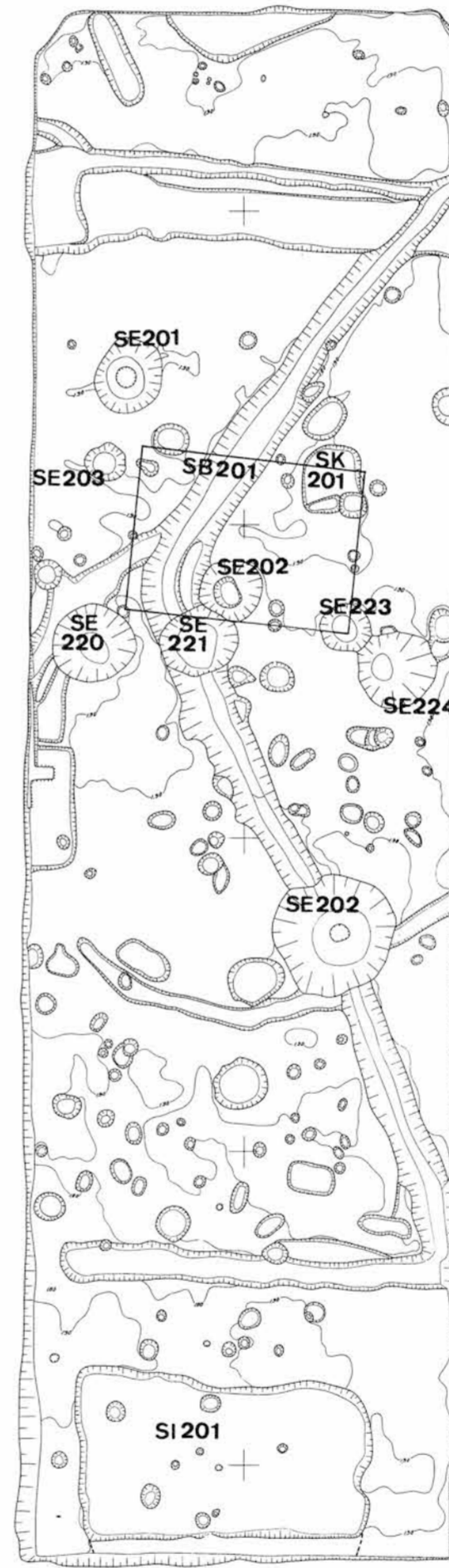
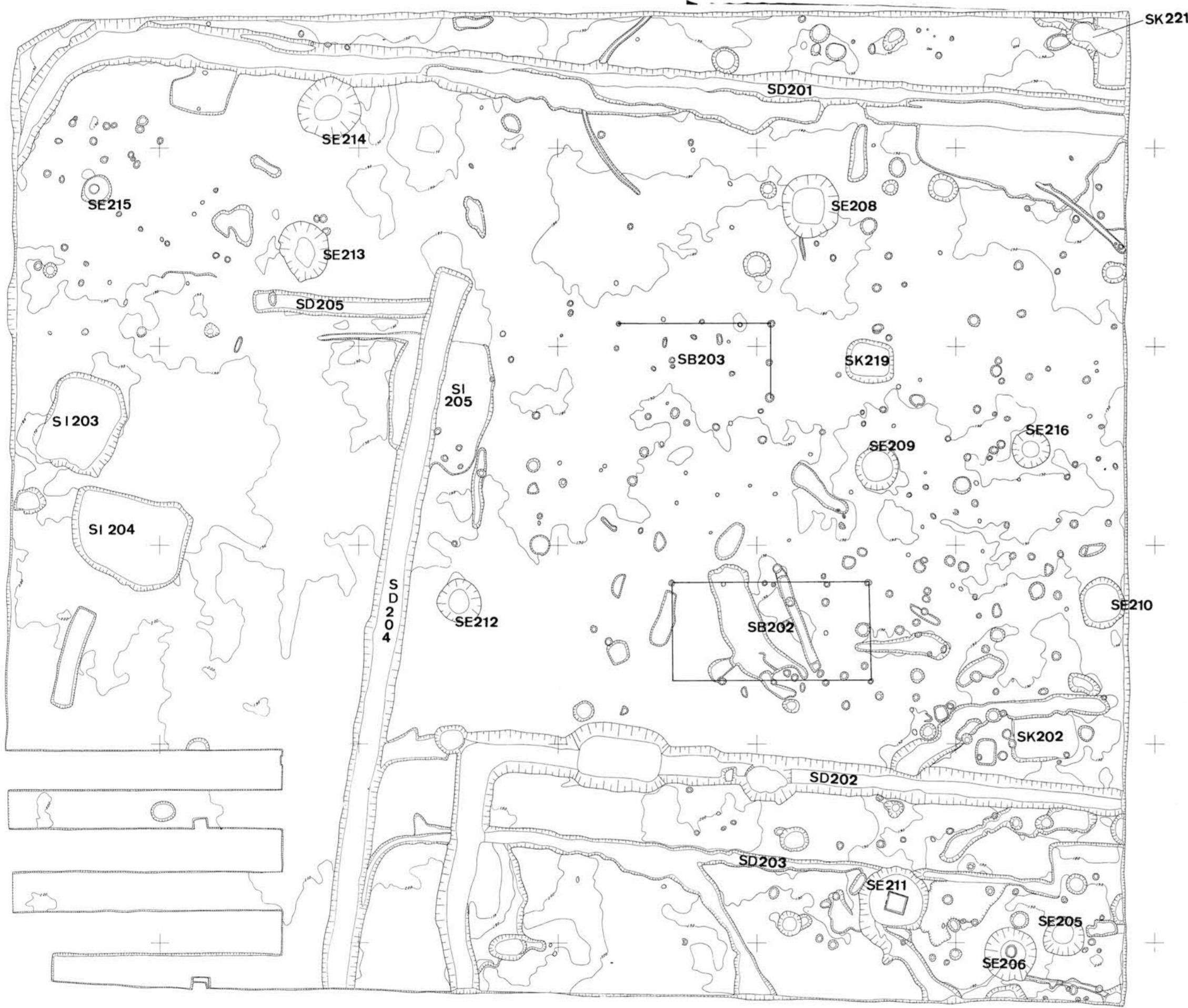
付図1. 白江梯川遺跡第4次調査遺構配置図 (S=1/100)



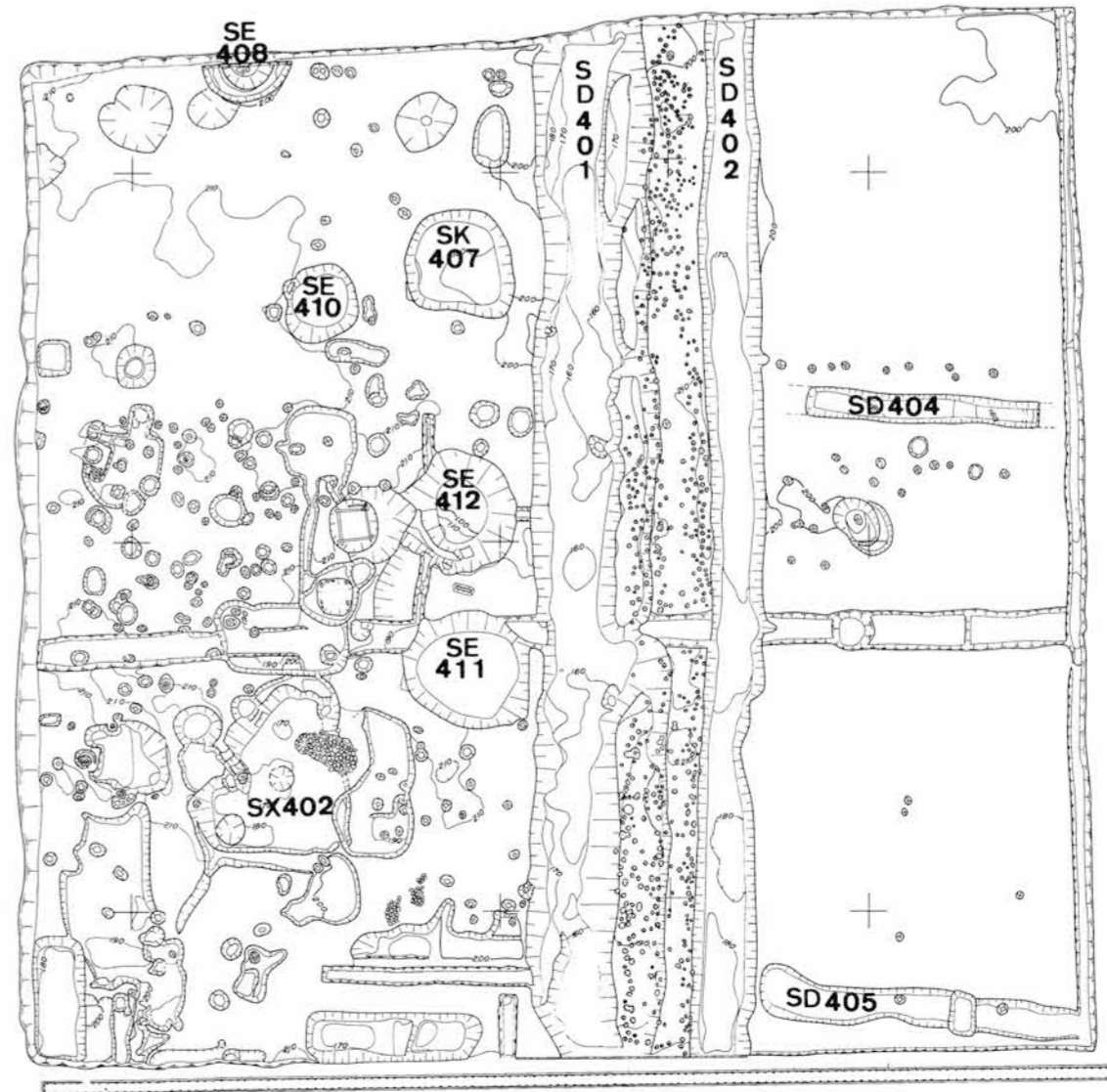
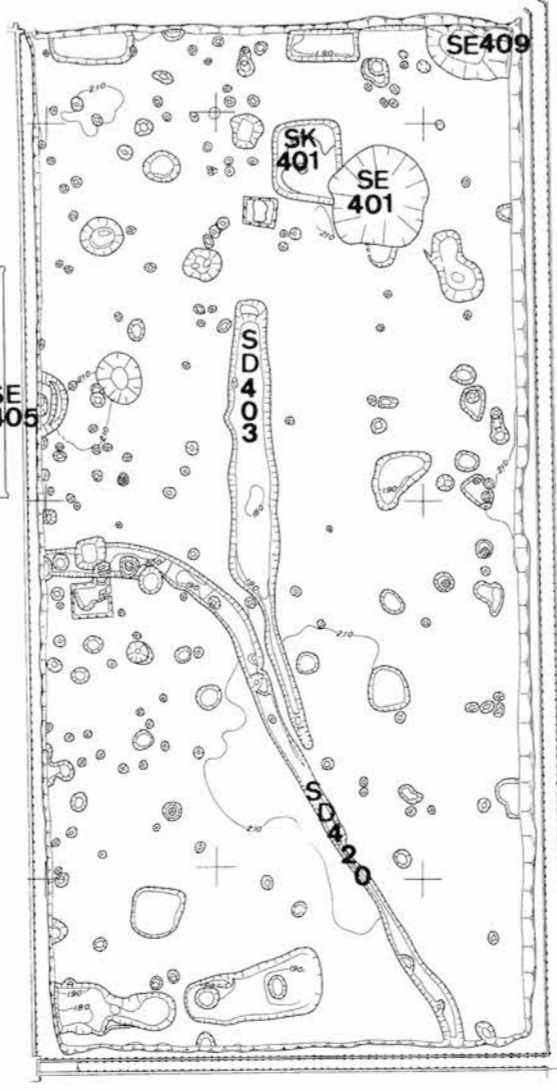
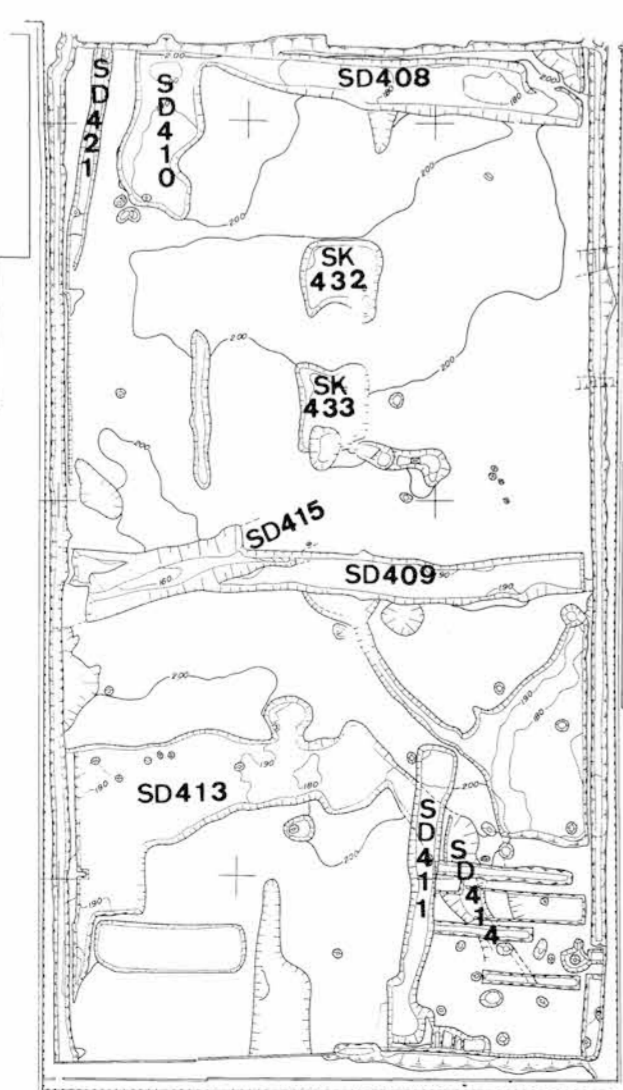
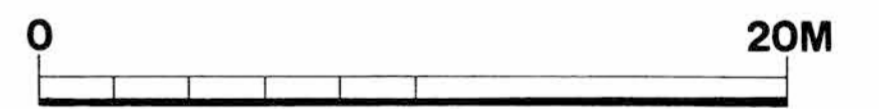
付図2. 白江梯川遺跡第2・3・4次調査遺構配置図 (S=1/200)



第3次調査区



第2次調査区



第4次調査区

